

国士舘大学審査学位論文

「陸軍看護制度の成立史」

鈴木 紀子

平成二六年度 博士論文

陸軍看護制度の成立史

学籍番号… 11—DH002

氏名… 鈴木 紀子

提出日… 平成二七年四月

目次

序論	四
----	---

第Ⅰ部 陸軍看護制度成立前史

第一章 戊辰戦争前史	
一 「小石川療養所」の女看病人	二二
二 「長崎養生所」と看護	二四
三 「横浜梅毒病院」の介抱女	二九
第二章 従軍から教訓へ	
一 松本良順の会津戦争	三九
二 英医ウィリアム・ウイリスの救護活動	四三
三 人道主義への提言	四八
第三章 戦時医療体系の整備と課題	
一 奥羽出張病院の医療体制	六〇
二 衛生隊のはじまり	六四
三 「動病院」と「不動病院」	六八
四 海外事情探索「病院看病男」	七二
第四章 戊辰戦争と看護	
一 会津若松城籠城と看護	八一
二 女性看病人の採用	八四
三 海外看護婦の紹介	八七
四 戦時医療の課題と看護	九〇

第Ⅱ部 陸軍看護制度創設期

第一章 看護制度の整備はじまり	
一 看護人・看病卒の職務	一〇〇
二 ナイチンゲールの看護管理方法の導入	一〇四
三 看護卒教育のはじまり	一〇八
第二章 西南戦争と看護	
一 「大阪陸軍臨時病院」と看病夫	一一四
二 博愛社による救護活動	一二七
第三章 看護制度の第一次改革	
一 徴兵看病卒取扱手続の制定	一二二

二	看護長・看護卒の増員計画	一二四
三	一年志願兵制度の制定と看護長の確保	一二六

第Ⅲ部 陸軍看護制度成立期

第一章 衛生隊編成に向けた改革の動き

一	桂太郎の博愛社への患者受託計画	一三二
二	「担架卒教育規則」の制定	一三四
三	傭人磨工卒の採用開始	一三九

第二章 看護制度の第二次改革

一	「看護卒」名簿管理のはじまり	一四三
二	看護手制度制定に向けた上申	一四四
三	看護手制度と下士補充制度の確立	一四八

結論	一五三
----	-----

資料編（表・図・資料）目次

【表】

表 1	「奥羽出張病院」付属医一覧	一五七
表 2	「奥羽出張病院」東京引揚人数	一五八
表 3	明治八年「看病人看病卒服務概則」の職務比較表	一五九
表 4	岩倉使節団『特命全権大使米欧回覧実記』病院見学の記録の抜粋	一六〇
表 5	大阪陸軍臨時病院入院患者疾患名と患者数	一六五
表 6	明治一六・一七年徴兵看護卒取扱手続き	一六六
表 7	明治期陸軍看護学教科書一覧	一六七
表 8	軍備皇張費取調諸表	一六八
表 9	明治一六年 桂太郎草案の看護卒の定員の考え方	一六九
表 10	戦時師団衛生隊編制表（明治二〇年七月）	一七〇
表 11	看護卒と担架卒の教育内容の比較	一七一
表 12	陸軍看護卒教育内容の変遷	一七二
表 13	明治一九年徴兵看護卒取扱手続と明治二〇年陸軍看護卒教育規則の比較	一七三
表 14	橋本綱常上申「陸軍衛生部現役看護手補充條例被定件」	一七四
表 15	明治二十一年一月二一日	一七五
	陸軍・政治の動向と陸軍看護制度の変遷（明治一年～明治三年）	一七五

【図】		
図 1	戊辰戦争平潟口白河口戦時医療体系	一七六
図 2	戊辰戦争越後口軍病院と戦時医療体系	一七七
図 3	明治八年「看病人看病僧服務概則」による管理体制	一七八
図 4	『三角繃帯用法』附録「三角繃帯図附」	一七九
図 5	「三角繃帯包帯図附」の解説	一八〇
図 6	「大阪陸軍臨時病院」病棟管理図	一八三
図 7	大阪陸軍臨時病院発行「看病夫証書」	一八四
図 8	徴兵看護卒と陸軍看護卒の任命システムの比較	一八五
図 9	看護長・卒補充方法	一八六
図 10	看護長・看護卒に変遷	一八六
図 11	看護制度の第二次改革による衛生部下士補充システム	一八七

【資料】

資料 1	益頭駿次郎『欧行記』	一八八
資料 2	玉蟲左太夫『航米日録』	一九〇
資料 3	福沢諭吉『西洋事情』	一九一
資料 4	英国検索（福田作太郎筆記）	一九二
資料 5	看病人看病卒服務概則（明治八月一日一〇日）	一九六
資料 6	明治七年『三角繃帯用法』	二〇一
資料 7	「独逸戦時衛生條例適要」	二〇九
資料 8	担架術教育規則	二一一
資料 9	担架卒選抜及教育復習規則	二二三
資料 10	陸軍看病人磨工召募準則	二二六
資料 11	陸軍看護卒教育規則	二二八
資料 12	陸軍衛生部看護手補充條例（勅令九十二号）	二二九
資料 13	陸軍衛生部現役下士補充條例（勅令九十三号）	二三〇

初出一覧	・ ・ ・ ・ ・	一二二
参考文献一覧	・ ・ ・ ・ ・	一二三

序論

本稿のテーマは、陸軍衛生制度史における看護制度の成立過程を明らかにし、日本の近代化との関係で、その意義を考察することである。

陸軍では衛生部の草創期にあたる一八七三（明治六）年に、陸軍武官官等表の下士に看病人が、兵卒には看病卒¹（以下、看護兵と記す）を位置付け、衛生要員の補充制度の整備に着手した。一九一三年発行『陸軍衛生制度史』（以下、『明治篇』と記す）²には、「衛生部看護卒ノ補充ニ関シテハ明治初年ノ看病人ヨリ連繁シ種々ノ変遷ヲ有セリ故ニ之ヲ看護卒補充ト称セスシテ看護制度ト題シ茲ニ一括シテ叙述セントス」³として、第四編第五章に「看護制度」と題した章を設け、看護制度の成立過程とめまぐるしい変遷の過程が記録されている。

陸軍衛生部門の諸制度に関する資料は、『明治篇』のほか、『陸軍衛生制度史第二卷』（一九二八年発行、以下、『大正篇』と記す）⁴、『陸軍衛生制度史「昭和篇」』（一九九〇年発行、以下、『昭和篇』と記す）⁵の同名書籍二冊が刊行されている。その中で『昭和篇』は、第二次世界大戦によって散逸した資料を、一九八五（昭和六〇）年より調査研究を開始し、その成果を一冊にまとめたものである。これら『陸軍衛生制度史』三冊により、明治健軍以来第二次世界大戦終戦までの陸軍衛生制度の変遷が、明らかとなった⁶。しかし『大正篇』『昭和篇』では、看護制度の成立過程に関する記述は削除されており、現在では、その成立過程を知ることが困難な状況になりつつある。

陸軍では一八七三年に看護兵教育を開始し、その後一八七九（明治一二）年の徴兵令の改正にともなう「看護制度の第一次改革」⁷、さらに一八八八（明治二二）年一二月までには「看護制度の第二次改革」を行い、対外戦争を想定した衛生隊編成が可能なまでに、看護制度の確立を終えていた⁸。その過程で陸軍省が作成した看護学教科書は、わが国で初めて看護学という言葉を用いたことが判明している⁹。しかし、陸軍看護制度の改革内容や教育内容は、看護史の中では研究対象とはされてこなかった。

その理由は、看護史分野ではわが国の近代看護の草創期を、私的に看護婦¹⁰養成が開始された明治二〇年前後と定義してきた。近代看護教育の対象はあくまでも職業看護婦の養成であり、陸軍という男性看護兵を対象とした看護学教育は、軍陣医学¹¹の一部として扱われ、看護史の中には含まれないとの解釈があったからだと認識している。二〇一四年に日本看護歴史学会により発行された『日本の看護のあゆみ―歴史をつくるあなたへ―』（日本看護協会出版会）も、一八八四（明治一七）年一〇月有志共立東京病院看護婦教育所¹²で始められた職業看護婦教育が、わが国の近代看護の始まりとして看護歴史を展開している。しかし、陸軍が看護学という用語を初めて用いた事実と、看護兵教育を行っていたことを考えると、果たして、その教育内容などを明らかにして検討を行わずに、看護史から除外してよいのかという問題意識も生じる。

同時に、では何故明治新政府が、陸軍草創期に看護卒に近代看護学による教育をなさなければならなかったのか、という問題も存在する。前述したように、『陸軍衛生制度史』の『大正篇』『昭和篇』には、陸軍看護制度の記述が削除されている。そのため、陸軍創設期の看護制度史を改めて研究し、その成立過程を記録に残すことは、わが国の近代看護学の前史を明らかにすることでもあり、陸軍の看護兵教育の目的も明らかにする。

そこで本稿は、職業看護婦という概念がなかった時代から、鳥羽・伏見の戦いに始まる戊辰戦争における医療と看護の実態を探り、看護制度の整備に着手し、いち早く近代看護学を導入した陸軍の目的とその背景を探りながら、陸軍看護制度の成立過程を明らかにし、その意義を日本の近代化との関係で論ずるものである。尚、本稿が研究対象期間とするのは、看護制度の確立を見る看護制度の第二次改革までとする。

本稿が扱うのは陸軍の看護制度史であるが、看護史・看護制度史・看護教育史分野だけでなく、軍陣医学・医学教育史・軍事史、さらには近代史分野とも関係するテーマであり、看護が日本の近代化に果たした役割を知る上でも、その研究意義は存在すると考える。そこでまず、それぞれの参照すべき研究状況について概観を行う。

尚、語句の定義であるが、註10で説明しているように、看護師の名称はその時代の呼称を用いるが、職業看護婦教育が始まる以前は、看病人、看護人、雇女、介抱女など、様々な呼称が用いられていた。本稿は、資料に準じた呼称を用いることとするが、看病人・看護人の区別に明確な使用の根拠が見いだせない場合は、「看病人」で統一した。また陸軍関係では、『明治篇』において看護に携わる人の名称を「看護者」¹²としており、本稿もそれに倣い、「看護者」で統一した。

看護史 看護史は、大関和¹³が一九〇三（明治三六）年に、『看護婦人矯風会雑誌』（第一九号、二〇号）に「日本看護婦の歴史」を発表したことに始まると云われている¹⁴。大関は、日本で最初に職業看護婦の養成を開始したのは一八八五（明治一八）年の有志共立東京病院であると紹介した。

看護史では、「近代的な看護教育」の定義を、ナイチンゲール¹⁵によって発展させられた、一つの専門職として職業化された正式な看護婦（Trained Nurse）養成のための教育であると定義して、看護史を展開してきた。近代的な看護教育の教育方法は、系統的・組織的教育と訓練という欧米的な形態であり、近代看護学は西洋看護教育（ナイチンゲール方式）と呼ばれる¹⁶。わが国では、一八八四年から八六（明治一九）年にかけて、私的に創設された看護婦養成所で、外国人看護師の指導のもとに、ナイチンゲール方式によりトレンド・ナース（Trained Nurse）の養成が開始され、このトレンド・ナース教育が導入された明治二〇年前後を、近代看護の草創期としている¹⁷。

看護史はその後、通史・学校史・個人史・看護制度史・看護教育史、助産師および保健師の歴史などの分野で研究がなされてきた¹⁸。木下安子『近代日本看護史』（メヂカルフレンド社、一九七六九年）が、明治前期より第二次世界大戦中までを扱った通史として評価されてきた。高橋政子『写真でみる日本近代看護の歴史―先駆者を訪ねて』（医学書院、

一九八四年）、土曜会歴史部会著（代表執筆者…高橋政子）『日本近代看護の夜明け』（医学書院、一九七三年）では、明治初年ごろの応急的に発生した女性看病人と、トレンド・ナース養成のための教育とは区別すべきものであると提唱し、近代看護の草創期に創立された看護婦養成学校や、看護の土台を築きあげた人々の個人史も丹念に調べ上げ、順天堂医院で看護婦長を務めた杉本かね（一八三八～一九一五）を、日本最初の看護婦長として紹介している。

亀山美知子は、『近代日本看護史』（全四巻、ドメス出版）¹⁹を著し、この書は看護史の白眉として数えられている。看護史の背景をなすものとしては社会史・思想史・女性史・生活史・風俗史・衛生史など種々のものが存在し、複雑な要素により構成される。亀山は、看護師は近代初頭から存在する女性の専門職業の一つであり、女性の特性を生かすことのできる職業として、国策のひとつとして発達した職業という性格を持っているとしながらも、性差別（医師≡男性、看護婦≡女性）の問題を提起、男性中心に構築された社会体制とその歴史の見直しを行うなど、女性史の視点で看護史を書き上げ高い評価を得ている。²⁰

亀山の『近代日本看護史』全四巻のうち『近代日本看護史』『日本赤十字社と看護』（以下、『I日本赤十字社と看護』と記す）と『近代日本看護史』『戦争と看護』（以下、『II戦争と看護』と記す）は、本稿を書き進める上で貴重な先行研究となる。『I日本赤十字社と看護』は、西南戦争で発足した博愛社から日本がジュネーブ条約に加盟し、一八九〇（明治二三）年四月一日より、日本赤十字社看護婦養成で救護看護婦の養成が開始された経緯などが詳細に調べられている。『II戦争と看護』は、タイトルが示すように、戦争における看護婦活動に焦点を当てたものであり、第一章の「近代初頭における戦時救護活動」にはじまり、日清戦争、日露戦争、シベリア出兵、日中戦争、太平洋戦争における看護婦の活動について書かれたものである。

『II戦争と看護』第一章の「近代初頭における戦時救護活動」には、「戊辰戦争と女性による看護活動」「会津戦争と女性」と題された項目が確認できる。亀山は、鳥羽・伏見の戦いで土佐藩大阪屋敷に同藩の負傷兵が収容され、藩士の妻や娘たちが看護を行ったことに對し、神崎氏がこの時の救護活動が「看護婦の発生史」からいえば、最も古い事例であると述べていたことを紹介している。²¹

しかし亀山は、これらの女性を看護婦の原型とみる事には疑問を呈し、近代初頭における女性による戦時救護活動の一例として捉えている。同章で書かれているエピソードは、軍陣病院や城内で行われた看護活動、明治に入ってから西南戦争の救護活動であり、戊辰戦争で前線や野戦病院で行われた看護活動や、陸軍の看護兵の育成については書かれていない。

また『IV看護婦と医師』の第一章は「近代以前の医界事情」であり、「明治初年ごろの看病人たち」と題された項目では、長崎養生所の看病人に関する規則の紹介、横浜軍陣病院の雇女のこと書かれている。亀山は『復古外記 東海道戦記 第二』に記載されて

いる「雇女一人給銀拾七匁」と書かれた箇所を紹介し、この女性たちはあくまでも洗濯、飯炊きなどといった、いわゆる女性の仕事を分担させられるために集められたのであり、試しに「看病」にあたらせられたにすぎないと考察している²²。

さらに戊辰戦争当時、大半の医師らは看護婦についての理解をもっておらず、そのため日本人的発想に基づく、階級制ないしは身分制度や男尊女卑の風潮によって看病人の職務を決定したにすぎなかったとし、看病人は特に訓練する必要のない職業人という見方にとられ続けたともいえよう、と結論づけている²³。

看護史の中では長年、女性看病人の採用始まりを、横浜軍陣病院で働く女性看病人としてきた。しかし、二〇〇七（平成一九）年四月一日の栃木県下野新聞で、土佐藩医の弘田親厚が記した「慶応四戊辰会津征討日記 式の巻」の一八六八年四月二四日の記録に「銃創看病人として此地の婦人九人雇入養成局へ差置ける」と記されていたことが発表され、この日付は横浜軍陣病院で国内初の女性看病人が採用されたという定説より一カ月早いことから、壬生の女性看病人が国内初の採用として定説が塗り替えられている²⁴。

看護制度史 一九六〇（昭和三五）年に厚生省医務局が『日本看護制度史年表』（厚生省医務局編集発行）を刊行。明治元年から「保健婦助産婦看護婦法」が制定された一九四八（昭和二三）年までの、保健婦・助産婦及び看護婦の身分及び業務に対する規約や制度に関する史実が解明され、「看護制度史年表」が作成された²⁵。この制度史は、あくまでも国民福祉の担い手としての保健婦助産婦看護婦の歴史的推移を明らかにすることが目的であり、全国各地の看護婦養成所の設置経過や、看護婦の需要に伴う規則の変遷が、厚生省医務局によって記録された初めての看護制度史である。しかしその中に、陸軍看護制度に関する記述を確認することはできない。

また現在では、毎年発行される看護行政研究会編集『看護六法』（新日本法規）の「第三編 資料」の第一に「看護制度の変遷」²⁶として、看護婦制度の始まりから規則制定の変遷が書かれている。そこには、「看護事業として一般に認識されるに至ったのは、明治維新の際の彰義隊の傷病兵に対する救護に始まるが、西南の役及び日清、日露の戦争を経て著しい進歩発達をみるようになった」と、看護婦制度の始まりは三行の記述に終わっている。

看護教育史 平尾真智子『資料にみる日本看護教育史』（看護の科学社、一九九九年第一版）は、看護教育内容と制度に関わる豊富な文献を渉猟し、多くの資料を巻末に挙げ、貴重な研究業績となっている。また、佐々木秀美『歴史にみるわが国の看護教育―その光と影―』（青山社、二〇〇五年）は、明治期から一九九六（平成八）年までを研究対象期間として、看護教育の変遷経緯を歴史的に検証、看護教育における見習い制度の意義や准看護婦制度の問題なども含め、わが国の看護教育の歴史をナイチンゲールの教育思想と教育哲学を視野に入れて考察を加えた一書になっている。

平尾は『資料にみる日本看護教育史』中で、看護教育史の時代区分を研究の便宜上、第一期を一八八五年から一九一五（大正四）年までの「看護婦に関する全国的な規則のなか

った時代」、第二期を一九一五年から一九四八年までの「看護婦規則の時代」、第三期を一九四八年以降現代までの「保健婦助産婦看護婦法の時代」の、三期に区分している²⁷。

看護史では、近代看護の草創期以降を通史として扱ってきた研究状況があり、平尾が看護教育史の区分とした「第一期以前」は、「職業前史」「近代看護移入期前」「派出看護前史」という言葉で説明され、「派出看護前史」については研究業績が発表されてきた²⁸。

しかし、その「派出看護前史」においても対象研究期間は明治元年からである。平尾は、東京大学医学部付属病院の前身となった「大病院」で採用された看病人こそ、「病者に付添って身のまわりの世話をすることを職業とした最初の婦人たちであった」とし、その服務規則なども紹介している²⁹。

看護教育の変遷に関しては、杉森みどり、舟島なをみ『看護教育学』（医学書院、一九八八年）が再版を重ね、二〇一四年（平成二六）年現在第五版が刊行されている。近年、看護学が大学教育の中で行われていることに鑑み、用語の定義化が行われている。杉森らは、「『看護教育』とは、一般的・普遍的教育の一部であり、教育対象を特定すべき教育ではない。教育対象を特定し、目的的に看護という職業に従事するため教育を表現する場合には『看護師養成教育』となり、また、その内容に焦点を当て表現するならば看護学教育となる」としている³⁰。また陸軍における看護兵教育については、看護学という用語を用いた最古の教科書として『陸軍看護学修業兵教科書』（小林又七発行、一八九〇年）を挙げている。

この『陸軍看護学修業兵教科書』は、坪井良子編『近代日本看護名著集成（全一八巻）』（大空社、一九八八年）の第二巻に全員が収められている。その解説の中で高橋みや子は、看護学の名称が最初に現れたのは「陸軍衛生部現役看護手補充条例」（一九八八年一月二四日、勅令九二号）の第一条「六箇月間看護学ヲ修メタル者」と、第四条「看護学修業兵ヲ命ジ」であることを指摘し、「当時の看護界においても看護学の用語が一般化していなかった時に、陸軍が条約・教育規則・教科書に看護学の用語を使用しているのは興味深い」との考察を加えている³¹。

さらに高橋は、『陸軍看護学修業兵教科書』は、陸軍衛生部の職制、職階、職務内容、戦時看護倫理と原理を説く勤務学と、特に実践に必要な知識・技術を集大成し、大系化したものであると意義付け、勤務学と技術に、陸軍における看護学の特質を見ることができるとした³²。そして、一八九〇年に開始された日本赤十字社（以下、日赤と記す）病院看護婦養成は、陸軍衛生部の教育と同じく戦時看護者の養成であり、組織・教育内容上密接な関係があると考えられるとしながらも、『陸軍看護学修業兵教科書』が日赤看護婦養成に及ぼした影響などは未検討であり、その詳細は明らかにされていない点を問題提起している。その後もこの問題についての研究は管見の限りなされておらず、本稿の意義はその問題の解明にもつながるものと考ええる。

医学教育史 陸軍衛生制度史は、医学教育、医療史、大学教育史、近代史などとも関係しており、『陸軍衛生制度史』三冊は、貴重な研究資料としての存在価値は認められるとこ

ろである。特に陸軍軍医教育と医学教育は、密接な関係の中で語られるべき事柄であり、言いかえると、わが国の医学教育史を語る場合、陸軍軍医教育について触れずにその歴史を論ずることはできない。

日本医学の近代化に向けた動きは、明治新国家の基本理念ともいうべき「五箇条御誓文」が一八六八（慶応四）年三月一四日に採用され、「旧来ノ陋習ヲ破リ、天地ノ公道ニ基ク可シ」「知識ヲ世界ニ求メ大ニ皇基ヲ振起スヘシ」との国是のもと、近代国家建設に向け、範を先進諸国に倣う方針が立てられたことから始まった^{3,3)}。新政府の欧化政策に則り、同年二月に高階経由典薬少允らの「西洋医術採用方建白」^{3,4)}の布告によって西洋医術を用いることが公式に許可され、日本医学の近代化が政策として動き始めた^{3,5)}。

翌六九（明治二）年一〇月には、大学東校の少壮教師であった土岐頼徳^{3,6)}、石黒忠恵^{3,7)}、長谷川泰^{3,8)}の連名で、大学博士佐藤尚中^{3,9)}に「医学教育建白書」^{4,0)}が提出され、医師教育確立の整備目的が、国家人民全体の健康および長寿に対する職務を負った職業として、国家経営における使命があることが明確化された^{4,1)}。その結果、ひと月後の十一月に「医学校規則」が定められ、大学東校において医学教育が開始された^{4,2)}。

このような医学教育の近代化の流れのなかで、軍医教育がどのように行われたのかは、陸軍軍医学校篇・発行『陸軍軍医学校五十年史』（一九三六年）により、その成立過程・教育内容は明らかになっている。さらに近年では、西岡香織^{4,3)}、熊谷光久^{4,4)}、瀧澤利行^{4,5)}ら研究者により、陸軍軍医や明治初期の医師教育に関する研究成果が発表され、軍医教育と近代史の関係も論じられている。特に西岡は、「日本陸軍における軍医制度の成立」の中で、維新戦争の官軍衛生機関を調べており、北越戦争では近代的野戦衛生機関の隊繃帶所↓野戦病院↓野戦予備病院↓兵站病院・衛戍病院に似た、出征軍衛生機関業務系統が形成されていたことを明らかにしている^{4,6)}。

陸軍衛生制度史関係 陸軍草創期の看護兵については、石黒忠恵の回顧録『懐旧九十年』（岩波文庫）の「看護婦養成の苦心と賞牌」^{4,7)}、『陸軍軍医学校五十年史』の附録「衛生部の草創時代」の「其二 衛生材料に就て」^{4,8)}「其五 陸軍衛生部の教育に就て」^{4,9)}にその端緒が書かれている。石黒は、傷病兵が重症になった時には親切な用意周到な看護には婦人の手が適しているが、陸軍官憲では、看護婦を養成したり使用したりすることはできないため、戦時に軍隊医事衛生の援助を主眼とする日本赤十字社においてこれを養成し、戦時にこれを使用することとし、世が進むと平時にも看護婦を付けるようにするというのが、私の年来の計画であつたと述べ、「国事に挺身して、ために負傷した軍人にはよき看護婦を附けてやらねばならぬ」と考え、自ら看護婦の養成と待遇改善にも尽力した旨のことを書き残している。また、下士卒教育には、フランスの看護長・看護卒の教科書を参考にすることも書かれている。陸軍衛生部の草創期の制度制定・改革に携わった人物の記録は、軍の看護に対する認識を知る証言として重要視できる。

陸軍の衛生要員である看護兵に関する看護制度は、黒澤嘉幸が「陸軍看病人」^{5,0)}、「明治期の陸軍看護システム」^{5,1)}、「明治期の陸軍看護技術」^{5,2)}を発表したことで、一八七三

年から一八七六（明治九）年にかけて看護制度が整備されたことと、その内容が明らかにされた。黒澤嘉幸は、陸軍看護制度の組織管理にしたがった組織、身分、定員、募集、職務内容、要求される技能、教育訓練の項目を包括して看護システムとして、その項目ごとの内容を検討し、ナイチンゲールが唱道した看護管理が陸軍規則の中にも充分に取り入れられており、一八七三年に始められた看護兵教育は「近代看護」であると結論付けた⁵³。黒澤嘉幸は、さらに「衛生補給の史的考察」と題し、戦時における衛生材料の補給方法に關する変遷を、明治から昭和まで年代を区切って紹介・検討している⁵⁴。

軍事史関係では、松下芳男⁵⁵や吉田裕⁵⁶、加藤陽子⁵⁷が、一八八三（明治一六）年改正の徴兵令第一条に関して、一年志願兵制度が看護兵を対象としていたことを挙げている。松下はこの一二条は、比較的知識を必要とする看護兵をとる目的であったとしており、予後備役幹部生養成のためではなかったと考察している⁵⁸。その後筆者は、「陸軍衛生要員の育成と一年志願兵制度の創設」をまとめ、優秀な看護長を活用する対策の一つとして看護兵を対象とした一年志願兵制度が制定されたことを明らかにした⁵⁹。

陸軍看護との関係においては、日赤における看護婦養成を視野に入れずに論ずることはできない。日赤関係の先行研究は、まず西南戦争で発足した博愛社における看護婦養成や救護活動に焦点を置いた研究として、吉川龍子『日赤の創始者 佐野常民』（吉川弘文館、二〇〇一年）、同「明治期の赤十字看護教育」（明治聖徳記念学会編『明治聖徳記念学会紀要』復刻第五十号、二〇一三年一月）がある。

日赤では、養成した女性看護婦の戦地への従軍は、まず日清戦争で国内予備病院に限って救護活動の任にあたらせ、次に北清事変（一九〇〇年）では病院船勤務へ送り出し、内地から海上へと勤務先を拡大していった経緯がある。川口啓子は、日赤がどのような議論を行い、どのような認識のもとに女性を従軍看護婦として派遣するに至ったのかをテーマの一つに置いて「従軍看護婦派遣への道程に関する研究ノート」（二）⁶⁰（四）⁶⁰を発表している。西南戦争当時、政府軍管理の下で救護活動を行ったのは全て男性看護人であり、川口は、国策に沿って勃発する戦争における軍隊衛生部補助部隊として日赤看護婦を育成していくことになったが、女性を戦場に派遣する事には慎重であったとしながらも、石黒忠恵の高い評価もあり、戦時勤務に積極的に召集されることになったことの経緯を調べ上げている。

また二〇〇九年には、黒沢文貴・河合利修編『日本赤十字社と人道援助』（東京大学出版会）が発行され、西洋先進国から提起された「人道」援助という理念が、どのように日本に受容され、展開されたのか、その経緯と実際の活動内容を、博愛社創設から第二次世界大戦までを研究対象期間とし、ジュネーブ条約への加入の意義を日本の近代化との関係で論じている。その中で黒澤文貴らは、西南戦争時にはすでに日本の戦傷外科と軍医制度が発達していたとしている。

ジュネーブ条約加入に際しては、専門的な戦時救護医療、すなわち軍陣医学を充実させることが最重要課題であり、救護医療として軍団病院や包帯所で看護を担当していた看護

兵についても触れられるべきであるが、先行研究において看護兵育成についての研究はなされてこなかった。本稿が目的とする陸軍における看護制度整備の目的を明らかにすることは、この戦時医療の発達とジュネーブ条約への加入に向けた課題とも関係することであり、本稿の意義はその点にも存在するといえる。

最後に、戊辰戦争における医療の先行研究について概観する。戊辰戦争当時の医療は、従軍した医師らが書き残した日記や自叙伝、報告書がその資料となり、松本良順の自伝小川鼎三・酒井シヅ校注『松本順自伝・長与専斎自伝』（平凡社、一九八〇年）、斉藤省三（白里研究グループ）編「寛齋日記―奥羽出張病院日記を中心として―」（陸別町教育委員会、一九八二年）⁶¹、ジョセフ・シッドール著「日本陸軍病院にかんする報告」ヒュー・コータツツイ著、中須賀哲朗訳『ある英人医師の幕末維新』（中央公論社、一九八五年）、日本医史学会編集『横浜軍陣病院の日記』（『日本医史学会雑誌』第十七巻附録、思文閣出版、一九四四年）がある。さらにこれらを資料として書かれたものに、鮫島近二『明治維新と英医ウイリス』（日本医事新報社、一九七三年）、神谷昭典『日本近代医学のあけぼの―維新政権と医学教育』（医療図書出版、一九八〇年第二刷）ある。戊辰戦争における戦場医療に焦点をあてた研究としては、蒲原宏⁶²、佐久間温巳⁶³の研究がある。

蒲原氏は、「明治戊辰戦争越後口病院の変遷」（上）（中）（下）を発表し、北越戦争における戦時救護体制の実際を明らかにした。佐久間氏は、関寛斎⁶⁴の「奥羽出張病院日記」の資料として、平潟口の戦時救護体制の実際を明らかにしており、本稿は蒲原・佐久間両氏の研究成果に負うところが大きい。

また、わが国に海外の看護が紹介されたのは、一八六〇（万延元）年に遣米使節団が北米ワシントンの米国病院を見学した折の記録とされているが、幕末、幕府の使節団の西欧見聞との関係で看護史が論じられた先行研究は、管見の限り見出すことはできない⁶⁵。

このような研究状況を踏まえ、陸軍看護制度の成立史を課題とする本稿では、対象時期と分析視覚を以下の様に設定する。まず対象時期の設定である。一八七三年に看病人・看病卒が陸軍武官等に位置づけられたことで、陸軍看護制度の整備が始まる。陸軍における看護制度の成立過程を明らかにするには、その背景となる課題を明確にする必要がある。そのため、看護兵誕生以前を「陸軍看護制度成立前史」と設定する。「陸軍看護制度成立前史」は、明治以前であるが、さらに「戊辰戦争前史」と「戊辰戦争期」に区別する。

陸軍衛生制度史『明治篇』には、看護制度の第一次改革を「徴兵看護卒ハ明治十六年ヨリ行ハレタルモ明治十二年ノ改正徴兵令ニ於テ『看病卒モ諸兵ト同シク徴集シ該役ニ服セシムルコトアルヘシ』トノ條文アリテ早晚事実トナルヘキヲ以テ明治十三年一月陸軍軍医本部長ハ各鎮台病院長並各營所連隊医官ヲ東京ニ召集シ徴兵看護卒制度ノコトヲ議シ度旨上申シ認可ヲ得テ陸軍本病院内ニ会同シ之力取扱諸則ヲ議セリ之レ陸軍看護制度ノ第一次革新ナリ」⁶⁶と定義している。第一次改革の結果、徴兵看病卒の徴集が可能になるのであり、具体的には、一八八四年制定の「明治十七年徴兵看病卒取扱手続」（六月二五日送乙第二五四〇号）が制定されることで、第一次改革が終了した。そこでこの第一次改革までを

「陸軍看護制度創設期」と設定する。

さらに看護制度の第二次改革は、『明治篇』には「明治二十一年徴兵壯兵ノ両看護卒ハ廃止トナリ隊付ニ看護手ヲ置キ病院官衙学校ハ看病人ヲ傭役スルコトナル、之レ陸軍看護制度ノ第二次革新トモ謂フヘキナリ⁶⁷」と定義されている。この第二次改革は、一八八八年一二月に勅令第九二号「陸軍衛生部現役看護手補充条例」が公布され、看護手制度が制定されたことで看護制度の確立をみるのであり、第一次改革から第二次改革までの時期を、「陸軍看護制度成立期」と設定する。これらの対象時期の設定に沿い、本稿は「陸軍看護制度成立前史」（以下、「成立前史」と記す）、「陸軍看護制度創設期」（以下、「創設期」と記す）、「陸軍看護制度成立期」（以下、「成立期」と記す）の三部構成からなる。

次に分析視角であるが、「成立前史」の「戊辰戦争前史」では、規則に看護人が確認できる「小石川療養所」の看護の実態を探ることから始め、看病人に関する規則が確認できる施設、「長崎療養所」「横浜梅毒病院」を取り上げ、医療の西洋化が進む歴史の流れの中で、看護に関する認識の変化について考察を加える。

「戊辰戦争期」では、戊辰戦争における医療と看護の実態を明らかにし、戦時医療の課題を確認する。この「戊辰戦争期」に女性看病人が登場するが、亀山の考察は戦争当時の看病人を、あくまでも医師Ⅱ男性という理論と、入院で必要とされた看病（洗濯・飯炊きなど）Ⅱ女性の仕事Ⅱ男尊女卑の風潮Ⅱ看病人には訓練の必要はない、という方程式的考察にとどまっており、近代兵器による銃創を負った「重症患者の病院生活を支えた看病人」と云う視点での考察に欠けていることを指摘したい。そこで第一部では、「負傷兵の看護」としてという視点で、戦時医療における看護の課題の分析を試みる。さらに、同時期には海外事情が導入され始めた時期でもあり、看護に関しては、どのような海外の情報がもたらされていたのかも明らかにする。

第二部「創設期」、第三部「成立期」は、一八六七（慶応三）年一二月に発足した明治政府が、国家建設の目標を、国家的に独立し、国際社会において欧米列強と肩を並べる強国となることを掲げ、国家改革を次々に断行した時期であった。一八七〇（明治三）年、政府は兵制を、海軍はイギリスに、陸軍はフランスの兵制による軍制を定める旨を布告し、陸軍は制度整備に取り組む。その後、西南戦争、壬午事変⁶⁸などを経験し、一八八五年、陸軍はドイツ式に兵制を変更、鎮台制を師団編成へと変更する。その間、変更された徴兵令や軍令・軍制⁶⁹の変更は看護制度も大きく影響される。第二部・第三部は、これら看護制度改革の背景を調べながら、陸軍看護制度成立の意義を日本の近代化との関係で考察する。そのため、一年志願兵制度の育成と看護卒の関係、ジュネーブ条約の加入と看護制度という視点においての分析も加える。

以上の三部構成に加え、巻末には、結論の一章を置いた。ここでは、本稿全体の論旨を整理し、最後に、研究史の今後を展望し、残された課題を提示する。その中で、最初に問題意識として提唱した、陸軍で行われた看護学教育内容の意義づけを、看護史との関係でも考察する。

¹ 明治時代陸軍では、傭人看病人、壮兵看病卒、徴兵看護卒、看護手、看病人（傭人）等、めまぐるしく名称が変わり、明治末期に軍隊では上等看護卒、病院、官衙、学校においては看護卒であった。一九三一（昭和六）年には看護兵に、一九三七（昭和一二）年には衛生部の兵種名が改正され衛生兵となる。看護長、看護卒の官等、名称、等級に関しては、陸上自衛隊衛生学校修親会編『陸軍衛生制度史（昭和篇）』（原書房、一九九〇年）二三八―二五九頁を参照。

² 陸軍軍医団編『陸軍衛生制度史（明治篇）』（小寺昌発行、一九一三年）

³ 陸軍軍医団編『陸軍衛生制度史（明治篇）』三三四頁。

⁴ 青木袈裟美編輯『陸軍衛生制度史、第二卷（大正篇）』（陸軍省医務局内陸軍軍医団、一九二八年）

⁵ 陸上自衛隊衛生学校修親会編『陸軍衛生制度史（昭和篇）』（原書房、一九九〇年）

⁶ 陸上自衛隊衛生学校修親会『陸軍衛生制度史（昭和篇）』一―五頁。

⁷ 陸軍軍医団編『陸軍衛生制度史』三三三頁。

⁸ 拙稿「陸軍の衛生要員補充制度の成立過程」（『軍事史学』第四六卷第二号、二〇一〇年）一一―一二六頁。

⁹ 平尾真智子「明治初期における陸軍看護制度の看護教育史上の意義」（『教育史学会集録』第三十九号、一九九五年）五〇―五一頁。同『資料にみる日本看護教育史』（看護の科学社、二〇〇一年）五頁。平尾は、一八七五（明治八）年に陸軍が発行した『陸軍病院扶卒須知』は、日本にとつて最も先駆的な看護教科書であるとし、看護の教育用教科書の作成や看護学という言葉の使用においても陸軍が最初であり、公・私立病院や日本赤十字社による看護婦養成に先駆けているとした。さらにその教育レベルも、一般社会においても職業としての看護人の資格として十分なものであったと考察している。また平尾は、海軍軍医の教育を担当したイギリス人外科医ウィリアム・アンダーソン（William Anderson）が著した看護書『看護要法』（一八七九年）の解説（坪井良子編『近代日本看護名著集成 解説 第二期（第一〇巻―一八巻）』大空社、一九八八年、一一―一七頁）の中で、海軍看護部員の教育は一八七八（明治一一）年二月二十四日に制定された『海軍看病夫採用教導規則』（医第一五一号）によって始められたことと、講習科目（包帯、薬剤学、止血法、解体、生理学、外科、内科の七教科）も明らかにした上で、わが国に最初に近代看護を導入したのは陸軍であったと結論付けている。

¹⁰ 二〇〇一（平成一四）年三月一日保健婦助産婦看護婦法が改正され、「保健師」「助産師」「看護師」と名称変更がなされた。日本看護歴史学会は、看護「婦」と看護「師」の呼称区分については、その時代の呼称を用いることとし、客観的に述べる場合は、それ以前であっても、「看護師」を用いるとの意見表明をした。本稿もそれに倣った呼称を用いている。

¹¹ ヘンリー・ネーネスト・シゲリスト著、大津章訳『医学の歴史―医学の夜明けを尋ねて―』（三学出版有限公司、二〇〇九年）一九頁。あるグループの健康は大変重要である場合、社会がその責任を引き受けることとなり、軍陣医学は、組織化された医療サービスの最も早い時期の形とされる。

¹² 陸軍軍医団編『陸軍衛生制度史（明治篇）』三三四頁。

¹³ 大関和（一八五八―一九三二）桜井女学校付属看護婦養成所の第一期卒業生。卒業後は帝大病院の外科婦長となる。一八九九（明治三二）年に『派出看護婦心得』（中庸堂書店）を刊行し、派出看護婦の手引書として大きな役割を果たす。一九〇八（明治四一）

年には『実地看護法』（東京看護婦会）を著す。尚、この二冊は坪井良子編『近代看護名著集成7』（大空社、二〇一四年再版）に所収されている。

¹⁴ 亀山美知子『近代日本看護史』日本赤十字社と看護』（ドメス出版、一九九七年）二二頁。

¹⁵ フローレンス・ナイチンゲール (Florence Nightingale 一八二〇～一九一〇) ドイツのフリードナー牧師のデイーコネス養成所で一八五〇年～五一年に看護を学んだ。一八五三年にはロンドンの淑女病院監督となり、給食のためのリフトやナースコールを考案した。当時のロンドンではコレラの第三次パンデミックが起こっており、ナイチンゲールはミドル・セックス病院に多数のコレラ患者が運び込まれた時、支援を申し込みコレラ患者の看護にあたった。一八五三年にクリミア（五五）戦争が勃発し、翌五四年にイギリスが出兵したことに伴い、国防長官シドニー・ハーバード卿によって、数名の看護婦と共にトルコのスクタリ（イスタンブールの一部）野戦病院で任務に就くように依頼された。ナイチンゲールは到着して一〇日間で百名近くの兵士に食事を与え、三ヵ月一万名分の必要品も提供した。ナイチンゲールは、この病院における負傷者や病人に対する不断の看護によって、「ランプを持つ淑女」と呼ばれた。この時の活躍に感激した国民からの基金が寄せられ、基金をもとに一八六〇年セント・トーマス病院にナイチンゲール学校を設立した。

¹⁶ 津田右子「日本の近代看護教育草創期の教育観を探る」（『看護学総合研究（呉大学）』三巻一号、二〇〇一年）八頁。土曜会歴史部会（代表執筆・高橋政子）『日本近代看護の夜明け』（医学書院、二〇〇〇年）四一五頁の表1によると、近代看護教育を受けた卒業生数は、有志共立東京病院看護婦教育所の第一回は五名（明治二十二年卒業、京都看護婦学校は四名（明治二十二年六月卒業）であった。

¹⁷ 看護史研究会編『看護学生のための日本看護史』（医学書院、二〇〇八年）七四―七五頁。土曜会歴史部会『日本近代看護の夜明け』三一八頁。津田「日本の近代看護教育草創期の教育観を探る」八一―二五頁。明治二〇年前後に近代看護婦教育を開始した学校には、慈恵病院の有志共立東京病院看護婦教育所（明治一七年一〇月、三年コース）、同志社病院の京都看護婦学校（明治一九年四月、二年コース）、桜井女学校付属看護婦養成所（明治一九年十一月、二年コース）、帝大病院（東京）の帝国大学付属看護病法練習科（明治二十二年二月、一年コース）、日本赤十字社看護婦養成所（明治二十三年四月、一年半コース）があった。近代看護草創期の各看護学校では、以下に述べるナイチンゲール方式で看護教育を受けた海外の看護師らの指導によって行われた。有志共立東京病院看護婦教育所は、アメリカでナイチンゲール方式による看護教育を受けたアメリカ人看護師リード (Mary E. Reade)、京都看護婦学校はボストン市立病院看護婦学校校長リンド・リチャーズ (Linda Richards)、イダ・スミス (Ida V. Smith)、フレーザー (Helen E. Fraser)、桜井女学校付属看護婦養成所は、エジンバラ王立救貧院病院看護学校の卒業生であるイギリス人アグネス・ヴェッチ (Agnes Vetch)。

¹⁸ 杉田暉道・長門谷洋治・平尾真智子・石原明『看護史』（医学書院、二〇一〇年）四頁には、看護史をその一分科として紹介している。その一部を下記に挙げる。公衆衛生看護史、母子保健史、看護政策史、男性看護史の歴史、病院看護史、看護管理史、看護技術史、戦争看護史、各国の看護史、看護労働史、など多数存在している。

¹⁹ 亀山美知子『近代日本看護史』四巻は、『I 日本赤十字社と看護婦』、『II 戦争と看護』（一九九七年）、『III 宗教と看護』（一九八五年）、『IV 看護婦と医師』（一九八五年）と題され、ドメス出版より刊行されている。I・IIを対象として第四回山川菊栄記念婦

人問題研究奨励金を受賞。

²⁰ 亀山『日本赤十字社と看護婦』二頁。同『看護婦と医師』二頁。

²¹ 神崎清は『新女苑』(一九三九年一〇月号)に発表した「会津戦争婦人隊士顛末記」のなかで、土佐藩の大坂屋敷における藩士の妻や娘による負傷兵の看護を、「最も古い出来事」として紹介し、さらに「会津女性の看護活動も、同時に記録されるべきものである」としている。「会津戦争婦人隊士顛末記」は月刊『ジェイ・ノベル』(二〇一三年一月号)三四―五七頁に全文再掲されている。

²² 亀山『看護婦と医師』二七頁。

²³ 亀山『看護婦と医師』三一頁。

²⁴ 壬生町立歴史民俗資料館編『壬生の医療文化史 先駆者の医療を訪ねて』(独協医科大学、壬生町立歴史民俗資料発行、二〇一〇年)四一頁。栃木県安塚の戦いの際、壬生城内二の丸内に野戦病院を設置し、弘田が治療にあたった。

²⁵ この厚生省医務局編集・発行『日本看護制度史年表』(一八六〇年)は、坪井良子編『現代日本看護名著集成』(大空社、一九九三年)第一期第七巻に所収されている

²⁶ 看護行政研究会編集『平成二六年版 看護六法』(新日本法規、二〇一四年)一〇五九―一四一〇頁。

²⁷ 平尾『資料にみる日本看護教育史』二頁。九八頁。平尾氏は近代的な看護婦の養成は一八八八年に開始されたとして、看護教育の時代区分をしている。「保健婦助産婦看護婦法」(昭和二三・七・三〇 法二〇三)は一八四八年七月に制定され、従来は就業を条件とする業務免許であったが、就業の如何を問わない資格免許となり、登録後は終身資格が与えられるようになった。

²⁸ 看護史研究会(代表執筆 遠藤恵美子)『派出看護婦の歴史』(勁草書房、一九八三年)では、第一章を「派出看護前史(明治元々二年)」、第二章を「派出看護創設期(明治二二―二八年)」―訓練を受けた看護婦による最初の派出から日清戦争終結まで―と時代区分している。また、平尾真智子氏が仏教看護に基づく「看護書」の研究を発表しており、江戸期の看護史の研究もすすんでいる。平尾真智子『看病手引歌』(文政十年刊行)にみる仏教思想に基づく看護『日本看護歴史学会誌』第二六号、二〇一三年)六七―七八頁参照。

²⁹ 看護史研究会『派出看護婦の歴史』六一―八頁。

³⁰ 杉森みどり、舟島なをみ『看護教育学』(医学書院二〇一四年第五版増補一刷)八頁。

³¹ 高橋みや子『陸軍看護学修業兵教科書』、坪井良子編『近代日本看護名著集成 解説』第二期(第一〇―第一八巻)』(大空出版、一九八九年)一九―二八頁。

³² 高橋『陸軍看護学修業兵教科書』二五頁。

³³ 歴史学研究会編『日本史史料(4) 近代』(岩波書店、二〇〇九年)八二―八三頁。一八六八年一月中旬、新政の綱領の立案を命ぜられた由利公正(三岡八郎)と福岡孝弟(藤次)の参与両人が起草し、木戸孝允らが修訂し、京都の紫宸殿で明治天皇が百官群臣を集めて神前盟約の形式で行われた。五箇条御誓文の他の三項目は、「広ク会議ヲ與シ万機公論ニ決スヘシ」「上下心ヲ一ニシテ盛ニ經綸ヲ行フヘシ」「官武一途庶民ニ至ル迄各其志ヲ遂ケ人心ヲシテ倦マサラシメンコトヲ要ス」である。

³⁴ 厚生省医務局編『医制百年史(資料編)』(ぎょうせい、一九七六年)一九―二〇頁。

³⁵ 国公立所蔵史料刊行会『日本医学の夜明け』(日本世論調査研究会、一九七八年)二九八頁。『公文類纂』(国立公文書館所蔵)によると、一八六八年三月八日付の記録に「西洋医術ノ儀是迄被止置候へ共自今其所長ニ於テハ御採用可有之被仰出候事」(官日日記)

とあり、これが「西洋医術採用」に関する最初の記録である。典薬少允（次官）高階經由、高階筑前介の連名で、西洋医学の日進月歩の進歩を宮中にも採用し、医療の進歩を図るべしとの建言が採用された結果であった。

³⁶ 土岐頼徳（一八四三～一九二一）美濃国（岐阜）。名古屋の麻生頼三に西洋医学を学び、京都では漢方医学を修める。一八六六（慶応二）年医学所に入校。戊辰戦争当時は医学所学生であり、句読師の足立寛に、大沢謙二と共に連れられて遠州久津部に向った。一八六九年には、大学東校の准少寮長となり長谷川泰、石黒忠恵と学生を監督した。一八七四年には陸軍軍医となり、西南戦争には医長として、日清戦争では第二軍軍医部長として従軍した。最終階級は陸軍軍医総監（少将相当官）。

³⁷ 石黒忠恵（一八四五～一九四二）陸奥（福島）。二〇歳で医を業とすることを決意し、一八六五（慶応元）年江戸医学所に入學、のちに医学所句読師となる。戊辰戦争時は越後に帰郷、負傷兵の治療にあたる。一八六九年には大学東校で少助教となる。一八七一（明治四）年に兵部省出仕し一等軍医。西南戦争に従軍後には、陸軍軍医総監、軍医学校長、陸軍省医務局長などを歴任。日清戦争では野戦衛生長官、日露戦争では大本営兼陸軍検疫部御用掛けとして従軍した。貴族院議員、枢密顧問官。日本赤十字社第四代社長。わが国の陸軍軍医制度の確立者。

³⁸ 長谷川泰（一八四二～一九二二）越後（新潟）。長岡の蘭学者に師事後、佐倉順天堂にて佐藤泰然・尚中親子、松本良順に師事。戊辰戦争時は石黒忠恵同様医学所句読師並であつたが、長岡藩に徴せられて藩医として北越戦争に参加。一八六九年に大学東校少助教（解剖担当）から始まり、一八七二（明治五）年九月には東京医学校長となる。文部省御用掛、警視庁御用掛、東京府衛生課長、内務省衛生局第一部長などを歴任し、明治中期の医療行政に多大な影響を与えた。済生学舎では、約九、六〇〇名の医師を養成した。

³⁹ 佐藤尚中（一八二七～八二）しょうちゅうともいう。下総（千葉）。一八四三（天保十三）年に佐藤泰然に師事、一八五三（嘉永六）年には泰然の養嗣子となる。一八六〇年に長崎に遊学してポンペに師事し最新外科学を学ぶ。一八六二（文久二）年に佐倉に戻り、一八六七年に佐倉藩に佐倉養生所を設けるが、翌年戊辰戦争の乱を受け、閉鎖する。泰然が開院した順天堂を発展させ、一八七三年に下谷練堀町（現、台東区）に順天堂を開院する。七五年四月には本郷湯島に移転し、順天堂医院と改称した。順天堂、長崎医学伝習所時代の教え子であつた相良知安や岩佐純ら明治新政医官の要請を受け入れ、大学東校を主宰、日本の近代医学の基礎を築く。一八七三年には下谷練堀町に順天堂医院（現順天堂大学医学部附属順天堂医院）を開院。

⁴⁰ 厚生省医務局編『医制百年史（資料編）』二二―二三頁。

⁴¹ 坂井建雄編『日本医学教育史』（東北大学出版会、二〇一二年）二四八―二五一頁。

⁴² 医師の養成に関しては、小高建『日本近代医学史』（考古堂書店、二〇一一年）五三―一〇一頁、坂井『日本医学教育史』一一六〇頁を参照。一八六八年六月二六日に旧幕府の医学所を接收して「医学所」を置き、昌平坂学問所を接收して「昌平学校」と改称、二ヵ月後の九月には開成所を接收し「開成学校」として復興した。政府は昌平学校を「大学校」（現在の文部科学省に相当する行政官庁）と改称、医学校、開成学校を分局とした。また「大学校」の規則の中で、医学校とは「医理ヲ明ニシ薬性ヲ審ニシ以テ健康ヲ保全シ病院ヲ設ケ諸患ヲ療シ実験ヲ極ムルヲ要トス」る施設だとされた。十二月には大学校をさらに「大学」に改称、同時に神田一ツ橋の開成学校は「大学南校」、下谷和泉橋通の医学校は「大学東校」となった。十一月に定められた「医学校規則」は一〇項目

から成る。一八六九年にドイツ医学への転換が決定されたことで、レオポルド・ミュル
ネル (Benjamin Carl Leopold Muller 1824～93 陸軍軍医正) とテオドル・ホフマ
ン (Theodor Eduard Hoffmann 1837～94 海軍軍医) の二人の医学教師の到着を
待つて、一八七一年から最新の医学教育が開始された。尚、大学南校と大学東校は後に
合同して、一八七七 (明治一〇) 年七月には東京大学となり、法科・医科・理科・文科
の四学部が置かれた。また「医学校規則」に関しては、一八六八年わが国初の洋式病院
「長崎精得館」は「長崎医学校」と改称 (学頭・長与専斎) した際に「医学校規則」を
定め、修学年限を五年にするなど教育制度を整えていた。しかし一八七二年に太政官達
で閉校となっていた。

⁴ 西岡香織「日本陸軍における軍医制度の成立」『軍事史学』第二十六巻第一号、一九
九〇年) 二四―三九頁。

⁴ 熊谷光久「明治期陸軍軍医の養成・補充制度」『軍事史学』第四十六巻第二号、二〇
一〇年) 二七―四五頁。

⁴ 瀧澤利行「明治初期医師養成教育と衛生観」『日本医史学雑誌』第三十八巻四号、一
九九二年) 四五―六四頁。二〇一二年に酒井建雄編纂により、わが国の医学教育の歴史
を様々な側面から幅広く論じた一書、坂井編『日本医学教育史』が発行され、瀧澤はそ
の編者の一人として、「第八章衛生思想と医学教育」(二四七―二九四頁) を執筆してお
り、軍医教育についても説明している。軍医養成教育は、一八七〇年二月に大阪城内の
軍事病院に軍医学校が併設され、ボードインを顧問として軍医養成教育は開始された。
一八七二年二月に兵部省が陸軍省に改組され、「軍医寮」が陸軍省内に設置されたと同
時に、大阪の軍医学校は廃止された。翌月の三月には、軍医寮附属病院内に「陸軍軍医
学校寮学舎」が設置され、七三年一〇月からは、ブッケマン (Beukema, Tjarko Wiebenga
1838～1925) が赴任するが、七四年には廃止され、軍医養成教育は東京医学校に委託さ
れた。

⁴ 西岡「日本陸軍における軍医制度の成立」二五頁。

⁴ 石黒忠恵『懐旧九十年』(岩波文庫、一九八三年第一刷) 二七八―二八二頁。

⁴ 陸軍軍医学校篇『陸軍軍医学校五十年史』附録七―一一頁。

⁴ 陸軍軍医学校篇『陸軍軍医学校五十年史』附録一七―二四頁。

⁵ 黒澤嘉幸「陸軍看病人について」『日本医史学雑誌』第三十七巻第四号、一九九一
年) 一〇五―一〇七頁。

⁵ 黒澤嘉幸「明治期の陸軍看護システム」『日本医史学雑誌』第三十九巻第四号、一九
九三年) 六三―八一頁。

⁵ 黒澤嘉幸「明治期の陸軍看護技術」『日本医史学雑誌』第四十巻第二号、一九九三年)
九三―一〇〇頁。

⁵ 黒澤嘉幸「明治期の陸軍看護システム」七九頁。

⁵ 黒澤嘉幸「衛生補給の史的考察(第一報)―衛生科の変せん(明治元年―明治一五年)―」
『防衛衛生』第三〇巻第一号、一九八三年一月) 一一―二二頁。同「衛生補給の史的考察
(第二報)―衛生科の変せん(明治一六年―明治三〇年)―」『防衛衛生』第三〇巻第六号、
一九八三年六月) 一一五―一二〇頁。同「衛生補給の史的考察(第三報)―衛生科の変
せん(明治三一年―明治四五年)―」『防衛衛生』第三〇巻第一〇号、一九八三年一〇月)
三二五―三二八頁。同「衛生補給の史的考察(第四報)―衛生科の変せん(大正二年―
大正一五年)―」『防衛衛生』第三二巻第五号、一九八四年五月) 一一九―一二五頁。同「衛
生補給の史的考察(第五報)―衛生科の変せん(昭和二年―昭和一五年)―」『防衛衛生』

第三一卷第一号、一九八四年一月)三七三—三八〇頁。同「衛生補給の史的考察(第六報)——衛生科の変せん(昭和一六年—昭和二〇年)」『防衛衛生』第三二卷第六号、一九八五年六月)一六一—一七九頁。同「衛生補給の史的考察——第七報衛生材料の変遷(明治元年—明治一五年)」『防衛衛生』第三四卷第七号、一九八七年七月)二五五—二六三頁。

⁵⁵ 松下芳男『徴兵令制定史』(五月書房、一九八一年)四九二頁。

⁵⁶ 吉田裕『国民皆兵』の理念と徴兵制」由井正臣・藤原彰・吉田裕『軍隊 兵士』(岩波書店、一九九二年)四五—四七五頁。

⁵⁷ 加藤陽子『徴兵制と近代日本 1868—1945』(吉川弘文館、一九九六年)四六—四七頁。

⁵⁸ 松下芳男『徴兵令制定史』(五月書房、一九八一年)四九二頁。

⁵⁹ 拙稿「陸軍衛生要員の育成と一年志願兵制度の創設」(『国史館史学』第一四号、二〇一一年)二二—五二頁。

⁶⁰ 川口啓子「従軍看護婦派遣への道程に関する研究ノート(二)」『大阪健康福祉短期大学紀要(二)二〇〇四年三月』八一—八九頁。同「従軍看護婦派遣への道程に関する研究ノート(二)」日露戦争を中心に」(『大阪健康福祉短期大学紀要(三)二〇〇五年三月』八三—九五頁。同「従軍看護婦派遣への道程に関する研究ノート(三)第一次世界大戦を中心に」(『大阪健康福祉短期大学紀要(四)二〇〇六年三月』六九—七六頁。同「従軍看護婦派遣への道程に関する研究ノート(四)第二次世界大戦とその後」(『大阪健康福祉短期大学紀要(五)二〇〇七年三月』九三—一〇二頁。

⁶¹ 官軍大総督宮から病院頭取に任命された関寛齋が、一八六八年六月八日に筆を起し、一月初旬に東京に引き揚げ、残務整理の終わった十二月中旬に至る約六カ月の病院の動静を「奥羽出張病院日記」(現在北海道陸別町郷土史料室に保存、写しが佐倉市教育委員会に所蔵されている)として記録した。

⁶² 蒲原宏「明治戊辰戦争越後口軍病院の変遷(上)」(『日本医事新報』一八〇〇号、一九五八年)四五—四八頁。同「明治戊辰戦争越後口軍病院の変遷(中)」(『日本医事新報』一八〇一号、一九五八年)四四—四九頁。同「明治戊辰戦争越後口軍病院の変遷(下)」(『日本医事新報』一八〇二号、一九五八年)五二—五五頁。

⁶³ 佐久間温巳「奥羽出張病院日記」の研究——戊辰戦争中の一軍事病院の実態」(『医譚』五三号、一九八二年)三一—四三頁。同「奥羽出張病院日記」の研究(承前)——戊辰戦争中の一軍事病院の実態——『医譚』第五四号、一九八五年)三三七—三三八頁。

⁶⁴ 関寛齋(一八三〇—一九二二)千葉県山辺郡中村に生まれ、十四歳の時に関俊輔の養子となり、一八四八(嘉永二)年に佐藤泰然の門に入り、医学を修めた。一八六〇年には佐藤尚中とともに長崎でポンペに学ぶ。ポンペの内科と外科のオランダ語講義録の翻訳に関わる。戊辰戦争後は徳島藩が一八六九年に創設した藩医学学校(俗に巽浜医学学校)の付属病院(俗に診療所・徳島病院と呼んだ)の院長をつとめた。明治中期の約三〇年間は徳島市中徳島町で診療所を開設して、生活貧窮者に対する医療の提供に従事した。七二歳で医業を廃して開拓事業を目指して北海道に渡り、自作農の創設を図った。八二歳で自著『命の洗濯』を出版。本稿において関寛齋に関しては以下の書籍を参考とした。米村晃多郎『野のひと 関寛齋』(春秋社、一九八四年)酒井シヅ監修・日本医師会編集『医界風土記 中国・四国篇』(思文閣出版、一九九四年)一九六—一九九頁。相川忠臣『出島の医学』(長崎文献社、二〇一二年)一三〇—一三二頁。

⁶⁵ 石井研堂『明治事物起原 下巻』（春陽堂、一九四四年）一一四五―一一四六頁。第一三編病医部「看護婦の始」には、「日本で未だ看護婦の無かった時代に最も早く海外の看護法を紹介したのは、一八六〇年に遣米使節団が北米ワシントンの米国病院を見学した折の記録である」と紹介されている。この記録に関しては、亀山『近代日本看護史』看護婦と医師』二〇―二四頁にも紹介されている。

⁶⁶ 陸軍軍医団編『陸軍衛生制度史（明治篇）』三三三頁。

⁶⁷ 陸軍軍医団編『陸軍衛生制度史（明治篇）』三三八頁。

⁶⁸ 壬午事変（京城での事変ともいう）は一八八二年七月二三日に漢城（後のソウル）で大規模な士族の反乱が起こり、政権を担当していた閔妃一族、日本人軍事顧問や日本公使館員らが殺害され、日本公使が襲撃を受けた事件。一八七六年の江華島条約により朝鮮進出への道を開いた明治政府は、朝鮮の開国をめざす政策を取り日本式軍隊を編制させた。これに反感を抱いた朝鮮の旧軍隊が日本公使館を襲った事件。日本軍は出兵し、清国の李鴻章の工作で、朝鮮との間の済物浦条約を締結。二年後には甲信事変が起こり日本は敗退する。日本側は日本軍による日本公使館の警備を約束し挑戦に軍隊を置くこととなったが、冊封体制を維持したい清との対立が高まり、のちに日清戦争へと結びつくことになる。

⁶⁹ 軍制とは、軍の建設・維持・管理・運用など軍事に関する諸制度の総称。兵制とは、軍制のうち兵備の制度をいう。軍令とは、軍隊の出す命令である。

第 I 部

陸軍看護制度成立前史

第一章 戊辰戦争前史

一 「小石川療生所」の女看病人

看護は、肉親による看護が最も基本的なものであるが、社会の発展に伴い、家族が担っていた諸機能は分化され、専門的な知識や技術を持つ医療専門職者として、社会で認知される職業に発展してきた¹。一九一五年六月三〇日、看護婦規則が発令されたことにより看護婦は国家資格となり、全国的な看護婦資格と業務内容の統一が実現した²。しかしこれは、医師の資格制度の確立から約四〇年後のことであった。

記録に残る最初の職業的看護の始まりは、享保の改革で設立された「小石川養生所」であったとされている³。そこで、この戊辰戦争前史では、規則に看病人に関する項目が確認できる「小石川養生所」「長崎養生所」「横浜梅毒病院」を取り上げ、戊辰戦争以前、養生所や病院で雇われていた看病人らの実態を明らかにする。

八代将军徳川吉宗は享保の改革を行い、一七二二（享保七）年、江戸の都市政策のひとつ、下層民対策として官設の養生施設「小石川養生所」を設置した。この養生所に関する研究は、近世史の分野で享保の改革をテーマとする中で取り上げられてきた⁴。

当時、参勤交代によって全国の大名が江戸での生活を強制されたことから、江戸には商人だけでなく、出稼ぎ人・日雇・奉公人なども増加し、江戸は大都市へと成長していた。さらに火事などで焼け出された農村人口も流入、貧民も増加していた。すでに元禄末期より、江戸における貧窮民や非人の増大には為政者も着目し、吉宗も貧窮病人の救済に何らかの処置の必要性を認識していた⁵。そのようなおりに、小石川伝通院前の町医者小川笙船が、施薬院の設置を願う上書を目安箱へ投じたことで、吉宗の救済事業が施療院の設立という形で実施した⁶。

吉宗の時代、熱い病人（享保元年）や痘瘡（享保五年）など、疫病が断続的に流行した。吉宗はその対策として、四名の本草学者を登用し、薬草政策を実施、全国の薬園の整備・充実を図った⁷。同時に薬種の普及・拡大、薬の効能の宣伝、各地の新薬の販売許可、薬価統制なども行った。

しかし薬草政策は薬の高騰を招き、江戸に多数集まった出稼ぎや日雇い・奉公人たちは、病気に罹ると貧困のために服薬もできない状況に陥った。さらに、大火事が江戸市中で繰り返し発生（享保元年、同二年、同三年、同五年）し、鰥寡孤独の貧困に喘ぎ、看病・介護する者がいないという病人の生活環境・家族構成が問題として浮上した⁸。

小石川養生所の施療対象は、二月二六日に発せられた養生所開設の旨によって知ることが出来る。左記はその一部である⁹。

今度小石川御薬園ニおいて、病人養生所被仰付候間、町々極貧之病人薬も給兼候躰之者、或ハ独身ニ而看病人も無之、又ハ妻子有之候得共、不残相煩養生不罷成者之類、右養生所江罷越、逗留し候而療治請可申候、尤療治之内ハ御扶持被下、其上夏冬衣類家具等ニ至迄、諸事不自由ニ無之様ニ被仰付候間、其身歩行候者ハ格別、歩行難成病人ハ、家主或ハ親類店請人、又ハ相店之者成共相頼、御役所江可訴出候

この開設の要旨には、貧しいために病気に罹っても服薬ができない病人、独り身のために看病してくれる人がいない病人、妻子も皆病氣であるため養生できない病人を対象として、入所することで治療を受けることができ、治療中は季節に合わせて着衣や夜具が支給され、不自由がないように療養ができる施設であることが書かれていた。

一七二一年、吉宗が四万坪に拡張していた小石川御薬園の中に、約千坪の敷地の小石川養生所を、建設費二百両を費やして建設した。養生所全体の監督を務める肝煎職には、発案者の小川笙船が就き、病棟は五棟で、男性病棟（新部屋・中部屋・九尺部屋・北部屋）と女性病棟に分けて造られた。医師の定員は二三（享保八）年には、本道（内科）二名、外科二名、眼科一名の五名と定められ、本道と外科のそれぞれの医師二名が一日交代で、眼科の医師が三日に一日の割合で診察に当たった。

養生所に住み込み養生所の医療活動を助けたのは、「看病中間」六名と女看病人二名であり、薬煎、看病、門番などの雑用に当たった。食事の世話をする「賄中間」は五名置かれた¹⁰。養生所の運営事務と警備に当たったのは、養生所見回り与力二名、同心一〇名であった。さらに、入所者のなかで病状や怪我の状況が快方に向かいつつある者に、看病中間の仕事を手伝わせ、「役掛り」と呼び、看病中間とともに入所患者の生活管理をさせた¹¹。

養生所内の病人の生活についての規定の概略は、「養生所壁書」および、『与力同心勤方』の「養生所見廻り役勤方之事」（寛政一一年書出）で知ることができる¹²。『与力同心勤方』には、小石川養生所の運用における決め事が、三七項目列挙されている。その決め事を見ることで、看病中間や下女の役割、またどのような管理体制にあったのか、同所の生活概要を知ることができる。看病中間や下女に関する項目を左記に抜粋する。

- 一 養生所江両組老人宛隔日二昼四時より相詰夕七時過迄罷在、病人部屋部屋見廻、薬用候節取違不申、諸事入念病人共を労、火之元大切ニ仕候様、看病中間下女共江申付候
- 一 朝夕病人之食事致し候節、年寄同心小普請同心立合甲乙無之様看病人之中間下女江申付候
- 一 女病人長屋江暮六ツ前より入口戸江錠おろし看病人之下女は内ニ差置、湯水用事之節ハ錠を明ケ不申用事達候小キロより相達申候
- 一 門出入之儀は暮六ツ時限申候、暮六時打候得は年寄同心小普請同心立合錠おろさせ、口々之錠年寄同心方ニ預り置、夜中用事之節は其訳承届明ケさせ、用事仕廻

候得は猶又同心立合錠おろさせ申候

これは養生所同心の見廻り役としての務めの規則であるが、夜間の火の元の管理は看病中間下女に任せていたこと、暮れ六つには女病棟には錠をし、夜間は女看病人の下女が看病にあたったこと、男病棟も暮れ六つに同心立ち合いのもとに錠をおろし、用事のある場合に、同じく同心立ち合いのもとに錠をあげ、看病にあたる規則であった。

小石川養生所は、設立当初四〇名収容の長屋として計画されたが、設立翌年の一七二三年の収容人数は百名となり、その後一八五二（嘉永五）年には六四二名にまで増大するなど、幕府の窮民対策は積極的に進められた¹³。

しかし、収容定員の増加に加え、医師の治療に対する不熱心、看病中間らによる物品の横領行為は日常的となり、病室の衛生状態も最悪を極めた。町奉行の報告書では、「不浄の場所」と表現され、養生所内部の改革の着手を余儀なくされた。

例えば、「養生所見廻り役勤方之事」に書かれているように、看病人が入所者の用事に錠を開けて対応しない限り、入所者は看病を受けることができなかったということであり、これらの状況が看病中間らの不正を放置する結果となったことは容易に推測できる。実際、看病中間の給金は低く、不浄な病人部屋で働くことは、徳分があるから勤めているのだと、看病中間の賄賂などの不正を公認している実態があった¹⁴。

一八三二（天保三）年当時は、役人が縁側を通ただけで風がつく、部屋の畳には膿血がこぼれ、重病人の寝所は排泄物で畳が汚染されたままであるなど、不潔な状態を極めていた¹⁵。その結果、当時の養生所における病人死亡率は三二％であり、入所者の三分の一が死の転帰をとるという高い数字を示し、養生所内の悲惨な状況を物語っていた¹⁶。

行われた養生所の改革のひとつに、看病中間らの給金の値上げがあった。看病中間は二両一分から三両一分に、女看病人も一両二分から二両二分に増額する処置をとった。しかし、衛生状態の改善、医師や看病中間、看病人による医療活動の改善は見られなかった¹⁷。

養生所の改善として、給金の増額をする処置を取ったことは、入所者はあくまでも病人であり、病んだ人の身の回りの世話や食事の世話などは、単に女性が役割として担っていた家事業務としての仕事として、割り切ることの出来ない役割が期待された結果であった。町奉行の報告書でも、「惻隱の心が深き者」でなければ身を入れて病人を介抱することはできないと報告されていた¹⁸。

惻隱の心とは、孟子により発展した儒教の教えのひとつであり、孟子は人間の本質は善であるとする性善説を唱えた。孟子は、人間は惻隱の心、羞惡の心、辞讓の心、是非の心という仁・義・礼・知の四つの徳の芽生えの心（四端）があり、これを養い育てることで四徳を備えた道徳的な人格が完成するとした。惻隱の心とは、具体的には、他人の不幸を可愛そうと思って見過ごすことのできない同情心、憐みの心、他人の不幸を忍ぶことができないという情である。小石川療養所の悲惨な状況を改善するためには、看護を請け負う介抱人には、惻隱の心が必要であると奉行所が考えていたことがわかる。

結局、医師の不熱心な医療行為、看病中間や賄中間による入所者への虐待行為、物品の横領などは無くならず、養生所の最悪な医療環境の状態を改善することはできなかった。小石川養生所は一八六五年八月、町奉行支配から医学校の所管となり、以後貧病院と改名され、六八年、一四七年間継続した業績は幕を閉じた。

鰥寡孤独の者、困窮の疾病者を救済する、病氣から人々の生命を守ることを政治理念として、平時より継続性をもって小石川療養所を運営したことは、大きな意義のあることであつた。この小石川養生所で雇われていた看病中間らは、わが国の職業看護婦の登場のはじまりであり、看病人を専属においたという点で特筆すべきことである¹⁹⁾。

さらに、小石川養生所における改革過程は、社会事業として施療院を設立し、病人の治療・回復の支援施設を設立しても、その目的を達するため、施設の質を継続するためには、看護する者の良し悪しが大きく影響するということを、社会が認識する切掛けとなつた。

二 「長崎養生所」と看護

一八五四（安政元）年、日米和親条約の調印により、下田や函館の開港が決まつた。幕府は海防政策の一環として、五五（安政二）年に長崎に海軍伝習所を開設した。その運営に当たり、幕府からは幕府医師松本良順²⁰⁾が、第二次海軍伝習生付御用医として派遣された。海軍伝習所で軍医養成を始めるにあたり、幕府はオランダに援助を依頼し、五三年八月二日に来日したファン・デン・ブルック（Jan Karel van den Broek）²¹⁾が医学教育を任された。ブルック帰国後の五七（安政四）年、オランダ二等軍医ボンペ・ファン・メルデルフオールト（Johannes Lydius Cathrinus Pompe van Meerdervoort）²²⁾が二年間の予定で着任した。ボンペは、病院は患者の治療上必要であるばかりでなく、医療行政上病院建設が急務であること、医学教育期間には五年間が必要であり、臨床教育も必要性であるとの旨を幕府に建白した²³⁾。

病院建設にあたっては、協力的であつた長崎奉行岡部駿河守に代わり就任した高橋美作守や監察使有馬帯刀が、小石川養生所の衰敝を例として「無益の証」とし、設立には反対の意向を示し、松本との面会も拒否する状況にあつた。松本は、病院建設の利害損失を説き、必要性を論説した。どのような会話がなされたのかは、松本の『蘭疇自伝』に書き記されている²⁴⁾。

与は大いに病院の必要性を論説す。然るに彼は旧来江戸にあるところの小石川養生所の衰敝を引いて無益の証となす。予曰く、江戸の養生所は設立の悪しきにあらず、積年の弊、その法を守る者の善からざるなり。さればこれを廃するも可なり。すでに朽廃せる養生所を以て証とし、ために今日有為なる病院の設立を止むるは、あに不当のことならずや、と。諄々これに利害得失を説きしに、彼しばらく沈思黙考せし

説得の結果、一八五九（安政六）年、幕府より正式に病院設立の許可が達せられた。この病院設立の許可の背景には、五八（安政五）年のコレラの大流行の影響があった²⁵。日本では一八二二（文政五）年以来コレラが蔓延したことはなく、一八五八年七月に米国ミシシッピー号がシナから日本にコレラを持ち込んだことで、多くの犠牲者が発生した。

コレラの発生は急速に広がり、日本側に援助を求められたポンペは、コレラ対策としてキニーネ、硫酸エーテル・アルコールの使用、予防策としての衛生処置など、治療と救済に尽力した。その後、コレラは日本全国に万延したが、ポンペはコレラに関する日本語で書いた解説書を印刷させ、全国に頒布した²⁶。

ポンペがコレラ患者を治療するにあたり、医師たちにコレラの特徴と療法を教えたが、同じくコレラ撲滅に尽力した人物に海軍派遣隊の看護兵G・インデルマウル(G. Indermaur)がいたことは、ほとんど語られてこなかった²⁷。

宮永は、コレラ撲滅に尽力した看護兵G・インデルマウルについて、「日本人の恩人として記憶にとどめなければならぬ」として、ポンペの書簡に残るコレラと看護兵に関する報告内容を一部抄訳して紹介している²⁸。本稿でも、左記に引用する。

コレラに関連して海軍派遣隊の看護兵G・インデルマウルについて、いささかくわしく述べておかねばなりません。昨年と同じ時期に長崎はコレラに襲われましたが、私たちは極力、治療と救済に尽しました。上述の看護兵は、コレラが猛威をふるっていたとき、その社会的な地位からはどうてい考えられぬことですが、目覚ましい働きを示しました。

コレラがはやったとき、日本人に手を貸すことなど、海軍派遣隊に属する看護兵の仕事ではありませんし、ましてや病院の付添人の仕事でもありませんが、閣下にお知らせするのが私の義務と考えます。

上述の人（インデルマウル）は、賞賛にあたいするほどの働きぶりを示しました。全力をあげて、進んで救済に乗り出しました。しかも私の命に従って、てきぱきと、まちがわず、根気強く働きました彼は、すばらしい結果をもたらすのに貢献いたしました。

ポンペはこの報告の中で、看護兵G・インデルマウルの功績に対して褒美として労賜金を出してもらえようをお願いしている。看護兵G・インデルマウルは一八三一年にユトレヒトに生まれ、一九歳の時に二等砲兵に任じられ、一度除隊後、一八五七年二月にロッテルダムで三年契約で看護兵として雇われた。二六歳の時に第二次海軍派遣隊一行に、職種は看護兵として日本に來日した人物であった。

インデルマウルが実践した具体的な看護の内容は確認出来ないが、「看護兵」によるコレラ患者の看護の実際は、医学だけでなく「看護」の臨床教育として、大変貴重な見聞となつたことは十分に推測できる。

ポンペは病院を建設するにあたり、松本良順の協力のもと幕府の協力を獲得し、建設地の選択も精密な構想を以て計画した。例えば、病室は南方を向かせる、清登な戸外の空気と健康的な日中の光線をできる限り取り入れる、豊富な分量の水が供給でき、乾燥した土地など、いくつかの条件を妥協することなく実現させた。建設地も決定し、養生所はオランダ海軍の建築家（一等海軍士官）のB・D・ファン・トロイエン（BernardDiederick van Trojen）の協力で作図した設計図に基づいて建設された²⁹。病院設立に先立ち、一八六一（文久元）年八月一日、長崎奉行所は左記の訓令を公布した³⁰。

此度御取建相成候養生所之儀は、病氣療養致し候者下^{々ニ} 而は医師見舞等行届かず、又は舶来之薬種類間^々 品切も有之、殊^ニ 薬剂療方とも銘^々 の好僧により意外之迷ひを生し、療治不行届相果候もの不少、既^ニ 午未年の流行病之節、其手当届兼夥敷死亡之者も有之候間、医薬は勿論看病人相撰養生筋不行届無之様致し遣度との御趣意^ニ 付、長崎市郷之者共をはしめ旅人たりとも療養相願度者有之候は、其役所人共厚相心得病者寄宿手重^ニ 不相心得様いたし遣すべく候、尤別紙規則所之趣相心得身許有之者共^ハ 寄宿料可差出、極貧之者江^ハ 御施薬^ニ 可被成下候条来ル九月三日より勝手次第可願出候

右之趣令承知別紙規則書相添不洩様可申渡候

八月朔日

（傍点筆者付記）

この訓令は、養生所を設立する目的を、下々の者には医師の見廻りが不行き届きであり、舶来の薬も品切れとなり、また、薬剂や療法の医師による違いにより治療が行き届かず死亡する者があること、特に安政五年と翌六年のコレラの流行の際には手当が行き届かず、夥しい死亡者があったこと、そのため治療が普く行き届くようにと云う趣意を以て病院を設立するのであるから、市郷の者はもとより、旅人に対しても病院規則に則り、診療治療を施すようにと諭し、極貧の者には無料で施薬を許すことを宣言した内容になっていた³¹。

この訓令で注目すべきは、筆者が傍点を付記した「看病人相撰養生筋不行届無之様致し遣度との御趣意」と書かれていることであり、看病人を選び、養生に不行き届きがない様にと云う趣意があったということである。養生所の運営に於いては、看病人による養生、つまり住居・衣服・夜具・飲食・入浴・睡眠・運動・房事などの手当を重視していた。

一八六一年九月二一日（文久元年八月一七日）、わが国最初の本格的洋式医学教育施設として医学校兼病院「養生所」（通称、長崎養生所）が設立され、ポンペを教師とした、基礎と臨床の課程を系統的に学習する五年間の西洋医学教育が開始された³²。

建設された病院は、南北に窓の多い南風が通るようなH型の、天上の高い二階建ての二棟からなる洋式の病院であった。病室は八室（一病室あたりベッド数一五床、計二二四床）、隔離患者室および手術室（四室）の他、薬品・機器・書籍などの備品室、炊煮所（台所）、

浴室、書役・監察官室・番医師室・看護者室、穢垢衣衾ヲ洗濯スル所などが設けられた³³。

入院に際しては、内科棟は熱病患者、皮膚病患者、回復患者とその他の内科患者の四室、外科棟は創傷患者、梅毒患者、眼病患者、疥癬病患者の四室と、同病の患者に分けて収容し、院内感染に配慮した管理を実践した³⁴。

また診察の規定は、一八六一年九月五日（文久元年八月一日）付で「養生所規則」（八項目）として発布された³⁵。

養生所規則

一療用相願候者は銘々居町居村役人并引請証人名前相認候印紙書付式枚持参証人同道直

ニ養生所江罷越壹枚は門番所江差出壹枚は玄関江持参役人引合医師改請寄宿可致候

但養生所より人別糺方いたし候間居町居村乙名散使江相届置罷越可申尤乙名散使等

より申立ニ不及当人とも直ニ罷越不苦候

一夜具寝衣之類は置附之御品有之候間持参ニ不及尤自分所持之物致持参度候はば医師見届候上差許可申候

一病氣快方ニをもむき歩行等差支無之者は服薬相休不申候とも帰宅為致日を定相通ひ診察受ケ可申候事

一療治相願候もの身許有之分は寄宿中一日壹人六匁宛一切之為賄料相納可申尤全快後たりとも其前たりとも都合次第相納可申候事

一看病人召連寄宿いたし一間借切方相願候者は一切之為賄料一日拾式匁宛前同様相納可申候事

一市郷之内身許薄之者江は薬剂被下候間前同様之手順ニ而一日壹人式匁五分宛相納可申候事

但極貧之者共は其時宜ニ寄諸賄料等一式差出ニ不及候事

一病人之親類其外見舞之者は兼而渡置候番付ケ証札持参看病人案内ニ而対面可致尤飲食之品差贈候節は医師之改を請可申候事

一此外之儀は寄宿之上諸事其筋之もの差図を請ケ可申候事

この規則には「看病人」と書かれた箇所が二ヶ所ある（傍点付記）。ひとつは患者自身が生身の回りの世話をさせるために連れてくる付添人に対する規則であり、もう一カ所は養生所の看病人の仕事に、見舞客を案内し面会をさせることがあったということである³⁶。

実際の付き添い人については、ポンペ著『日本における五年間——日本帝国とその国民の知識への寄与——』（沼田次郎、荒瀬進氏共訳）にも、「身分の高い夫人は五・六人の侍女を連れてやってくることもあり、一人だけはやむを得ぬものとして例外的に許可した」と書かれている³⁷。

一八五七年十一月二日（安政四年九月二六日）、ポンペは一四名の聴講生に対して医学

講義を開始した。松本の呼びかけに応じ、多くの藩主がこの学校への留学を許可し、医学生はその後四〇名に達する。医学生らはポンペに従い回診を行い、聴診器などの診察器具の用い方を学び、診断・治療、死体を使った手術の練習の他に、三ヵ月交替で臨床実習として、包帯実習、処方箋記載、調剤、栄養指導、食事及び浴室の監視、牛痘苗の管理、カルテ整理等を行った^{3.8}。

ポンペは、理想とする病院運営に必要な洋風の食事、ベッドの使用、浴室の完備、設備のよい薬品倉庫と調剤室での薬剤の取扱いなどを実現し、日本最初のヨーロッパ式の医学校と附属病院を設立、運営した。ポンペはその治療と看護を振り返り、オランダの病院と比較しても「限りなく完全に近い」「病人に対する処置と看護は、今や院内に於いて誠に好ましいものとなった」と述懐している^{3.9}。

さらにポンペは、「私には従順な病院の役人、優秀な看護人、立派な浴室と回復期の病人のための庭園がある」「病人の処置と看護に関しては譲歩、容赦ということはいっさいあり得ない」と述懐しているように、ポンペは病院における看護の重要性と、医学教育には「秩序がなければならないこと」を教え、その結果が病院の看護に関する評価を高めた^{4.0}。

ポンペは、病人に規則正しい入院生活を送らせるように管理することが、規則正しく病人を看護できる、という信念に基づいて運営しており、医学教育の効果とともに、治療効果もあげていた^{4.1}。

実際ベッド一二四床のうち、常に平均七〇〜八〇のベッドが使用され、平均入院日数は二九日であった。夏季に入ると、長崎に渡り来る外人家族も多く、また外国船では天然痘、チフス、コレラ、骨折などの病人などが現れ、隔離が必要な場合は病院に収容し、一日の看護料として、二ドルを徴収したが、決して高くないと好評であった^{4.2}。

一八六一年九月二一日（文久元年辛酉八月一七日）から翌六二年九月二一日（文久二年壬戌年八月二八日）までの一年間に、ポンペが養生所で診察した患者数は九三〇名程度であり、そのうち死亡者は一三名と大変低い数字であった^{4.3}。長崎養生所の患者の死亡率の低さは、ポンペが施した西洋医学による治療の成果と、感染予防の考えに則った患者管理という側面だけでなく、ポンペが評価したように優秀な看病人による看護の成果があったと、判断することができる。

小石川養生所が不浄の場と酷評されたのに対し、長崎養生所はポンペ自身が看護を評価できる状態で運用できた。この違いの要因は何であったのか。この二つの養生所を比較した場合、その設置目的が、小石川療養所は下層民対策として設置された施薬院であったのに対し、長崎養生所は医学教育の臨床実習の場として設置された。

欧州では病院建設を任された医師が全権を委任され、病人に必要と思われることは何でもできるという西欧式に近づけるべく、ポンペ自身が主導的な指導を行ったことが、良い看護の実践につながった大きな要因であった。

長崎養生所の運営は、わが国における医学教育の始まりとしての意義だけでなく、規則正しい入院生活と、それを実行する看護の力を実証した、初めての病院であったという点

において大きな意義があった。特にコレラ蔓延時に、「看護兵」によるコレラ患者への看護の実践を、医学生として学んでいた日本人医師らが知り、自らも臨床実習で経験したことは、病院における一つの職種としての「看護者」の存在を認識する切掛けになったという点においても評価できるものであった。

さらに養生所の歴史的意義は、ポンペの門人らの養成という側面においても高く評価される。ポンペは洋式病院を設立し、臨床の実態を学生に体験させ、人体解剖も実施した。ポンペは医学に七科（物理・化学・解剖・生理・病理・内科・外科）を設けて系統的に医学教育を行っただけでなく、民主主義に立脚した医療を実践した。貧富・上下の差別なく病人の治療を施すことは、封建社会で育った門人らにとつて驚くべきことであつたが、「医師は自分自身のものでなく、病める人のものである」という医戒を、養生所で身をもつて実践し学んだことは、以後、医師としての行動規範となつた^{4.4}。

日本人医師でポンペに教えを直接うけた門人は一三三名と云われており、松本良順をはじめ、佐藤尚中、関寛斎、橋本綱常などが、のちに起こった戊辰戦争で軍医として従軍し、ポンペから学んだ西洋医术をもつて多くの負傷兵を助ける^{4.5}。また、ポンペの門人の中には、その後、看護教育に関係する人物も多い。松本良順は、明治陸軍の初代軍医総監として、陸軍の衛生制度整備の中心人物となり、一八七三年から整備事業を開始した。その他にも陸軍軍医総監・初代日本赤十字社の病院長になる橋本綱常や、翻訳看護書『看病心得』を刊行した太田雄寧などがポンペに医学を学んでいた。これはポンペの門人として、臨床実習で看護を実践した経験が、大きく影響した結果であつたと考えて良いだろう。

「長崎養生所」はオランダ医師ポンペによつて西洋医学、西洋の病院方式によつて運営された。ポンペの目指した病院における治療においては、規則正しい入院生活を作り上げることが医療の中心にあり、その実行に看護は欠かせないものであつた。酒井は、ポンペが病院を建設した目的の一つに、病人に対して規則正しい看護法を教授することがあり、日本に看護教育という認識を持つて講義を行ったのは、ポンペが最初であるといえる」と述べている^{4.6}。つまりポンペの業績は、わが国の看護史においても、病院運営に訓練された看護の必要性を認識させた初めである、いう点で大いに評価されるべきものであつた。

さらに海軍派遣隊の看護兵による看護の実践は、コレラという伝染病の蔓延という危機的状況において、看護の力をクロースアップし、病院における一つの職種として「看護者」の必要性を日本人医師に印象付けたと考えられる。

三 「横浜梅毒病院」の介抱女

長崎養生所の医師ポンペは、眼病や結核とともに性病の多いことに注目し、特に梅毒が国民の健康被害に及ぼす弊害を警告した^{4.7}。日本では一五二一（永世九）年に梅毒が上陸したと云われており、江戸時代には梅毒の蔓延は深刻なものになつていた^{4.8}。

江戸駐在英國公使館の補助官兼医官として一八六二年五月に来日したウィリアム・ウィリス (William Willis)⁴⁹の報告書「日本の売春」⁵⁰によると、「江戸では遊女の約十パーセントが梅毒にかかっている」とされ、「都市では三〇歳の男の三分の一がそれに冒されている」とあり、「開港場に日本政府が適当な病院を設立し、当分のあいだ病気の女性の営業を強制的に禁止させることである。この目的にそって、十分に資格のある人物が、すくなくとも一週に一度、すべての売春婦を定期的に検査しなければならない」との意見を提出した。

ポンペの警告とウィリスの報告書が出される以前、一八六〇年に長崎にロシア軍艦が来航した際、ロシア軍医が遊女の陰門を悉く改めたいと申し出るという事があつた⁵¹。松本良順も梅毒の拡がりを懸念したことを、自伝に左記のように書き残している⁵²。

梅毒に警戒なきは放火の禁なきより甚だ害あり。火はただ財産を失うに止まれども、梅毒の伝播に至りては際限なく子々孫々に伝え、変じて諸種の難病となり、ついに人を殺し国力を弱うするに至る。宜しくすべからくこれを房遏するの策を講ずべきなり。

ロシア艦長と長崎奉行、遊女屋の相談により、ロシア軍艦の停泊地に近い稲佐にロシア水兵専用の休息所を作り、隔日に陰門改めを行うという取り決めがなされた。運営に関しては、軍艦ポッサジニカ搭乗の提督ビリレフが百両を提供したことで早速三名の遊女によって運営実行に移され「魯西亜マタロス休息所」と称された⁵³。この検梅が日本における始まりとなるが、あくまでもロシア海軍の軍艦乗務員に関係する遊女に限られたものであった。

西欧ではすでに一八世紀の初め頃から娼婦の検診を制度化しようとする動きがあり、一八六六年、イギリスでは兵営所在地、または開港場のすべての娼婦に対して性病の有無を定期的に検診することを定め、梅毒に罹っていると診断された者は病院に収容し、全快まで拘留する事を得るという処置をとっていた⁵⁴。

イギリスは自国の軍隊の入港する開港場において検梅を行うため、一八六七年に、同国海軍軍医ニートン (George Bruce Newton)⁵⁵を日本へ派遣した。九月、開国後の日本に駐留することとなったイギリス公使パークス (Sir Harry Smith Parkes)⁵⁶はニートンを後援し、日本政府に梅毒病院を横浜に設立することを説いた。ニートンが提出した意見書には、医師、看病人、病者の役割が文章化されていた⁵⁷。

都督

判事衆より、士官一人⁵⁸命し、病院を都督せしむべし。

施行せる規則を察すべし。

惣而不法の事を防ぐべし。

治療之外、諸事其責に任す。

院内掃除、病者衣食^ニ、大^ニ注意すべし。

医師

医は、院内に住し、院内^ニ止宿する人の為、昼夜尽力すべし。何時頼まるゝとも、出張して、親切^ニ心付け、正当の医術を以て、病者を取扱ふべし。
一日^ニ一度は、必ず病者を見舞べし。
病人又ハ其朋友より謝儀進物を受る事、一切相ならず事。
切要なる薬種を備へ、自分差配して、善く是を検すべし。

看病人

実母の如く善く精勤し、性行宜敷女を撰み、医師等聴従、病者を親切に注意すべし。
其請持の療養所を清潔にする事を引請、かつ療食所内にハ、医師、都督の外ハ、人足其他、何人^ニ而も、入る事を許さざる故、臥床諸具も掃除すべし。
毎朝第八時^ニ、看病人の手^ニ而浴し、着服すべき病者を引請べし。
受持之療食所に医師見舞時は、其場所等へ出して、医師の指図に随ひ、衣服を着せ、薬を与ふべし。
食物を割烹所より取り、病者に世話し与ふべし。
医師見舞たる後、調合所^ニ至り、病者の薬を請取べし。

割烹人并人足

割烹人并人足の数は、少かるべし。
都督、医師の外、男子ハ止宿を禁ずる事故、割烹人并人足等、院内止宿を許す理あるべからず。

病者

病毒を請たる妓は、治療終日迄、厳に病院に留置べし。
請求に偽り無之ハ、門外他出を許すべし。
病妓、病院に入る時は、其用心保護の為、病院の服を与ふべし。是に依りて、病院に関する妓たる事を、知らるべし。
右病院の服は、夏冬一通り、下着^ニ至る迄、備ふべし。

右ハ別段の形になし、着用する者を、見分易くし、分散其外不持^ヲを防べし。
閑時を消する為、音楽遊嬉を許べし。
且病者各、火鉢、化粧箱備ふべし。
常例輔時等は、病者の為に、良質の食を、沢山に備ふべし。
又医師の差図等^ニ依り、余分の増を給すべし。

このニュートンの意見書からわかることは、看病人は母のようによく務め、医師に従い、病人を親切にできる人を選ぶこと。看病人の職務は、療養所の清掃、寝具の整頓、毎朝の入浴介助、診療時の介助、薬の受け渡し、食事の介助をすることを目的としていた。

ニュートンによって意見書が書かれたのは一八六七年である。すでに、イギリスではクリミア戦争に従軍したフローレンス・ナイチンゲールによって、イギリス国家からの感謝状と五万ポンドをもとに、一八六〇年ナイチンゲール基金看護婦養成所が開設され、セント・トーマス病院がその臨床学習のために選定されていた。ナイチンゲールは、軍隊において、兵士の学校に病院雑役婦や料理人の講習課程を創設し、将校の医学校創立の促進も行っていた⁵⁸⁾。

一八六七年、ナイチンゲールは病院との契約に於いて、患者のケアには常に経験のある看護婦を配置しなければならないこと、さらに学生を指揮あるいは教えるためには、専任の資格が充分にある養成機関を卒業した、責任のとれる看護婦がいなければならないこと、などを特記していた⁵⁹⁾。

ナイチンゲールは病院の健全な運営に必要なことは、看護婦を組織化される状況で看護管理することを実践していた⁶⁰⁾。イギリス軍医ニュートンによって梅毒病院が設立されたことで、看病人の職務内容や人数などは、すでにイギリスで始められていた看護婦教育が参考にされた可能性は高い。そのためニュートンも、イギリスと同様の看護婦の必要性を認識した上で意見書を作成し、提出したと推察できる。

次に提出された「病院定之事」は一三の項目からなり、うち二つの規定に「介抱女」のことが書かれている。長文ではあるが、イギリス医師によってはじめて文章化された日本の病院の管理規則であり、左記に全文をあげておく⁶¹⁾。

- 一 病院詰并日々同所江通ひ候病者共、一同毎朝第九字迄ニ相揃、順番ニ治療請、右場所相済候後、介抱人調合場江罷出、薬請取、夫々手当可致候事。
- 一 介抱女ハ、病者凡式拾人ニ付壺人ツツ之見込、掛役々ニ而人撰之上、可申付事。
- 一 院内詰病者食物之義ハ、都而同所ニおいて煮焚可相与、且夜具、蚊帳、衣類丈ケハ銘々持参之事。
- 一 病者入湯并下湯をも、日々無差支様、可取計候事。
- 一 院内ニ罷在候病者共、猥ニ門外江立出、或ハ帰宅いたし候義ハ、難相成候間、其段抱主より当人江申含置、且院内より相詰候ものも心付、都而不取締之義無之様可致候事。
- 一 外国人商館江、一ヶ月又ハ半月仕切ニ而、被相雇候遊女共ハ、彼方江罷越候前日并期日相立引取候節をも病院江罷出可改請事。
- 一 前書病院詰并通ひの病者、且外国人商館行之外、廓内ニ罷在候惣遊女共を、順番相立、二周之内ニ不残病院江罷出、改請、瘡氣有之ものハ、夫々治療請可申事。

- 一 遊女共、可改請当日、瘡毒外之病氣ニ而、難罷出節ハ、其段抱主より即日病院江申立、見届請候歟、又ハ他之医師江診察請候容体書可差出事。
- 一 遊女増減有之節ハ、其抱主并町役人より、其都度無洩落、病院江可相届事。
- 一 通弁并町役人、其外院内小仕、水夫^ニ至る迄、毎朝第六字迄^ニ相詰、用済跡取片付、小仕を申合、式人ツツ泊番相立、朝夕食事賄并掃除等心附、火之元入念可申事。
- 一 外国医師之義ハ、日曜日之外、毎朝第九字病院出席之事。
- 一 院内下肥之義ハ、廊内江立入肥取のもの江申付、日々無怠掃除可為致事。
- 一 病院日々小買物并臨時入用等ハ、其都度役人共より申立、掛役之見留請、翌月二日^ニ至り、会所において引しめ勘定仕、払可申事。

(傍点筆者付記)

一八六八年四月一二日から、横浜の吉原遊郭の名主で岩亀楼主佐藤佐吉の長屋を仮病院として、横浜港遊郭の遊女の性病検診を週一回行い、有病者は強制入院させて治療することになり、ニュートンがこの検診を担当した^{6.2}。六月から官費を以て吉原町(現在長者町五丁目本願寺前にあたる羽衣町三丁目吉田小学校の地)に横浜梅毒病院を設立し、ニュートンを名誉院長に推戴し、神奈川府裁判所御雇医松山棟庵^{6.3}他二名の邦人医師を任命し、夫々が週一回出張して検梅の実施が開始された^{6.4}。

検梅を担当した医師松山棟庵は、福沢諭吉^{6.5}の門人である。松山は、福沢が蘭学塾(一八五八年に開設)を六八年に「慶応義塾」に改名し、さらに私財三万円を投じて七三年に医学所を開設した際に、慶應義塾医学所校長(一八〇年)を務めた人物である。松山棟庵らは、アメリカ医師カルヴィン・カッター(Calvin Cutter, 1807~1872)が一般向けの衛生啓蒙書として刊行した書物を医学生用として訳し『初学人身窮理 上・下』^{6.6}と題して発行した。

この本の一七章「看病人の心得べき事」には、「看病人ヲ教育スル為メニ更ニ学校ノ設ナキハ実ニ歎惜スベキコトナリ」^{6.7}と、看護学校の必要性が説かれている。棟庵は、横浜梅毒病院でイギリス医師ニュートンの下で働いた経験と、『初学人身窮理』の翻訳の経験から、未だ職業看護婦が存在していなかった時代に、病院における看護婦の役割、育成の必要性を認識していた有識者の一人であった。

横浜梅毒病院が設立されたことで、三カ月で一四、三〇七名の娼婦を検診し、四五二名の患者が発見され、治療がなされた^{6.8}。治療は水銀燻蒸法などが行われたが、ニュートンは一八七一年に『懲療新法』を刊行するなど、公娼の性病検診と組織的治療の体系化はニュートンの努力によって実現した^{6.9}。ニュートンの意見書「病院定之事」では、介抱女は人選された者が、二〇名の病人に一名の割合で付くことが定められた。実際に雇われたのは、介抱女六名であった^{7.0}。

彼女らの仕事としては、調合場に薬を請取に行き、各病人に手当をすることが主な仕事であった。手当の内容を推測すると、梅毒は天疱瘡とも綿花瘡(めんげそう)とも称され

るように、皮膚の形象をもつて名づけられており、皮膚症状に対する処置が必要とされた^{7.1}。梅毒は室町時代にわが国に伝わったが、梅毒発疹は潰瘍化すると悪臭を放つなど、その治療は人々に嫌忌され、離れ屋に隔離され、煎汁を付けるなどの看護は下女の仕事であった^{7.2}。介抱女が担った手当は、皮膚症状に対する手当、つまり「与薬」も主たる仕事であった。そして長崎養生所同様、入浴、食事、衣類に至るまで管理がなされていた。

横浜梅毒病院は一八七一年三月二〇日に一時閉鎖となるため、看護史の分野においても注目をされることはなかった。しかし本稿で、横浜梅毒病院では病院設立に向けて、看病人の必要性が設立前より認識され、実際には「介抱女」という名称ではあったが、仕事内容、人数、採用方法が定められ、文章化されていたことが明らかになった。これは、亀山氏の先行研究でも明らかにされてこなかったことであり、今後、女性看病人の雇いはじめを考える重要な指摘となる。

本章では、「小石川養生所」「長崎養生所」「横浜梅毒病院」の三施設を取り上げたが、江戸の末期、オランダ医師やイギリス医師の指導の下、西洋式の病院を運営していく過程で、看護者に関する規則も整備され、優秀な看護が病院運営に必要であるということが、西洋医学を学び始めた、いわゆる蘭方医たちに認識された、というのが本章の結論である。

註

¹ 新村拓『死と病と看護の社会史』（法政大学出版局、一九九五年）一八〇頁。

² 看護史研究会編『看護学生のための日本看護史』八八―九五頁。一九〇〇（明治三三）年七月一日「東京府看護婦規則」（府令第七一号）が発令されたが、これは派出看護婦を対象としたものであった。「看護婦規則」制定の背景には、東京に集中していた看護婦が地方にも増加し、府県ごとに資格に格差があることで生じている不都合を解消すること、また女子教育が盛んになり、職業婦人の進出に伴う看護婦資格の見直しなどがあった。

³ 杉田他『看護史』九三―九五頁。

⁴ 特に本稿執筆に当たり参考とした文献を以下に記す。南和男『江戸の社会構造』（塙書房、一九九七年）、岩渕佑里子「寛政く天保期の養生所政策と幕府医学館」（『論集きんせい』第二二号、二〇〇〇年六月、四〇―六一頁）、大石学『吉宗と享保の改革 改定新版』（東京堂出版、二〇〇一年）、安藤優一郎『江戸の養生所』（PHP研究所、二〇〇五年）。

⁵ 南『江戸の社会構造』二九六―二九八頁。

⁶ 南『江戸の社会構造』二九八―二九九頁。小川笙船の上書は以下の通りである。

施薬院被為仰付候は、難有仕合可奉存候、町々極貧之病家を窺候処、不便千万之仕合共ニ御座候、武家方より奉公人を大病ニ付、請人方江返し申候処、受人も親類ニ而も無御座候ものは、散々ニ看病仕候無道人も多く御座候、其外無縁之もの或妻子等無御座候貧人之相煩候へ、見殺ニ仕候事も多御座候

⁷ 大石『吉宗と享保の改革』一五九―一六六頁。登用したのは、丹羽正伯貞機、野呂元丈実夫、阿部友之進照任、植村左平次政勝の四名であり、医薬・物産についての豊富な

知識があり、献策を行い、書物なども多数著した。

⁸ 小川明「わが祖、赤ひげ・小川笹船の仁と小石川養生所の変遷」(文京ふるさと歴史館編集・発行『洪庵、知安、そして鴟外 近代医学のヒポクラテスたち』二〇一二年)一〇―一一頁。

⁹ 南『江戸の社会構造』三〇〇頁。

¹⁰ 安藤『江戸の養生所』九八―一〇一頁。看病中間は中部屋(二〇名収容) 北部屋(三〇名収容)・新部屋(二五―二六名収容)であり、二名ずつ配置された。所内では「親方」「番子」と呼んだ。

¹¹ 安藤『江戸の養生所』九八―一〇一頁。

¹² 南『江戸の社会構造』三二四頁。

¹³ 渡邊隆子・山下光雄「病院療養食史考(第一報)―石川養生所、長崎養生所について」

¹⁴ 『千葉県立衛生短期大学紀要』第一八巻第一号)五一―五七頁。

¹⁵ 南『江戸の社会構造』三二三頁。

¹⁶ 南『江戸の社会構造』三三〇頁。

南『江戸の社会構造』三三八―三三九頁。病死率は二七・二六(享保一一)年は五%と低く、一八三二(天保三)年以降の改革以降徐々に死亡率は低下、一七二三年から一八五九年の死亡率は十一%となった。

¹⁷ 安藤『江戸の養生所』一七四頁。

¹⁸ 安藤『江戸の養生所』一八〇頁。

¹⁹ 杉田他『看護史』九三頁。

²⁰ 松本良順(一八三二―一九〇七) 下総佐倉の藩医佐藤泰然の次男、幕府の医官松本良甫の養子、名は順。一八五五年に將軍御目見医師となり、長崎には海軍伝習生御用医として着任、ポンペに従学し、長崎養生所建設に尽力した。江戸に戻り医学所頭取助となるが、戊辰戦争では江戸城明け渡し後奥羽越列藩同盟のために会津の文武の学校日新館内に野戦病院を開設、治療と共に軍陣外科の講義も行った。兵部省に出仕後は、衛生部創設、軍医の編成に努力し、軍医試験補制度、学力による等級などを画策し、軍衛生部制度の創立にあたった。初代陸軍軍医総監。後に貴族院議員、男爵。

²¹ ファン・デン・ブルック(Jan Karel van den Broek、一八一四―六五) 一八一四年オランダのヘルウィネンで生まれる。幼少の時より科学に関心を抱く。一八三三年ロッテルダム医学校を卒業、一八五三年八月二日に長崎出島の商館医として来日。第一次海軍伝習が始まると派遣教官、班員の診療を依頼され日本人との交流が盛んとなる。医学の他に軍事から写真まで近代科学技術を教えた。

²² オランダ海軍軍医ポンペ・ファン・メルデルフォールト(Johannes Lydius Cathrinus Pompe van Meerdervoort、一八二九―一九〇八)。フルネームは、ヨハネス・リディウス・カタリヌス・ボンペ・ファン・メルデルフォールト。現在のベルギーのブルージュの貴族の家に生まれた。一八四九年にユトレヒト陸軍医学校を卒業後、一八五一年から五五年までは東インドで勤務。一八五七年九月二日(安政四年八月五日)に第二次海軍伝習の教官として長崎に赴任。松本良順の協力を得て、近代西洋医学教育を開始し、一八六二年の帰国までに六一名に卒業証書を渡し帰国した。帰国後も医学生(伊藤玄伯と林研海)、法学生(西周と津田真道)、榎本釜次郎らの幕府留学生の補導に務めた。普仏戦争の時は、オランダの医療班を率いてザールブリュッケンの野戦病院に勤務した。のちヘーグで開業。また赤十字協約設立後は同地で第一回の委員となった。

²³ 菅谷章『日本の病院―その歩みと問題点―』(中公新書、一九八一年) 一七一―一八頁。

²₄ 小川鼎三・酒井シヅ校注『松本順自伝・長与専斎自伝』(平凡社、一九八〇年)二二頁。
²₅ 富士川遊『日本疾病史』(平凡社、一九六九年)二二三―二三四頁。一八五八年七月より長崎の出島でコレラが発症した様子が、長崎奉行所へ提出したポンペの書や松本順著「朋百口授筆記」に残されており、七・八月の二ヵ月で松本が治療を施した人数は凡そ一千八百余名と報告されている。

²₆ 沼田次郎、荒瀬進訳『ポンペ・日本滞在看聞記』(二〇〇二年、雄松堂書店)二八九頁。ポンペのコレラについての解説書は「転寝の夢」その他として世間に頒布され、この教えは防疫上有力な指針として迎えられことは、緒方洪庵の「虎狼痢治準」の題言や箕作秋坪の書翰から推測できている。

²₇ 看護兵に関する記録は、宮永孝『ポンペ―日本近代医学の父』(筑摩書房、一九八五年)を参照。看護兵のことは、沼田『ポンペ・日本滞在看聞記』にも、相川忠臣『出島の医学―出島を舞台とした近代医学と科学の歴史ドラマ』(長崎文献社、二〇一二年)にも書かれていない。その理由として看護兵インデルマウルは、出島の印刷師として名を知られており、長崎の名職録「早業活版師ゲ・インドマウル」『長崎洋学史』に掲載されている。

²₈ 宮永『ポンペ―日本近代医学の父』一六八頁。

²₉ 青木正夫・新谷肇一・篠原宏年「長崎養生所の敷地選定と配置計画について―日本最初の近代洋式病院、長崎養生所に関する計画史的研究―」(『日本建築学会計画系論文報告集』第三六二号、一九八六年)

³₀ 森永種夫校訂『長崎幕末史料大成3 開国対策論1』(長崎文献社、一九七〇)四〇一頁。万延二年正月―文久二年二月「手頭留(十二)」に所収。

³₁ 古賀十二郎『西洋医学伝来史』(日新書院、一九四二年)三一六頁。

³₂ 酒井シヅ『絵で読む江戸の病と養生』(講談社、二〇〇三年)一六七―一六九頁。長崎療養所が病院という名称を使わなかったのは、小島の地に病院を建設することで、近隣の人々に無用な不安を与えないためであり、小石川療養所の名を使ったためである。

³₃ 沼田『ポンペ・日本滞在看聞記』三一五頁。

³₄ 相川『出島の医学』一二二頁。

³₅ 森永『長崎幕末史料大成3 開国対策論1』四〇一―四〇二頁。

³₆ 亀山『看護婦と医師』二五―二六頁。亀山氏は、「規則文の中にある看病人とは、この場合は養生所側の了解を得た病人の身内などを指しており、養成所に看病人が準備されていたとは考えられない。面会人がある場合は、養生所がすでに認めた看病人(証札の所持者)の案内によると規定しているところからも、看病人は外部のものであったといえる」としている。看護婦がいなかった理由としては、ポンペの母国オランダに職業として看護婦が確立されていなかったことを挙げている。オランダでは一八九二年オランダ病人看護協会が医師を中心にでき、看護婦協会の設立は一九〇〇年、看護婦の登録開始は一九二一年であった。

³₇ 沼田『ポンペ・日本滞在看聞記』三二〇―三二二頁。

³₈ 沼田『ポンペ・日本滞在看聞記』三一六頁。

³₉ 日本科学史学会編『日本科学技術史大系 第二四巻・医学(一)』(第一法規出版、一九六五年)四八―六四頁。

⁴₀ 沼田『ポンペ・日本滞在看聞記』三一五―三一七頁。

⁴₁ 沼田『ポンペ・日本滞在看聞記』二八九頁。

⁴₂ 古賀『西洋医学伝来史』三一二頁。

- 古賀『西洋医術伝来史』三二二頁。^{4 3}
- 相川『出島の医学』一二二—一二三頁。^{4 4}
- 石橋長英・小川鼎三『お雇い外国人(九)——医学』(鹿島研究出版会、一九六九年)六一頁。^{4 5}
- 酒井シヅ「日本の看護と高木兼弘」(『日本看護歴史学会誌』第二〇号、二〇〇七年)一一八頁。^{4 6}
- 沼田『ボンペ日本滞在看聞記』三三四—三四六頁に、日本の売春制度のことと遊女屋に対する医学的監督の必要性が書かれている。^{4 7}
- 日本科学史学会『日本科学技術史大系・第二四卷・医学(一)』三九頁。^{4 8}
- ウィリアム・ウィリス(William Willis、一八三七—一九四)イギリス人。アイルランドのフェルマナー州のフローレンス・コートで生まれる。一八五九年にエジンバラ大学医学部を卒業し、同大学医学士の称号を受け、ロンドンのミドルセックス病院で外科研修医を経験。外務省の試験に合格し、一八六一年に駐日イギリス公使館医員として来日。維新の際、薩長軍のために活躍。相国寺の薩摩病院では通訳官アーネスト・サトウ(Ernest Satow、一八四二—一九一九)と共に治療にあたり、北越軍の軍医長としても従軍した。ついで横浜軍陣病院から東京の大病院に移り外科の治療、学生の指導にあたった。後に西郷隆盛に迎えられて鹿児島に移り、医学学校病院を主宰した。日本名は烏利士、字理宇私、偉理士、偉利士、韋而司。在日期间は一八六二—一八八一年。^{4 9}
- コータツツイ『ある英人医師の幕末維新—W・ウィリスノ生涯』の付録として「日本の売春」が掲載(三四—三四五頁)されている。この報告書は一八六七年一月二六日に江戸で提出された。^{5 0}
- 立川昭二『明治医事往来』(新潮社、一九八六年)一五四—一五六頁。^{5 1}
- 小川・酒井『松本順自伝・長与専斎自伝』二四—二六頁。^{5 2}
- 古賀『西洋医術伝来史』三七—三九五頁。立川『明治医事往来』一五四—一五六頁。^{5 3}
- 「マクロス休息所」運営にあたっては規則所取締のための規則書が休息所の門内に掲げられ、その規則書は九州大学に保存されている。^{5 4}
- 日本科学史学会『日本科学技術史大系・第二四卷・医学(一)』四—四二頁。^{5 5}
- イギリス海軍軍医ニートン(George Bruce Newton、一八二〇—一九七一)一八六七年に来日。性病検診、治療制度の体系化と実施に功績を残した。日本名は沙夕新頓、紐敦、牛董、奈端。^{5 6}
- サー・ハリー・スミス・パークス(Sir Harry Smith Parkes、一八二八—一八八五)解任されたオールコックの後任として英国の外交官として来日し、十八年間駐日英国公使を務めた。^{5 7}
- 古賀『西洋医術伝来史』三八—三八三頁。^{5 8}
- 福田邦三・永坂三夫・久永小千世共訳『聖トマス病院ナイチンゲール看護婦養成学校一〇〇年の歩み』(日本看護協会出版会、一九七三年)^{5 9}
- J. A. ドラン『看護・医療の歴史』小野泰博・内尾貞子訳(誠信書房、二〇〇一年)二四四頁。^{6 0}
- 金井一薫『ナイチンゲールの七つの素顔(その1)』(『綜合看護』二〇〇九年)四九—五八頁。^{6 1}
- 古賀『西洋医術伝来史』三八三—三八四頁。横浜梅毒病院の規則に関しては、日本科学史学会『日本科学技術史大系・第二四卷・医学(一)』四二—四四頁にニートンの覚書(本訳文)と収支表が掲載されている。病院経費は遊女からの歩合で徴収し、収

入の余剰金によつて横浜は官営の種痘所を併設、公営としてはわが国最初の種痘所となつた。そのため、横浜梅毒病院としての資料記事は、官見の限り『西洋医術伝来史』が詳しく書かれた資料として貴重である。

⁶² 蒲原宏「パーム、ニュートンとパーセル―イギリス人医師たちの見た日本の風土病・性病そして民族―」宗田一・蒲原宏・長門谷洋治・石田純郎編『医学近代化と来日外人』（一九八八年、世界保健通信社）六三―七二頁。

⁶³ 松山棟庵（一八三九―一九一九）紀伊（和歌山）。紀州和歌山藩の選抜留学生として江戸で福沢諭吉について英学を修め、一八七一年に大学東校に出仕・助教。一八九一（明治二四）年には、高木兼寛らと共立病院（後の慈恵病院）設立に尽力する。日本国最初の英語医学書を翻訳するなど、多くの書物を残す。東京医学会（後の日本医師会）、成医会、大日本私立衛生会の設立にも尽力した。

⁶⁴ 横浜市役所編纂『横浜市史稿』（風俗編）（臨川書店、一九八五年復刻）四九四頁。
⁶⁵ 福沢諭吉（一八三四―一九〇一）中津藩士。長崎及び緒方洪庵の適塾で蘭学を学ぶ。

幕末の三回にわたる遣米欧使節団随員としての見聞を、『西洋事情』（初編、卷之一・卷之三、三冊、一八八六年刊行、外篇、卷之一・卷之三、一八八八年刊行）、『学問のすずめ』（一八七二―七六年、十七編刊行）ほか、多くの著作を残した。一八六八年には江戸芝新銭座に慶応義塾を開く。東京学士会院初代会長。一九一七（大正六）年に、細菌学者北里柴三郎を慶応義塾大学学部長に呼んで医学科予科を開設し、翌一八（大正七）年には看護婦養成所を開設した。

⁶⁶ 松山棟庵・森下岩楠合訳『初学人身窮理 全二冊』一八七三年初版。『初学人身窮理』はベストセラーとなり、一八八二（明治一五）年までに六版を重ねた。

⁶⁷ 第十七章は（下）三五―三六頁（一九七六年版）。その中はさらに「入浴」「食物」「空気」「温度」「静寂ニスベキ事」の項目があり、看病人の役割が書かれている。看病人には、日夜時を無駄にせず働く女性が適していること、看病人を教育するための学校がないことは嘆き悲しむことである、と書かれている。

⁶⁸ 立川『明治医事往来』一五六頁。

⁶⁹ 宗田一他『医学近代化と来日外人』六八―七〇頁。

⁷⁰ 日本科学史学会『日本科学技術史大系・第二四巻・医学（一）』四三頁。「横浜吉原街町入用併病院入用等請払仕訳書」には、「金七拾貳両ト永七百五拾文」が通弁一名、手伝医師一名、町役人二名、小仕五名、介抱女六名、水汲人足一名の合計一六名の給料として記載されていることから、介抱女は六名であったことが確認できる。

⁷¹ 富士川遊『日本医学史綱要2』（平凡社、一九七五年）一八四―一八六頁。
⁷² 新村拓『死と病と看護の社会史』一八〇頁。

第二章 従軍から教訓へ

一 松本良順の会津戦争

一八六八年一月三日、鳥羽・伏見の戦いで始まった戊辰戦争¹は、翌六九年五月、箱館の五稜郭で榎本軍が敗北・降伏して終結した。戊辰戦争では、新政府が会津藩主松平容保の追討令を仙台藩に発令したことをきっかけとして、仙台藩を盟主として奥羽越列藩同盟が成立し、東北二五藩に越後の六藩も加わり、計三一藩が新政府軍と対抗することとなった²。その戦闘方法は、幕末・維新動乱期に幕府や諸藩が取り入れた近代的な兵器が使用され、負傷兵のほとんどが銃創によるものであった。

鳥羽・伏見の戦いにおける旧幕府側の負傷兵は、一旦紀州（現三重県の一部を含む）で治療を受けた後、海路で江戸に後送され、下谷和泉橋の西洋医学所³において治療を受けた。移送過程で重症者は死の転帰をとる者も多く、最初運ばれてきた負傷兵は百名に満たない人数であったが、漢方医は止血法も知らないことから、医学所頭取の松本良順は自ら銃創治療を行い、軍医として必要な医術を教授した。良順は長崎でポンペに西洋医学を学び、明治となり陸軍が軍医寮を創設した際、初代軍医寮頭として陸軍衛生部の創設に深く係わる人物である。

医学所は初代頭取大槻俊斎（一八〇六～六二）が、一八六二年に病死し、後任として選ばれた適塾主宰者緒方洪庵⁴は、適塾方式（単語の品詞や文法的なことを質疑や討論で綿密に勉強する方法）による蘭学指導法を導入していた。しかし、洪庵もまた一八六三（文久三）年六月に死去したため、良順が頭取助として医学所に採用され、門人らを多数引き連れて頭取のポストに就くこととなった。

良順の医学教育に対する考えは、長崎で師事したポンペの医学教育に対する教育理念が基盤であり、その実践が医学の進歩につながるの確固たる信念に裏打ちされていた。ポンペは長崎に來日した際、第二次海軍教育班⁵の中での自分の分担を「日本人に自然科学と、医学と治療学を与えること」と認識しており、軍艦医の養成であつても、創傷を治療するためには基礎的諸科学とともに、順序立てて組織的に学ぶ必要があり、同時に軍陣医学が学べるとした⁶。

海軍伝習所の御用医師としてポンペに学んだ良順は、国防のためには何よりも、まず近代海軍の編成が必要であると考えていた。そのためには、基礎固めのひとつとして近代医学の伝習を行うべきであり、近代医学は砲煙弾雨の下を馳駆する士族の医学であり、だからこそ国が多額の費用を投ずる官学の意味があるのだとする強い想いがあつた⁷。良順はその実践として、医学分科の厳格な学習、訓練を課し、医学の専門技術化を図った。しかしこのような方法は、緒方洪庵の指導法を良しとしていた学生代表足立寛⁸、田代基徳⁹（い

ずれも旧緒方門」らの批判を受け、解剖実習や臨床実習などの組織化は困難を極めた。

良順はそのような状況においても西洋医学による医学教育を進め、銃創治療を始め外科的療法に関しては、医学所教授の島村鼎甫が、グロス (Gross, Samuel D. 1805~1884) の外科書中の銃創編について講義を行っていた。その講義内容は、すでに『創痕新説』と題され一八六六年に出版 (須原屋医伊八発行) されており、多くの医師に読まれていた¹⁰。

鳥羽・伏見の戦いが始まると、銃創による負傷兵が続々と医学所に移送され、漢方医たちは良順の指示の下、創傷の洗浄、繃帯交換など、西洋医学に基づく治療方法を学び、実践から軍医としての経験を重ね、技術を身につけた¹¹。

また良順は多くの負傷者が入院治療を必要とする状況に対し、エタと差別された弾左衛門の配下の者を自ら教育し、看病人として多数使用するという手段をとった。長崎養生所で、ポンペの傍らで西洋医術を学んだ良順にとって、病院は医療を提供する場であると共に、回復までの生活の場であり、賄や洗濯、風呂焚きと云った生活を支える者として看病人を確保したのであった。

良順が使用したのは弾左衛門の配下の者であるが、弾左衛門とは、武家階級から切り離され賤民の地位に置かれた者たちの職掌をあらわす名称である。弾左衛門の正式の肩書は、えたがしら (穢多頭) であり、当時支配していた男女は七万人、江戸を含む関八州 (日光神領と水戸家、喜連川家領分を除く) を主とし、伊豆一ヶ国、三河国設楽郡の一村、甲斐国都留郡、駿河国駿東郡、陸奥国白川軍を支配していた¹²。

良順の自伝には、「病者の賄方を弾に命じてなさしむ」¹³と記されており、第一三代弾左衛門が新政府から請け負っていた一四カ条の中のひとつにも、「海陸軍つき病院御用」があった。多くの負傷者に対して繃帯交換は漢方医らが担当し、弾左衛門の配下の者たちは看護者の役割を担った。しかしその看護の実際は、病者の賄方、洗濯・食事作り、排泄物の世話などであり、亀山が指摘しているように、家庭のなかで女の仕事とされてきた事柄の領域は出ていなかった。

一八六八年六月九日 (九月に明治と改元)、医学所は新政府に接收されることになる。

良順は奥医師として従軍することを決め、医学所も解散すること、北へ向かうことの意向を医学所の門人らに伝え、薬品、外科器具などを準備し、教授の渡辺洪基 (のちの初代東大総長)、名倉知文、三浦煥、小泉順英、山内作楽 (通称徳三郎) 太田雄寧¹⁴ら六名を連れて、江戸を発った。途中千葉の実父佐藤泰然¹⁵が主催する佐倉順天堂に立ち寄り、そこでかねてからの門人であり、京都守護職藩公の侍医・新選組治療藩医として京都で行動を共にした、会津藩医南部精一郎¹⁶と再会した。

良順ら一行は南部と合流し、会津に向かう。四月二四、五日には会津へ到着、「軍陣医部」¹⁷という名をつかって、会津藩校日新館を病院に改造、塩川村には分院として島之病院を設立し、良順は院長として治療を開始する。治療は、途中別れた太田雄寧を除く、医学所から同行した門人五名に南部を加えた医師六名を中核とし、これに会津藩西洋医から加賀山翼、古川春英¹⁸、伊藤元岱らを加え、指揮班を作った¹⁹。

その他、部長に大岩嘉造、次長に日下順庵をおく侍医団があり、川崎尚斎は医薬品、器械政策に従事するなど役割が割り当てられていた。さらにその傘下には、日下順良、六角尚兼・兼三父子、佐藤周禎、鈴木秀仙、加藤松庵、酒井壮哲、宇南山寿庵、赤羽寿庵、鈴木良哲、石田瑛達、高橋修斎、五井新内、渋谷昌甫、諏訪順吾ほか、町医、村医そして盟藩医が治療にあたった²⁰。

良順が会津に到着し、投宿した城下七日町清水屋には、宇都宮の戦鬪（四月二四日）で足に銃創を負った新撰組土方歳三が二七日に到着、土方はここで良順の治療を受けることとなる²¹。江戸の医学所頭取である良順が会津に来たことは、各前線の陣営に伝えられ、負傷兵が続々と日新館に運び込まれた。

良順が日新館で目にした負傷兵らは、西洋医学を知らない村医らにより、銃創が縫い合わされるなどの不適切な処置や、湯や薬草を煎じた液での消毒で患部は壊疽状態となり、その結果、傷口は化膿し、敗血症となり、衰弱して死亡する者が多かった。良順は適切な処置療法を口授し始めると、そのうわさを聞いた奥羽諸藩の藩医ら六〇余名が集まり、良順は日々銃創治療の方法などを講義し、講義内容はちに「療瘡略伝」という一書にまとめられた²²。

日新館に收容された負傷兵の数は、二〇〇名を下らない状況が続く。良順は治療に全力であたるが、治療に必要な医薬品、包帯材料の不足は甚だしく、その確保には困難を極めた。軟膏を塗るにもその材料はなく、良順はその状況を自伝に「日々洗濯せしむるも、甚だ不潔にして、実に惨状を極めたり」²³と書き残している。

良順が長崎でポンペから学んだものは、病院での医療の中心は規則正しい入院生活を作り上げることであり、その実行に看護は欠かせないという考えであった。良順はその後の経験からも、病院の入院環境を整え、医師による管理された治療が行われることが治療効果を高め、回復を促すということを実践していた。

例えば、京都で門人南部精一郎が良順の借り住まいを訪ねてきた時、以前より面識のあった新選組長近藤勇も良順を訪ねて来たことがあった。その後良順は、近藤の招きに応じて西本願寺の新選組屯所を訪ねるが、良順は屯所の不潔さに驚き、さらに三分の一が病者であることを知り、近藤に次のように指示したエピソードが自伝に残っている²⁴。

総人数百七、八十名あらん。またその中に、横臥する者、仰臥する者、あるいは裸体にて陰部を露わす者あり、甚だ不体裁にして、その無礼なる言うべからざる者あり。予一巡し終りて勇を詰つて曰く、今巡行して一見するに、局長・次長の共に至るに裸体仰臥してその状を改めざるは如何、あに長上に対して無礼至極ならずや。これ壮士を制御するの法宜しきを得たりと云うべからず。宜しく規律を厳にし、節制によらざるべあるべからず、と。「勇答えて曰く、真に貴説の如し、然れども彼等はみな病者なり、故に敢えて束縛を加えざるなり。君乞うこれを恕せよ、と。予曰く、然らば総人員三分の一は病者なるか、驚くに堪えたり。謂うに医療を施さざる者の如し、如何。

勇曰く、否、医を招き治を乞うも、各自その信ずるところに従うのみ。予曰く、果たして然らばこれ策の得たるものにあらず、宜しく一の快闊なる室において蓐を並べ平臥せしめ、医者日々これを回診してその処方箋を作り調薬を命じ、看護者を設けて起臥飲食の用を弁ぜしむべし。然る時は一医師にして多数の患者を治療し得べし。また浴場を設け全身の不潔を洗滌せしむべし、と。ために病院に擬して一図を画き示し、患者に処する方法を教え、かつ西洋病院の概略をも説示せし

良順の指示に対し、新選組では直ちに西本願寺の講の集会所を借りて病院として、並列に病人を並べて寝かせ、浴桶も三個準備するなど体制を整えた。さらに良順は南部に対して、毎朝回診をして病歴の作成と薬の調製を行うことを指示し、週二回は自分が往診することを決める。それらを実行した結果、新選組の病者は心臓病と結核患者の難病の患者を除き、一カ月で全員が全快し、兵士らの感謝を受けた。良順はその結果に満足しながらも、さらに厨房の不潔さに対し、残飯を利用して豚を飼い、その豚を食して体力を回復させること、豚の膀胱は取って冷罨法に用いること、敗飯は乾固させて鶏を飼いその肥料とし、産んだ卵を食べて滋養をつけることを指導した²⁵⁰。

良順はこれらの経験からも、外科的な病者も含めた病気の回復には、病状に応じた処方など管理された治療と共に、清潔な環境、身体の清潔、滋養のある食物による体力の回復が欠かせないことをわが国で最も理解し、そして実践した医師であった。

会津藩野戦病院日新館では、長引く戦いで増え続ける負傷兵、乏しくなる医薬品と繃帯材料に不潔な状態は免れられない状況ではあったが、良順の傍らには京都で新選組の隊員らを共に治療した南部がおり、南部が良順のなさんとした治療を実践した功績は大きい。良順の自伝には、「患者の死亡数を算するに十人中一人二、三分に過ぎず」²⁶とあり、それは治療と看護の成果であったと評価できる。

しかしその後良順は、旧幕府側医師として会津藩の戦いに従軍する。良順は野戦病院で治療に専念する中で、病院として患者の回復を促進する食材を選んだ食事の供給、医療材料の補給、治療を継続するため繃帯交換などを補助する看病人の確保を、切実な問題として認識した。戊辰戦争では戦場が拡大し、西洋外科学による治療が施される中では、看病人の仕事の質も内容も、繃帯交換などの治療補助もこなす者へと変化したのであった。

良順は、政府軍が会津城下に攻め込むのを前に、会津藩主松平容保の意向を汲んで、江戸を共に発った門人らと会津を出て米沢に向かう。良順らが去ったあとの会津では、鶴ヶ城西出丸そばの日新館野戦病院は敵襲を受け、猛火に包まれ、身動きできぬ負傷兵は自決、または焼死するという悲しい結末を迎えていた²⁷。

二 英医ウィリアム・ウイリスの救護活動

薩長軍は、京都・相国寺内の「養源院」に臨時の薩摩藩病院を設け、鳥羽・伏見の戦いによる負傷兵約百人を收容し、治療を行った。しかし藩医たちは、骨折や銃創の処置、止血方法や化膿を防ぐ方法を知らず、戦死者は増えるばかりであった²⁸。特に、富ノ森陣地攻撃で頸部に貫通銃創を受け、「養源院」に收容されていた西郷信吾（のちに陸軍卿となる従道）は、消毒が不完全のため傷口は化膿し、その病状悪化と苦痛に、周囲の者が介錯を申し出たほどであった²⁹。

薩摩軍二番砲隊を率いていた薩摩藩士大山弥助（巖）³⁰は、本陣東寺にいる西郷吉之助（隆盛）と大久保一蔵（利通）³¹に、洋医招聘を進言した³²。西郷は了解し、外国人が京都に入れないことから、藩主島津忠義の名で大久保一蔵を介して朝廷に願書を提出する³³。

島津忠義、英国ノ医生ヲ京ニ召シ、兵士ノ瘡夷ヲ治セントフ請フ、之ヲ聴ス

此度戦争ニ付、手負之者夥敷御座候処、療医砲瘡イマタ不精処ヨリ、追々及死亡候者不少、実ニ不被忍次第第二御座候、就テハ其術ヲ究、治療方突鑿仕候折柄、兵庫滞在英国熟練之医師頼入申度、無抛為致相談候処、人命ニ相拘候儀、不容易事候間速ニ可差出旨致許諾候ニ付、当邸へ召呼、療治相加度御坐候間、何卒入京御免被仰付被下候様、宜敷御執 奏奉願候、以上。

正月二十四日 薩摩少将

西郷はこの依頼文で、夥しい数の負傷兵に治療が出来ない状況が忍び難い状況であり、西洋医学に熟練した技術を有している兵庫在住の英国医師による治療の必要性を説き、京都に入ることに許可を願ひ出た。同時に、一八六五年にイギリスへの留学経験を持つ、当時神戸駐在の参与外国事務判事寺島宗則³⁴と五代友厚³⁵を介して、イギリス公使パークスに医師派遣を依頼した。この要請に対しパークスは直ちに快諾し、公使館医官ウィリアム・ウイリスに通訳官アーネスト・サトウ³⁶を付して派遣することを決めた。

京都相国寺の薩摩藩病院で治療を受けていた大山が、自ら兵庫へ赴いて、寺島、五代に英医ウイリス派遣の仲介を願ひ出たその背景には、大山が江戸の江川塾で砲術を学んでいた頃、江戸の西洋医術、とくに外科が格別に優れている事例を見聞し知っていたことと、薩摩藩の軍陣医療の遅れがあった³⁷。

幕末、すでに多くの藩が近代兵制に見合う軍陣医学の必要性を認識し、漢方から西洋医学の修行を積み始めていた。例えば、適塾出身の大村藩医長与専斎³⁸は、「西洋にては軍医の制度よく整いて軍気も之れが為め引立つよし承る。然るに本藩には銃創の治療さへ心得たるものなく万一の時に及ばば他藩に対しても面目なき次第なり。某は従来専ら内科を修めたるのみなれば今一たび長崎に出でて外科を練習せんとするの志あり」³⁹と、長崎で

の勉学を願い出て、一八六六年三月には、藩より医師数名と長崎への遊学修業の命が下った。長与はその命により長崎に遊学し、ポンペ、ボードウイン⁴⁰、マンスフェルト⁴¹に西洋医学を学んでいた。

長州藩では、緒方洪庵同学の青木周弼が萩に藩医学教授所「好生館」を設立し、蘭医学の普及に務めたこと、大村益次郎⁴²によって兵制改革が進められたことで、自前の軍医部編成を持つてはいた⁴³。

薩摩藩は、シーボルト門下の戸塚静海を藩医として招いたり、「好生館」や大阪の「敵塾」に藩医の派遣をしてはいたものの、幕末に至るまで藩医学校は漢方による教育を行い、藩医も漢方が主力であった⁴⁴。そのため、銃創治療ができる医師がいらないという薩摩藩の状況は、西洋医術のできる医師の確保が緊要の課題であった。大山らは、負傷兵の増加は隊の弱体化を招き、その状況は戦勝にも影響を及ぼすと考え、ウィリス招聘に動いたのであった。

派遣要請を受けたウィリスは、北アイルランドのフェルマナ州で、三人の兄と二人の妹に囲まれて育った。一八五五年にグラスゴー大学医学部に入学し、予科を経てエジンバラ大学を卒業。翌年五月からロンドンのミドルセックス病院(Middlesex Hospital)で外科研修医を経て、内科医としても勤務し医師としての経験を積んだ⁴⁵。一八六一年英国外務省の海外勤務に応募し、外務省試験に合格、六二年六月江戸駐在イギリス公使館補助官兼医官として二五歳の時に着任した。六八年一月には副領事になる。ウィリスは公使パークスの命により、通訳官アーネスト・サトウとともに、急ぎ京都に向い、二月一七日に京都薩摩屋敷に到着した。ウィリスは、土佐の藩主山内容堂が重態に陥ったのを全快に導き、西郷信吾の頸部貫通銃創の治療も行った。

鳥羽・伏見の戦いでは、負傷兵のほとんどが砲弾や小銃弾による火傷や銃創であり、銃弾の摘出、腐敗した骨片の除去、膿瘍切開などの手術を必要とした。ウィリスは二週間京都に滞在し、必要時はクロロホルムの麻酔を適用して、大手術を一回施行した⁴⁶。

治療には、当時薩摩藩病院にいた藩医上村泉三、石神良策⁴⁷、山下弘平、前田杏斎、児玉剛造らに指導をして助手として働かせ、西洋医術を身につけさせた。ウィリスの西洋外科学の知識と技術は、負傷兵の治療に大きな功績をもたらし、西洋外科の優れていることを立証した。その結果を受け、在京藩当局は一月二九日、藩医に対して漢方医、蘭方医の別なくウィリスの療法を見習うように命じている⁴⁸。

四月一日江戸は新政府軍に開城され、徳川慶喜は水戸へ退去するが、戦場は東北へと移る。錦旗を掲げて討伐軍を東へ進めるなかで、続出する傷病者を救うため、大総督府は一日、江戸芝赤羽根の有馬屋敷に英医ウィリアム・ウィリスを横浜より招聘した⁴⁹。二日附を以て総督府参謀から、鳥羽・伏見の戦いに参加した伊州藩、備前藩、長州藩、佐土原藩、大村藩、薩摩藩等の各長官宛てに負傷兵診療について、英医を招くことと、病院を横浜に設ける旨の左記の通達が布告された⁵⁰。

十三日、大総督府、英国医師ヲ雇ヒテ兵士ノ創痍ヲ療ス、尋テ病院ヲ横浜ニ設ケ、使番佐藤金義ヲ遣シテ、其事務ヲ総管セシム。

明十四日、英医、御招ニ相成候間、此間中房、総辺ニテ戦争有之各藩病員召連、朝四ツ時頃赤羽根有馬上屋敷へ可罷出候様、仰出候事、

但、各藩医官同伴可有之事。

後四月十二日

東海道総督府参謀

各通

伊州藩

備前藩

長州藩

佐土原藩

大村藩

薩州藩

長官中

東海道先鋒記

岡山藩記

新政府は四月一七日、横浜の野毛山上にある修文館を改装し、軍陣病院（野毛山修文館および洲干弁天境内語学所の二ヶ所）^{5.1}とし、政府軍の負傷兵の治療を始めた。この横浜軍陣病院は、大総督府御使番佐藤喜七郎（名古屋藩士）を総取締とし、治療は英医ウィリアム・ウィリスを招き、医師団は同じく英医シッドル（Joseph Bower Siddall）^{5.2}と、後に白河口頭取となる佐藤舜海^{5.3}、薩摩藩医石神良策ら一〇数名によって構成された。

ウィリスは翌一九に助手二名を連れて病院到着後、直ちにクロロホルムを使用しての手足の切断術、過酸化マンガンの使用による創傷処置、鉄製副木による固定術など、西洋医学による治療を行った^{5.4}。しかし、銃創処置、止血法、副木の使用方法などの知識のない日本の医師達は、何事によらずウィリスに質問を繰り返し、あらゆる種類の医療器具の使用方法を聞き、ウィリスを悩ませた^{5.5}。

ウィリスは治療の必要な重症者は、すべて横浜軍陣病院へ護送するようにと政府に勧告し、政府もその助言に従い、負傷を負った兵士の初期治療を野戦病院で施した後、重症者は海路、または陸路で数日を掛けて横浜に護送する方針をとった。そのため、横浜軍陣病院は、開院初日の四月一八日の薩摩藩七名の入院にはじまり、次々に運ばれて来る負傷兵に大混雑をきたす。

横浜軍陣病院は、開院二週間後の五月四日には重症者が増して手狭となり、分院を設けて分散させて治療にあたったが、その不都合の現状を総督府に訴え、以前兵舎として使用していた建物を病院へと改修して使用することとなる^{5.6}。その上申書には、「病人手負人數合い三十七人其外看病人等凡九十人程」と記されており、「日々増減有之候」^{5.7}と書かれている。中西淳朗の論文^{5.8}をもとに作成した荒井保男の報告によると、横浜軍陣病院の入院患者は、五月三日三七名、五月一日七二名、六月二九日一七六名、七月一日一九三名、そして九月二四日にはピークの二〇七名であった^{5.9}。

その後政府軍は、会津の落城が間近であり戦いの終焉が近いと判断し、東京下谷泉橋の津藩邸（藤堂邸）への移転計画を立てる。下谷の大病院（後に東京大学医学部へと進展）への移転を九月三〇日頃から開始し、十月一七日にはすべての患者の移転を完了している。

移転前の七月二一日、パークスに提出したウイリスの報告書には、日本人医師に対する評価も書かれていた⁶⁰。

日本人医師は、銃創治療に適する副木や他の器具の使用など、彼らにとって有益なことをすでに多く学びとった。日本の軍医たちがシッドルの指導に応えて、てきぱきと包帯を巻いたり副木を当てたりして立派に医者働きをしている姿や、いかなる手術にも熱心に興味を示す態度などを見ると、医療法にかんする西洋の智識がしだいに日本中にひろまり、現在あらゆる階層のあいだであまねく行なわれている漢方の複雑で時として有害な医学の流派に、やがてはとつてかわるのではないかという期待をいだかせるのである

ウイリスは、日本人医師らが病院の開院から約三カ月の間に多くの重症患者の治療に関わり、西洋外科学を学び、その結果として西洋医学の知識も全国に広がるであろうことを期待し、将来に対しての明るい見通しを述べており、ウイリスの日本人医師に対する評価が変化してきたことが読みとれる。

ウイリスは総督府からの依頼を受け、横浜軍陣病院の治療をジョセフ・シッドルに任せ、北越軍に従軍することになる。ウイリスが北越軍に従軍することが決まった経緯は、越後口の戦線拡大と、戦傷者に対する医療技術を各藩軍医はもっており、その治療成績が良くないという現状が背景にあった。

四月二七日柏崎鯨波において、桑名藩と征討の命をうけた山県狂介（有朋）⁶¹・黒田了介（清隆）率いる薩長諸藩との衝突が生じ、緒戦から多くの兵士が負傷を負った。北陸道鎮撫総督参謀のひとりであった山県は、二九日に長州藩執務広沢兵助に宛てて「死傷余分有之何とも遺憾」「京都詰居上等之医師兩人 何卒繰合出張之儀御配慮奉願上候」と、戦傷治療に対して有能な医員の急拠派遣を依頼する書を送っていた⁶²。「京都詰居上等之医師」とは、ウイリスその人を指していたと考えて良いであろう。

越後口では、同盟軍の長岡藩が長岡城を失い苦境に陥ったものの、仙台・米沢・会津藩の援軍が到着し、長岡藩河井継之助は長岡城奪回を目指し、攻勢を企画した。政府軍側は六月一四日に北陸道鎮撫総督高倉永祐に代わって仁和寺宮嘉彰親王が会津征討越後口総督に任命され、参謀も山県と黒田了介に加え、西園寺公望が大参謀、前原彦太郎が参謀として加わった⁶³。一五日には、西園寺が柏崎軍病院を訪れ、薩摩・長州・加州・高田の各藩の傷病兵を見舞うが、官軍首脳部は、病院視察で傷病兵が予想外に多いことに驚く⁶⁴。そして布告を達し、傷病兵治療に万全の策を尽くすように指示を出している⁶⁵。

北越同盟軍の戦争が熾烈をきわめるにつれ、いよいよ西洋外科軍医による治療の必要性を痛感した大総督は、その旨をイギリス公使パークスに依頼し、再度ウイリスは招聘に応じることになる。八月一八日には行政官より「督府本病院ヲ高田ニ設ケ赤川玄樞（長州藩医）ヲ以テ頭取トナシ外国医師ヲ雇ヒテ官軍ノ創痍者ヲ療ス、尋テ之ヲ柏崎駅ニ移ス」の

達が出された。^{6.6} 続いて八月二〇日の太政官日誌には「創傷ヲ被リ相悩候者モ可有之ト深ク不便ニ被思召 今般洋医御雇可被差遣候間 右病人等 篤卜治療相加へ精々調護行届候様可取計御沙汰候事」とあり、越後口において、九月九日に各藩に外国医師が治療のために病院に来ることが知らされた。^{6.7}

ウイリスが筑前藩の護衛二五名に守られて江戸を出発したのは八月二〇日であり、新潟高田軍病院に到着したのは、九月一日である。ウイリスが高田を訪れた時には、約二〇〇名の負傷者を含め、四〇〇名以上の病人がいくつかの寺院に收容されていた。^{6.8} 負傷者の倍にあたる人が入院していたことになるが、当時入院していた者は、戦傷者と平病者が、はっきり区別されていた。佐久間によると、平病者に関する記録はないが、平潟に伝染病・慢性病院を開設した記録や、東京帰還にも平病者は東京での世話は一切不要であるとの指示も残っており、平病を言い立てて戦場を離れた兵士もいたことを指摘している。^{6.9}

ウイリスが越後口に到着後、直ちに開始した治療に各藩医らは目を見張った。しかし、銃創の治療がすぐさま可能となったわけではなく、ウイリスが公使パークスに宛てた報告書には、切断手術を行うためにはそれらの医師を、助手ができるように教育する必要がある、その教育に三日間を要したとある。^{7.0}

さらにウイリスは、自分が到着するまで「手術はなに一つ行なわれず、副木一本もあてがわれてなかった」^{7.1}「出血は放置され、化膿を防ぐ方法を知らなかったので死ぬ者が続出した」^{7.2}、「手足を骨折した患者が副木によって固定もされずに長途を移動しなければならぬとすれば、傷や生命が助かる機会をますます減少させるばかりか、直接の死因を与えることになる」^{7.3}とあり、「負傷してかなり時間がたっていたために、手足の状態が悪化し、その結果治療のむずかしさがいちじるしく増大したことを私は残念に思う」^{7.4}と、日本人の医師たちに外科の知識がなかったから、大勢の患者が助からなかったにちがいない」と報告書に書いていた。ウイリスは、その後柏崎、新潟、新発田を経て、一二月五日に帰京した。^{7.5}

ウイリスは、北越各地の軍病院を巡回し治療を行った感想を、各地の駐屯地の寺院に收容された負傷兵には、日常の必需品が支給され、「現地の医師や看護人の不完全な医学的技術や知識不足にもかかわらず、期待されうる限りの世話がなされているように見えた」^{7.6}としている。そして治療に携わった九日間を振り返り、「事態をかなりよい態勢に整えることができた。私の指示が要領よく実行されるならば、多くの負傷者は看護の努力によって回復に向かうだろうと思う」と回復過程における「看護」に期待を寄せていた。^{7.7}

つまりウイリスは、西洋外科的な治療を医師が行ったあと、その回復過程において、医師から指示された繃帯交換、薬の投与、患部の安静を保つなど、行うべき治療が継続されることを「看護」とし、その看護力が治療の回復を左右するとの考えがあった。

さらに、一一月三日に書かれた柏崎からの報告書には、「日本人の医師たちが、病人を情深く親身になって看護する場面をたびたび見ることはできたが、それでも私が受けた一般的な印象は、彼らに理論と実地訓練とがひどく欠けており」^{7.8}と書かれている。

ウィリスの母国イギリスでは、一八五三年に開戦（クリミア戦争、五六年にパリ講和条約を締結）したバルカン半島・中東への進出を狙うロシアとオスマン帝国との対立に、翌年フランス、サルデーニャと共に出兵し、大量の戦傷死者を出していた。戦場となったクリミア半島では負傷兵や病人が放置されたままとなり、従軍した『タイムズ』の記者に報道され、看護の必要性が叫ばれた⁷⁹。

その対処のひとつとしてフローレンス・ナイチンゲール一行が派遣されることとなり、ナイチンゲールは、未だ看護学校が知られていなかった時代に、修道女以外の三八名の看護婦を集め、スクタリにある基地病院で一、五〇〇名の患者の看護にあたった。

当初陸軍軍医は、戦時に婦人を使用することは煩わしく、看護婦と同じ程度の看護ケアはトレーニングされていないオーダー（雑役）でもできると感じていた。しかし、ナイチンゲールが看護にあたった病院の衛生状態は悪く、死亡率は四二%という状況にあった。従軍したナイチンゲールは、食事の改善、病室の環境改善、消毒の徹底⁸⁰、清潔ケアを行い、着任後六ヵ月で死亡率を二%に下げることになった⁸¹。

一八六〇年、ナイチンゲールはイギリス国家からの感謝状と五万ポンドをもとに、ナイチンゲール基金看護婦養成所を開設、セント・トーマス病院がその臨床学習のために選定された。さらにナイチンゲールは軍隊において、兵士に病院雑役婦や料理人の講習課程を創設し、将校の医学校創立の促進も行った。一八六七年、ナイチンゲールは病院との契約に於いて、患者のケアには常に経験のある看護婦を配置されねばならないこと、学生を指揮あるいは教えるためには、専任の資格が十分にある養成機関を卒業した、責任のとれる看護婦がいなければならないことなどを特記しており、すでにイギリスでは看護婦が女性の職業として確立され、実践と理論を結びつけた訓練方法も確立されていた⁸²。

イギリスで医学を学んだウィリスにとって、一月三日の報告書に書かれた「かれらに理論と実地訓練とがひどく欠けており」という発言は、まさに「看護者の条件には理論と実施訓練が必要である」という、ウィリスの認識からなされたものであった。実際に、明治陸軍創設の中で、看護を担う者の育成は、課題となるのであった。

三 人道主義への提言

鳥羽・伏見の戦い、横浜軍陣病院での治療、越後方面での従軍、会津への救護活動を行ったウィリアム・ウィリスは、日本人医師の技術を学ぶ意欲に感心しながらも、日本が維新後の近代国家を目指すうえで重要な提言を行っていた。ウィリスは北越で救護活動を行う中で、「捕虜を見ていない」ことに疑問を持ったが、その理由が、日本では敵兵すべてを無慈悲に処刑してしまうというを知り、人間の生命に不必要な損失であるとの想いを強く持っていた。ウィリスは新潟に訪れた時に見聞したことを、左記のように報告している⁸³。

この戦争では、人間の生命がきわめて無造作に犠牲にさせられてきたと信じられないふしがあるのだ。私これまでであった日本の当局者に、新政府が敵対する大名の家臣を見さかいてもなく殺害していることを世界の国々が聞けばぞっとするであろうし、とりわけ文明国は、あらゆる日本の戦争の特性として負傷した敵兵の無差別な殺害が行なわれるということを聞けば、憎悪心をたぎらせるであろう、と話してきた。新政府が敵の負傷兵にたいして寛大な処置をとることを立証してくれる機会があれば、私自身としても大変嬉しいのであるが、とも私は彼らに言っておいたのである。

ここに書かれている「日本の当局者」とは、薩長両藩の参謀として奥羽越列藩同盟の討伐にあたった参謀陣、山県や大山など、明治新政府で近代的な軍隊創設の中心的人物となつた人々であつたと推測できる。この報告の以前、江戸での負傷兵治療にあたつた時の報告書にも同様の内容が書かれていた⁸⁴。

敵側の手に捕えられた負傷兵の処置にかんして、私が知りえたことを二、三言つておきたい。不必要なまでに残酷に生命を犠牲にすることが、双方の敵対行為の特徴となつてゐることは、まさに恐るべきである。それぞれが相手の行為によつてみずからの行為を正当化しているのだ。江戸の最近の戦闘で、負傷した残党はみな打首にされた。信頼するにたる筋から聞いたところによると、残党の治療に手を貸したある不幸な医者、その行為のために処刑され、彼の首は江戸吉原付近の山谷という町にさらされたのである。私は負傷した捕虜がまったくいないことに重大なわけがあることを知つた。敵対する党派の一方が相手側に生命を保障しているにもかかわらず、負傷した捕虜はほとんど同情を寄せられることもなく、概して打首になると信じざるをえない。人命の不必要な犠牲に反対するために、私が全力を尽くしてきたことは言うまでもないであろう。

ウィリスは北越戦争に従軍し、外科的技術を駆使して多くの負傷兵を助けたのち、会津若松での医療活動にも参加した。ウィリスが会津戦争にも従軍したその背景には、新発田病院城内で一〇月五日に越後口総督仁和寺宮嘉彰親王に拝謁し、宮より一カ月任務を伸ばして、官軍ならびに敵側の負傷兵の治療にあたつて欲しいとの依頼を受けたからであつた⁸⁵。ウィリスは、会津若松の陥落に負傷者が多く出たことを慮り、自ら会津行きを願い出て、パークス公使へ任務の延長許可を得る手紙を書き送つてゐる⁸⁶。

私は明日若松に行こうと思う。私が若松に行けば、私の目的は三倍にも達成されるだろう。すなわち、不幸な大勢の負傷者たちに医療を与えてやることと、その医療を与えるに際して、私の行為が完全に不偏不党であるのを見せてやること、それに、敵味

方を問わず全員にヒューマニズムを教え込むという目的が、日本人の戦闘行為における残忍無慈悲な殺生を改めさせようとする私の努力が、けっしてむだにはならぬと期待されるのである。

ウィリスは薩摩藩医上村泉三他一名を伴い、新発田から会津に向う。会津が降伏した時には、城内には六百名ほどの負傷兵があり、ウィリスが会津で治療した負傷兵の数は二千名であったともいわれている⁸⁷。ウィリスは戦場で、命が簡単に犠牲にされている事実に対して怒りにも似た驚きとともに、負傷者や敵側にとらえられた捕虜に対する処遇のありようについて、医師として人道思想に基づいた対処を提言していたのであった。

すでに一四世紀末に火薬が発明され、大砲が戦場に登場したことで、世界の戦争と傷病兵の状態には大きな変化が訪れていた⁸⁸。一六世紀にはフランスのアンブローズ・パレ（二五〇九〜九〇）が、フランス軍の野戦外科医として四肢切断と人工補綴術（義肢・義足の技術）や止血法の改善を行い、戦傷外科は大きな発展をみていた⁸⁹。一八世紀になると、傷病兵の中立の尊重が唱えられ始め、負傷兵の救護は国家の責任であるという考えが生まれた⁹⁰。

一八五九年六月二四日にイタリアのソルフェリノで展開されたイタリア統一戦争における最大の激戦「ソルフェリノの戦い」が起こり、翌二五日に町にやってきた三一歳のスイス人青年実業家アンリ・デュナン（1787〜1875, Jean Henri Dunant）は献身的に看護を行う村人とともに、夥しい数の負傷兵の看護に従事した⁹¹。アンリ・デュナンは戦争の傷病者はもはや兵士ではなく、一人の人間として収容し、看護しなければならないと唱え、それがきっかけとなり、六三年一〇月二六日から二九日まで救護社設立の会議がジュネーブで開かれ、最終日の二九日に「赤十字規約」が採択され、救護組織の目的と活動規則が定められた⁹²。

翌六四年八月スイスのジュネーブに、軍の衛生部隊の要員と施設、救急馬車を局外中立とするための国際条約を締結することを目的として、一六カ国の政府代表二六名が集まり会議が開催された。その結果、スイス・フランス・イタリア・プロイセン・オランダ・デンマーク・スペイン・ポルトガル・ベルギー・バーデン・ヘッセ・ウエルテンベルグの一ニカ国の代表により「戦地にある軍隊の傷病者救護のための一八六四年八月二二日のジュネーブ条約」（赤十字条約）が締結された⁹³。さらに、翌月の九月二〇日には、新たに一三カ国が条約を批准し、その中には、ウィリスの母国イギリスも加盟国となっていた⁹⁴。

また、アメリカが赤十字条約に加盟するのは一八八二年だが、一八六一年から六五年の南北戦争では、両軍合わせて六一万八千名もの戦死者（病死者四一万名を含む）を出し、アメリカ合衆国はその反省から、六三年四月二四日にリンカーン大統領により、「リーバー法（綱領）」が公布されていた。「リーバー法」は、野戦病院とその要員を局外中立とみなして保護し、捕虜としないこと、傷病者に対して人道的な待遇を行うこと、捕虜に意図的な苦痛を課すことや過酷な拘禁や復仇（報復）を禁止することなどを規定したものであり、

この法典化した綱領が近代における戦争法をはじめて規定したものであった。⁹⁵

ウィリスは、このような人道主義に基づく赤十字思想がヨーロッパをはじめ世界で徐々に広がっている時代に、戊辰戦争では多くの捕虜が命を取られ、負傷兵が治療を受けられないまま死を迎えている現状に驚き、歎き、自ら会津に出向き、敵味方の別なく治療を施すという人道思想に基づく治療を実践したのであった。ウィリスの報告書には、会津で治療した官軍の負傷兵は九百名、敵兵である会津藩の負傷兵七百名の治療を行ったことが報告されている。⁹⁶

戊辰戦争では、戊辰戦争の報を聞き、フランス留学から急遽帰国した医師高松凌雲⁹⁷が、知友の榎本武揚（一八三六―一九一六）が、蝦夷地に脱走した際、榎本軍に加わり、函館に病院を開き、榎本軍や官軍の区別なく、約一千四百名の傷病兵の治療にあたったことは、人道主義の実践であり、後の赤十字社と同じ精神であったと評価されている。⁹⁸ ウィリスの人道主義への提言は、未だ人道主義という概念がなかったわが国に、欧米列強における戦場医療の有り方を示唆した重要な提言であった。すでに世界各国に広まる人道主義思想の受容は、従軍した日本の医師、政府軍要人らに戦場医療の課題として認識された。人道主義の受容は、西洋医学による軍医教育、患者の処置を補助し生活を整える看護人の確保、衛生材料の補充システムの確立などとともに、明治政府の重要な課題のひとつとなった。

註

¹ 本章において、戊辰戦争に関して参考とした書籍を以下に列举する。星亮一『会津落城―戊辰戦争最大の悲劇』（中公新書、二〇〇七年四版）、星亮一・戊辰戦争研究会編『新選組を歩く―幕末最強の剣客集団その足跡を探して』（光人社、二〇一一年）、『歴史読本』編集部編『カメラが撮らえた会津戊辰戦争』（新人物往来社、二〇一二年）、佐々木克『戊辰戦争―敗者の明治維新』（中公新書、二〇一三年三三版）。

² 同盟に参加した藩は以下の通りである。仙台伊達陸奥守（宮城、六二万五千石）、米沢上杉弾正大弼（山形、一八万石）、盛岡南部美濃守（岩手、二〇万石）、秋田左竹右京大夫（秋田、二〇万五千石）、弘前津軽越中守（青森、一〇万石）、二本松丹羽左京太夫（福島、一〇万七〇〇石）、守山松平大学頭（福島、二万石）、新庄戸沢中務大輔（山形、六万八二〇〇石）、八戸南部遠江守（青森、二万石）、棚倉阿部美濃守（福島、六万四〇〇石）、中村相馬因幡守（福島、六万石）、三春秋田万之助（福島、五万石）、山形水野真次郎（山形、五万石）、平安藤理三郎（福島、三万石）、松前松前志摩守（北海道、三万石）、福島板倉甲斐守（福島、三万石）、本庄六郷兵庫頭（秋田、二万二石）、泉本多能登守（福島、二万石）、亀田岩城左京太夫（秋田、二万石）、湯長谷内藤長寿丸（福島、一万五千石）、下手渡立花出雲守（福島、一万石）、矢島生駒大内蔵（秋田、八千石）、一ノ関田村右京太夫（岩手、三万石）、上ノ山藤井伊豆守（山形、三万石）、天童織田兵部大輔（山形、二万石）、新発田溝口誠之助（新潟、一〇万石）、村上内藤紀伊守（新潟、五万九千石）、村松堀右京亮（新潟、三万石）、三根山牧野伊勢守（新潟、一万石）、長岡牧野備中守（新潟、七万四千石）、黒川柳沢伊勢守（新潟、一万石）の計三一藩。

3 一八五八年一月十五日、江戸での種痘所の開設が許可され、神田お玉ヶ池種痘所が誕生した（現在の東京大学医学部の淵源のひとつとされる）。その後下谷御徒町（現、東京都台東区東一丁目）に移り、一八六〇年一〇月四日には、お玉ヶ池種痘所は幕府直轄の施設となった。一八六一年一月二五日には「西洋医学所」と改称され、種痘・解剖・教育の三科が設けられた。初代頭取は江戸の蘭学医大槻俊斎。大槻が六二年四月に病死後、緒方洪庵が頭取となる。洪庵もまた六三年六月に死去したことで、長崎でポンペに修学し、六二年から奥詰医師と医学所頭取助を兼務していた松本良順が、六三年から奥医師・医学所頭取のポストと在校生三〇名を引き継ぐ。松本は、ポンペ式の近代医学教育に切り替え、窮理（物理）・舎密（化学）・薬剤・解剖・生理・病理・療養・内科・外科の九科を定めて講義を行っていた。

4 緒方洪庵（一八一〇～六三）備中（岡山）。一七歳で蘭学医中天游の私塾思々斎塾に入り西洋医学修行を始めた。江戸では蘭学医坪井信道の塾に入門（一八三一～一八三五年）し、オランダ語の読解力を身につけた。一八三六（天保七）年には天游の遺子耕介を連れて長崎に赴く。三八（天保九）年長崎での勉学を終え、三月に大阪に「適塾」を開く。適塾では福沢諭吉、大村益次郎、高松凌雲、長与専斎、佐野常民ら多くの門人を輩出した。一八六二年八月、蘭学医としての業績が認められて、当時の医師の最高位である奥医師に就任し、江戸西洋医学所の頭取を兼務する。洪庵については、中田雅博『緒方洪庵―幕末の医と教え―』（思文閣出版、二〇〇九年）を参照。

5 ペリー来航に危機感を持った徳川幕府に対して、西洋式海軍伝習と造船所建設のための助力をオランダが申し出る。一八五五年七月にオランダ東インド艦隊海軍中佐、ヘルハルドウス・ファビウス（Gerhardus Fabius, 1803～1888）が司令官として来日。その際オランダより「観光丸」が贈呈される。ペルス・ライケン G.C.C.Pels Rijcken、在日期间一八五五～一八五七）がスーピン号の艦長として来航し、ファビウスが四カ月滞在了帰国後、派遣隊在留分隊二二名の隊長として、蒸気船を運転操縦して航海する教育を伝習した。この時選ばれた三名の指導官要員のひとりに勝麟太郎がいた。一八五七年にリーダー・ハンセン・ファン・カッテンディーケ W.J.C.Ridder Huijsen van Kattendijke、在日期间一八五七～一八五九）が、第二次海軍教育班三七名を率いて一八五七年にヤパン（Japan）号で来崎した。ヤパン号は「咸臨丸」とし改名される。

6 神谷昭典『日本近代医学のあけぼの―維新政権と医学教育』（医療図書出版社、一九八〇年第二刷）一七頁。

7 神谷『日本近代医学のあけぼの』一七頁。二四―二五頁。神谷は、医学の伝習を軍事という国家目的に沿って組織化するためには、当然その形態は、直参ならびに諸藩から俊秀の士を貢進させ、外人教師による西洋科学教育を官費で講授せしめるという、のちの帝国大学なる「官製モデル」以外にはないとし、医学の伝習であってもそれが国家目的となる以上、教官は医官たる軍医将校でなければならず、学生は武士でなければならなかったとしている。そして松本良順は最もこの理を理解し、熱心に実行した指導者であったと評価している。

8 足立寛（一八四二～一九一七）遠江国（静岡）。適塾に一八六二年に入門（入門番号六〇七、姓名録は足立藤三郎）。翌六三年には洪庵を追い、江戸で医学所に入り、助教として蘭学、理化学を担当する。一八六九年東校中助教兼寮長、その後一八七四年には四等教授になるが、翌七五年に長官に抗し罷免となる。その後陸軍軍医正、軍医総監にまで累進する。軍医部創始者の一人で、陸軍軍医学校教官、同校長、陸軍医務局長を務め、軍医の育成にも尽力した。陸軍軍医学校では、初めて消毒法講義を行った。多数の論文を

翻訳した。陸軍退官後は赤十字社講師を勤め『看護法教程』（一八九八年）を発行するなど、看護婦教育にも携わる。

⁹ 田代基徳（一八三九〜九八）豊前中津（大分）。一八六一年適塾に入門（入門番号五七九）し、洪庵とともに江戸に出て医学所に入る。専門は外科・解剖。明治となり文部省に出仕したのち、一八七四年より陸軍出仕。軍医監、陸軍軍医学校長、軍医部長を務める。一八七四年にアメリカの看護書の中から「看護婦の心得」の章を翻訳し、『看病心得草』と題し出版した。田代の看護書発行については、平尾真智子「明治最初の翻訳看護書の原著解明と看護史上の意義―田代基徳・岡田宗沢『看護心得草』（明治七年）―」（『日本医史学雑誌』五九卷三号、二〇一三年）三九一―四〇五頁、がある。

¹⁰ 『日本医史学雑誌』五九卷三号、二〇一三年）三九一―四〇五頁、がある。

¹¹ 石黒忠恵『懐旧九十年』（岩波書店、一九八三年）一五七頁。

¹² 小川・酒井『松本順自伝・長与専斎自伝』六六―六七頁。

¹³ 弾左衛門に関しては以下の書籍を参考とした。塩見鮮一郎『弾左衛門とその時代』（河出書房新社、河出文庫、二〇〇八年）。中尾健次『弾左衛門―大江戸もう一つの社会』（解放出版社、一九九四年）。塩見鮮一郎『解放令の明治維新―賤称廃止をめぐる―』（河出書房、二〇一一年）、星亮一・戊辰戦争研究会編『新選組を歩く』一二八―一二九頁。浅草の矢野弾左衛門は、三千石の大名に匹敵するほどの財力を持っていた。良順の計らいで、一八六八年四月一日平民に取立てられ矢島内記と名乗り、配下二百名にはフランス式調練を受けさせ、甲州に出立し、新選組と一時期行動を共にした時期もあった。のちに弾直樹と改名。

¹⁴ 塩見『弾左衛門とその時代』二四頁。

¹⁵ 太田雄寧（一八五二〜八一）医師の長男として出生し、松本良順に師事して西洋医学を学ぶ。戊辰戦争では、松本良順と船橋駅で別れている。一八七五年にアメリカに留学し、化学、製薬学を学び、帰国後七七年二月、医学雑誌「東京医事新誌」を創刊（雄寧の死後も発刊され、一九六〇年二月に廃刊。欧米の『薬物鑑法』『新式化学』など、製薬学、化学、養生論、温泉論など多領域にわたる著書を執筆した。太田雄寧訳纂の『看護心得』の原著は、ロバート・E・グリフィス（Robert Eglesfeld Griffiths 1798〜1850）著『一般処方集（A Universal Formulary）』第三版であった。「東京医事新誌」は、一八七九年一月二二日発行の「東京医事新誌」第八七号に論説「看護人教育の切要」を掲載しており、雄寧は系統的な看護教育が開始される以前より看護教育の必要性を認識していた一人であった。雄寧に関する先行研究には、樋野恵子「明治初期における医療の一分野としての看護―医師太田雄寧訳纂『看護心得』の原著解明と比較検討―」（『日本医史学雑誌』第五四卷第四号、二〇〇八年）三七三―三八六頁がある。

¹⁶ 佐藤泰然（一八〇四〜七二）武蔵国川崎稲毛に生まれる。一八三〇（天保元）年に二七歳で医学を志し、高野長英などに師事し、後に長崎へ遊学、オランダ通詞、蘭学を大石良逸、檜林栄達などに学ぶ。一八四四年（天保一四）年に長女つるの夫、林洞海に家督を譲り、下総佐倉に移住し、姓を佐藤に改める。佐倉で開業医となる側ら、蘭学塾「順天堂」を設け、一八五三年には正式に佐倉藩医となる。佐倉時代の順天堂は、高度な外科が評判となり、「東の長崎」との異名で全国各地から西洋医学をおさめに医学生が集まった。松本良順は二男。養子は舜海（尚中）。

¹⁷ 南部精一郎（一八三四〜一九二二、明治四年頃より精二）信夫郡上飯坂村の横山主税の長男として生まれる。一八五六（安政三）年に佐藤泰然の門に入り、会津藩藩医にも選ばれる。一八六〇年から四年間長崎でポンペから蘭学を学び、同時に松本良順の門人となる（その時の名は鈴木瑞慎）。その後、京都守護職松平容保の藩医と同時に、新選組

の治療にもあたった。会津落城後は、実姉の嫁ぎ先である伊達郡保原町に移り住むが、西軍に捕縛され、士族から平民に降格放免される。一八七一年に上京し順天堂佐藤尚中に再度外科を学び、札幌では梅毒院を建て駆梅に尽力した。札幌、四国松山市、静岡市、岩手県などで病院長などに就任したが、一八八九（明治二二）年以降は飯坂で開業医として過ごした。良順の古希にも出席するなど生涯を通して良順との親交は続いた。七七歳で老衰で死去。南部精一郎については、酒井シヅ監修・日本医師会編『医界風土記 北海道・東北編』（思文閣出版、一九九四年）一九五―二〇〇頁参照。

¹⁷ 「太政官日誌」一六九号で、「未ダ行ハレ難キ儀モコレアリ、暫時、病院ノ名目」を辞めて「軍務治療所」を唱えることについてのおふれが出る。しかし、結局「病院」が定着した。

¹⁸ 中田『緒方洪庵』三二二頁には適塾入門番号四四六に古川春龍の名を確認できる。春龍は会津の出身で、長崎のボードウィンに師事し、戊辰戦争で帰藩し、良順の助手を務め、良順のあと会津城内の病院を主宰したとあり明治三年に没。この古川春英と春龍が同じ人物かは不明。

¹⁹ 蒲原「明治戊辰戦争越後口軍病院の変遷（上）」四五頁。

²⁰ 酒井・日本医史会編『医界風土記 北海道・東北編』一九六頁。

²¹ 星・戊辰戦争研究会編『新選組を歩く』二〇四頁。

²² 小川・酒井『松本順自伝・長与専斎自伝』七一頁。

²³ 小川・酒井『松本順自伝・長与専斎自伝』七二頁。

²⁴ 小川・酒井『松本順自伝・長与専斎自伝』五〇―五二頁。酒井・日本医師会編『医界

風土記 北海道・東北篇』一九六―一九七頁には、南部は京都守護職松平容保の藩医として京都木屋町の芸者町の中の一軒の家を二つに仕切つて八畳と六畳に分けて住んでおり、南部の家には良順や近藤がよく訪ねてきたとある。

²⁵ 小川・酒井『松本順自伝・長与専斎自伝』五二頁。

²⁶ 小川・酒井『松本順自伝・長与専斎自伝』七二頁。

²⁷ 星『会津落城』一三二―一三四頁。

²⁸ コータツツイ『ある英人医師の幕末維新』の付録一六九頁。

²⁹ 児島襄『大山巖 第一巻幕末・維新』（文藝春秋、一九七七年第一刷）一八九―一九〇頁。

³⁰ 大山弥助（巖）（一八四二―一九一六）薩摩藩士で、西郷隆盛・西郷従道の従兄弟。江川塾で砲術を学び、戊辰戦争では薩摩藩兵の砲術長。一八六九年に軍事視察で渡欧。帰国後の一八七一年陸軍少将に任ぜられ、同年再度渡仏留学して軍政を学ぶ。一八八〇（明治一三）年には陸軍卿・参議となり、山県有朋とドイツ式軍制を取り入れる。一八八四年には欧米各地を視察し、八五年に内閣制度が作られた時に初代陸軍大臣となる。日清戦争では総司令官、日露戦争では満州軍総司令官。最初の元帥、のちの内大臣。

³¹ 大久保一蔵（利道）（一八三〇―七八）薩摩藩士。西郷隆盛と公武合体運動を展開するが、討幕派の急進人物となる。明治新政府では参議となり、版籍奉還、廃藩置県などの実現に力を尽くす。岩倉使節団の副使として渡米。大蔵卿と内務省の内務卿を兼任し、政府の実権を握る。殖産興業も推し進めるが、一八七八年五月一四日暗殺される。

³² 大山元帥伝刊行会『元帥公爵大山巖』（マツノ書店、二〇一二年）「第九章 英医『ウキリス』の招聘」二九七―三一〇頁参照。

³³ 神谷『日本近代医学のあけぼの』二八―二九頁。ウィリスを京都に呼ぶことに関しては、西郷隆盛が藩主島津忠義の名で大久保一蔵を介して朝廷に提出した願書の記録。「復古記」巻二四、明治元年正月二四日の記録。

³⁴ 寺島宗則（維新前の名は松木弘安、一八三二―一九八）。薩摩藩士。蘭学を学び、戸塚静海の塾に学ぶ。和親条約締結後は、洋学所に設立準備に着手し、一八五六年に藩書調所が創設された際には、既に蘭学者としては有名であり教授手伝いとなる。一八六二年の文久遣欧使節団には傭医師兼翻訳方として随行し、福澤諭吉、箕作秋坪と病院および学校の調査を担当し報告書をまとめた。一八六八年九月に神奈川県知事に任命されると、電信機敷設、造幣器械の購入、灯台の建設など、近代化の政策を行った。外務卿、文部卿、駐米公使、枢密顧問などを歴任。

³⁵ 五代才助（友厚）（一八三五―一八八五）薩摩藩士。藩命で長崎に留学し海軍伝習所に入り、航海術・砲術・測量術を学ぶ。薩英戦争に敗れた薩摩藩は、西洋の軍事力に対抗するために西洋文明を学ぶことを痛感し、開明的な考えをもっていた五代才助（友厚）は、藩に「五代才助上申書」を提出、その結果、薩摩藩は一八六五年一月、イギリス海軍の技術を学ぶため、グラバー商会を介して密航という形でイギリスに選抜した薩摩藩士一六名を留学生兼遣英使節団として派遣した。五代は視察員（船奉行副役）の一人として関研蔵という変名で渡航。他に同役割で松木弘安（変名、出水泉蔵）が、開成所諸生二等には、維新後文部官僚となり文部大臣を歴任した森有礼もいた。この留学の縁で、薩摩藩とイギリスとは友好関係が成立していた。五代は大阪商法会議所初代会員。

³⁶ アーネスト・サトウ（Sir Ernest Mason Satow、一八四三―一九二九）ロンドンのクラブトンに生まれた。一八歳の時に、イギリス外務省の通訳生試験に合格し、希望した日本駐在を命ぜられた。一八六二年九月八日に横浜港に着く。一週間も経たないうちに生麦事件がおこるなど、明治維新前後を青年外交官として二五年間日本に滞在し、様々な出来事に通訳官、書記官としてその歴史的出来事に関わる。一九〇六年にイギリスに帰国。日本滞在中は、日本語の言語に習熟しただけでなく、歴史、宗教、風俗なども徹底して研究し、日本文化の紹介者でもあった。多くの著述を残し、その目録は、アーネスト・サトウ著、坂田精一訳『外交官の見た明治維新（下）』（岩波文庫、二〇〇九年第六九刷）二六三―二七〇頁に掲載されている。

³⁷ 神谷『日本近代医学のあけぼの』二八頁。

³⁸ 長与専斎（一八三八―一九〇二）肥前（長崎）。祖父長与俊達は大村藩藩医であり、人痘種痘の腕種法の改良を行い、いち早くモーニッケ病苗を大村藩にもたらした人物で、その祖父に薫陶を受けて育つ。一八五四年に適塾に入門（入門番号三〇一）し、福沢諭吉の後塾頭を務めた。塾在六年目のときに、洪庵より長崎で西洋医学を学ぶことを勧められ、ポンペ、ボードウィン、マンسفエルトラに師事。一八六八年には精得館（のちの長崎医学学校）の頭取に就任しマンسفエルと医学教育を開始。文部省に出仕を命ぜられ、一八七一年には岩倉使節団に参加、欧米諸国の医学教育、医療制度の調査に担当した。帰国後医務局長（衛生局長）に就任、「医制」制定に深く係わるなど、日本の近代的医事行政の創始者。

³⁹ 伴忠康『適塾と長与専斎―衛生学と松香私志』（創元社、一九八七年第二版）一二〇頁。
⁴⁰ アルベルト・ボードウィン（Albertus Johannes Bauduin、一八二二―一八八五）オランダのドルドレヒトに生まれる。一八四三年にユトレヒト陸軍軍医学校を卒業後、同校に勤務していたが、ポンペの後任として一八六二年一〇月二八日に四〇歳で長崎に着任した。眼科に詳しくヘルムホルツ発明の検眼鏡を日本に伝えた。長崎養生所は六五年に精

得館と改称され、翌六六年に任期を終える。緒方惟準（おがたこれよし、緒方洪庵の次男）、松本銈太郎（まつもとけいたろう、松本良順の長男）が幕命によりヨーロッパ留学するのに同伴した。再来日後、六八年明治新政府はボードインを大阪に招聘、翌六九年四月に発足した大阪府仮病院（大阪大学医学部の前身）で教頭として講義を開始する。講義は、軍陣繻帯学、軍陣外科学、軍陣衛生学、赤十字規則などを担当し、ボードインの長崎での弟子橋本綱常が通訳をした。幕府瓦解後も大阪の病院で教えていたが、ドイツ医学の採用により帰国を予定していたドイツ医師の来日遅延のため、大学東校の講義を一時引き受けた。一八七〇年にオランダに帰国後、七九年には勲四等旭日小綬章が日本政府より送られた。

⁴¹ フアン・マンスフェルト (G. van Mansvelt 一八三二〜一九二二) ユトレヒト陸軍軍医学校卒業、ボードインの後任として精得館に赴任した。在日期间一八六六年七月〜一八七九年。長与とともに、長崎医学学校を発足させ、厳格で精密な医学教育を開始した。五年の任期を終えたあとは、熊本古城医学学校の創始に係わり（一八七二〜七四年）、教え子に北里柴三郎がいる。その後、京都府療養病院（一八七六〜七八年）、大阪病院（一八七八〜七九年）でも教鞭をとり、滞日は一四年に及んだ。オランダに帰国後は種痘局長となった。一八八六年には、勲四等旭日小綬章が日本政府より送られた。

⁴² 大村益次郎（一八二五〜六九）長州の代々医者をやとする家に生まれ、苗字は村田、通称は、良庵、藏六と名乗った。防府の蘭学医、梅田幽斎のもとで医術と蘭学の基礎を学んだのち、一八四六（弘化三）年に適塾に入門（入門番号五二番）。その後一時郷里で開業するが、伊予宇和島藩に出仕、西洋兵学に転向。江戸で鳩居（きゆうきよ）堂を開塾、また幕府の蕃書調所や講武所に出仕した。六五年三月には、長州藩の「兵学校御用掛」として軍制改革、長州征伐・戊辰戦争に活躍。官軍を指揮して上野の彰義隊を撃破。明治政府の兵部大輔に就任し、国民皆兵主義による徴兵制度と統一された近代軍隊の創設をめざし、新政府の軍制改革に着手、近代兵制医学の確立に尽力した。一八六九年九月京都で刺客に襲われる。敗血症を併発し、大阪府仮病院で大腿よりの切断術を受けるが、一月五日死亡。没四五才。

⁴³ 神谷『日本近代医学のあけぼの』二八頁。

⁴⁴ 神谷『日本近代医学のあけぼの』二八頁。中田『緒方洪庵』三三〇〜三八〇頁に掲載されている適塾門下生一覧には、薩摩藩（鹿児島県）から入塾した門人は六名である。現在の九州の県単位で比較すると、福岡県三三名、大分県二一名、佐賀県三五名、長崎県一九名、熊本県九名、宮崎県七名であり鹿児島県が最も少ない。ちなみに最も門人名を連ねている山口県（周防、長門）は、五六名であった。

⁴⁵ 荒井保男『日本近代医学の黎明―横浜医療事始め』（中央公論新社、二〇一一年）六〇〜六一頁。

⁴⁶ 鮫島近二『明治維新と英医ウイリス』（日本医事新報社、一九七三年）六四頁。一六三〜一六九頁。ウイリスが相国寺内の養源院の薩摩病院で治療した負傷者の中には、頸部に銃創を負った西郷隆盛の弟慎吾（従道）がいた。ウイリスの治療により頸部の銃創も全癒するなど、ウイリスは非常な名声を博することになった。ウイリスは、三月二日に神戸に帰還し、同日付で京都の医療活動の報告書を提出した。

⁴⁷ 石神良策（一八二二〜七五）薩摩鹿児島藩医。一八四三年二三歳の時に長崎に遊学し、七年間蘭方医学を独学で学ぶ。鹿児島における種痘の実施をはじめたことで有名。一八五〇（嘉永三）年に鹿児島に戻り、石神塾を開く。戊辰戦争でウイリスの下で治療にあ

つたのち、一八六九年には医学校開設のために鹿児島に戻り、鹿児島医学校教授。一八七二年には海軍病院長となる。鹿児島時代の門人に高木兼寛がいる。

⁴⁸ 荒井『日本近代医学の黎明』六五頁。

⁴⁹ コータツツイ『ある英人医師の幕末維新』三四六頁。横浜軍陣病院で、ウィリスに依頼され治療に従事したシッドルの報告書「日本陸軍にかんする報告書」（一八六九年三月三〇日に提出）には、ウィリスの京都での治療に成果があったことから、「日本当局が北国の大名との戦闘による負傷兵を彼の看護下にゆだねたいと望んだ」と書かれている。

⁵⁰ 大島蘭三郎「近世日本病院略史（四）」『中外医事新報』一二二四号、一九三五年十月四〇四—六頁。

⁵¹ わが国最初の軍事病院は、長州藩が幕長戦争で一八六六年四月に鴻城・高森・吉田に開設した三病院である。横浜軍陣病院は、仮病院、横浜病院、養生所、修文館、野戦病院、天朝病院等の異名があった。

⁵² ジョセフ・バウアー・シッドル (Joseph Bower Siddall、一八四〇—一九二五) イギリスのダービーシャー州生まれ。セント・トーマス病院医学校を卒業。セント・トーマス病院の外科研修医、ブラックバーン病院で勤務後、一八六八年に駐日公使館付医官として来日。ウィリスが戊辰戦争の東北地方に従軍している期間、横浜軍陣病院、東京の大病院で、一八六九年まで治療にあたった。一八七〇年からは横浜外人居留地六七番で開業する。帰国後は、治安判事となり医療からは遠のく。在日期间は一八六八—七四年。

⁵³ 佐藤舜海とは、佐藤尚中であり、鳥羽・伏見の戦いの傷兵が江戸に後送されてきたとき、佐藤尚中は養嗣子進と共に、芝新銭座の会津藩邸中屋敷で将兵三〇名余命の治療にあたっていた。その後五月半ばには、横浜軍陣病院に所属していた。尚中の所属する佐倉藩は会津藩とのつながりも強く、尚中の立場は複雑なものであり、戊辰戦争を通しての動静も複雑なものがああり、白河口、山道軍の軍医長は息子の佐藤進が勤めている。尚中の戊辰戦争の動静と立場に関する研究成果が、神谷『日本近代医学のあけぼの』二九—三六頁に詳細に書かれている。神谷は、尚中は薩摩藩の繋がりが深く、維新新政府での重用となったとしている。

⁵⁴ 荒井『日本近代医学の黎明』六六—六七頁。

⁵⁵ コータツツイ『ある英人医師の幕末維新』一七六頁。

⁵⁶ コータツツイ『ある英人医師の幕末維新』三四六頁。シッドルの報告によると、横浜軍陣病院は外人墓地からほぼ二マイルのところにある大きな日本家を病院として負傷兵を収容し、それぞれ個室をあてがわれていたが、二—三週間して患者数が急速に増大し、「止むを得ず付近の茶屋数件に分宿させた」とある。そのため診察には患者のいる家を回らなくてはならず、多くの時間を損失することが治療の妨げにもなることから、新しい病院が設けられた。新しく病棟として改修されたのは、元厩として使用されていた兵舎であり、約六〇〇ヤードの奥行のある構内に、長さ二五〇ヤードで一五ヤード間隔に並んだ二列の一階建て家屋と、各三〇ヤードの長さの二階建ての建物六棟であった。

⁵⁷ 大島「近世日本病院略史（四）」四〇六頁。

⁵⁸ 中西淳朗「横浜軍陣病院の介抱女」（日本医史学雑誌）第四二巻第四号、一九九六年二月）六五六—五七頁。中西は、横浜軍陣病院の日記（日本医史学雑誌・復刻版第一七巻附録・昭和一九年・思文閣出版）から、介抱女の記事を抽出してその実態を調べた。中西は、介抱女は五十才以上の老女であり、給与は他の職員よりは高かったが、東京府大病院で作った規則では、投薬・起臥・着替えの手伝いが看病人の主な仕事であること

から、横浜軍陣病院の介抱女は、「わが国における職業としての看護婦の最初」と位置付ける説を否定する資料であることを、学会例会にて発表している。

⁵⁹ 荒井『日本近代医学の黎明』六八頁。ウィリスが七月二日にパークスに提出した報告書には、患者数は一七六名、その内訳は薩摩一二〇名、長州二三名、土佐一八名、豆州六名、備前五名、戸田三名、大村一名と記載されている（コータツツイ『ある英人医師の幕末維新』一七八頁）。

⁶⁰ コータツツイ『ある英人医師の幕末維新』一七六頁。

⁶¹ 山県狂介（有朋）（一八三八～一九二二）長州の生まれ。松下村塾に学ぶ。奇兵隊を率いて幕軍と戦い、戊辰戦争・北越鎮撫・会津征討の参謀を務める。一八六九年兵制視察のため渡欧。帰国後に兵制をフランス式に統一、徴兵制の施行など、新兵制確立にあたり初代陸軍卿となる。伊藤博文とともに明治政府の最高指導者となる。内務大臣、陸軍大臣、総理大臣を務め、墓碑には、枢密院議長元帥陸軍大将従一位大勲位功一級公爵と刻まれている。

⁶² 蒲原「明治戊辰戦争越後口軍病院の変遷（上）」四五―四六頁。

⁶³ 木村紀八郎『大村益次郎伝』（鳥影社、二〇一〇年初版）二七八頁。

⁶⁴ 山県有朋の手記「越の山嵐」（陸軍省編修掛編・発行『越の山嵐』一九三〇年）一三二頁に、西園寺公が訪れた記録が残っている。「此日（六月十六日）西園寺、四条ノ両公同行シテ関原ニ来ラレタリ、両公ハ戦地実見、旁、軍隊慰勞ノ為メ、去ル十四日ノ夜ニ柏崎マデ来ラレ、本日関原へ来リ給ヒシニテ十七日ニハ怪我人ノ養生所（今日ノ所謂ユル野戦病院又ハ兵站病院ナリ）ヲ視察セラレ、十八日には、初版へ慰勞ノ言ヲ賜ハリタリ」

⁶⁵ 蒲原「明治戊辰戦争越後口軍病院の変遷（上）」四七頁。

⁶⁶ 神谷『日本近代医学のあけぼの』三二頁。

⁶⁷ 蒲原「明治戊辰戦争越後口軍病院の変遷（上）」四七頁。

⁶⁸ コータツツイ『ある英人医師の幕末維新』二〇一頁。

⁶⁹ 佐久間『奥羽出張病院日記』の研究（承前）一三三七―四頁。

⁷⁰ コータツツイ『ある英人医師の幕末維新』一八四―一八五頁。

⁷¹ コータツツイ『ある英人医師の幕末維新』二〇二頁。

⁷² 鮫島『明治維新と英医ウィリス』一六九頁。大山巖の要請を受けて初めて相国寺の薩摩藩病院に治療に訪れた時の感想。

⁷³ 鮫島『明治維新と英医ウィリス』二〇九頁。

⁷⁴ コータツツイ『ある英人医師の幕末維新』二〇二頁。

⁷⁵ 鮫島『明治維新と英医ウィリス』一一五頁。

⁷⁶ コータツツイ『ある英人医師の幕末維新』二三六頁。

⁷⁷ コータツツイ『ある英人医師の幕末維新』二〇二頁。

⁷⁸ コータツツイ『ある英人医師の幕末維新』二二二頁。

⁷⁹ クリスティン・ハレット著、中村哲也監修、小林政子訳『ヴィジュアル版看護師の歴史』（国書刊行会、二〇一四年）四四頁。

⁸⁰ デイター・ジェット著、山本俊一訳『西洋医学史ハンドブック』（朝倉書店、一九九六年）三二五頁。消毒の歴史は、一七七三年にチャールズ・ホワイト（マンチャスター）による厳格な清潔操作、一八四三年オリヴァ・ウェンデル・ホームズ（ボストン）による産褥熱は予防できることを指摘、一八六一年にイグナス・フィリップ・ゼンメ

ルヴァイス(ウィーン)による手洗いの励行が主張され、ジョセフ・リスター(グラスゴー)による石灰酸散布が始まるのは一八六八年である。

⁸¹ J. A. ドラン『看護・医療の歴史』二二七頁。

⁸² J. A. ドラン『看護・医療の歴史』二四四頁。

⁸³ コータツツイ『ある英人医師の幕末維新』二二三頁。

⁸⁴ コータツツイ『ある英人医師の幕末維新』一七九頁。

⁸⁵ コータツツイ『ある英人医師の幕末維新』二二七頁。

⁸⁶ コータツツイ『ある英人医師の幕末維新』二二九頁。

⁸⁷ アーネスト・サトウ著、坂田精一訳『一外交官の見た明治維新(下)』(岩波書店、二〇〇九年第六九刷)二二八頁。

⁸⁸ 井上忠男『戦争と救済の文明史―赤十字国際人道法のなりたち』(PHP研究所、二〇〇三年)三三頁。

⁸⁹ 井上『戦争と救済の文明史』三三頁。

⁹⁰ 井上『戦争と救済の文明史』三九頁。

⁹¹ 井上『戦争と救済の文明史』四二―四三頁。

⁹² 井上『戦争と救済の文明史』四六―四七頁。アンリ・デュナンの提唱にジュネーブ公益協会会長で法律家のグスタフ・モワニエ(1826~1910)のちの赤十字国際委員会第二代会長)、スイスの国家的英雄アンリ・デュフル將軍(1787~1875)、外科医で戦傷医学の大家ルイ・アッピア(1818~98)、外科医のテオドル・モノワール(1806~69)の五人が賛同し、委員会は通称「五人委員会」と呼ばれた。現在の赤十字国際委員会の起源は、一般に五人委員会の会合が開かれた一八六三年二月一七日とされており、国際赤十字の創立日は同日とされている。但しモワニエは、デュナンの提案を話し合うための最初の会合日である一八六三年二月九日が、赤十字の本当の始まりの日だと回想している。

⁹³ 井上『戦争と救済の文明史』七九―八〇頁。

⁹⁴ その他の二二カ国は、フランス・スイス・オランダ・イタリア・スペイン・ノルウェー・デンマーク・ギリシャ・プロイセン・トルコ・メクレンブルグ・シュヴェリンである。

⁹⁵ コータツツイ『ある英人医師の幕末維新』四〇―四一頁。

⁹⁶ コータツツイ『ある英人医師の幕末維新』二二五頁。

⁹⁷ 高松凌雲(一八三六~一九一六)筑後国久留米の農家の三男として生まれる。二十一歳の時に下級武士の養子となるが、医師になる決意をして養家を飛出し脱藩。江戸の蘭方医石川桜所のもとで修業後、一八六一年に適塾に入門(入門番号五八〇)一年在籍した。その後將軍侍医となり、徳川昭武のパリ万国博覧会への参加を目的とした使節団の随員に選ばれ、フランスへ渡る。凌雲はフランスの市民病院オテル・デュウ(HOTEL DIEU・神の国)に通い医学修行に励む。その背景には同じく随行した渋沢篤太夫(栄一)の配慮があった。函館戦争では敵味方の区別なく傷病者を治療。一八七九年には同愛社を結成、東京周辺に慈善施設を多数開く。日本史籍協会編『高松凌雲翁経歴談・函館戦争史料』(東京大学出版会、一九七九年復刻)六四頁には、病院規則を設けて、「医務心得」「病者取扱い」「看病人心得」等を制定したとあるが、その内容は書かれていない。

⁹⁸ 新村拓編『日本医療史』(吉川弘文館、二〇〇七年第二刷)二二二頁。

第三章 戦時医療体系の整備と課題

一 奥羽出張病院の医療体制

新政府は官軍の総司令官である東征大総督に有栖川宮熾仁親王を選び、正月四日、山陰道鎮撫総督に西園寺公望を、翌五日に東海道鎮撫総督に橋本実梁を、九日には東山道鎮撫総督に岩倉具定を、北陸道鎮撫総督に高倉永祐を任命し、東征を本格的に始める。二月六日には、それぞれ東海道先鋒総督兼鎮撫使、東山道先鋒総督兼鎮撫使、北陸道先鋒総督兼鎮撫使と改め、沢為量を奥羽鎮撫総督（奥羽は先鋒総督なし）とした¹。

官軍は会津攻めを三方面（平潟方面、白河方面、高田・新発田方面）に分れて進軍した。太平洋海岸沿いを取り平潟方面に進んだ海道軍には関寛斎（阿波藩）²が、白河方面に進撃し信濃川の溪谷沿いの道をとった山道軍には、佐藤進（佐倉藩）³が軍医長として従軍した。越後口方面の北越軍には赤川玄樸（長州藩、ポンペ伝習、松本門）を頭取とし、越前藩の橋本綱維、綱常³兄弟らが従軍した。各方面の戦場では、それぞれ従軍した軍医らが、総督府と連絡を取りながら野戦病院で治療にあたり、重症患者は横浜または東京の大病院へ後送するという手段をとった。

本章では、今まで経験したことのない、銃創により外科的治療を受けた重症患者や増え続ける負傷兵に対して、どのような医療体制がとられたのかを、関寛斎と橋本綱常に焦点をあてながら明らかにする。

新政府が東征に向け、軍陣医療体制をどのように整えようとしていたのかは、『復古記』からその一端を知る事ができる。二月六日、東海道と北陸道の先鋒総督兼鎮撫使から先鋒出張藩に向け、左記のような布告がなされている⁴。

此度、御親征ニ付、各藩人数ニ応シ、医師召連、陣営ニテ各医打寄、病院相立療治之
手当可致候様、可相心得、御沙汰候事。

東海道先鋒記

北陸道先鋒記

それに対し、二月八日に長門（山口）宰相寺内暢三は、左記に示すように、長引く戦争により多くの負傷者の手当てを国元で行うため医師を差し出す事ができない事、負傷者の治療は設けられた病院でお願いしたい旨の返事を提出している⁵。

今度、御沙汰之趣ニ付、別紙人数差出候ニ付テハ、医師ヲモ一同差出、病院へ加入可仕
之处、来春之戦争ニ付、傷瘡之モノ多人数、詰合之医師ニテ手合兼候付、国元へ申遣

シ、未上著不仕候間、此度出兵之間ニ合不申候間、不快尚傷瘡等相受ケ候節ハ、此度御一手病院ニ於テ、療養被 仰付候様、兼テ奉願候、以上。

又紀州藩では、四〇七名のうち医師二名を召し連れていくことを報告している⁶。この時期、幕府軍も政府軍も軍医の状況は系統組織づけられたものではなく、各々その所属藩医が戦地に臨む体制であった。しかし、従軍したほとんどの藩医は、西洋外科学を知らない漢方医であった。五月一九日、会津征伐大総督の発令があり、東征大総督熾仁親王が兼任でその長に補され、続いて、東海・東山・北陸三道の鎮撫総督府が廃される。新たに、白河口・平潟口・越後口三道の総督が任命された。

奥羽追討平潟口軍総督には四条隆調、参謀には木梨清一郎（長州）、渡辺清左衛門（大村藩）が任命され、薩摩藩をはじめ、一大隊、五中隊、五一小隊、四砲隊七、九九五名の藩兵が駆り出された⁷。うち一三六名が死亡し、傷者は六九九名（内死亡九七名）との記録が残されている⁸。この平潟方面の海道軍の軍医長となったのは阿波藩医関寛斎であった。

寛斎は、一八四八（嘉永元）年一八歳で佐藤泰然の門に入り、五年間勉強した後、千葉銚子で開業、一八六〇年には醬油業を営む豪商浜口儀兵衛の援助で長崎に留学した。長崎ではポンペに師事し、ポンペと松本良順によって構築された医学教育のカリキュラムで医学を学んだひとりであった。寛斎は三三歳の時に阿波藩の御典医となったことで、官軍の追討令に伴い、東下部隊に阿波藩士も参加することで、隊付医師として海路江戸に下った。

寛斎は、五月一五日に起こった上野彰義隊の戦での負傷兵治療のため、大総督府の命令で神田講武所に開設された病院で治療にあたった。関寛斎の「戊辰役軍陣病院日記」によると、その病院からウィリスの治療を受けるため、横浜軍陣病院へ負傷兵を護送した記録が残されている⁹。

そこでの治療が、大総督府の西郷隆盛や軍務官判事となっていた大村益次郎の目にもとまり、六月八日、寛斎は大総督府から至急登城するようにとの呼び出しを受け、参謀渡辺清左衛門から書付けを渡され、奥羽出張病院頭取の命が下された¹⁰。

来ル十一日乗船ニテ兵隊千人斗リ御出兵ニ相成候ニ付キ、御時会柄殊ニ炎暑之時節ニモ有之候間、銃創其余手厚ク用意可仕仍而者追而諸藩医御引揚ニ相成御渡ニモ相成可申候得共、不取敢右御用意向可有之見込書差出可申旨被達候

翌九日には、準備金として八二〇両が寛斎に渡され、医療器具の準備は横浜病院（頭取有馬意運）の協力を得て準備をするように連絡が届けられた。寛斎は門人斉藤龍安と古川洪堂門人中村洪斉を助手として同伴させる許可を得て、早速準備に取り掛かる。寛斎は越前屋より薬種、浴衣、晒木綿、外科道具を購入し、一日一三時に出発し、一七日には、平潟村「地福院」（神護山地福院海徳寺）を奥羽出張病院として治療を開始する¹¹。

寛齋はこの奥羽出張病院（以下、出張病院と記す）頭取に任命された六月八日より、十二月一五日の本営引き渡しまでの約六ヶ月間の記録を、「奥羽出張病院日記」（以下、「奥羽日記」とする）と題し、その運営記録を残した。奥羽日記は五巻に分冊され、主に寛齋が記入しているが、筆跡からは三名以上の医師が担当していたと考えられている¹²。原本は北海道陸別町郷土資料室に保存されている¹³。

南関東を制圧した政府軍は、太平洋海岸線から同盟国を攻める方針を打ち立て、六月六日から二〇日にかけて約千五百名の兵士を平潟港に上陸させた。政府軍は後続の援軍が上陸するのを待ち、平から相馬をぬき、そのまま仙台まで攻撃することを計画した¹⁴。

寛齋が頭取を命じられた出張病院は、野戦病院としての機能を持つものであった。寛齋は野戦病院である病院の設置場所を追討軍の動きに合わせ、六月一七日から七月二二迄は平潟、翌二三日から海路小名浜に移転し数日滞在、二七日には平に移動し、寺院に本院を、裕福な町人宅などに分局を置いた。病院の設置場所は、七月二二日の日記には、出張病院滞在中に世話になった施設として、地福院の他に、由右衛門宅（六月二五日に慢性病院として開設）・善十・橋本屋・念仏堂夫妻等、町人宅も明記されている¹⁵。

また寛齋は到着後、藩兵と地域の住民にチフス患者が発生するが、寛齋は山上の念仏堂を熱病院として隔離対策を実施する。この隔離対策は、長崎でコレラが大流行した際に、寛齋がポンペから学んだ伝染病拡大防止対策の実践であった。

「地福院」を仮病院とした寛齋は、翌一八日参謀らと相談し、平潟並びに川越藩医らをして「付属医」とし、隔日で朝五時（八時）より七時（一六時）まで出勤させることを決める¹⁶。

付属医として現地徴用したのは、中西玄隆（川越藩医、八月二〇日帰宅）、小松秀謙（川越藩医、八月末まで）、篠田本庵（庵）（平潟在住の町医、東京引揚解放まで）、下山田主計（平潟在住の町医、八月二〇日帰宅）の四名であり、二名一組で出勤し治療にあたった。

「奥羽日記」に書かれている出張病院機構図には、病院の付属医は計二五名、その他現地協力医師は一九名の名前が記されている¹⁷。二五名の名簿と各自に支払われた月給の一覧は、表1¹⁸に示す通りであるが、付属医は、寛齋の門人、知人やその紹介、現地徴用、各藩医、出張病院の寛齋に入門して腕を磨いて付属医に取り立てられた者（現地徴用医の子弟など）であった¹⁹。八月三日の日記には、「追々手負人相増且諸藩病院江相残シモ多分ニ相成候ニ付当地並最寄之医師雇上ケニ仕候召平潟表二地下医師相雇候通り一ヶ月三両ツツ月給被下置度奉存候」とあり、現地協力医師らにはひと月三両が支払われていた²⁰。

戦線が北へ向かうに従い、野戦病院は分院を設けて移動をした。分院は現地の寺院に本院を、他に裕福な町人宅などを分局として負傷兵を収容し、寛齋は西洋の治療知識を活用して銃創者の手当、消毒の実施、器具を用いた銃弾の摘出、下肢又は指の切断術、破砕骨摘出などの手術を行った。出張病院の記録には、銃・砲弾による創の手当は二二七件、手術を受けた者二六名、下肢切断一件、指切断二件、銃弾の摘出一七件、破砕骨摘出二件の記載があり、そのうち四名が死亡している²¹。

銃撃戦による負傷兵に、寛齋は野戦病院で出来うる限りの処置・手術を施すが、重症者

は入院期間が長期に及ぶことも予測された。そのため六月二日には、参謀から重症患者は横浜軍陣病院へ移送するようとの指示が入る。「奥羽日記」には「参謀衆ヨリ手厚負之分日間取御見込有之横浜病院へ差送可申当院ハ相成丈輕便ニ致置様差指図モ有之候」との記録²²が残されており、寛齋は重症患者の海路での移送を開始する。

寛齋は前線の移動に伴い、野戦病院の重症患者は船便で横浜軍陣病院への移送を合計六回行い、移送には必ず付属医師一名を付き添わせた。第一回は六月一七日、負傷して治療を受けた薩州壱番隊高松庄兵衛・財部左十郎の二名を、薩州大砲隊付属医安楽養清（九月二〇日より相馬病院へ）付添のもと、六月二日「飛隼丸」で横浜病院に後送する。（図1参照）佐久間は、「横浜軍陣病院日記」の記録から、海路横浜への移送には、約二日間を要したとしている²³。

第二回は六月二五日、「三邦（国）丸」にて一七名の負傷兵（大村藩一名、薩摩藩二名、備前藩一四名）を移送し、備州医師佐次碩安が付き添って後送（六月二七日横浜到着）する²⁴。第三回は七月四日、「安豊丸」にて一八名（備前藩二名、佐土原藩五名、柳川藩四名）を後送。この八名の後送に関しては、因州医官伊藤健造の他に、初めて「看病人」四名も付き添っており、氏名（前田定右衛門・新名中右衛門・飯田銅毅・夫卒壱人）も記録されている。この四名の看病人がどのような者であったかは不明である。

当時の軍事医療体制は、参戦各藩が藩医を従軍させ、第一線での初期治療を行う形態であり、病院での世話には各藩から看病人を差し出していた。「安豊丸」に乗船した看病人四名も、負傷者八名の藩である備前藩、佐土原藩、柳川藩から差し出された看病人であったと考えるのが妥当なのではないだろうか。

七月一三日早朝から始まった平城の攻防では、前藩主安藤信正が城を脱出し、落城する。同盟軍は相馬中村方面に退き、政府軍は、四倉・広野へと相馬方面に向かう海道軍と、山間の道を進み、三春に向かう山道軍とに分かれて進撃を続ける。

第四回目の移送は、平城が落城した翌一四日に、第一回目を使用した「飛隼丸」で、合計一九名（薩摩藩一七名、佐土原一名、大村藩一名）の負傷者に、付添医も同じく安楽養清が付き添い、横浜まで移送している。第五回目は七月一八日、寛齋が門人として最初に同伴した中村洪斉を付添医として、英国船で五六名（佐土原三名、備前一三名、薩摩藩二名、柳川藩二名、鳥取一六名）という多くの負傷兵を横浜に移送しており、看病人六名（病院渡し看病人二名、会計方御雇の看病人四名）も同船している。そしてこの回では初めて「会計方御雇の看病人」が登場した。

五回に及ぶ海路を使用している患者移送後も負傷兵は出張病院に運び込まれ、二二日の「奥羽日記」には「入院等一六名 諸藩病院諸病人八八名」²⁵とある。第六回目の移送は、七月二五日肥後蒸気船「万里丸」に、二七名（薩摩藩一八名、柳川藩四名、大村藩五名）に負傷兵に、付添医官小松立介²⁶、看病人五名（氏名の記載なし）が同船している。

出張病院は、六回目の負傷兵移送を終えた二日後、平に移転する。移転に際しては、「昨日二四日当地引揚げ平表迄引移候参謀衆ヨリ達シモ有之候ニ付龍安義即日出立彼地探索イ

タシ病院取立之義申付置候」²⁷と、病院移転の通達は参謀により指示され、事前に付属医らが現地の視察に赴き、病院の移転場所を決めてくるという段取りであった。

七月二十七日、平に開院した出張病院には、「平潟ヨリ之看病人七ツ時（一六時）着二相成候」と、看病人が移転先の病院から到着した旨の記録も残されている。前述した会計方が雇い入れた看病人らは、病院移転と共に移動し、看病に従事していたと考えられる。

二 衛生隊のはじまり

奥羽出張病院は、七月二十七日に病院移転するが、同日には広野と木戸の間の戦争による負傷兵七名（長州藩）が、翌二八日には五〇名（因州藩三五名、芸州藩一五名）の負傷兵が入院する²⁸。続々と負傷兵が運び込まれる状況に、病院は重症者で充満し、前線と共に移動することが困難となり、もはや野戦病院としての機能が果たせなくなる。八月三日の日記には、参謀に左記の伺い書を提出している。

追々諸藩手負人相増候上者是迄通り□病之義重体之分入院為致候事ハ御座候得共、以後之処ハ行届不申候事ニ御座候召以後之処ハ仮令大病人ニテモ入院為致候義ハ一切断リ可申哉、又ハ別段病院御取立ニモ相成候哉、追々諸藩共本病人モ相増夫々重体之症モ有之如何ニモ難義仕居候是迄通り諸藩病院ニテ療養仕居如何様重体之症多シ、然共当病院ヨリ見舞手当仕候迄之義ニ御候ハバ、仕懸リシ事故相勤可申候得共、当病院ニテ十分見舞モ只今之懸リニテハ自然疎遠ニ相成不本意之義ニ御座候乍去当時之御用繁之御場合ニテ病院御取立御行届ニモ相成不申候節ハ当病院ヨリ此迄通り診察手当之義可仕候召一藩ニ付屯人宛看病人世話イタシテ当表迄御残シ置被下度左候ハバ只今之所ヨリ行届キ様相成候方モ被存候召此段諸藩迄御布告被下度奉存候、前件之次第得卜御談之上御差図被下度□存候

本文看病人之義参謀ニ達置候召諸藩迄相達シ差置候様可被致候

病院小名浜ヨリ平迄昨日引移リニ相成候処□諸藩病人迄モ世話仕候テ引移リニハ相成候共小名浜ニテモ人馬支之彼是ニテ内外打混シ甚タニ相成候、寛齋初メ付属医師ニ会計方等モ奔走仕候テモ行届不申右ニ付手負人初病人手当尚之義モ自然卜疎遠ニ相成事故以後病院引移シ之節ハ人馬方出立ヨリ着迄之処御付被下度此段御相談シ可上候

各藩ヨリ看病人屯人ツツ付添上ハ右看病人ニテ世話可為致候事

寛齋は、重症者が増え入院患者を断らなければならない状況であり、諸藩でも重体の者が多く治療に難義していることを訴え、別に病院を設立することの必要性を提言している。小名浜から平までの移転では各藩の重症者も引き取り、付属医も会計方も奔走したが、運

び込まれる負傷兵に十分な治療は行えない状況が続く。寛斎は、收容能力を超えた入院患者に治療も充分でずに不本意であること、各藩から一人の看病人を付き添わせて世話をさせて欲しいことを参謀に謀り、その通達がなされたことが書かれている。^{2,9}

八月一九日の記録には、負傷兵は一五〇名に達したと共に、同日千両の費用を受領した事が記録されているが、二一日にはさらに二、三千両の送金を願っており、病院運営資金に困窮していたことの記録が随所に見られる。^{3,0} 佐久間によると、入院患者の費用は一日一両と決められており、これを下廻ることは許されず、入院患者の増加に費用は嵩み、その費用調達のため患者以外の者は食事をきりつめたことも書かれている。^{3,1}

後年、第二次世界大戦当時には、兵站病院は千名の患者を收容し得る要員と材料を有するまでに整備が進められるが、戊辰戦争当時は使用する薬品類、繃帯材料類、蒲団などのリネン類、食事の材料も、寛斎を含めた会計方が現地調達しなければならず、寛斎の負担は大きく、寛斎は病院会計監査官を一名増やし、自分は治療に専念したい旨の要望を参謀木梨にも出していた。

出張病院の構成は、征討総督―参謀―下参謀の下に、各藩戦斗部隊・機械方・会計方があり、出張病院は会計方に所属した。^{3,2} そのため、出張病院に対する指示、病院から上層部への伺いは、会計方の責任者を通じて行なわれた。負傷兵が増加することは、藩から差し出された看病人だけでは、とうてい負傷兵の世話は賄えなかったこと、藩にとつても負傷兵がでることは兵力の減退につながり、結果、藩から看病人を差し出すことも困難な状況が生まれ、その状況改善と病院運営のためには、会計方が地元のを雇い入れる策をとったであろうことは、容易に推察できる。例えば、九月一八日の日記には、「平潟、平病院開設の際負傷者の看病にあつた糖屋平兵衛外四人に格別の礼金を渡す」^{3,3}とあり、地元の者に看病を依頼していたことが記録されている。

八月一日は木梨清一郎参謀からは、三春と相馬の出兵に際し、「双方共遠隔地二相成ル事」として、手負人の手当が厚く行き届くように諸事総て寛斎に委任するとの指示がなされていた。^{3,4} 七日には、浪江戦争の負傷兵二三名、九日には同じく浪江戦争における長井藩の負傷兵三名、一〇日には二本松攻撃の負傷兵一八名が運び込まれ、八月一九日には、各藩から運び込まれた入院患者数は一五〇名まで増える。^{3,5}

このような状況に、八月一三日には相馬病院を開設し、一日の駒ヶ峰戦争の負傷兵らが運び込まれた。相馬病院に收容された負傷兵は、東京へ移送される途中、一時平の出張病院へ入院しており（一〇月五日津藩負傷兵二〇名、七日に久留米藩負傷兵七名）、出張病院は後方に位置する兵站病院^{3,6}の役割を担うことになる。

戦争は寛斎が軍医長を務めていた平潟口方面だけでなく、佐藤進が軍医長を務めた白河口でも激戦は繰り返され、白河城における戦いは七回に及び、七月二九日に奥羽追討白河口総督府隊が二本松城を陥落させる。山道軍は三春町字荒町の寺院竜穩院に「三春病院」を設けて野戦病院とし、二本松の負傷兵、会津戦争での負傷兵を收容、治療を行った。この三春病院では、赤地に黒く菊花徽紋と病院の二字を描いた旗が立てられており、「天朝病

院」とも呼ばれた³⁷。この三春病院には、会津で銃創を負った大山弥助も入院した。

薩摩砲兵隊を指揮していた大山は、八月二三日右股を内側から貫通する負傷を負い、一端後方の病院に入ったのち、翌二四日に三春病院に後送された。移送は、戸板に乗せられ、十六橋、猪苗代、保成峠と、進撃の逆を辿り、二日間かかって二六日に三春病院に到着した。大山は入院治療後、九月二一日に退院し、一〇月六日には千住宿に帰京した³⁸。

二本松の負傷兵や会津戦争での負傷兵は三春病院で治療を受けたが、患者は大山同様、戸板などに乗せられて運ばれるが、その移送には小荷駄の人馬方などがあつた³⁹。三春病院の負傷兵は、応急処置を受けたのち、重症者は旧陸羽街道を堀越に陸送し、そこから那珂川を舟下し、横浜へ移送された⁴⁰。

九月四日、大村益次郎より奥羽出張病院を「大病院」（但し、東京の大病院と区別するため本稿では以下も出張病院と記す）と称することの連絡が入り、出張病院は兵站病院としての機能へと変わる。

九月二二日、会津藩の降伏の報せは一〇月四日に病院へもたらされ、回復した者は順次退院させると同時に、直ちに引き揚げ準備が開始された。すでに八月二一日には、薩摩医官中島管治が付き添い、薩摩藩六番隊の二本松攻撃の負傷兵五名を、九月二五日には薩摩藩九番隊負傷者三名を、ともに陸送で横浜に後送していた。引揚に際し一〇月六日、総督府からは「官兵ノ創痍者ヲ横浜ニ護送ス」との令が出され、会計局へは左記の通達がなされた⁴¹。

一金一両、但、病人一人三付、一日分御定、

外ニ看病人、重病へハ一人ツツ、軽キ病人ニハ三人二人ノ割、

右、今度中村、平両所病院病人、陸通り横浜迄被差送候條、病院取締方相談之上、

病人数ニ応シ、夫々手当金可被相渡之事。

この通達に、看病人一名を重症者一名に付けることが総督府の文章に登場したことは、「病院で看病を担当する看病人」という役割意外に、「負傷兵の後方病院への搬送時に重症者に付き添い看護できる者としての看病人」が、配置人数と共に総督府通達に定められたのであり、軍陣医学の発展上着目すべき史実である。

一〇月五日には相馬病院から津藩の負傷兵二〇名、七日には久留米藩の負傷兵七名が東京へ帰還する途中、出張病院へ一時入院した後、兵站病院へと移送されている。寛齋は一〇月一日、病院引揚について参謀と協議を開始し、一六日には東京に帰るまでの警護体制のほか、引揚げ方法について、木梨参謀に書面を提出する。

その中で寛齋は、「引揚ノ際ハ、二十名グライヲ一組トシテ、四組グライニワケ、各組三二人宛ノ医官ヲ付添トシテ、紋付提灯及ビ小旗ヲ目印ニ使用ス」⁴² という計画を立てている。東京への引揚は、入院患者六〇名を、一番立・二番立・三番立・四番立の四組に分けて一〇月二六日・二七日・二八日の三日間で行い、最後の四番立に寛齋も乗船し、江戸

には一月八日までに全員帰京し、患者は大病院に收容された(表2参照)。

奥羽出張病院の東京引揚では、寛齋は通達に従い負傷兵約二〇名をひと組として、負傷者の重症に合わせて看病人を配属しており、四回の移送で合計五二名の看病人(男三一名、女二一名)が東京への移送に付き添っている。人足も多数乗船しているが、重症者は戸板などで移送するため、人足の人数は重症患者一名に四名、軽症患者一名に人足二名としたのか、または軽症患者では、看病人一名に人足六名として確保したのかは不明である。

看病人を確保するにあたっては、日記に「看病人世話方ノ才礼」と書かれた箇所が確認できることから、その募集や取締は、看病人世話役に依頼していたと考えられる⁴³。さらに一〇月二四日の記録には、「入院多勢の際看病に協力した二五人に謝礼金を渡す」⁴⁴とある。その氏名には、お中・おせい・おまつ・おてつなど女性の名前もあり、町医者や村落の男女を看護や病院の雑役としてあたらせ、各自に「金二分」を渡している。

寛齋が平潟口討伐の軍医として従軍したことから、奥羽出張病院で初めて野戦病院が登場し、「病院」という名称もその後定着した⁴⁵。戦火が激しさを増す中、出張病院は前線とともに移動する野戦病院から兵站病院へと役割は移行し、さらに適切で十分な治療のためには、東京の大病院へ後送するという医療体系が確立されていた。

出張病院が、野戦病院―兵站病院―大病院という戦場での医療体系の確立に大きな役割を果たしたことは特筆すべきことである。さらに特記すべきは、東京の大病院への後送に、付属医・看病人・人足を構成人員とする、いわゆる「衛生隊」をわが国ではじめて編成し、実行、その達成を見たことであった。

すでに西欧フランスでは、ナポレオンに指揮された一七九七年のイタリア戦線において、三個の病院隊で一個移動野戦隊が編成され、外科処置の補助者や看護の担当者が役割として決められていた。さらにフランス革命からナポレオン時代にかけて、フランス陸軍の軍医を務めたドミニク・ジャン・ラレイ(Dominique Jean Larrey)⁴⁶によって、戦場医療の大きな改革がなされていた。

ラレイは、フランス革命において衛生隊を組織し、荷馬車を改良した患者輸送専用車(救急車)を開発し、戦場における組織的な治療・後送体系を創った⁴⁷。衛生隊を編成したことで負傷兵は早く後方へ集められ、高度な治療を受けることが可能となり、将兵の志気も向上した。これらフランスの軍事状況を実質的最高指揮官であった大村益次郎は、フランス兵制を学ぶ中で、すでに知り得た情報であったと考えられる。

先行研究では、従来「女性」という「性」に着目されてきたが、本稿において、寛齋の出張病院では後送にあたり「看病人」を採用し、さらに患者の重症度に応じた配属がなされていたことが確認できた。これは「戦時医療機関の構成要員に看病人が必要であった」と、関寛齋および総督府が認識していた結果であった。

関寛齋によって運営された奥羽出張病院では、横浜及び東京大病院への移送に際し、看病人を患者の重症度に応じて配置し、医師―看病人―人足による医療チームを構成し、それがわが国のはじめての衛生隊編成であったことに意義を見出すことができる。寛齋が実

施した出張病院から東京大病院への後送が、「わが国の衛生隊の始まりであった」とする先行研究は、官見の限り見出すことはできない。それは同時に、戦時医療では西洋外科医の育成とともに、重症患者の看護ができる看病人の必要性が初めて認識されたことでもあった。つまり、本章の分析視点の一つでもあった、「洗濯・飯炊きといった女性の仕事としての看護」から、「外科的治療を受けた患者の回復を支える看護人」へと、看護の質が変化したのであり、看護人に求められる能力も医師の補助者へと移行したことを意味した。

また、奥羽出張病院の開設・運営は、各藩毎に病院を持つていた体制から、政府の病院として運用することになった初めての野戦病院であった。政府としては兵士の治療には充分な運用資金を調達する方針を取るが、負傷兵の増大は莫大な病院運営資金を必要とした。その費用には、医療材料だけでなく、布団などの日常品をはじめ、食費、人件費も含まれるのであり、費用の調達を含め、野戦病院の運営に関して多くの問題提起を残すこととなった。

三 「動病院」と「不動病院」

正月九日、北陸道鎮撫総督（先鋒総督）として高倉永祐が任ぜられ、副総督四条隆平、安芸藩士小林柔吉、船越洋之助が追従し、安芸藩兵二五〇名を率いて越後高田に到着したのは三月一五日であった。政府軍は高田から北上して長岡を挟撃し、新潟を占領して会津の左翼を包囲するという作戦を立て、四月一七日には参謀として黒田了介、山県狂介を北越に派遣した。越後口・北越軍の軍医長を赤川玄操とし、軍陣外科医である越前の橋本兄弟を加えた医療体制がとられた。

橋本兄弟とは、第四代陸軍軍医総監となる橋本綱常と、兄越前藩医橋本綱維である。綱常は、一八四五（弘化二）年福井越前藩医の子として生まれた。長兄左内⁴⁸は、藩主松平慶永（春獄）の側近であったが、井伊大老による安政の大獄で処刑されている。次兄の綱維は江戸で航海術やオランダ語を学んでいたが、兄左内死後藩に帰り、医学を修め医業に従事した。一八六四（元治元）年長崎でボードインに師事し、翌六五年に帰藩し、奥医師となる。綱維は再度長崎に渡りマンسفエルト (Mansvelt, Constant Georgevan)⁴⁹に師事するが、戊辰戦争の勃発により、越前藩医として弟綱常と従軍した。維新後は陸軍に出仕し、一八七七年には陸軍一等軍医正まで進むが、翌七八年三八歳で病氣のため死去した⁵⁰。

綱常は一七歳の時に長崎に遊学し、松本良順、ボードウィンに西洋医学を学び、綱常も関寛斎同様、長崎でポンペから西洋医学教育を受け、ポンペが一八六二年一月に帰国する際に、修了証書を授与された一人であった⁵¹。

越後口の戦いの初期の治療態勢は、海道軍同様、各藩毎に従軍した医師によって行われた。しかし、西洋外科技術を身につけた藩医がほとんどいなかったことから、各藩での治療は仮繃帯所の役割でしかなかった。さらに藩同士の横の連絡、協力体制も不十分であり、

各藩では十分な負傷兵治療、特に銃創治療はできない状況にあった。

四月二七日の柏崎郊外の鯨波の戦いでは、多くの負傷兵がでる。政府軍では負傷兵の多さに、参謀の山県が戦傷治療のできる有能な医員の急遽派遣を、長州藩執政広沢平助に要望書を送ったことは前述したとおりである。鯨波の負傷兵は、三月一五日に北陸道鎮撫総督が到着すると直ちに設けられた高田寺町浄土宗来迎寺内の高田軍病院に収容された。政府軍はこの高田軍病院を「根病院」とし、鯨波の戦いの負傷兵三九名（長州藩七名、高田藩八名、加賀藩二四名）を収容した⁵²。

「根病院」とは、現在の兵站病院に匹敵する役割を担うものであり、高田軍病院は政府軍が越後に設けた最初の兵站病院であった。兵站病院とは、後送される患者を収容・治療するために軍作戦地域に開設され、患者を収容し得る要員と材料を有し、戦地における治療の最後を担当する重要な役割をもつものである⁵³。高田病院は一定の呼称がなく、本病院、不動病院、根病院、根拠病院等と称された⁵⁴。

さらに柏崎の守備桑名藩が敗退した直後には、柏崎旭町一の聞光寺内に病院を設置し、仮繃帯所としての役割を担った。しかし、五月二日長岡藩の河井継之助と土佐藩岩村精一郎の慈眼寺会談が決裂し、中岡戦争が始まると、越後の地は壮絶な戦地となる。五月九日の長岡城の落城から七月二五日の長岡奪還、二九日の再落城と約二ヶ月に及ぶ持久戦は、信濃川を隔てた砲撃のしあいに、政府軍兵も奥羽列藩同盟兵士の夥しい死傷兵を生み、山野を焦土と化した。柏崎軍病院は、根病院乃至不動病院としての役割へと移行し、多くの負傷兵を収容することになる⁵⁵。

軍医として従軍していた橋本綱常は、予想を超える戦傷者が続々と運び込まれる状況に、柏崎軍病院を「不動病院」とし、他を「動病院」とすることを兄綱維に提案した⁵⁶。綱常の提案した負傷兵治療の体系とは、戦地での仮繃帯所となる「動病院」は隊と共に進退し、後方の病院は「不動病院」として一定の地に留まり、治療にあたる方法であった。「動病院」はいわゆる救護所、仮繃帯所であり、「不動病院」は野戦病院にあたるものであった⁵⁷。

提案の結果、動病院の編成は、各藩の兵一隊ごとに医師二名と薬剤方又は調合方を附し、前線に近い寺院、旧家等の大邸宅を利用して傷病者の応急処置を行うこととなった。高田軍病院以外の方の病院が動病院としての機能を有することになる。北越戦争を通じて、五泉、三条、見附、村上、新発田、出雲崎、寺泊、長岡、与板、浦佐、小千谷などに、動病院が設けられた（図2参照）。

綱常自身、専ら越前藩の動病院医師として治療に従事し、前線と後方の軍病院の体系を整えて治療にあたり、さらに治療の必要な者は、蓆を利用した担架によって後送した。そして戦乱後期戦火の激しさが増すと、前線の「動病院」と後方の「不動病院」をつなぐ「中間病院」を設け、関原軍病院と新潟軍病院がその役割を担った。

新潟軍病院が設立されると、薩摩藩医山崎良泰、佐竹立庵の二名が入局し、薩摩藩、長州藩、越前藩、高鍋藩、加州藩の五藩の各藩医、さらに越後高田藩の医師も加わり、軍病院の診療が行われた。「中間病院」となった新潟軍病院では、八月二二日から一〇月一二

日までの間に治療をうけた者は、戦傷患者四六〇名、戦病患者二三名にのぼった⁵⁸。

当時の軍事医療体制は、参戦各藩が従軍させた藩医による前線での治療、次に軽症者は戸板や竹籠で後方病院へ移送され、さらに治療を要する場合は船で横浜病院に送られた。西岡香織はこの北越戦争における体制を、「近代的野戦衛生機関の隊繃帶所↓野戦病院↓野戦予備病院↓兵站病院・衛戍病院に似た、出征軍衛生機関業務系統が形成されたことになる」と意義付けている⁵⁹。

総督府においても、長岡方面の戦闘を境とする負傷者の続出に、すでに綱常の越前藩が実践していた医療体系、つまり前線病院としての動病院と、本病院としての不動病院の二者を設ける体系への移行を決める。八月十八日、総督府から本病院を高田に設けて本病院とし、長州藩医赤川玄櫟を頭取として、外国医師を雇って官軍の負傷兵に治療にあたること、その病院を柏崎に移すことの指示が出される⁶⁰。さらに同日、各藩には左記の布達が出された⁶¹。

賊軍矢石之際被創病疴之輩其藩々ニ於テ病院取建手厚取扱候儀ニハ候得共、为国家奮戦勇闘罷在候段深御焦慮被遊、寸刻之苦惱ヲモ被為厭候ニ付テハ、近頃西洋治療ノ道相聞ケ奇療顯然病院立法甚懇篤ニ相聞候間、此度洋医御雇ニ相成、其外医官被差置官軍病院根拠ヲ高田表ニ被居、出張先々分院ヨリ大患ナル者ハ根院ニ差送り厚御世話被為在候思召ニ候間、各藩病医合一致シ熟談ヲ遂ケ懇切ニ治療可致旨被仰出候間各深密ノ御趣意洞徹可致様可相心得候事

総督府はこの布達により、西洋医を雇い高田病院を本病院とするので、重症患者は高田病院へ送り、手厚い治療を受けるようにとの方針を各藩にも周知させ、さらに各藩医も協力して懇切に治療をするようにとの指示を与えたのであった。この頃はまだ前線にあった仮繃帶所としての病院（分院）が、手に負えない負傷兵を後送するという漠然とした対処であったものを、政府が西洋医であるウイリスを越後口に差し向けたことで、重症者を根病院に送るという態勢が確立したのであった⁶²。

九月一日、外科医ウイリスは高田に到着し、約一週間逗留した後、一〇日前後に高田を出発し、直江津経由で柏崎に到着する。病院も高田軍病院を柏崎に移動し、本病院（不動病院・根病院）としての柏崎軍病院が誕生した。九月九日には、頭取となった赤川が御沙汰書を提出し、各藩医一八名と五名の調合方に柏崎軍病院での勤務を命じる⁶³。この布達の意図は、高田に本病院を設立したことで、治療体系の組織化を図る事であり、調合方も含めることで、医療陣薬剤補給に対して万全の施策がとれることになった⁶⁴。

柏崎軍病院は、頭取赤川の指揮の下、各藩の医師が出仕して治療が行われるという、組織力による治療体系が誕生し、そこでウイリスによる治療が行われたのであった。ウイリスは柏崎軍病院に一〇日内外滞在したのち、出雲崎経由で新発田軍病院へと向かい、動病院でも治療を続けた。

すでに八月初めから中間病院としての役割を担っていた新潟病院では、前述したように薩摩・長州・越前・真鍋・加州・越後高田藩ら六藩の藩医らは、病院長となった長州藩原田英伯が診療統率の主導をとり、軍病院勤務医師団としての組織的な治療を展開していた。その新潟軍病院は、新発田軍病院や五泉口軍病院の中間病院としての役割を果たし、四六〇名の傷病兵の治療に、各藩医師三一名の他、看病人三二一名が戦傷者の看護にあたった⁶⁵。さらに患者移送に動員された日雇者は一、一六三名であり、中間病院としての新潟病院は、その運営に莫大な人員と膨大な運営資金を必要とした⁶⁶。

各藩の帰郷は、一〇月九日に始まるが、傷病者の輸送に関して御本営（越後在陣参謀）から一二日に達しが出される⁶⁷。

怪我人引揚ニ付附属ノ医師共道中休泊雑用並人足員数等定

怪我人一人二付 宿駕籠一挺 布団二枚宛 駕籠人足二人 物持人足一人

医師一人二付 薬籠持人足二人 両掛人足二人

休泊雑用共 主人一人一日金二分宛 家来一人一日金一分宛

人足費 一里二付錢二百五十文宛

関寛斎が頭取を務めた奥羽出張病院では、東京大病院への移送に、総督府から看病人の配属人数も指定されていたが、この「越後在陣参謀」から出された布告には、看病人が付くことは書かれていない。越後口への布達に看病人が含まれていなかったその理由は、出された達しが総督府でなく本営からであったという違いによるものなのか、または橋本をはじめ軍医らの看病人の必要性に対する認識の違いに由るものかは、不明である。

東京大病院へ移送するにあたっては、まず各不動病院から柏崎軍病院に、一旦傷病者をすべて収容する策がとられた。収容後に選別を行い、輸送方法を決定した。また、九月二三日に会津若松の日新館内の戦時病院の立ち退きを命じていたが、一〇月一日に、旧幕府軍の敵軍の負傷者も官軍病院に収容する許可が出される⁶⁸。

越後口の軍事医療体系がどのようなものであったのかを^{図2}を参照されたい。浦佐・小千谷・長岡・見附・与板・三条に設けられた動病院の重症者は、中間病院となった関原軍病院に後送され、新発田・村上・五泉口の動病院の重症者は、中間病院の新潟癌病院へ後送、さらに継続した治療を要する者を柏崎軍病院へ後送し、そこから東京または横浜に移送するという体系が見事に確立していたことが確認できる。

越後口における軍事医療体系の確立は、わが国ではじめて出征軍衛生機関業務系統を形成したことに、大きな意義を見出す事ができる。さらに、各々版籍の異なる藩医らが組織的に力を合わせて柏崎軍病院で治療が行われたことも、軍陣医療の進歩であり、その治療過程を、出仕した地方医師らが体験する機会になったことの効果もあげることができる。

四 海外事情探索「病院看病男」

神谷は、会津攻めの主要方面各戦線における幹部軍医の配置には、練達した軍陣外科医を配置し、動病院（救護所）、不動病院（野戦病院）のシステムをもつ「病院」なる軍医部編成を、短時日のあいだに作り上げることができたその大きな要因に、大村益次郎の手腕を高く評価している^{6,9}。

すでに徳川幕府では、一八六七年一月に第一次フランス顧問団を招聘しており^{7,0}、兵は庶民階級から募集し、士官には旗本出身の秀才があてられ（幕府歩兵では士官のことを差図役と呼んだ）、幕府歩兵はフランス式で教練されていた。

徳川幕府は幕末、数回にわたり使節団を派遣し^{7,1}、随行した使節団員により多くの情報もたらされていた。特に、第二回使節団となる一八六一年一二月に竹内下野守保徳を正使とする総勢三八名の文久遣欧使節団は、修好通商条約（第三条）に規定された江戸・大阪・兵庫・新潟の開市開港の延期交渉と併行して、イギリス公使ラザーフォード・オールコック（Alcock, Sir Rutherford）^{7,2}の勧めにより、「ヨーロッパ事情探索」を第二の訓令とした^{7,3}。

それはヨーロッパ締盟国であるフランス・イギリス・オランダ・プロシア・ロシア・ポルトガルの六カ国を訪問し、夷情探索をできるだけ行い、見聞を国政の改革、幕府体制の補強、外交交渉に活用しようという目的に基づいたものであった。事情探索の内容は、建国の法、政体、風俗、城郭、砲台、軍制、産業、貿易、軍事産業、貨幣鑄造法、産業用機械の製作、学制、病院と、多岐に渡るものであった。そのため語学堪能な松木弘安、福沢諭吉・箕作秋坪^{7,4}・福地源一郎^{7,5}・立広作^{7,6}・太田源三郎^{7,7}ら六名を翻訳方および通詞として参加させた。

松木・箕作・福沢は、病院および学校を訪問し、見聞した事柄を宿舎で確認し合って記録、最終的に報告書として「大冊」にまとめた^{7,8}。調査領域ごとにまとめられた報告書は、組頭柴田剛中^{7,9}が帰国後に福地源一郎に編集させた。この報告書を公的文書（報告書）として勘定役目付福田作太郎が筆記しまとめたものに「福田作太郎筆記」^{8,0}がある。

福田作太郎筆記の中で「英国探索」は分量が最も多く、松沢弘陽校注のもと、全文が『西洋見聞集』に掲載されており、その報告内容を知ることが出来る^{8,1}。「英国探索は」さらに四〇の題目に分類されて報告され、そのひとつ「軍制並随意の兵の事」には、「前書随意の兵卒戦争にて疵請け候節は、政府にて厚く療治手当向等いたし、当人の出費は聊も相懸不申由」^{8,2}と、書かれている。前述したように、奥羽出張病院では入院患者の費用が一日一両と決められていたことを考えると、政府はイギリス同様、負傷兵の治療を負う方針を取っていたと判断することができる。

また、勘定組頭支配普請役益頭駿次郎^{8,3}は、医師高橋祐啓^{8,4}や川崎道民^{8,5}らとフランス「フリボワジュール病院」や陸軍病院「ヴァル・ドウ・グラーヌ病院」を訪ねており^{8,6}、

「欧行記」⁸⁷にその見聞した内容が書かれている(資料1参照)。「欧行記」の三月一九日の記録には、「病院看病男」のことが書かれている。左記のその部分を抜粋して紹介する。⁸⁸

病院看病男は一体仏国民間の若き男百人有之候へは五十人は兵隊にいたし候制度に有之候処右兵隊の内にて病院に入り看病を望む□時は七ヶ年の期を限り召使ひ猶また兵卒に致し候由尤右七ヶ年中には大略医師の筋を心得候様相成相應出来いたし候ものはエルス、フシユルと相唱へ候て半は医師半は士官にて兵卒の中に加り戦争等の節疵受候ものの療治等為致候趣○別にバレイス中にストラジビュルグと相唱へ候陸軍の為にのみ設置候病院有之候○右病院は前病院に比し候ては一層後代にて病症千八百床程も有之候趣右は全く政府入費にて陸軍の上等士官等の入り候病室は清潔にして手広に作り恰も旅宿に居ると同様有之候由右陸軍病院附頭取たる医師は医学校の中□療養學術共相勝れ候ものを選み六七年中半者ハレイス平人の病院に入り修行為致半はアラビヤ邊へ差遣し小戦争の節士卒の疵傷を負ひ候ものを療治致し実地の修行相熟し候上にてミレタイレと唱へ候医師頭に取立候趣右医師の位階は陸軍にて申候得はゼネラルの官に相適り候位階にて医師の棟梁に有之一ヶ年の給分二千トルラル程に有之候由

「病院看病男」は、兵隊に入隊したのち、病院での看病を希望した兵士であるということである。フランスでは若い男子百人のうち五〇名は兵隊に入隊する制度があり、七年間を期限として「病院看病男」として仕えることができ、その七年間に医師としての技術を心得、医師にふさわしい者は士官候補生となり、半数は医師へ、半数は士官として兵卒に加わり、戦争で負傷した者の治療に当るといふシステムとなっていた。

益頭らが見学した「ヴァル・ドウ・グラーヌ病院」は、修道院として始まり、フランス革命後に病院として使用されていた。さらにその後、医学教育機関としての役割も担い、一七九三年から陸軍病院として使用され、二年後の九五年から患者受け入れを始めた病院であった。⁸⁹

使節団派遣の目的は、ヨーロッパで積極的に事情検索し、知り得たことを参考にして、国政の改革に活かそうとすることであったが、近代史の中の評価では、文久遣欧使節団の調査結果は、幕末の動乱の中で政策に活かされることもなく埋もれてしまったというのが一般的な評価とされてきた。⁹⁰

神谷は大村が短時日のあいだに軍医部編成を作りあげた手腕を鮮やかであったとしているが、大村がこれら使節団随員の報告を参考にしたことを裏付ける資料は、管見の限り見出すことはできず、今後の研究課題といえる。

橋本綱常の軍事医療体系の確立は、戊辰戦争で多くの負傷兵を生んだものの、わが国の軍陣医療を大きく発展させたと捉えて良いであろう。特に、橋本綱常は後年、陸軍で衛生隊編成に深く関わり、初代日本赤十字社の病院長にもなる人物であり、その業績には戊辰戦争の教訓が生かされることになる。

また佐久間は、橋本が確立した軍病院勤務医師団の組織的な治療の展開を評価し、組織力で治療されていく疾病処理の形態に対する魅力は、明治になり各地に設立される私立病院設立の大きな原動力となったと指摘している^{9,1)}。そしてその「病院」と云う組織においては「看病人」というものの存在を、地方の漢方医らが知る機会となり、明治における職業看護婦の萌芽につながることも付け加えたい。

註

¹ 佐々木克『戊辰戦争―敗者の明治維新』（中公新書、二〇一三年三三版）四一―四二頁。

² 佐藤進（一八四五―一九二二）常陸国の酒造業高和家の長男として生まれ、佐倉藩医佐藤尚中の養子となり医師を目指す。戊辰戦争では六月二十四日に官軍負傷兵の手当てのために奥州白河へ派遣の命が大総督から出され、薩摩兵の治療にあたった。その後一八六九年にはドイツに留学し、ベルリン大学で医学博士をとる。帰国後は佐藤尚中が一八七五年四月に開設した順天堂大学で外科の講義を担当する。西南戦争では大阪城内の陸軍病院長として赴任。八二年に尚中死去後は、順天堂医院の院長に就任。

³ 橋本綱常（一八四五―一九〇九）越前福井藩累代藩医橋本長綱の三男。長兄は橋本佐内。次兄は軍医綱維。一八六二年には長崎でポンペに、一八六四年にはボードウィンに西洋医学を学ぶ。一八七〇年には大阪軍事病院医官、一九七二年七月には松本良順の推薦により陸軍省から医学研究のためのドイツ留学を命ぜられ第一回留学を経験、一八七七年に帰国。翌年東京大学医科大学教授。一八八四年大山巖陸軍卿の欧州視察に随行、ジュネーブの万国赤十字条約加盟に貢献した。のちに陸軍軍医総監、医務局長を経て、一八八七年初代日本赤十字社病院院長に就任。

⁴ 太政官編『復古記』第二編（内外書籍、一九二九年）一五三頁。

⁵ 太政官編『復古記』第二編一五四頁。

⁶ 太政官編『復古記』第二編一五五頁。

⁷ 齊藤省三（白里研究グループ）編集『寛斉日記―奥羽出張病院日記を中心として―』（一九八二年、陸別町教育委員会）三三―三四頁。奥羽出張病院機構図には、各藩戦斗部隊（復古記調）として佐土原藩三小隊、因幡藩一七小隊一八三名、長門藩四中隊、岩国藩一中隊、徴兵隊一大隊、中村藩二九小隊、大洲藩二小隊他、薩摩藩一、四一三名、大村藩一四三名、備前藩六六九名、柳川藩三三六名、笠間藩三二二名、郡山藩一九〇名、安芸藩三五八名、久留米藩一、〇二一名、筑前藩七七三名、津藩八三〇名、肥後藩九五〇名、館林藩二二〇名、佐倉藩二八五名、御親兵二五二名、磐城平藩五〇名の計一大隊、五一小隊、四砲隊、七、九九五名が参加した。尚、先行研究である佐久間『奥羽周長病院日記』の研究（承前）二三七〇頁には、奥羽討伐平潟口軍には薩摩藩をはじめ一三藩の藩兵約六、〇〇〇名とあるが、本稿は齊藤編（白里研究グループ）編集『寛斉日記―奥羽出張病院日記を中心として―』三三―三四頁の奥羽出張病院機構図を参考としている。

⁸ 『復古記』第十三分冊、五六三―五六五頁。死亡一三六名の内訳は、大隊長一名、隊長以下士官一二名、兵隊一〇九名、人足一四名であった。傷者六九九名の内訳は、大隊長六（三）、隊長以下士官五八（九）名、兵隊五九一（八二）名、人足四四（三）名であった。尚、（一）内は傷者のうちの死亡者数である。

⁹ 神谷『日本近代医学のあけぼの』二九―三〇頁。

¹⁰ 齊藤編『寛斉日記』二頁。

¹₁ 齊藤編『寛斉日記』一一頁。

¹₂ 齊藤編『寛斉日記』一頁。奥羽出張病院日記第一卷（六月八日）五十六枚綴、負傷者氏名六十一枚綴、第二卷（七月七日）七十八枚、各藩入院姓名簿二十八枚綴、第三卷（八月十六日）四十七枚綴、戦死傷調書六十四枚綴、第四卷（九月十三日）五十七枚綴、処刑録六十一枚綴、第五卷（十月十一日）十二月十五日 九十四枚綴、外院処刑録・平病院八十七枚綴

¹₃ 本稿は、陸別町教育委員会が発行した、齊藤『寛斉日記―奥羽出張病院日記を中心として―』（一九八二年、陸別町教育委員会）を参照としている。原本は虫が入り込んで判読しかねる場所も多いものを、郷土史家を中心として「白里研究グループ」により日記五卷までの概要がまとめられたものである。また、「奥羽出張病院日記」は日本医史学会・国立歴史民俗博物館編『佐倉順天堂―近代医学の発祥地―』（日本医史学会・佐倉市教育委員会、二〇一二年、『翻刻史料編』五八―五〇頁にも掲載されており、判読の研究も進んだと判断し、日本医史学会編も参考としている。

¹₄ 佐々木『戊辰戦争』一四一―一四二頁。

¹₅ 齊藤編『寛斉日記』二―三頁。

¹₆ 齊藤編『寛斉日記』四頁。「参謀衆と相談、当平潟住並川越藩医師共付属医として隔日出勤とする」とある。佐久間は『奥羽出張病院日記』の研究―戊辰戦争中の一軍事病院の実態―「三一九八頁で「付属医」と書いているが、寛斉日記には、「付属医」とあるため、本稿は「付属医」とした。

¹₇ 齊藤編『寛斉日記』三三―三四頁。

¹₈ 表1は、齊藤編『寛斉日記』三三―三四頁を主に参考資料とし、二五名の氏名もそれに倣っている。佐久間『奥羽出張病院日記』の研究―戊辰戦争中の一軍事病院の実態―「三一九八頁、第二図「奥羽出張病院附属医師」には関寛斎の名があり、勝浦静馬の名は記載されていない。八月二日より付属医となった者に「桂静馬」がおり、記載ミスによる同一人物として判断して、佐久間は勝浦静馬の名を名簿から削除したのかは不明。『寛斉日記』の一〇月一六日の記録には「勝浦静馬」の氏名が確認できる。

¹₉ 齊藤編『寛斉日記』三三―三四頁。

²₀ 齊藤編『寛斉日記』一五頁。

²₁ 佐久間『奥羽出張病院日記』の研究（承前）「三三七二頁、第四表を参照。

²₂ 日本医史学会・国立歴史民俗博物館編『佐倉順天堂』Ⅱ・翻刻史料編、五四頁。

²₃ 佐久間『奥羽出張病院日記』の研究―戊辰戦争中の一軍事病院の実態―「三一九八―三一九九頁。

²₄ 齊藤編『寛斉日記』五頁。「三邦丸」で後送された負傷兵は、石黒幸次郎（尾州大砲対隊）・岡竹助蔵（尾州大砲対隊）・堀孫六（薩州一二番隊）・碓山真十郎（薩州一二番隊）・土橋真一（大村藩小銃隊）、備前藩負傷兵の水野三郎兵衛・西浦須之助（復古記には久次郎）・村幸之進・余嶋平三郎（復古記には余三郎）・小林助次郎・赤木佐衛門・津毛勇次（復古記には勇治）・柴田佐之吉・横田藤左衛門・伊東貞次郎・岩知道芳吉、鉄砲師石井惣七の一七名。

²₅ 齊藤編『寛斉日記』一一頁。

²₆ 七月二四日の日記には、「右付添医官薩州佐多泰元」と書かれており、佐久間の「奥羽出張病院日記」の研究（承前）「三三七三頁、第五表にも付添医欄には佐多泰元が書かれている。しかし、出発は都合により二五日に延期され、二五日の日記に「小松立介

付属」とあり、佐久間の研究でも、小松は七月二五日に採用され、東京引揚解散までとある。

²⁷ 斉藤編『寛斉日記』一一頁。

²⁸ 斉藤編『寛斉日記』一二頁。

²⁹ 斉藤編『寛斉日記』一三一―一四頁。

³⁰ 斉藤編『寛斉日記』一七一―一八頁。

³¹ 佐久間『奥羽出張病院日記』の研究（承前）三三七―三七頁。

³² 佐久間『奥羽出張病院日記』の研究―戊辰戦争中の一軍事病院の実態―」三一九―七頁。

³³ 斉藤編『寛斉日記』二二頁。

³⁴ 斉藤編『寛斉日記』一三頁。

³⁵ 斉藤編『寛斉日記』一六―一八頁。

³⁶ 陸上自衛隊衛生学校修親会編『陸軍衛生制度史（昭和篇）』八八頁には兵团病院は、明治四年、大阪、東北（仙台）鎮西（熊本）の各鎮台に創設された。その元祖は一八七〇年大阪に設置された軍事病院である。

³⁷ 佐藤進が掲げた病院旗は、日本医学学会・国立歴史民俗博物館編『佐倉順天堂』三八頁に掲載されている。二〇一四年四月に開館した順天堂大学「日本医学教育歴史館」にも病院旗は展示されている。

³⁸ 松村久『元帥公爵大山巖』（マツノ書店、二〇一四年）。二七九―二八三頁。三春病院は三春町字荒町にある龍穩院を総督府直轄の病院ではなく、薩摩藩の病院に充てていた。本堂には中央正面の佛壇を囲んで一室あり、其の畳数は一五三枚に算することが出来、相当数の負傷兵の収容が可能であった。

³⁹ 『歴史読本』編集部編『カメラが撮られた会津戊辰戦争』一一九頁。

⁴⁰ 佐久間『奥羽出張病院日記』の研究』三一九―六頁。

⁴¹ 『復古記』第十三分冊 五一―八頁。

⁴² 斉藤編『寛斉日記』二六頁。

⁴³ 斉藤編『寛斉日記』二八・二九頁。

⁴⁴ 斉藤編『寛斉日記』二六頁。

⁴⁵ 戊辰戦争で松本良順の医療の本拠地であった藩校日新館の四つの寮では、病院とは称せず、「軍陣医部」という名が使用された。一八六八年二月、「太政官日誌」一六九号で「未ダ行ハレ難キ儀モコレアリ、暫時、病院ノ名目」をやめて「軍務官治療所」と唱えることが達示されており、この時代に「病院」という言葉が日本には存在していなかった。しかし官軍の野戦病院には「病院」という旗が掲げられ、日本医学学会編『佐倉順天堂―近代医学の発祥地―』三八頁には、奥羽白河口（福島県白河市）で佐藤進が掲げた病院旗と、平潟口（福島県いわき市）に關寛齋が掲げた病院旗が掲載されている。

⁴⁶ ドミニク・ジャン・ラレイ（Dominique Jean Larrey、一七六六―一八四二）フランス陸軍の軍医総監。外科医の息子として生まれる。アメリカ沿岸でフランス海軍の外科医を務めた後、フランスのヴァル・ド・グラス修道院の陸軍病院で軍医養成上重要な役割を果たす。戦場での外科医としての活躍はナポレオンも賞賛した。ラレイが負傷兵輸送のために、馬に引かれた木製馬車に乗っていく姿は「飛び行く軍医」として人々に賞賛された。ラレイの主義の中で最も重要な項目は、失血患者が横たわっている場所に、できるだけ早く到着し、最善の手術をすることであり、実際戦場で多くの四肢切断術などを見事にこなした。また、眼病のトラコーマが伝染病であると主張（一八〇一年）した最初の医師のひとりとしても知られる。

⁴⁷ 尾立貴志「衛生隊誕生―戦場医療のルーツをたどる」『歴史群像』一九(五)、二〇一〇年)七八―八六頁。

⁴⁸ 橋本兄弟の祖父と父は花岡青洲の塾門下生であり、長兄佐内も一三歳より父の代診を務め、一九歳で家督を継ぐ。しかし藩命で江戸留学をしたのをきっかけとして志士活動に入る。医籍を脱け藩侯松平春嶽の政治参謀として働き、井伊大老の「安政の大獄」(一八五九)年に処刑された。

⁴⁹ マンスフェルト(Mansvelt, Constant Georgevan, 一八三二―一九二二)アムステルダム近郊で生まれる。ウトレヒト陸軍軍医学校で医学教育を受ける。ポンペの後任として推薦されたが、オランダ東インド政府側の承認を受けられず、その後ボードウインの後任として一八六六年に來日した。明治維新で精得館が長崎付医学校と改称された時、長与専斎と相談し、教育制度を改革。小学校学科(数学、物理学、化学)と大学校学科(解剖学、生理学、病理学、内科学、外科学、眼科学、産科学、一切治療、薬剤学、包帯学、翻訳)に分け、教育科目と専門科目を区別した。一八七一年からは三年間熊本治療所兼医学校(現熊本大学)に勤務し、その時の教え子に北里柴三郎などがある。

⁵⁰ 日本赤十字社病院編『伝記叢書 160 橋本綱常先生』(大空社、一九九四年)一〇頁。
⁵¹ 相川『出島の医学』一一二―一二五頁。

⁵² 蒲原「明治戊辰戦争越後口軍病院の変遷(上)」四六頁。

⁵³ 原剛「概説 戦傷病者に対する医療・援護体制」『軍事史学』第四九卷、第四号、二〇一四年三月)三八―四九頁。第二次世界大戦当時になると、兵站病院は軍作戦地域に数個開設され、各兵站病院は約一、〇〇〇名の患者の収容ができる要員と材料を有していたとある。

⁵⁴ 蒲原「明治戊辰戦争越後口軍病院の変遷(中)」四六頁。

⁵⁵ 蒲原「明治戊辰戦争越後口軍病院の変遷(下)」五二頁。

⁵⁶ 蒲原「明治戊辰戦争越後口軍病院の変遷(下)」五二頁。

⁵⁷ 日本赤十字社病院編『伝記叢書 160 橋本綱常先生』(大空社、一九九四年)二二―二三頁。綱常の提案した野戦病院の体系は、西洋の事情を調べて参考にしたことではなく、綱維・綱常二氏が必要上工夫した結果であったと説明されている。

⁵⁸ 蒲原「明治戊辰戦争越後口軍病院の変遷(中)」四六頁。

⁵⁹ 西岡香織「日本陸軍における軍医制度の成立」『軍事史学』二十六卷第一号、一九九〇年)二四―三九頁。

⁶⁰ 蒲原「明治戊辰戦争越後口軍病院の変遷(中)」四六頁。

⁶¹ 「北西日誌」第十四、八月一八日。朝倉治彦編『幕末明治日誌集成 第二卷』(一九八六年、東京堂出版)一〇一頁。

⁶² 蒲原「明治戊辰戦争越後口軍病院の変遷(中)」四七頁。

⁶³ 朝倉編『幕末明治日誌集成 第二卷』一三六頁。赤川は加州藩医三名、薩摩藩医二名、

長州藩医六名、越州藩医二名、土州藩医一名、高田藩医三名、松代藩医一名の計一八名に「御雇ヲ以於柏崎病院診療方可相勤ノ旨御沙汰候事」を提出、同じく調合方として長州藩四名、高田藩一名の五名に柏崎勤務を命じている。

⁶⁴ 蒲原「明治戊辰戦争越後口軍病院の変遷(下)」五三頁。

⁶⁵ 蒲原「明治戊辰戦争越後口軍病院の変遷(中)」四六頁。

⁶⁶ 蒲原「明治戊辰戦争越後口軍病院の変遷(中)」四六頁。

⁶⁷ 「北西日誌」、朝倉治彦編『幕末明治日誌集成 第二卷』二四一頁。

⁶⁸ 蒲原「明治戊辰戦争越後口軍病院の変遷(下)」五四頁。

⁶₉ 神谷『日本近代医学のあけぼの』三三頁。

⁷₀ 篠原宏『陸軍創設史―フランス軍事顧問団の影』（リポート、一九八三年）

⁷₁ 田中彰編『近代日本の軌跡1 明治維新』（吉川弘文館、一九九四年）に所収されている犬塚孝明「幕府遣外使節団と留学生」（九七頁）では、幕府遣外使節団は七回として

いるが、宮永孝氏は『幕末遣欧使節団』（講談社、二〇〇六年、三四八―三四九頁）、使節団の数は八回としている。第一回は、一八六〇年一月、日米修好通商条約批准交換目的で渡米、新見豊前守正興の一行。第二回は、一八六一年二月、ヨーロッパ締盟国であるフランス・イギリス・オランダ・プロシア・ロシア・ポルトガルの六カ国に開港開港延期交渉を目的に渡欧、竹内下野守保徳一行。第三回は、一八六三年二月、横浜鎖港談判目的で渡仏、池田筑後守長発の一行。第四回は、一八六五年閏五月、横須賀製鉄所設立準備のためフランス・イギリスへ派遣、特命理事官柴田剛中の一行。第五回は、一八六六年一〇月、カラフト境界画定談判のためロシアに派遣、小出大和守秀美の一行。第六回は、一八六七年、パリ万国博覧会参列観覧と締盟各国聘問目的で將軍慶喜の名代徳川昭武一行が渡欧。これらの外交使節団とは別に、幕府は留学生を派遣している。

⁷₂ ラザーフォード・オールロック (Alcock, Sir Rutherford、一八〇九―九七) 英国公使オールロックは、文久遣欧使節団派遣を企てたその背景には、本国である英国に幕府高官の中の開明分子を選んで派遣し、英国の実力やヨーロッパの外交慣行の実態を見聞させ、結果日本の改革は、漸進的に上層部より下層に浸透するのがよいと考えていた。その考えは、オールロックの『The Capital of the Tycoon』（一八六三）（日本語版は山口光朔『大君の都』上・中・下、岩波文庫）に記録されている。その日本語訳に関しては、大久保利兼他編『史料による日本の歩み近代編』（吉川弘文館、一九九六年）二四―二五頁に掲載されている。また、オールロックの日本の印象などは誤ったものであるとして福澤諭吉が批判しており、その詳細については、松沢『近代日本の形成と西洋経験』三八六―三八七頁を参照されたい。

⁷₃ 宮永孝『文久二年のヨーロッパ報告』（新潮選書、一九八九年第三刷）二五二―二五三頁。

⁷₄ 箕作秋坪（一八二五―八六）岡山県津山藩士。旧姓菊池、通称文蔵。儒学者菊池文理の次男。箕作阮甫に洋学、大坂の適塾で緒方洪庵に蘭学を学ぶ。阮甫の二女と結婚し、箕作姓を継いだ。文久遣欧使節団には傭医師兼翻訳方として随行。一八六六年にはカラフト国境交渉の随員としロシアを訪問した。維新後は、三叉学舎を開設して明治の各界で活躍する偉人俊英を教育、さらに福沢らと明六社（後の東京学士会院）を創立し社長に就任。教育博物館、東京図書館長の兼務など、多くの業績を残した。

⁷₅ 福地源一郎（桜痴、一八四一―一九〇六）蘭学を学んだ後、江戸に出て英学を学ぶ。万延元年に御家人となり第一回遣米使節団には定役並通詞として随行し、日本語学者レオン・ド・ロニーからフランス語を学ぶ。文久遣欧使節団には、外国奉行支配役格通弁御用として随行、帰国後は、ヨーロッパの巡回報告書を（和綴五冊、現在行方不明）執筆。一九七一年の岩倉使節団には一等書記官として随行した。

⁷₆ 立広作（一八四五―七九）名村五八郎から英語を、神父メルメ・ド・カシヨンからフランス語を学び、文久遣欧使節団では最年少一六歳で箱館奉行支配役通弁御用出役として随行した。明治新政府には外務省に一等書記官として入り外務大丞になる。

⁷₇ 太田源三郎（一八三五―九五）神奈川奉行所勤めで唐通詞として文久遣欧使節団に随行。明治になり工部省鉄道局権頭。

⁷₈ 吉村道男監修『寺島宗則自叙伝／榎本武揚子』（ゆまに書房、二〇〇二年）一二二―一

二三頁。寺島の自伝には「余と箕作秋坪とは病院学校等に治療教育及び組織の方法を探究せり。其他各分任あり。帰宿すれば之を筆記し、終に集めて大冊を成せり。然れども帰朝後之を読むの暇なかりしなり。或云ふ福沢の著せる西洋事情多くは此聞見録に基けるものなり」と書かれている。

⁷⁹ 柴田剛中（一八二三～七七）通称貞太郎。江戸小石川で直参の家に生まれた。昌平黌に学んで成績優秀であった。文久遣欧使節団では、正史と副使の諫め役、意見の調整役、西洋事情探索方責任者を担った。帰国後は外国奉行となるが、起こった生麦事件の賠償金を巡ってイギリスとの折衝に忙殺された。一八六五年には、横須賀製鉄所建設準備と軍制調査のため特命理事官として再渡欧し、資材と技術者の調達を行うなど、有能な幕吏として外交の表舞台で活躍した。

⁸⁰ 福田作太郎（一八三三～一九一〇）。福田は弓矢槍組同心の子として生まれ、父の職を継いだ後、一八五四年から一八六〇年まで箱館奉行所勤務、その後徒目付に転じ、翌年勘定格に任じられた。帰国後、神奈川奉行所に勤務後、フランス式に改革再編成をはかる幕府陸軍の中で昇進。新政府成立後は、電信事業に携わり、一八九一年には内務省衛生局次長を最後に退官した。「福田作太郎筆記」は、東京大学史料編纂所に所蔵されている。「福田作太郎筆記」は、中野善達「文久遣欧使節の徒目付福田作太郎をめぐる」（『蘭学資料研究会研究報告第二〇〇号』一一頁に所収、一九六七年九月刊）によってその概要が報告された。

⁸¹ 沼田次郎・松沢弘陽『西洋見聞集』日本思想大系66（岩波書店、一九七四年）四七七～五四八頁。

⁸² 沼田・松沢『西洋見聞集』四九七頁。

⁸³ 益頭駿次郎（一八二九～一九〇〇）幕臣。江戸の総録検校（盲人の統轄官の最上の位）となった芙蓉一の長男として生まれる。万延元年遣米使節団にも普請役として参加し「亜行航海日記」を、文久遣欧使節団には勘定組頭支配普請役として参加し、「欧行記」を著す。維新後は郷里の駿河国（静岡県）に一時移り住むが、のちに上京し、一九〇〇年没し、泉岳寺に葬られた。

⁸⁴ 高島祐啓（一八三一～八一）幕府漢方表医師、文久遣欧使節団の紀行を『欧西行記』（全四巻）と題して一八六七年に誠求堂より刊行し、此の版本も当時、欧羅巴事情を巷に広めるのに貢献した。

⁸⁵ 川崎道民（一八三一～八一）佐賀藩医松隅甫庵の四男として生まれ、鍋島安房の侍医川崎道明の養子となる。蘭学を学び藩医となり、第一回万延遣米使節団にも御雇医師として参加している。道民はヨーロッパから写真技術を学んで帰国し、活字印刷で佐賀県初の新聞「佐賀県新聞」を一八七二年に発行する。但し二ヶ月で終わるが、日本のジャーナリストの先駆者のひとりとされている。道民は、第一回遣米使節団随行の紀行を『航海実記』三冊に著す。現在、東京国立博物館に所蔵されている。この史料に関する先行研究には、大塚英明「万延元年遣米使節、随行医師・川崎道民の海外帰国報告―道民自筆本『航海実記』の紹介をめぐる―」（『東京国立博物館研究誌』一九九七年、五四六号、五七―六九頁）がある。

⁸⁶ 宮永孝『幕末遣欧使節団』（講談社学術文庫、二〇〇六年）八九頁。益頭らの見学した模様は、『ジュルナル・デ・デバ』紙（四・十九付）に「同日の午前中・使節団の医師や主なる高官らは、外務省医師エルヴェ・ド・ラヴオール氏の案内でラリボワジュール病院を訪れた。かれらは薬局、試験所、病室を見て回った。その間メモを取り、あとで他の病院も見学したいと云った」との記事が見られる。

⁸⁷ 益頭駿次郎「欧行記」(大塚武松編『遣外使節日記纂輯 第一〜三』日本史籍協会、一九〇三年)一二五―三三八頁。

⁸⁸ 益頭「欧行記」一八九―一九〇頁。

⁸⁹ 今泉孝「絵ハガキで見るパリの古い病院(四)―ヴァル・ドウ・グラーヌ陸軍病院(パリ五区)(その1)」『医譚』七二巻、一九九七年)四二五―四二五三頁。同「フランス軍陣医学におけるヴァル・ドウ・グラーヌ病院の役割」『日本医学雑誌』四三巻三号、一九九七年)一五四―一五五頁。同「絵ハガキで見るパリの古い病院(五)―ヴァル・ドウ・グラーヌ陸軍病院(パリ五区)」(その2)『医譚』七三巻、一九九八年)四三二―四三二三頁。

⁹⁰ 岩田高明『福田作太郎筆記』の『欧州探索』にみる西洋教育制度受容過程の分析―文久元年遣欧使節団による欧州学制探究―(『日本の教育史学:教育史学紀要』二〇〇六年)一九―三三頁。松沢弘陽『近代日本の形成と西洋経験』(岩波書店、二〇〇八年第四刷)三三頁。岩田は、「調査結果は『欧州探索』にまとめたが、幕末の動乱期の中で政策に生かされることなく埋もれてしまった」とし、松沢も、「とるべき政策にまで論及することなく、西洋諸国の現実に対して評価をのべることもなく、その限りで客観的な事実の説明に終始していた」と評価している。

⁹¹ 蒲原「明治戊辰戦争越後口軍病院の変遷(下)」五五頁。

第四章 戊辰戦争と看護

一 会津若松城籠城と看護

戊辰戦争は、前線の仮繃帯所で治療処置が行われ、野戦病院には多くの負傷兵が運び込まれ、多くの看護人が必要とした。壬生城内に設置された官軍の負傷兵を治療する「養生局」(野戦病院)で、銃創看病人を九名雇入れた事例が、わが国の女性看病人の始まりとされているが、それは、従来各藩夫々が繃帯所を創設し、負傷者に看病人を付き添わせるといった形態では、すでに対処できないという課題として認識された結果であった。

負傷兵の看護は、籠城した城の中で、士族の婦女子らによってなされたことも知られている。白河口を突破した政府軍は、母成峠、猪苗代、戸ノ口原、滝沢峠と勝利を治めながら若松城に迫った。会津藩は八月二三日早朝、城内の鐘を乱打、その合図で会津藩は籠城の構えをとる。この割場の鐘の会津で籠城したのは約六百名、自殺した者二百数十名であり、九月二二日の降参、開城の際に城中にいた老幼婦女子は五七五人、籠城中に戦死した者も含め、多くの非戦闘員が本丸に約一ヶ月籠城した¹⁾。

城内は、溢れる負傷者のために薬品は不足し、繃帯も補充できない状況であった。負傷兵の治療の補助・看護にあたったのは、籠城した会津藩士の家族である婦女子であった。そのひとりに山本八重²⁾がいた。八重は、砲術師範の娘として育ち、鳥羽・伏見の戦いで戦死した弟三郎の衣装をまとい男装し、八月二三日早朝、七連発のスペンサー銃とその弾丸百発を持った上で、入城をした。八重は戊辰戦争後、京都府顧問となっていた兄の山本寛間を頼り母と京都に移り住み、新島襄³⁾と結婚し、のちに日本赤十字社の社員となり、日清戦争・日露戦争時に篤志看護婦⁴⁾として従軍する。八重は後年「男装して会津城に入りたる当時の苦心」を発表し、その中で「入城した女の役目は、兵糧を炊くこと、弾丸を作ること、負傷兵の看護をすること」であったと語っている⁵⁾。

同じく籠城をした山川操子⁶⁾の籠城中の実見録や、藩士間瀬新兵衛の娘みつ子が日記風に綴った「戊辰後雑記」(稿本)により、鶴ヶ城城内で行われた看護の実態を知る事ができる。山川操子の籠城中の実見録⁷⁾からその部分を抜粋する。

私ども婦人の仕事は、弾をこしらえるのと握飯をつくるのとの外に、負傷兵を看護する大任がございました。城も覆えるかと思うばかりの大砲の轟きがきこえたかと思うと、血だらけになった負傷兵を表の方から私どもの方へ連れてまいります。その負傷兵の姿をみる毎に、ああまた一人味方の兵隊が斃れたのかと、ほんに涙がこぼれました。

医者は幾らかおりましたようですが、薬などは少しもございませんから、負傷兵に対

しては、ただ慰めるというばかりで、おそろしい傷があっても、それをどうすることもできません。それでも、初めは畳の上に寐かしておきましたが、しまいには、畳を牆壁のかわりに使いますので、皆剥がして行ってしまうましたから、あとでは、床板の上へ寐かしておくだけでございました。

蒲団は、城の中にもとからおりました奥女中や下働きの女どもので間にあわせましたが、それではとても足りませんから、その人たちの衣類だの、私たちの衣類を脱いで着せてやりました。それですから、向うには、縮緬の縫をした襦を着て唸っている負傷兵があるかと思うと、こちらには、木綿もののゴツゴツした着物を被って呻いているものがあるというような始末でございました。

何分暑中のことでございますから、負傷兵は皆、『看護人さん、水を飲ましてもらいたい。』と、苦しそうに申します。けれども、井戸は深くございますのに、大勢の人が城中におって汲むものですから、朝でもございませんと、水が少なくなつて濁っております。

それでも飲みたいと申せば仕方がございせんから弾の飛ぶ中を手桶をさげて汲みにまいりました。

中に一人、火薬を頭から身体中に浴びて、まっ黒に火傷した人がありました。身体中の皮膚はすっかり爛れていて、着物を着せることもできませんから、裸体のままでおきました。それが、時々、『起して下さい。』と申します。抱きかかえるようにして起しますと、火傷した皮膚が剥れて両手にべったりつきます。しかし、その手を洗うこともできませんから、いい加減に拭いておきますが、その臭いことと申したら、とても我慢ができませんでした。しかし、私どもは家老職の娘でしたから、自分が先に立つて働きませんと、他の女たちの勇気が鈍りますから、一生懸命に働きました。

・・・(中略)・・・大砲の弾、小銃の弾は、私どもの頭の上をピューピュー飛んでまわります。そこらに落ちて破裂するものもございすし、屋根の瓦を飛ばす。戸障子を砕く。それはそれは恐ろしい有様でございました。その中に、血は流れておりますし、負傷兵は唸っておりますし、屍骸は横わっているという有様でございす。その当時は気が立っておりますし、自分も死ぬ覚悟でございすから、少しも恐ろしいとは思いませんでした。眠ることなどはとてもできません。ただ少し手のすいた時に、柱にもたれてウトウトするぐらいなものでございす。

会津藩の婦女子らは、一同主君のために働いて、一思いに討死する覚悟を持ち、黒羽二重の紋つきの袴の着物など、拝領の衣類を着て入城した者が多かった。山川操子の実見録からは、多くの負傷兵に治療を施す薬品もなく、ただ蒲団もない床板の上に寝かされ苦しむ負傷兵に、婦人らは自分の着物も提供し、寝る時間もなく看護人として働いたが、「ただ慰める」ことしかできなかつたと述懐している。

間瀬みつ子も「八月二三日―奥より御指示にて、手すきの者は手負者看病に出候様、右

に付のぶ、つや、ゆうは手負看病に出申候。私は結び（握飯）握りに出候様に付」とあり、入城すると、女手が必要とする部署に配置されたことがわかる⁸。

一九三九（昭和十四）年に、「会津戦争婦人隊士顛末記」を『新女苑』に投稿した神崎は、「日本における看護婦の発生史からいえば、明治元年正月、伏見・鳥羽の戦争後、土佐藩の大坂屋敷に同藩の負傷兵を収容して、藩士の妻や娘が看護にあたったのが、最も古い出来事であるが、会津女性の看護活動も、同時に記録されるべきものであろう⁹。」と述べている。

籠城した若松城は、会津藩の大本営であると同時に野戦病院であり、兵站病院であった。そこで「看病人」を務めたのは、籠城した藩士家族の婦女子らであったが、化膿し鼻を衝くばかりの腐敗臭と膿だらけの創部の治療を素手で行い、自らの着物を差出ながら看病を行い、負傷兵の希望を聞き入れ、慰めに務めた彼女らの看護の実際は、病院における女性看病人のはじめであったと位置付けて良いであろう。

また山川操子の妹は、のちに陸軍卿大山巖の妻となる山川捨松¹⁰である。捨松は岩倉使節団に参加した五人の女性の一人であり、ニューヘイブンのベーコン牧師の家に預けられ、名門女子大学ヴァッサーカレッジを卒業するが、日本へ帰国する前の二カ月、一八七三年六月開校したアメリカで最も古い看護学校の一つ、ニューヘイブン病院付属のコネティカット看護婦養成所で看護を学んで帰国した¹¹。陸軍大山巖と結婚後、有志共立東京病院に看護婦養成所を作るため、わが国最初の慈善バザーを開催し資金集めをするなど、わが国の看護の発展に関わった人物の一人である。

捨松が若松城に母や姉たちと籠城したのは、わずか七歳の時であった。捨松の義姉は、城内に落ち破裂した砲弾で胸を負傷し、拷問のような苦しみを味わいながら息を引き取った。捨松は後年、苦しさのために母に介錯を懇願するその姉の声は堪え難いものであったと、自身で語っている¹²。幼いながらも、この若松城内でのすさまじい悲惨な経験が、捨松が看護に関わり、看護の発展を推進する力の原点であった。

さらに、会津城で看病人の役割も担った山川操子の実見録にも「私どもは家老職の娘でしたから、自分が先に立って働きませんと、他の女たちの勇気が鈍りますから、一生懸命に働きました」と述べている。これは政府軍の進撃に、多くは主従関係が崩壊し、奉公人は逃げ、または暇を出したことで、若松城内では士とその家族がすべてを負担する状況になっていた結果であった¹³。

明治となり、日本赤十字社に上流階級の婦人たちによる篤志看護婦人会¹⁴が設立された時に、捨松は理事となって衛生学の普及や看護婦の地位向上に務め、一九〇一（明治三四）年に結成された愛国婦人会などでも積極的に救護活動を始め、包帯作りにも励んだ。八重も日清・日露戦争では自ら従篤志看護婦として従軍した。これらの積極的な看護活動の源は、若松城での籠城で、士族の家族として「自分たちが先に立って働く」というその精神と同一のものであり、同時に、傷ついた者にとっては「看護」が何よりも必要とされることを知りつくしていた証であった。

二 女性看病人の採用

大病院に移転するまでの約六カ月以上に及ぶ横浜軍陣病院で行われた看護については、シッドルが一八六九年三月三〇日に提出した報告書「日本陸軍病院にかんする報告」と、『横浜軍陣病院の日記』¹⁵（以下、『横浜日記』とする）で知ることができる。『横浜日記』は、慶応四年閏四月一八日より、同年一〇月二一日に至る横浜軍陣病院の日記であり、各地の騒乱によって発生した傷兵の手当を行うために、当時外科医として名高いウィリアム・ウイリスを招くことを目的として設けられた病院であり、当初は江戸で病院を開く予定であった。しかし、ウイリスが横浜を離れることが困難な状況にあることで、やむを得ず急遽横浜修文館に病院を開くことに変更をされた。その経過を含め、『横浜日記』は一七日の大総督府の達の掲載から始まっており、一八日使番の佐藤喜七郎（名古屋藩士）が到着し、手配等事務が開始されたことで、日記が記録され始めるのであり、『横浜日記』は事務の執務日記である。そのため、治療内容ではなく、入院者名や掛かった経費などが詳細に記録されており、沿革を知ることのできる根本史料である。¹⁶

開院にあたっては、食費や薪・炭等の購入代金と共に、老女を介抱人として「銀十八匁」で雇い入れたことが記されている。記録には、

一 老 女

一 銀拾八匁 介抱人五十以上女壹二付

但病人壹人二介抱人女壹人之筈之處書夜不寝等二而ハ難相勤趣再々申出候二付
増人三人都合拾壹人二而繰合筈

一 銀六匁九分六厘 風呂焚男壹人二付

とある¹⁷。介抱女の人数は開院当初薩摩・伊州両藩の入院負傷兵八人に対して五〇歳以上の老女を介抱女として雇入れたが、昼夜を通しての勤めはきついで、三名の増員を要求して一名となった¹⁸。

さらにこの記録からは、介抱女の賃金「銀拾八匁」は、風呂焚き男よりも高い設定であったこともわかる。その料金設定の根拠は、看護の仕事内容を評価した結果なのか、それとも介抱女を集める条件として高い料金設定が必要であったのかは不明である¹⁹。但し、多くの負傷兵に膨らむ病院運営経費のため、介抱女の賃金も九週間後には日銀一五匁（二朱〓五百文〓約七千五百円）に引き下げられている²⁰。

『日記』には介抱女の仕事内容は書かれていない。中西は移転した大病院では「東京府大病院規則」に「看病人」として、その仕事内容が規定されていることから、横浜病院でも同様の仕事をしていたと考えられるとしている²¹。その規則には、

看病人

一 診察後者後二残り病室之薬法書並薬袋薬瓶取集調合 取^マ江差出調合済次第早々病者江相渡候事

一 病者之起臥衣類飲食其他掃除等万事世話可致事
但せんたくは女の事

と書かれており、看病人は薬の投与、病人の食事、衣類の世話、掃除等、日常生活全般の世話がその仕事とされた。シッドルの報告書には、「調剤はみな日本人医師がやっている」とあり、看病人の仕事は薬を飲み終えたあとの薬袋、薬瓶の回収と、調査された薬を患者に渡すことであつた²²。

『日記』には、看病女に褒美金が贈られたことの記録も残されている。六月二三日、死亡の転帰をとつた薩摩藩士の看護を「神明二念入抱致し候趣相聞へ候二付」として、看病女「なか」に褒美金子百疋が贈られている²³。この看病女は日当で雇われた介抱女ではなく、入院に際し藩が付添人として準備した者であつたと考えられる。

その理由は、八月二七日に総督府が「大病院規則」として記したものに、「各藩看病人可為無用事」²⁴とあり、それまでは各藩が、入院の際は看病人を準備していたと判断できる。これは平潟口総督日誌に書かれたものではあるが、総督府の方針として横浜軍陣病院も相違なかつたと推察でき、「各藩が用意した看病人」と「病院が日当を以て雇い入れた介抱女」が存在していたと考えるべきであろう。看病人「なか」は各藩が雇入れた看病人であると考えると、褒美金が送られたことにも納得がいく。

九月三〇日頃から横浜軍陣病院の入院患者の移転を開始し、一〇月一七日には全ての患者の移転は完了する。病院となつた藤堂屋敷は、約六八、〇〇〇平方メートルの広さを有し、内科、外科、医療材料を始めとしてあらゆる必要物品を支給する部局の三部局に分けられて運営された。どのような看護がなされたかは、シッドルの報告書「日本陸軍病院にかんする報告」にその一端が書かれている。その箇所を左記に抜粋する²⁵。

患者用にたくさんの寝台や、鉄製の寝台床架、一級品の馬の巻き毛の敷きぐとん、シートや毛布を用意した。これらの品物は大多数の者にはまったく見なれないものだったので、初期のころ、寝台はシートを広げてよこれを防がねばならぬことや、折りたたんだシートとか油紙を用いて患者の排泄物を防ぐことが必要だという考え方を、すくなくとも患者の付添い人たちに正しく理解させることは非常に面倒であつた。そして、いくつかの寝台を切り裂かねばならなくなって破損した後、ようやくこの問題に留意することが看護の第一原則の一つとしてすこしは認識されはじめたのである。

患者につく看病人や付添い人はおもに既婚の婦人だつた。平均して、各患者に一名ついている。というのは、軽症患者二名か時には三名に付き添い人は一名しかつか

かったが、一方重症患者には二名か時には三名の付添い人がついたのである。これらの婦人たちは、概して、彼女らの任務を非常によく遂行するようにみえた。私は患者の臨終に際して彼女らがはげしく嗚咽するのを見たことがある。しかし、患者にわがままな行為を許さないためにも欠くことのできぬ確固たる態度が彼女らには不足している。(・・・略・・・)可能ならば、患者が独立した部屋に収容されるという事情は、看病人が一名与えられる慣行を明らかにするだろうが、西洋人の考え方によれば、それは患者が実際に必要とする程度をかなり超えているのである。

シッドルやイギリスの医師等にとっては、看護婦が業務として日常的に行っている患者の排泄物に対する汚染防止対策なども、日本ではその必要性を看病人に理解させることから始めなければならなかった。

また、横浜病院に続く大病院では、看病人は患者一名に一名の看護人が付き添っており、その日本の制度についてウィリスは「現在採用されている看護制度は高くつき、しかも好ましくない。患者一人に看病人が一人就き、重患は二人か三人の看護人をあてがわれた。それぞれの看病人は、一昼夜の付添いで、一定量の米のほかに二分の一分の賃金を支給されるのである」と、看護人の配置についてその不合理に苦言を呈していた²⁶。

東京大病院では、ウィリスの助言によって女性看病人を雇入れることになり、この女性看病人の採用は、わが国における看護婦の濫觴といわれている。女性看病人を雇いはじめたその経緯については、石黒忠恵の残した記事で知ることが出来る²⁷。

当時の(東京大病院)入院患者はその負傷は戦勝の種であると云ふ心の持主が多く、従て患者の氣勢がなかなか盛で我儘一パイにて、とても医員の云うことを用ひない。況んや、看護は頗る難しい。気に入らぬと烟草盆を投げる、枕は蹴とばす、癩癩が起ると看護者を殴打すると云ふ輩も多かった。そこで如何にしてよいかと云う相談で、試みに女子に看護せしめて見ようと云ふことに議一決し、其の看護に従事する婦人を募集することになった。然るに患者が荒々しいと云ふことが世間に知れ渡りて居るので看護業務に來り応ずる者なく漸くに応募せる婦女は孰れも所謂「バクレン」者で、着物に白と紺との弁慶縞の単物に、髪は「ジレッタ」結びに黄楊の横櫛と云ふ様な姿、海に千年、山に千年、男を男とも思わね輩であるが、他に応じ来る人なかりしより止むを得ず先づそれを雇入れて看護に従事せしめて見た所が、患者等は従順となり、一方之等婦女の内には案外勤勉で、繃帯など漸次巧みになり、看護の業務概して男子に勝る事を見出したのである。又其の中には看護婦を統御する才幹あるものも出て、意外にも辛酸を嘗めた方正のものもあつて段々熟練して來た。之が明治維新當時に於ける看護婦の最初で、我が東京帝国医科大学病院の看護婦の元祖である。最も之等の内で漸次技能熟達し、患者の取扱にも慣れ優秀看護婦と称せられた者もある。

この回顧録に出てくる「バクレン」とは、世間ずれしたわるがしっこい女のことを差す

が、これは上野戦争の際緊急に集められ、身元調査も不十分なままで雑用に充てられた者のなかに、吉原の遣手婆などの女性も一部交じっていたことが、強調して伝わったと考えられている²⁸⁰。

石黒の記録には、女性が勤勉であること、訓練次第では繃帯法なども巧みに熟したとある。つまり、看護に従事させるために大病院では女性を雇い入れたのであるが、その看護の業務の一つに包帯法があったということである。賄や洗濯などの仕事を担当する人と区別されていたのかは不明であるが、横浜病院・大病院でウイリスやシッドルの指導の下で病院を運営する過程で、看護人は負傷兵の治療に携わる人へと役割が変化していったと判断できる。

三 海外看護婦の紹介

戊辰戦争によって病院に女性か看病人を雇い入れることが始まるが、幕府が幕末より西欧諸国に派遣した使節団の随員らは、海外の病院で働く看護婦の存在を知る機会にもなった。前章ではフランスの陸軍病院の病院看病男について触れたが、わが国に最も早く看護職を紹介したのは、一八六〇年に日米修好通商条約批准交換を目的とした正史新見豊前守正興の遣米使節団一行の従者、仙台藩士玉虫左太夫誼茂²⁹の『航米日録』であり、随員玉虫が北米ワシントンの米国病院を見学した折の記録であるとされている。

亀山は、「新見の訪米のころには、すでに病院という名称ないし概念は一部に定着しはじめていたが、看護婦や修道女たちの存在については、ほとんど知られていなかったといつてよいだろう」としている³⁰。海外を経験した有識者たちが病院見学で何を見て、報告したのかを確認しておくことは、明治となり近代化への改革に何をどのように生かしたのかを知る貴重な資料となる。そこで本項では戊辰戦争当時、海外の看護に関する情報がどのように伝えられていたのかを確認する作業を行う。

まず玉虫左太夫の『航米日録』である。玉虫は仙台に生まれ、幼児に藩校養賢堂で四書五経と西洋事情などを学んだ。一三歳の時に藩士荒井東吾の養子となり、荒井家の娘と結婚するが、妻病死後、二四歳の時に脱藩して江戸へ出奔した。

玉虫は一八五七年四月から九月まで、函館奉行堀利熙に従って蝦夷地を巡行する機会に恵まれ、地勢や気候や風土、アイヌの生活習慣、衣食住、蝦夷地警備の状況などを『入北記』に著した。その観察力と、観察した結果を詳細に記録する根気と筆力などが認められ、使節団の記録係として推挙され、仙台藩からも使節団参加を許された。玉虫は、帰国するまでの約一〇カ月の渡米体験を、八巻の『航米日録』に書き記した。『航米日録』には、ワシントン滞在中の四月一四日、同じく従者福島義言と木村鉄太と連れ立って、石造りの玄関のある四階建の病院を見学した記録が残っている（資料2）³¹。

大小ノ房室相並ビ数十個アリ。男女各限隔ヲナシ、病者臥シ居タリ。一房多キハ七八人少キハ五六人、病者女ナレバ女、男ナレバ男ヲ以テ監視セシム。寢室・食床極メテ清潔ニス。医官数人其傍ニ在テ時々ニ診察ス。．．．（略）．．．其外病人ノ取扱ヘ一ノ遺漏ナク感心スベシ。

病室は男女別になっており、それぞれ女性の病人には女性の看病人が、男性の病人には男性の看病人が、一つの病室に七から八名、少なくとも五、六名が配属されていた。寢室、食卓が極めて清潔であること、病人の取扱いに一つの漏れもないことに感心する。さらに、看護を行っている女僧については「女僧黒衲衣ヲ服シテ是ヲ守護ス、男ノ入ルヲ禁ズ。予等ヲ導キシモノ始メ男ニシテ、此房中ヘ入リシトキ女僧一人付き副フテ、男ハ戶外ニ待ツ。尤其女僧ハ常ニ十字木ヲ腰辺ヘ帶ブ」と記録している³²。

玉虫と行動を共にした福島義言の「花旗航海日誌」には、病院を見学した記録が一二日の記録に確認できる。「白キ石ヲ以テ四重二建、貧難病者等ヲ療治ス、男子ハ介抱シ、女子ハ室ヲ隔テ男ヲ禁シ、女介抱スト云」と短く記録されている³³。

また同じく木村鉄太の『航米記』の一日の日記には「病院」と題された項目があり、「都下。往々病院アリ。中チ甚ダ清淨。難病人及び貧人、薬ヲ買フコト能ハズル者ハ官之ヲ養テ病ヲ療ゼ会ム。男女ヲ別テ居ヲ令メ、病男ハ男之ヲ介抱シ、病女ハ尼層之ヲ介抱ス。凡ソ三日ノ中チ一度衣衾ヲ更メ会ム。皆官医之ヲ司ル」と記録されている³⁴。

鉄太の日記にも玉虫同様、病院が清潔であることが記録されているほか、病院では、難病で苦しんでいる人や貧乏で薬を買うことが出来ない者を政府が治療をしていること、政府から医者と介抱人をつけ、三日に一度は衣服を着替えさせていること、これらすべては政府の医者が管理をしていることなど、鉄太が知り得た事柄も記録されている。

注目すべきは、玉虫は看病人を「監視セシム」人と捉えているのに対し、鉄太と福島は、「介抱」する人と、記していることである。玉虫は、病院に入院している者は「病者臥し」と記録しているのみであるが、鉄太は、三日毎の衣服交換など、尼層が行っている内容も調べており、その結果として、尼層の仕事看病人の介抱であると理解し、「介抱」という言葉を用いたと思われる。看護婦という職業に関する概念もなく、武士社会の上下関係に身を置く玉虫にとっては、「監視」という言葉でその状況を理解したと推測できる。

護衛艦威臨丸の従者の中には、アメリカで入院を経験した者もいた。提督木村摂津守の従者の一人長尾幸作はサンフランシスコで急病に掛かり半月間の入院を経験した。その様子は長尾の『亜行日記鴻目魁耳』に残されている³⁵。

長尾は、サンフランシスコ入港直前に病を発症し、現地の病院に入院する。記録には、「余愈悪シク大下痢ヲ催ス」「矢張下痢ス、大渴食ヲロニ入レス」とあることから、下痢による脱水症状を起こしていたと考えられる。症状がよくなると、病室を見て回り、懇意となった医師から外科道具や妊婦の手術を聞いて、西洋医学の吸収に努め、半月後に退院する³⁶。退院が決定した日の記録には、入院中に感じたアメリカ人の人間性に触れ、感動し

たその想いが書かれている³⁷⁾。

皇国扇二本宛相携礼謝ニ行ク、各医一期月モ看病施治之知己トナル故皆分袖又遺憾ノ情大ニ顔ニ露ル、夷人タリト雖トモ返テ亜斯亜州産之人ニ勝ル、惣テ亜米利加州之情合新開国之地故人情正直親密、他人ヘ対シ空虚ナルコトナク厚情致至、余独所論ニ非ス、亜斯亜州ハ旧国故薄情、地球中惣論ナリ、時ニ別ヲ告ケ余モ又長々懇情ヲ受病癒引去之情大筆ノ外ニ在リ

長尾の記録には、入院中に施された具体的な治療や受けた看護などは書かれていないが、長尾が入院中に接した医師や看護婦の対応から、差別もなく、米国人の情の深い扱いに感心したことが書き綴られている。

長尾の入院に際しては医師牧山修卿³⁸⁾らが病院へ引き渡し役を務めた。修卿は適塾出身で、長尾の入院中も度々面会に訪れており、長尾の入院経験は、医師が西洋医学を学ぶ好機となった³⁹⁾。修卿は一八七五年には東京府病院副院長に就任し、その病院では入院区分別に看病人の配置も決められた⁴⁰⁾。看護管理に、使節団随員としての見聞がどのように活かされたのか、その資料を見出すことはできないが、未だわが国に職業看護婦のない時代に、入院区分別に看病人を配置して病院管理を行っていた事実は、西洋式病院の看護管理の始まりと捉えて良いだろう。

咸臨丸でのアメリカ訪問に続き、文久遣欧使節団に翻訳方及び通詞として参加した福沢諭吉⁴¹⁾は、海外体験での詳細な聞き書きを、「西航記」、「西洋事情」に著した。福沢は「西航記」で修道女看護婦「ノン」を紹介し、また病人と介抱人の配置割合なども記録していた⁴²⁾。

介抱人は男女両様ありて、男子は病男に属し、婦人は病婦に属す。病人五十人に介抱人十名を附るを定則とす。又、ノンと名くるものあり。これは老若婦人、奇数に遭ふか、或は他故あるもの、神に誓ひて若干年間、病者を扶けんことを自から約し、其年期内は男女の交を絶ち、自から守ること本邦の女僧の如して、病院に入るものなり。故に此ノンは、病者を扶くるに、男女を弁ぜず臥床に近くことを得るなり。

一八六八年に刊行された『西洋事情』初編全三巻では、「病院」(資料3)「貧院」「盲院」「哑院」「癲院」「痴児院」「博物館」など、西欧社会における福祉、医療の現状とその成り立ちを詳細に調べた結果を項目ごとにまとめる形で紹介した。

福沢はイギリスで四つの病院を訪問している。その四つの病院とは、キングスコルレーン病院(King's College Hospital' 一八三九年設立、セント・メアリーズ病院(Saint Mary's Hospital' 一八四五年に設立)、セント・ジョージズ病院(St George's Hospital' 一七三三年設立)の一般病院三施設と、精神科病院の「養癲院」であるベツレム病院(Bethlem Royal Hospital)である⁴³⁾。

イギリスではすでに一五〇の病院が設立されており、キングスコレージ病院は、一八六一年に新たに建て直され、四階建て病床数は約二〇〇であった。換気への配慮、大きな調理場、看護婦の為の宿泊設備など、当時の模範的な病院とされており、福沢らは約二時間かけて、患者と看護婦の快適と便利を考えて作られた病院を視察した。ベツレム病院は、一二四七年に教会の小修道院として建てられ、福沢らが訪れた当時は三七〇名の入院患者の収容が可能であり、病室はすべて個室、病棟と廊下には椅子やテーブルが置かれ、鳥かご、花、絵などが並べられ、レクリエーションも行われるなど、入院患者の生活環境が改善され、注目を集めていた時期であった。

『西洋事情』とともに、明治期の日本人の「開知」（知識の啓発）のために読まれた書物に、一八六九年に発行された橋爪貫一編『開知新編』（二〇巻本）⁴⁴があった。この『開知新編』は、文久遣欧使節団の報告書を、勘定役格徒目付福田作太郎が筆書き写した「福田作太郎筆記」二七冊⁴⁵を収録したものである。

「福田作太郎筆記」のうち、文久遣欧使節団の見聞に関するものは七冊である。そのうち最も分量の多い「英国探索」には、「英国倫敦府病院并学校の事」と題された項目が確認できる。その全文は巻末に付記（資料4）するが、一四〇五人の病室を看病人三〇四人で担当していること、病室は常に清潔で換気も充分に行われ、蒲団類は七日毎に交換されていること、看病人は全て婦人を使用していることなどが報告されている。

先に述べたように、イギリスではすでにナイチンゲールにより軍の衛生改革が行われ、一般病院の環境改善も行われていた。また、イギリスの軍隊は志願制であるため、個人による健康管理が大きな意味を持っており、兵士の健康障害による戦力低下を防ぐため、一八五九年からは医官が衛生管理やヘルス・ケアについても担当していた。一八六〇年からは、陸軍医学校にて軍事活動に即した外科学、衛生学、病理学、医学などによる医官教育も開始していた⁴⁶。

文久遣欧使節団がイギリスを訪れたのは、このような陸軍の改革が行われた直後であり、事情探索により、戦争において兵士が負傷したときの国家の責任、兵士の健康と戦力低下の関係、病院における看護の効果など、今後わが国が近代国家建設に向け取り組むべき課題を情報としてもたらされてはいた。これらの情報が生きるのは戊辰戦争を経た、明治政府が近代化を目指すなかで活かされることになる。

四 戦時医療の課題と看護

幕末、使節団の随員となって欧米諸国を見聞する機会に恵まれた者たちは、その情報を日本の近代化に活用するべく、報告としてその情報を幕府にもたらし、また書物として多くの開明的な日本人が知識を得るのに寄与した。すでに病院における治療が社会の中仕組みとなっている西欧諸国と、病院そのものの存在が一部に限られた日本では、もたらされ

た情報を活用するには限界があった。特に西欧で病院で看護に従事しているのは、十字架を下げた修道女であり、亀山が指摘しているように、単なる異国事情として捉えられていた感強い⁴⁷。

しかし、戊辰戦争を経験する中で、野戦病院で藩という枠を超えた組織力による医療の実践の必要性を体験した医師らは、医療の近代化に向けた多くの課題を認識するに至る。まず、兵器の進歩により旧来の漢方医らでは対処できないことが明白な事実として、医師のみならず政治を掌ろうとする多くの有識者らに認識された。さらに多くの負傷兵を助けられなかった事実と、ウィリスが提言した人道主義に対する課題が、近代国家建設を目指すにあたり、戦場医療の課題となった。

軍陣治療は大きく三つの段階に分けられる。まず一段階目は、仮纏帯所となる前線での応急処置（主に止血と患部に固定）、二段階目は、医療体制の整った（医療材料を含め）病院での西洋外科学による治療、三段階目が隊への復帰を目指した回復過程における看護が主体となる病院での治療である。そしてさらに各段階を繋ぐのは「移送」である。

戊辰戦争では、第一段階目は藩が用意をした男性看病人を使用していたが、野戦病院では多くの負傷兵が入院することで、病院が看病人を確保するようになる。その結果、看護人として地域の女性を雇入れる、また籠城では士族の婦女子が看病人の役割を担った。

戊辰戦争では広がる戦場に、負傷兵の移送に船を用い、奥羽出張病院では医師―看護人―人足というチームで移送を行う。大病院では初めて女性の看病人を採用し、包帯交換などの治療の介助も看病人の仕事として熟し、その効果も確認された。このように戊辰戦争では、看病人は単に洗濯や掃除などの家事部門を担当するという役割から、医療チームの構成要員へとその必要性が移行していったことが確認できる。

戊辰戦争で明らかになった戦時医療の課題を挙げると、次に挙げる五項目にまとめられる。

- 一. 西洋医術を身につけた医師の早急な育成⁴⁸
- 二. 医療材料、武器弾薬、食糧などの確保・補充システムの確立
- 三. 戦場における、病院（仮包帯所）―中間病院―後方病院といった医療体制の確立
- 四. 理論と実地訓練による看護者の育成
- 五. 文明国家となるべく人道主義の理解

これらの課題のうち、一に関しては、石黒忠恵・土岐頼徳・長谷川泰ら、戊辰戦争に従軍し、戦場医療に携わった医師により提出された「医学教育建白書」⁴⁹により、医師教育が開始される。課題二は、人件費を含め、費用の確保から始まり、政府を含め、軍のシステムの整備にかかわる問題であった。課題三に関しては、寛斎や橋本らが実践したことで衛生隊が初めて組まれたが、陸軍として負傷兵の後送システム、支援体制は整えなければならぬ課題であった。つまり、政府が戦時にどのような医療体制を整えるのか、病院陸軍の中で衛生部隊をどのように作り上げるのか、その構想の中で課題四の看護兵の育成が取り上げられることになる。さらに課題五は、人道主義を取り入れ文明国となることは欠

かせない近代国家建設の条件であり、明治政府首脳人に大きな課題が投げられたのであった。

一八六七年二月明治政府が発足。政府は国家建設の目標を、国家的に独立し、国際社会において欧米列強諸国と肩を並べる強国となることを目指す。

日本医学の近代化は、新政府の欧米化政策に則り、「西洋医術採用建白」⁵⁰によって始まり、西洋医学の採用（一八六八年）⁵¹、ドイツ医学の導入（一九七一年）⁵²、文部省の「医制」の制定（一八七四年）、「医師開業試験法」の制定（一八七六年）、文部省「医学校通則」を制定（一八八二年）がなされ、課題の一である西洋医術による医師の育成が医学教育と医師の免許を柱として行われた⁵³。さらに、医学の近代化に大きく貢献したのが、陸海軍の軍制改革にともなう軍隊の医療施設・教育の整備充実があった⁵⁴。

国軍を建設（健軍）するためには、全国の軍備の充実という政策がとられることになるが、一八六九年兵部省が設置され、兵部大輔の地位に就いた大村益次郎は、国軍の創設に手腕を振るった。大村がどのような軍制改革の構想をもっていたのかは門下の山田顕義⁵⁵が残した記録によって知ることができる。

大村は「諸藩を徹し、佩刀を禁じ、徴兵令を定め、兵学校、造兵局を開き、鎮台七道に分置するがごとき」と考えており、それは士族軍務専任主義の打破であり、国民皆兵を推進するものであった⁵⁶。山田は、『大村益次郎先生事績』の中で、大村の軍病院構想について左記のように説明している⁵⁷。

戦時に於ける病人を扱うには平常の時の治療とは余程趣を異にするものであるから、軍事病院と申すものを設けて充分に治療法の攻究を致さなければならぬ、それがないと戦の起った時に負傷者の治療に非常に困ることが出来る、又鎮台と云ふものを設け処々の要所に兵を置き、又海軍の如きも所を定めて鎮守府を置き軍艦の集まる場所を定めて非常の用意を設けて置かなければならぬ

一月一八日、国軍の創設、兵制確立に尽力した大村益次郎が没後、大村の遺志を継いだ兵部大丞山田顕義ら兵部省幹部らによって、太政官に「兵部省上申」が提出された⁵⁸。上申書では「軍医寮ヲ設置クベキ事」とし、兵部省、海陸兵学寮、陸軍屯所、砲銃火薬製造所等と共に、軍病院の設置が具体的計画として提示された。

一八七〇年に大阪軍事病院が設立され⁵⁹、併設した軍医学校では、アントニウム・フランシスカス・ボードイン⁶⁰ (A. F. Baudin) を顧問として招聘し、軍医養成教育を開始していた⁶¹。翌七一年には兵部省内に軍医寮が設置され、陸海軍の医事を所掌した。軍医寮頭となつたのは元幕府の奥医師兼医学所頭取であった松本良順（明治四年に順と改名）であり、その出仕にあたっては、兵部大輔大村益次郎の死後、事実上兵部省を代表する立場にあった、兵部少輔山県有朋の強い希望によるものであった⁶²。

山県は、戊辰戦争当時北陸鎮撫総督参謀の任にあり、緒戦から戦死者が多数発生した状

況に對し、戦傷治療のため有能な医員の急遽派遣要望書を長州藩執政広沢兵助に要請した経験があった。^{6.3} 八月欧州視察から帰国した山県有朋は、戊辰戦争に幽閉処分を受けていた松本が、赦免後、早稲田に開院していた病院を自ら訪問し、「ようやく兵部省あるも、最も必要とする衛生部なし」として、松本に兵部省への出仕を要請した。^{6.4} 軍医寮頭となつた松本の進言により、七月五日には陸軍衛生機関の中央機関として兵部省内に軍医寮が置かれ、衛生部の官等が初めて制定されることとなる。

すでにフランスなどでは、病人看病男として兵士を看護兵として育成している方法もあったが、戦場で負傷兵の治療に医師とともにあたり、重症患者の包帯交換を担当し、重症患者の移送にも付き添える看護者を、未だ職業看護婦教育のない日本で、ウイリスが認識していたように「実施と訓練」のもとにいかに育成するシステムを作るのか、陸軍は軍医寮も一つの課題として取り組むことになる。

註

¹ 神崎清「会津戦争 婦人隊士顛末記」、『新女苑』一九三九年一〇月号初出、『J - novel』二〇一三年一月 三九頁。

² 山本八重（新島八重）（一八四五～一九三二）会津藩砲術家に生まれる。一八六五年には川崎尚之助と結婚。戊辰戦争後、川崎と離別。京都府の顧問格に就任していた兄覚馬を頼り、一八七一年に京都に移住。七五年には新島襄と再婚。新島襄永眠（一八九〇年）後は、日本赤十字社の正社員（一八九五年には日本赤十字社終身社員）となり、日清戦争、日露戦争に従軍。一九〇六（明治三九）年にはその功績により薫六等宝冠章を受ける。八七歳で永眠。

³ 新島襄（一八四三～九〇）江戸に生まれる。アメリカボストンに密航しアーモスト大学とアンドーヴァー神学校に五年間在籍。在学していた時、その人格と識見を認められ、一八七二年より岩倉使節団の文部大丞田中不二麿理事官の秘書・通訳として使節団に随行し、フランス、スイス、ドイツ、ロシアを訪問し、一八七四年に帰国するまで各国の教育制度の調査研究を行う。日本への帰国が許され、日本では宣教師として布教活動を行い、七五年に京都で「同志社英学校」を開校しキリスト教主義の教育を創始した。さらに医学教育の実現を目指すが断念、看護婦学校と病院の建設を目指し、八六年秋京都府より看護婦学校設置の正式認可を受ける。指導者にはアメリカからボストン私立病院看護学校校長のリンダ・リチャーズを招聘。毎年九月の第三月曜日に入学し、修業年限二年間で六月に卒業する「京都看病婦学校」を設立。指導者の下で実業務を通して看護を学ぶ、実地学習を主体とした看護教育を行った。一八八八年六月第一回卒業生四名を始めとして、一九〇六（明治三九）年の廃校になるまで、約八〇名の卒業生を出すなど、わが国の近代看護学の発展に寄与した人物でもある。

⁴ 看護史研究会『看護学生のための日本看護史』七五頁。一八八七年六月に有栖川宮妃殿下を初代総裁、会長鍋島侯爵夫人栄子をはじめとした皇族、華族の婦人達が發起人に名を連ねた「日本赤十字社篤志看護婦人会」が発足した。この発足に際しては、岩倉使節団の最初の女子留学生五人のひとり、山川捨松の功績が大きい。「日本赤十字社篤志看護婦人会」は、皇室と軍部の保護を背景に、やがて誕生（一八九〇年四月に日本赤十字社看護婦養成所創設）させる日本赤十字社救護看護婦のイメージアップを図るものであ

り、この組織は地方にも広がり、市会（長は知事夫人）、分会が上流婦人を中心に結成され、一通りの救急看護法の講習を実施して、戦時には役割を果たした。

⁵ 新島八重子「男装して会津城に入りたる当時の苦心」『婦人世界』第四卷第一三号初出、明治四十二年十一月、『J - novel』二〇一三年一月、一四—一九頁復刻）

⁶ 山川操子（正しくは操）とは、旧会津藩士山川尚江の礼嬢で、戊辰戦争当時籠城を指揮した山川大蔵（のちに浩、陸軍少将・男爵）や後年女子高等師範学校教授となる山川双葉子の妹であり、健次郎（帝国大学総長理学博士）、陸軍卿公爵大山巖夫人となる捨松の姉である。十七歳の時に戊辰戦争で鶴ヶ城で籠城を体験。数年後に旧会津藩士小出光照と結婚するが、光照は陸軍入りし佐賀の乱で戦死。その後操はロシアに留学し、フランス語をマスターし、宮内省御用掛となる。

⁷ 山川操子「十七歳にて会津籠城中に実験せし苦心」『婦人世界』第四卷第一二号初出、明治四十二年十一月、『J - novel』二〇一三年一月、二〇—二三頁復刻）復刻は、『婦人世界』に掲載された記事を全文再録されたもので、読みやすいように新字、現代仮名遣いに改められている。

⁸ 神崎「会津戦争 婦人隊士顛末記」五五頁。

⁹ 神崎「会津戦争 婦人隊士顛末記」五六頁。

¹⁰ 山川捨松（大山捨松）（一八六〇—一九一九）捨松は留学中にアメリカニューヘイヴン病院付属のコネティカット看護婦養成学校で二カ月間看護を学び帰国。捨松は陸軍大臣大山巖と結婚後、政府高官の婦人として高木兼寛が創立した有志共立東京病院（現在の東京慈恵会病院）を見学し、看護人に男性看護人しかいないことに疑問を感じ、看護婦養成所創設のための資金集めのために、一八八四年六月十二日から三日間「鹿鳴館慈善バザー」を開催し、八千円の収益を寄付。高木はその寄附金によりわが国初の看護婦養成所を開校した。捨松はその後も、看護婦という職業が欧米社会では高く評価されていることを説き、日本赤十字会にも働きかけ「日本赤十字社篤志看護婦人会」が発足した。捨松は、日本赤十字社に上流階級の婦人たちによる篤志看護婦人会が設立された時に、理事となり看護法や衛生学の普及や看護婦の地位の向上にも努めた。捨松に関しては、ひ孫にあたる久野明子著『鹿鳴館の貴婦人 大山捨松—日本初の女子留学生』（中公文庫、二〇一一年四刷）を参照。

¹¹ 久野「鹿鳴館の貴婦人 大山捨松」一三九—一四二頁。

¹² 久野「鹿鳴館の貴婦人 大山捨松」三五—三七頁。捨松は一九〇四（明治三七）年にアメリカの雑誌「トゥエンティース・センチュリー・ホーム」に英語で語った記事が掲載されており、義理の姉の壮絶な死を語っている。

¹³ 神崎「会津戦争 婦人隊士顛末記」三七頁。

¹⁴ 篤志看護婦人会は、一八八七（明治二〇）年五月十九日、有栖川熾仁親王妃董子の台旨により、有志の貴婦人、橋本綱常、石黒忠恵らが集まり、日本赤十字社の監督のもとに、篤志看護婦人会設立を決める。この時の集会では、妃殿下四名と貴婦人二五名が發起人となり、会員は日本赤十字社社員であり、「年齢族籍二拘ハラズ平素品行貞淑ニシテ患者看護ニ熱心ナル者」とし、「看護法救急法ノ如キ看護ニ必要ナル学術ヲ教授」して、卒業後には証書を授与することが定められた。その後、講習会の様子は『女学雑誌』などに掲載された。活動は一九四五（昭和二〇）年八月の終戦を機に廃会となった。これら篤志看護婦人会の発足過程やその後の活動の詳細は、吉川龍子『日赤の創始者 佐野常民』（吉川弘文館、二〇〇二年）一三三—一三九頁を参照。

- ¹⁵ 日本医史学会編「横浜軍陣病院の日記」(『日本医史学会雑誌』一七卷附録、一九四四年、思文閣出版、一九七八年復刻) 一一八二頁。
- ¹⁶ 日本医史学会編「横浜軍陣病院の日記」二頁。
- ¹⁷ 日本医史学会編「横浜軍陣病院の日記」四頁。
- ¹⁸ 中西淳朗「横浜軍陣病院の介抱女」(『日本医史学雑誌』第四二卷第四号、一九九六年、一五八—一五九頁)。
- ¹⁹ 中西「横浜軍陣病院の介抱女」一五八頁。中西は賃金が高い理由として、「肉体労働が一応認められた」結果であつたと考察している。
- ²⁰ 中西「横浜軍陣病院の介抱女」一五八頁。
- ²¹ 中西「横浜軍陣病院の介抱女」一五九頁。
- ²² コータツツイ『ある英人医師の幕末維新』三五〇頁。
- ²³ 日本医史学会編「横浜軍陣病院の日記」三六頁。
- ²⁴ 朝倉治彦編『幕末明治日誌集成第一巻』「平潟口総督日誌」(東京堂出版、一九八六年) 一三三頁。
- ²⁵ シンドル「日本陸軍病院にかんする報告」コータツツイ『ある英人医師の幕末維新』三四八—三四九頁。
- ²⁶ コータツツイ『ある英人医師の幕末維新』二四五頁。
- ²⁷ 鮫島『明治維新と英医ウィリス』一三九頁。初出は、『日本医事新報』第一二五四号、一九四二年)。
- ²⁸ 亀山『²⁷ 看護婦と医師』八六—八七頁。
- ²⁹ 玉虫左太夫(一八二二—一八六九)。玉虫に関してはその五代末の玄孫である山本三郎氏が著書『仙台藩士膜松世界一周—玉虫左太夫外遊録—』(荒蝦夷、二〇一〇年)で紹介している。
- ³⁰ 亀山『²⁷ 看護婦と医師』二〇—二二頁。
- ³¹ 沼田・松沢『西洋見聞集』一〇四—一〇五頁。
- ³² 亀山『近代日本看護史』²⁸ 看護婦と医師』二〇—二二頁。亀山はこの病院にいた女性の看護婦はシスターをさし、男女の性別によつて看護婦の使用を異にするのは、宗教上の病院によく見られる病院管理方法であると述べている。又、亀山は「フェドルヒヤ」の病院を訪ねたとして、地名のフィラデルフィアであると解説しているが、玉虫の記録三月二十五日に見られる「フェドルヒヤ」とは、ワシントンまで乗船した「フィラデルフィア号」の事である。
- ³³ 福島義言「花旗航海日誌」、日米修好通商百年記念行事運営会編『万延元年遣米使節史料集成』第三卷(風間書店、一九六一年)二七九—四〇〇頁。病院見学の記録は三三八頁。
- ³⁴ 木村鉄太『航米記』六卷(三)の四月十三日の記録。国立国会図書館所蔵。現代語訳は、高野『航米記』一四〇頁。
- ³⁵ 長尾幸作『亜行日記鴻目魁耳』日米修好通商百年記念行事運営会編『万延元年遣米使節史料集成』第二卷、一九九—二九九頁。
- ³⁶ 佐志傳、「解題『亜行日記鴻目魁耳』」「亜行記録」、『万延元年遣米使節史料集成』第二卷、四一三—四二〇頁。
- ³⁷ 長尾『亜行日記鴻目魁耳』二〇九頁。
- ³⁸ 牧山修卿(一八三四—一九〇三)武蔵に生まれる。江戸の出て漢学を学んだ後医業を志し、坪井信良に蘭学を学び、長崎に一年、適塾で二年間(一八五一—五三)学ぶ。適

塾生八木称平や村田蔵六（大村益次郎）らとは江戸でも親交があった。咸臨丸での米国からの帰国後、一八六九年には医学学校教授試験補となり、一八七四年まで医師教育に携わる。東京府病院副院長、東京地方会衛生委員、駒込避病院長などを歴任後、上野花園町に開業。牧山に関する先行研究には中崎昌雄「咸臨丸に乗っていたもう一人の適塾生 牧山修卿」『適塾』一九卷、一九八六年）三―二三頁。神前「適塾生『牧山修卿』と東京府病院」『適塾』二三卷、一九九〇年）一六九―一八九頁がある。

³ 長尾幸作『亜行日記鴻目魁耳』二月二十四日の記録には「役医四輩見舞来ル」、三月七日の記録には「吉岡勇平、山本金次郎、小杉雅之進、牧山修卿、大橋栄二・秀島藤之助右六名余カ病床ヲ尋来ル」とある。

⁴ 東京市役所編『東京史稿 救済篇』五三九頁。入院区分（一等から四等）に応じた看護人を配置。一等（一日一円、個室、看護人一人）、二等（一日三七銭五厘、一〇二人部屋、看護人一人／患者四人）、三等（一日三一銭二厘五毛、三〇四人部屋、看護人一人二部屋）、四等（一日二五銭、患者一〇人余人雑居部屋、看護人一人一部屋）。一等と二等は「看護人」三等・四等は看病人になっているが、その区別の詳細は不明である。

⁴ 福沢諭吉（一八三四―一九〇一）中津藩士。長崎及び緒方洪庵の適塾で蘭学を学ぶ。一回目は第一回新見豊前守正興の一行に、護衛艦咸臨丸で木村撰津の守の従者として随行。二回目は竹内下野守保徳一行に、通詞外国方翻訳局員として参加。三回目は、一八六七年に軍艦受取委員小野友五郎の翻訳方として二度目となるアメリカを訪問。

⁴ 富田正文編『福沢諭吉選集（第二刷）』（岩波書店、一九八〇年）二六頁。山口一夫『福澤諭吉の西航巡歴』（福澤諭吉協会、一九八〇年）三八―三九頁。

⁴ 山内慶太「福澤諭吉の見たロンドンの医療」（福澤諭吉教会編・発行『福澤諭吉年鑑二九』二〇〇二年）一〇五―一二九頁。

⁴ 『開知新編』は、福田作太郎がまとめた文久遣欧使節団の報告書二七冊のうち、プロシアとロシア二カ国の分だけを除き、順序を変えて殆んどそのまま取り入れて橋爪貫一が刊行した。『開知新編』は、一八六六年に刊行された福沢の『西洋事情』とともに、明治期の日本人の知識の啓発に大きく寄与したとされている。

⁴ 「福田作太郎筆記」（東京大学史料編纂所所蔵）全二七冊中、文久遣欧使節団に直接関係するものは、「英国探索」「荷蘭探索」「仏李葡探索」「欧羅巴行御用留（一）」「欧羅巴行御用留（二）」「欧羅巴行御用留（三）」「魯西亜探索」の七冊がある。「仏李葡探索」には、「仏蘭西国探索」「李漏生国探索」「葡萄牙国探索」といった見聞録が含まれる。

⁴ 「（荷蘭探索）・プロシア（李漏生国探索）・ロシア（魯西亜探索）・ポルトガル（葡萄牙国探索）」の六カ国における見聞の項目が、中野善達により一覧表として比較検討されており、ポルトガル以外の五カ国には「病院之事」が項目として挙げられていることが確認できる（松沢弘陽「解題 英国探索始末」沼田・松沢『西洋見聞集』五八―五八三頁）

⁴ 看護史研究会編『看護学生のための世界看護史』（医学書院、一九九七年）七八頁。イギリスでは一八世紀末から、大病院内で内科・外科などの専門医によって、解剖実習を基礎にした医学教育が開始されていた。一八五八年にはロンドンを中心に病院付属の医学校が一カ所に設けられ、同年には医師法が成立している。

⁴ 亀山『TV 看護婦と医師』二二頁。

⁴⁸ 中村赴『新説 明治陸軍史』（梓書房、一九七三年）九二―一〇九頁には「陸軍がたどった近代医学の道」と題されて、戊辰戦争での医師不足から陸軍が軍医育成を初めた経過が書かれている。

⁴⁹ 厚生省医務局『医制百年史』（ぎょうせい、一九七六年）資料編二二頁。
⁵⁰ 厚生省医務局『医制百年史』資料編一九頁。一八六八年二月。新政府は典藥少允（次官）高階経由、高階筑前介の連名による西洋医学採用の建議を採用した。

⁵¹ 国公立所蔵史料刊行会編『日本医学の夜明け』（日本世論調査研究会、一九七七年）二九八頁。一八六八年三月八日付「西洋醫術採用」の記録、「西洋醫術ノ儀是迄被止置候へ共自今其所長ニ於テハ御採用可有之被仰出候事」が、『公文類纂』で確認できる。

⁵² 一八六九年に「醫学校取調御用掛」に任ぜられた相良治安と岩佐純はドイツ医学の採用を強く主張、その結果一八七〇年、ドイツとの間に医学教師二名を三年契約で雇用する協定ができ、翌七一年にミュルレル（陸軍軍医少佐）、ホフマン（海軍軍医少尉）が東校医学教授として来日し、ドイツ式の大学制度に倣った医学教育が開始された。

⁵³ 国公立所蔵史料刊行会編『日本医学の夜明け』二九五頁。

⁵⁴ 国公立所蔵史料刊行会編『日本医学の夜明け』二九七頁。

⁵⁵ 山田顕義（一八四八―九二）長州。一八五七年に松下村塾に学ぶ。六二年に上京し藩主の跡継ぎである毛利定広の警護を務める。戊辰戦争では、陸軍参謀兼海陸軍参謀として勝利に貢献した。一八六九年の新官制施行により、兵部大丞に就任する。大村益次郎死亡後は、その継承者として兵部省確立に尽力した。岩倉使節団に兵部省理事として随行し各国軍制を調査。帰国後「兵は凶器ナリ」とした上申書を提出した。一八七五年には警報編纂委員長に就任し、後第一次伊藤内閣の司法大臣に就任。工部卿、内務卿、司法大臣などを歴任。伯爵。

⁵⁶ 木村紀八郎『大村益次郎伝』（鳥影社、二〇一〇年）三〇二―三〇三頁。

⁵⁷ 村田峰次郎『大村益次郎先生事績』（一九二四年刊、二〇一三年マツノ書店復刻）一〇六頁。

⁵⁸ 由井正臣・藤原彰・吉田裕『軍隊兵士』（岩波書店、一九八九年）一八一―一九頁。大村は一八六九年九月四日に襲撃され重傷を負い、同年一〇月一六日に早急に軍事病院を設立すべきとして右府三条実美卿に「朝廷之兵制」についての意見書を提出、十一月五日に死去した。

⁵⁹ 大阪軍事病院は、一八六八年四月に設立した横浜軍陣病院に次ぐ軍事病院であり、関西では最初の陸軍病院となった。

⁶⁰ アントニウム・フランシスカス・ボードイン (Antonius Franciscus Bauduin 一八二〇―一八八五) オランダのユトレヒト陸軍軍医学校におけるポンペの恩師。長崎養生所のポンペの後任として一八六二年に来日。三年半長崎の医学校で眼科学、生理学等の講義を担当した。一度帰国後、明治新政府移行後に再来日し、大阪仮病院に就職し、大村益次郎の右大腿部切断術を執刀した。大学東校でも二ヶ月講義を担当。

⁶¹ 坂井編『日本医学教育史』二五〇頁。明治新政府の医師への期待が示され、医師の教育課程の水準を均質化することと同時に、当初は医師という職種の国家経営における使命を明確にすることが指向された。

⁶² 小川・酒井『松本順自伝・長与専斎自伝』八二頁。松本の自伝には、山県有朋は松本が早稲田で開業していた病院を訪れ「然るに、未開の国、ようやく兵部省あるも、最も必要とする衛生部なし、しかして、このことをなさん者、他にその人なし、出でてこれを主宰することあらば、予必ずこれを任ぜん。」と説得されたことを記録している。

⁶³ 蒲原「明治戊辰戦争越後口軍病院の変遷（上）」四五―四六頁。四月二十九日付広沢兵助宛てに「前文略 先鋒を争候熱、死傷余分有之何とも遺憾（中略）、此辺は御推察被下度候（中略）、京師詰居上等之医師兩人 何卒繰合出張之儀御配慮奉願上候 寺内君（暢三） 其外へもよろしく御鳳声梅雨中別而御自重為国家専祈仕候」との書簡が残っている。

⁶⁴ 小川・酒井『松本順自伝・長与専斎自伝』八二頁。良順は会津若松城を去ったあと、米沢・鶴岡でリウマチの療養を行った後横浜に戻る。しかし明治政府により幽囚され、一八六九年一二月に赦免。金銭を工面し、計画していた私病院「蘭疇舎」を一八八〇年三月に開院していた。医員には、長崎での教え子であり当時浪人中であった橋本綱常を招き、ポンペ流の西洋式病院運営を実践した。

第Ⅱ部

陸軍看護制度創設期

第一章 看護制度の整備はじまり

一 看病人・看病卒の職務

一八七二年二月二七日に兵部省が廃止され、翌日二八日の陸軍省設置に伴い、軍医寮は陸軍省の所轄となる。明治時代における陸軍衛生機関の中央機関は、一八七一年から七二年までは軍医寮、七三年から七八年までは陸軍本病院、七九年から八五（明治一八）年までは陸軍軍医本部、八六年以降は陸軍省医務局と変遷し、陸軍軍事行政の医事・衛生を掌った¹。

七三年五月、初めて衛生部の官等が定められ、軍医官等も設けられ、会計部病院課の下士に看病人（一等看病人・二等看病人・三等看病人）が、兵卒には看病卒が置かれたことで、衛生要員の補充制度としての看護制度の整備がはじまる²。その切掛けは、軍医寮が行った病院附属兵制度創設についての上申であった。

陸海軍の医事を所掌することとなった軍医寮は、一八七一年一〇月、病院附属兵制度創設について、左記のような上申を行った³。

病院附属兵ハ大凡兵卒百名ニ拾人位ヲ撰附シ隊伍ヲナシ以テ「アンビランス」ニ附属シ病傷兵ノ護衛トナリ或ハ戦地傷創ノ者ヲ運輸スルモノニシテ平時ハ軍事病院ニ随從シ小給ノ役ニ充テ病者ヲ看護シ或ハ病院出入ノ番卒タルモノナリ徽章ハ帽衣ニ至ルマテ各国一般白地ニ赤十字ヲ誌スヲ以テ格トス右ハ軍事病院ノ附属ト仕平時傷創等ノ取扱ヲモ習熟致サセ置キ度存ジ候方今ノ処ハ先三四拾名モ有之候ハバ行足リ申ス可キト存ジ候間然ベキ御撰定ノ上當寮附属仰付ケラレ度尤衣食俸給等ハ都テ他ノ兵隊ト同様御給与相成度此段申出テ候ナリ

病院附属兵とは、欧州のホスピタルソルジャーを模した者で、兵卒一〇〇名に一〇名程度の割合で隊伍をなし、病傷兵の護衛、戦地傷創の兵士の運搬、軍事病院における病者の看護を行う者のことである。上申内容からは、軍医寮が平時に創傷の取扱も習熟させておきたい考えを持っていたことがわかる。

しかし実際には、病院附属兵制度はすぐには創設されず、兵团病院創設後も看病人は日給の傭人であり、その金額が各隊によって金額が違ふことの不都合⁴や、行軍の際の服装が不揃いのことでの不都合を生じていた⁵。そのため、軍医寮は看護兵に関わる諸制度の不備不整頓による混乱を避けるために、看護制度の整備に着手する。

病院附属兵制度が上申された七一年は、大阪、東北（仙台）、東京、鎮西（熊本）の四鎮台に兵团病院が創設された年であった。鎮台の他に、広島等の分営には養生所が設備さ

れ、七三年には東京に陸軍本病院が創設された。鎮台の各病院には衛生要員として、医師、薬剤師、看護要員が必要となり、医師は中央で募集した軍医が派遣された。

一八七二年一〇月、軍医寮が制定した「軍医寮職員令並事務章程」の一六条附録に「看病人設備法則」五項目が制定されたことで、看病人の採用規程が法規上看病人の雇用初めとなった。

- 一 軍陣病院ノ看病人ハ所謂病院兵ヲ使用ス可キナレトモ当今今未タ病院兵ノ設ケキヲ以テ別ニ看病人ヲ設クルコト左ノ如シ
- 一 体質強健ニシテ信実ナル者ヲ撰ヒテ身分ヲ本質ノ地方官ニ質シ看病人ヲ命シ病兵ノ看護ヲナシム但病兵十名ニ看病人一名宛ヲ以テ常トス然レトモ重症危篤ノ者ニ至テハ此例ニアラス
- 一 各屯営病院看病人ハ当番ノ銃卒ヲ以テ之ニ充ツルヲ法トスレトモ立法未タ密ナラサルヲ以テ粗漏ノ恐アリ故ニ当分看病人ヲ雇フテ看護セシム其雇料ハ隊ニ於テ彼ノ月金貳朱ノ内ヨリ出ス可シ但鎮台等他邦出張ノ向ハ藥種料金一分貳朱永二十文ノ内ヲ以テ之ニ供ス可シ
- 但他国出張先ニ於テハ各地方ニ於テ雇料ニ高下アレハ各地ノ宜キニ従フ可シ
- 一 看病人中優勝ノ者ヲ撰ンテ看病人長ニ命シ看病人ノ勤惰ヲ監督セシム看病人二十名毎ニ長一名ヲ定員トス
- 一 看病人若シ病者ノ伝染病ニ感冒セハ病中平日ノ日給ヲ賜ハリ一等軍医之ヲ治療シ藥劑ヲ賜ハリ若シ殞命セシ時ハ埋葬料金七両ヲ賜ハル但伝染病ノ全ク病兵ヨリ感受セシヤ否ヤハ医正又ハ一等軍医ノ印証ニ拠テ沙汰ス可シ

陸軍としては、軍陣病院の看病人には「病院兵」を使用する方針を持っていることがわかる。しかし、実際はその制度のないことから、身元の確認できる者に看病人を命じ、病兵一〇名に看病人一名という割合を標準として配置することが定められた。但し、重症危篤の場合はその限りでないとしているが、このように看病人の定数を決めたことは、ウイリスが「現在採用されている看護制度は、高くつき、しかも好ましくない」と指摘した、看護制度の不備に対する制度化といえる。一〇名の病兵に一名の看病人という配置は、病院附属兵制度の上申がその発想の基準となったかは不明であるが、軽症と重症では配置人数を区別する方針であったことは読み取れる。

さらに、同じく一六条附録には一三項目からなる「看病人心得」も制定された。これには看病人の職務と遂行方法、禁止事項を定めたものであった。

- 一 病者ヲ扱フニ万事深切懇篤ナルヲ要ス
- 一 藥ヲ服セシムルニ分量時刻ヲ違フ可ラス
- 一 病者ノ食事ハ当直医官検査済ノ品ニアラスンハ仮令病者切ニ求ムルモノアリトモ

之ヲ与フ可ラス

- 一 毎朝夏ハ六字冬ハ七字迄ニ病室ヲ清掃シ室中ヲ清潔ニ致スヘシ
- 一 当直医官朝暮四診ノ時ハ各受持病者ノ床頭ニ侍シテ詳ニ容体ヲ演述スヘシ
- 一 受持病者ニ変アラハ速ニ当直医官ヘ報告シ四診ヲ請ヘシ
- 一 病者撰生法ヲ守ラサルカ又ハ病院ノ規則ヲ犯スモノアラハ一応嚴責シ尚改メサルトキハ速ニ当直医官ヘ報告スヘシ
- 一 日録ヲ置キ春雨風雪等ノ天時ヲ記シ毎日朝第八字夜十二字寒暑鍼ノ度ヲ記載スヘシ
- 一 大小便其他凡テ不潔ノモノハ速ニ取除クヘシ
- 一 病者法ヲ犯スモノアリテ医官ヘ報告セサル時ハ受持ノ看病人モ亦罰アルヘシ
- 一 病死スル者アル時ハ丁寧ニ屍室ニ輸リ且其人病中所用ノ病被其外臥具ノ名目一々之ヲ記シ一等軍医ヘ出シ焼捨又ハ取捨或ハ取捨ニ不及ノ検印ヲ請ケ之ヲ本寮ヘ出スヘシ
- 一 看病人室ニ於テ酒賭並ニ淫犯ノ小説ヲ讀ミ或ハ雑話高声等凡テ禁止タリ
- 一 看病人長ハ看病人ヲ督責シ謹慎ヲ糺ス可シ

「看病人心得」では、看病人は親切懇篤であるという人間性はもちろんのこと、決められた時間に薬を投与すること、排泄物は速やかに処理し、病室内の清潔を保つこと、病状の変化などは医官に報告すること、日誌を書くこと、病人の入院態度に関する役割などが定められ、実際には多くの場合、当番の銃卒が看病卒の職務に付いた。

これらの内容は、松本がポンペに学び、病院で入院生活を整えるために新選組屯所で実践し、私病院「蘭疇舎」でも実践した西洋式病院でも実践した、入院生活を整え、治療の回復を促進する実践者として、看病人の職務内容が制定されていたことがわかる。

また、この「軍医寮職員令並事務章程」が定められた前年七一年七月には、廃藩置県が行われており、中央集権化が達成され、藩という考えがなくなった時期である。そのため、明治政府が建設し軍病院に働く看病人という立場は、医官―看病人長―看病人と命令系統に位置するものであり、病人と看病人という関係性は、幕末までに存在した武士階級における立場などに影響されるものではないという、政府の方向性が示されたものであったとも推察できる。

一八七三年一月一〇日、太政官番外無号布告として諸省府県宛に「徴兵令」が布告された。徴兵令は国民皆兵主義を標榜し、「国民軍ハ常備後備両軍ノ外ニ、全国ノ男子十七歳ヨリ四十歳迄ノ者、悉ク兵籍ニ載セ置キ、全国大挙ノ役アルニ方リ均シク隊伍ニ編入シ、以テ管内ノ守備ニ供スル者ナリ」と、徴兵の対象を明確に規定した。四月からは徴兵による最初の入営兵があり、翌五月には陸軍武官官等表の改正があり、会計部病院課の下士に初めて看病人が、兵卒には看病卒が位置づけられた。九月二四日には、太政官から陸軍武官服制が布告（第三二八号）され、下士官までの制服が整えられ、一等看病人から三等看

病人までは、会計部下士官の制服・サーベルを着用し、背囊を所持することが義務付けられていた⁹。

所属が会計部病院課の所属になった経緯は、病院管理は軍医の所轄外ということで、陸軍の制度を取り入れたフランス式に倣ったと考えられている¹⁰。すでに幕府時代、フランス顧問シヤノワヌの建白書では陸軍局を、第一局（召集、法規、教育）、第二局（大砲等の装備）、第三局（騎兵、馬飼育）、第四局（会計、運輸）の四局に分けることを提言しており、一八六七年当時は陸軍奉行を歩・騎・砲の三局に分けていた¹¹。その後、戊辰戦争では関寛斎の奥羽出張病院日記でもわかるように、征討総督―参謀―下参謀―三部局（各藩戦斗部隊、機械方、会計方）の、会計方の下に出張病院が組み込まれていた。食料の調達を始めとした医療材料の調達、看病人の補充業務も会計方の業務として行われていたその流れの中で、会計部病院課に看病人が位置づけられたと考えられる。

一八七五年一〇月一七日「陸軍病院条例」¹²（第七五条）¹³が制定された。この条例により、東京に陸軍本病院を置き各鎮台に鎮台病院を置く事、病院長の役割、軍医の階級などと共に、病院長―医官―看病人―看病卒と云う指示命令系統も定められた。さらに看病人、看病卒の職務もはじめて明文化された。その要点を次に列挙する。

看病人の職務

第十二条 病室とその周囲、浴室などの清掃、取り締まり

第十七条 各病室の監視、看病卒が看護を実施するが重病人に対しては看病人が率先して看護を行うこと

第三十二条 隊より支給された病者所用の管理

第三十五条 退院決定者の第一課への連絡

第三十八条 死亡者の埋葬時の取扱

第四〇条 亡くなられた方の死体の引き渡し

第四三条 失火及び天災時の病者の保護

看病卒の職務

第十二条 病室とその周囲などの清掃

第十七条 各病室における看護

第十九条 朝夕一回ずつの病室内の環境整備

第二三条 診察・食事前の空気の入れ換え

第二八条 散歩、入浴の時の監視

第二九条 病室の温度管理

第三一条 重病人のベッドサイドにおける面会の監視

第四〇条 霊安室における死体の管理

第四三条 失火及び天災時の病者の保護

さらに翌月の十一月一〇日には「看病人看病卒服務概則」¹³が制定され、一等看病人職

務（一四条）、二等看病人職務（一七条）、三等看病人職務（一七条）、看病卒職務（一六条）の階級ごとに職務内容が定められた（資料5）。

定められた職務内容を、定員・病棟管理・患者管理・人的管理・教育的管理・物品管理の項目別に一覧表にして比較したのが表3である。「陸軍病院条例」は、あくまでも陸軍本病院、鎮台病院における看病人・看病卒の指示命令系統と職務内容の制定がその目的であったが、「看病人看病卒服務概則」は、「行軍」を想定した職務内容が盛り込まれた。

二等看病人は患者の輸送を介助するが、職域としては、三等看病人が行軍の際には看病卒を率いて行軍することが定められている。看病卒は行軍の際、陸軍武官服制（第三二八号）によつて所持が義務付けられた背囊に外科道具や手術備品を納めて背負い、使用時に備えて所持している薬品や機械類は全て暗記しておく事が求められた。背囊には、三角布白布、サック入注射器及び薬液瓶、膿盆、巻軸帶、止血帶、呉氏副本、綿撒糸、海綿、脱脂綿、帽子針、錫製水呑、絆創膏の一二品目が所持されていた。

「看病人看病卒服務概則」では、「看病人設備法則」で病兵一〇名に看病人一名と定められた定員も、陸軍本病院、鎮台病院別に、各階級の定員が定められた。

一等看病人 陸軍本病院 二名

各鎮台病院 一名

二等看病人 看病卒二〇名ないし二一名に一名、各屯営病室に一名

三等看病人 看病卒八名に一名

看病卒 患者六名〜一〇名に対して一名、各屯営病室毎に一名

具体的にどのような管理体制であったのかを図に示したのが、図3である。「看病人看病卒服務概則」は看病人・看病卒の職務が定められただけでなく、病院、屯営病室で受け持つ患者の人数と、各階級における役割が明確になったことで、看護管理体制が確立されたのであった。

二 ナイチンゲールの看護管理方法の導入

黒澤嘉は、「看病人看病卒服務概則」の制定によつて整備された陸軍看護制度には、ナイチンゲールが提唱した看護管理が取り入れられていることを指摘した¹⁴。ナイチンゲールは、生涯で一五〇点を超える印刷文献と一二、〇〇〇通以上におよぶ手稿文献を残している¹⁵。一五〇点の著作のうち、英国陸軍に関する文献は一一編である。

ナイチンゲールはクリミア戦争に従軍した経験から、陸軍病院では物品管理責任をどうすべきか、必要な処置を患者に速やかにおこなうためには指示命令系統はどうあるべきかなどを、具体例を挙げて改革の必要性を唱えた¹⁶。日本でも翻訳され『ナイチンゲール著作集』全三巻が刊行されており、一卷にはナイチンゲールが一八五八年に書き上げた「女性による陸軍病院の看護」¹⁷と題された著作が掲載されている。

一八五六年に、イギリスでは陸軍大臣の命によりナイチンゲールが陸軍の軍病院の女性

組織の総監督として承認されたことで、医務官長はナイチンゲールと連絡を取り、命令を下すシステムとなった。まず、ナイチンゲールは平時であろうと戦時であろうと、将来陸軍病院の看護婦総監督になる人々の指針を決めた。その要点は次のような内容であった¹⁸。

1. 看護婦総監督は毎月その部下である「各病院」の監督ひとりひとりに、看護婦と患者とに関する出費の予算請求の概要を作成させ、それを調達官に提出させるようにすること。
2. 陸軍省は、女性看護スタッフに関連して作成された報告書類は、秘密報告書であつても看護婦総監督に提示すること。

3. 総監督は陸軍省と直接連絡を取る権限を持つこと。そして総監督の収支計算書は直接陸軍省に送ること。

またナイチンゲールは、フランスやイギリス各国の戦時医療の状態も紹介している。フランスでは、「連隊医療活動は、一両日ほど軍務を免除される程度の一過性の傷病のみを扱う。数週間も要すると思われるような傷病の場合は戦場にある師団野戦病院に送る。回復に数カ月も要すると思われるようなときには、作戦根拠地にある陸軍総合病院に送る」方法であり、イギリスでは「連隊が行く先々に連帯病院を作る。いかに連隊が実際に破壊されようと、それはもっぱら連帯組織の病院なのである」としている¹⁹。

ナイチンゲールは、陸軍で看護にあたるのは、優れた品性と能力を身につけた他の病院で婦長にあつた女性のみであり、患者の清潔、リネン交換を含めた病床周りの清潔、食事、与薬、外科医が行う処置以外の手当、医務官の指示を患者に徹底させることについて、責任があるとした。そして陸軍病院では、病院およびその中の人間に関する軍務上の業務（入院簿の記入や収支決算書などの書類の作成）に関する責任は、病棟長すなわち軍曹であるとしている。さらに、看護婦と患者の数は、看護婦一名が受け持つ患者数は二五名を超えてはいけないこと、陸軍病院では民間病院に比較して平時には外科病棟において重症患者の割合は低い傾向にあるが、戦時勤務で有能に働くためには訓練が必要であり、平時から重症患者の看護に慣れさせることが最も重要であるとし、「戦時勤務にあつては、可能な限り省力し、できるだけ少人数の有能なスタッフで優れた看護をするようにしなければならない」²⁰とその理由を述べている。

ナイチンゲールは、陸軍病院の病棟長は少なくとも曹長と同等の階級と報酬とを与えることが望ましいとの提言をしていた。病院管理について「病棟長すなわち軍曹は、病院およびその中の人間に関する軍務上の業務と、軍務上の業務―それはすなわち入院簿の記入、定期兵力報告書、答申書、収支計算書、その他の書類の作成等であつて、その中には、女性でないとうまくこなせない仕事、すなわち婦長の行なう仕事や患者の世話に関してのオーダーリーの監督あるいは与薬などの仕事は含まれていない」²¹と説明している。

我が国の陸軍では、会計部病院課の下士に看病人が位置付けられ、一等・二等・三等看病人は、それぞれ曹長、軍曹、伍長と同等となった。ナイチンゲールの提言と「看病人看病卒服務概則」の一等看病人・二等看病人の職務内容を比較すると、曹長と同等の一等看病人の職務は、医官・会計官の指示に従い病院諸般の事務を掌ることであり、ナイチンゲ

ールの云う総監督の仕事になっている。そして軍曹と同等の二等看病人は、病棟長の職務内容になっていると判断できる。一等看病人が掌る病院諸般の事務とは、収支決算書関係も含め、物品管理、人の管理（二等看病人以下の看病人と看病卒、患者の管理）など、病院運営全般にかかわるものであり、二等看病人が具体的な日常の治療の遂行に関する責任を担うものであった。

またナイチンゲールの云うオーダーリーの業務が看病卒の職務になっているなど、ナイチンゲールが提唱した陸軍病院の看護システムと、「看病人看病卒服務概則」の内容が相似していることは明らかであり、陸軍がフランス式の兵制を導入してはいたが、黒澤嘉の指摘しているように、陸軍の看護管理には、ナイチンゲールによって改革されたイギリスの病院管理体制を参考に、わが国の陸軍の階級に合わせた職務内容を制定したと考えるべきであらう。

一等看病人の職務内容は、戊辰戦争で奥羽出張病院の軍医長であった関寛斎が現地で調達することに忙殺された業務（付属医・看病人の確保、医療材料の補充、食糧の確保、運用資金の確保など）であり、その大変さに寛斎は「木梨準一郎参謀三春より帰路寛斎は病院会計監査官一名を増員されるように要望し、寛斎は治療に専念したいと旨上申」²² している。一等看病人を曹長と同等の階級に位置付けたことで、医官が治療の専念できる体制が作られたと同時に、病院運営に必要な管理体制が確立したのであった。この管理体制の確立は、戦場医療の課題の問題解決につながるものであった。

ナイチンゲールによって実践されていたイギリス陸軍の看護管理体制の情報は、岩倉使節団によってもたらされた可能性が高い。一八七一年一月から七三年九月までの約二年間、特命全権大使岩倉具視ら使節団員四八名、留学生五八名を加えた欧米使節団（以下岩倉使節団とする）が西米欧一二カ国を歴訪した²³。

岩倉使節団の発遣意図には、条約締結国に新体制政府として各国元首に国書を捧呈し、聘問の礼をとること、各国と結んだ条約（不平等）の改正の交渉、各国と同一一致の水準の国力を高めるため、欧米各国の政治・社会・経済・産業・軍事・教育・宗教・文物・思想等々、あらゆる分野に、各省理事官を分遣し実地調査を行い、わが国への摂取導入の可否と方法の研究をすることがあった²⁴。

岩倉使節団の大きな特色に、最初から調査専門の理事官を特設したことがあった。理事官は、各省派遣の専門別の調査官のことで、遣外使節構想を立案した「事由書」には、派遣省庁は、左院をはじめ、外務、大蔵、兵部、司法、宮内、文部、工部であり、日本行政の中央全官庁が理事官を派遣した。それら、理事官とその補佐役の専門的技能者群は、主に各省に關係する分野の実地調査に於いて重要な任務を担った。

文部省の理事官として任命をされたのは田中不二磨²⁵であった。一八七一年一〇月二二日に任命を受けると、就任早々、田中は欧米諸国の先進的な教育の成果を積極的に研究してくることを目的に、「調査予定項目」を上申した²⁶。「講究スヘキ目的」として挙げた「調査予定項目」は三二項目に挙がり、そのなかには、「病院法則之事」「貧院法則之事」「亜院

法則之事」「盲院法則之事」「癲院法則之事」「痴兒院法則之事」などがあつた。

田中は一八七二年より、アメリカ・アマースト大学に留学中の新島襄²⁷を秘書・通訳として私設秘書として参加させ、その新島の力を借りて、帰国後に復命報告と『文部省理事功程』全一五巻を提出し、アメリカ合衆国・イギリス・フランス・ベルギー・ドイツ・オランダ・スイス・デンマーク・ロシアにおける調査研究によって各国の教育制度を明らかにした²⁸。

この『文部省理事功程』は、各国の医学教育や病院に関する調査報告がなされたものであるが、その内容には各国の医学教育についての報告があるが、病院に関する報告はなされてはいない。この点については、小林も指摘しているが一八七五年七月に衛生行政が文部省から内務省に移ったことと関係があるのではないかと推察している²⁹。

具体的に病院見学をした記録は、大使に随行した太政官少書記官久米邦武（当時、権少外史）が、使節団が訪問した米欧一二ヶ国（ウィーン万国博物館を含む）と回覧を途中で中止したスペイン・ポルトガル両国の略記、さらにヨーロッパ総論、帰国日程を加えて編修した報告書『米欧回覧実記』全五巻（岩波文庫）で確認できる。

使節団は各国で、陸軍病院や海軍病院をはじめとして、国を代表する大病院や医学校付属病院、乳児院などを見学しており、見学場所を順に辿ると、華盛頓の精神病院（五月一日）³⁰、イギリスグリニッジの海軍病院（一〇月二日）³¹、巴黎府の軍病院（一月一八日）³²、伯林の大病院（三月一四日）³³、羅馬の軍病院（五月一五日）³⁴がある。病院見学で、どのようなことを見聞してきたのかを『米欧回覧実記』より抜粋し、表4にまとめた。あくまでも、この記載内容は、久米邦武氏の見聞した内容であり、病院の管理方法などの着いての詳細な内容は書かれていない。

岩倉使節団は軍事問題にも多大の関心を払っており、軍事に関しては陸軍省の山田顕義が軍事理事官として参加していた。山田は西洋諸国の政府内で陸軍省はどのような機構をもっているかを調査せよとの訓令を受けており、兵器庫、海軍公廠、軍需工場、陸軍士官学校などを訪問した³⁵。

一八七三年六月二四日に帰国した山田は、「兵力は国家の各部門と権衡を適宜にして設置すべきであり、法律決して欠くべからず」と考え、形の上での徴兵を廃し、知識・学問を身につけた常識ある者の徴兵を説き、帰国する前年（七二年一月九日）に公布されていた徴兵令の延期という意見を以ていた。山田は総論（上篇）と各論（下篇）から構成される「建白書」を提出する。その中で山田は軍医ノ良否が軍の強弱に影響を及ぼす事、陸軍会計の育成が緊要な課題であることを説いている。特に、鎮台の運営と会計の関係についての山田の考えが書かれ箇所を左記に抜粋する³⁶。

陸軍会計給養ノ国家ニ緊要ナル、素ヨリ論ヲ待タズ。算盤一粒ノ差、国家ノ興廃全軍ノ勝敗ニ関ス。実ニ精密ヲ尽サズンバアルベカラザル者ナリ。故ニ是ノ官ヲ撰ブヤ、只常人ノ材能アル者而已ヲ以テ是ノ任ニ当ツベカラズ、必ゾ数年兵隊ノ諸務ヲ学ビ、然後

此学ヲ講ジ從テ又其事ヲ習ハシメ、追次其職ニ任ズベシ。若シ不レ然シテ不学ノ人ヲシテ此任ニ当ラシメバ、必ラズ其帳簿上ノ加減乗除能ク其理ニ合スト〔雖〕ドモ、自国他国ノ比較ニ於テ加減乗除スルノ理ヲ知ルベカラズ。是ノ理ヲ知ルコト実ニ会計ノ至要ナリ。不レ可レ不レ学ナリ。

如レ此会計軍医器械火藥等備リ、士官下士官兵卒有リ、之ヲ総ベ之ヲ括シ、以テ国内ノ鎮撫ニ当テ又外況ノ変遷ニ応ズル者ヲ鎮台トス。一国ハ尚ホ一家ノ如ク、鎮台ハ尚戸壁ノ如ク、其家屋ノ形勢ニ依リ戸壁ヲ以テ大小諸室ヲ各別スル如シ。諸要具皆其用ニ適シ、事ノ有無ニ関セズ常ニ能ク之ヲ預備スル者ナリ。其費用出糶ノ事ト其常産入糶ノ會計、及区内人別ノ多寡、人別職務ノ如何、運送運輸ノ便及人民刑律ノ異同ヲ計算シ、其分別鎮台ノ区分ト其別ヲ同ジフセズンバアルベカラザル。各国（独佔）之ヲ區別スルニ、コルダルメー域ハジビジョンヲ以テ其地方陸兵ノ事ヲ統括シ、全ク陸軍省ト格別ノ者ノ如シ。国ニ鎮台ノ設アルヤ、其用ヲ知テ之ヲ施サバ其利実ニ之レヨリ大ナルハ無シ。其用ヲ知ラズシテ之ヲ施サバ只ニ其用ヲ為サバル而已ナラズ、其害又之ヨリ大ナルハ無シ。鎮台ノ事務、地方凡百ノ事務ト并行ヲ得ザレバ決シテ其妙用ヲ得ザルナリ。苟モ其妙ヲ得、恰モ文武両輪ノ如クナラシメベ全国ノ軍備十全ト云ツ可シ。

この建白書からは、会計官の育成は国家の緊要な課題であるが、その会計官の采配が勝敗にも影響することから、兵隊として数年庶務を学んだ上でその任につくことが望ましいとしている。そのように考えると、会計部病院課に所属する看病人、特に曹長である一等看病人は、その職務内容からしても、将来の会計官育成のため、数年間兵隊での庶務業務を現場の実践者として学ぶ配属場所として、一等看病人という階級が位置付けられたとも考えられる。しかし、本稿ではその根拠を示す資料は持っておらず、実際に一等看病人を経験した者が、その後陸軍の中でどのような役割を担ったのか、今後の研究課題で明らかに確認していく必要がある。

三 看護卒教育の始まり

看病人・看病卒の教育に関しては、「看病人看病卒服務概則」の「第一章 一等看病人職務」の第七條で「職務ノ余暇ヲ以テ二等看病人以下ニ看護ノ方法ヲ教導スヘシ」ことが明示された。しかし、看病人が学ぶべき具体的な看護の方法などは示されていない。

一八七五年、陸軍はわが国の先駆的な看護学教科書となる『陸軍病院扶卒須知』を陸軍文庫から発行する。『陸軍病院扶卒須知』の原著はオランダ医ファン・ジュエル、ファン・エセル共著³⁷とされ、一八七四年に、大阪鎮台病院の軍医、堀内利国、明石退蔵、副島仲謙、山上兼善、人見元常が翻訳し、翌年に陸軍省から発行された。

陸軍二等軍医堀内利国が書いた「題言」には、この本を翻訳した目的が書かれている。

我邦陸軍病院ノ設ケアル茲ニ五六年体裁略備ハル、然レトモ夫ノ看病ノ方法ノ若キハ之ヲ学習シテ而シテ実践スルニ非ス、唯前規ニ因習スル者ノミ是ヲ以テ、平時尚且疎漏ノ弊ナキト能ハス。況ヤ戦時ニ於テヲヤ其鹵莽ノ患想フヘシ。嘗テ聞ク軍医学校ニ於テ看護ノ教則ヲ立ント欲スト、而シテ諸君執筆未タ遑アラサルナリ

この題言から、陸軍では、平時より看護が疎漏なくできなければ、戦場では実践するとはできないので、軍医学校で看護の教則を立てることを望むが、未だにその体制は整っていない状況が読み取れる。そのため、大阪鎮台文庫に所蔵されていた『看護須知』と題された書物を見つけ、この書物によつて看護者の学科及び看護の方法を備えることができ、さらに軍医部においてこの書は至要の一冊であることを目指したものであった。

構成は七編構成で、解剖・衛生学・外科学・包帯学・救急諸病・中毒証・瀕死及死亡からなっており、戦場で必要とされる処置に関する知識と、技術を学ぶ内容になっていた。特に「死体処置」の項には「毫モ仮死ノ疑念アル者ハ先ツ救急ノ法方ヲ施シ以テ医員ヲ招待スヘシ。屍少クモ創痕ナキ者ハ之ヲ適宜ノ位置ニ撰シ生命尚ホ喚起スヘキヤ百法以テ之ヲ試ミサルヘカラス」とある。このことから、看護兵には、戦場で仮死状態の者を発見した際は、医員が来るまであらゆる救急の方法を試みることを求めており、その処置が施せる能力を身につけさせたいと考えていた。

同年、包帯法に関する書物『三角繃帯用法』³⁸も、同じく陸軍文庫から発行された。諸言を書いたのは「医学教育建白書」提出者のひとり、土岐頼徳（陸軍軍医）である。

軍医の足ざる時兵士互に傷せし場所に繃帯を施す簡便の法を示す者なり。既に一昨年独逸と仏蘭斯との戦争に、独逸の兵士は平生より能く之を習込たるゆえ大に助となるなり。希くは我国の兵士も平日より之を心得おき、万一の時之を施さば大に療治の助手となり又軍医の事缺をも補うに足らむ

普仏戦争でドイツが勝利をもたらしたその要因の一つに、平時より兵士が包帯法を訓練し身に付けていたことを挙げ、兵士が包帯法を身につけていることが戦場での治療の大きいに役立ち、さらに軍医の不足を補えると書かれている。この『三角包帯用法』には、附録として「三角繃帯図附」が存在する。この「三角繃帯図附」を見つけたのは、土岐と同じく「医学教育建白書」提出者のひとり石黒忠恵である。看護卒がフランス式の医療背囊を所持することが決まった当時、石黒は一個の包帯小包を手に入れる。小包は三角巾であり、戦場で兵士同士が互いに三角布を応用して創所を包帯している図が印刷してあるのを見つけ、これがドイツの外科医エスマルヒの考案した三角包帯用法図式であることを知る。そこで同様に、戦場で負傷兵が包帯法を施されている絵を銅板に彫り、数千枚印刷して軍医

や看護長らに配布したのが、三角包帯法の始まりとなる³⁹。

『三角繃帯用法』（資料6）には、元来兵士は背囊の中に巻木綿（巻軸帯の包帯）と海綿、綿撒糸を一包にして常備し、軍医の手の回らない時には相互に仲間に包帯法を施すことが書かれている。その内容は、看病人兵らが戦場に出るときの心構えにはじまり、三角巾の利点として創部の保護、副木の固定、止血などの使用に簡便であること、大きさを変えることで全身のあらゆる創部の処置に使用できることが説明された。特に銃創を受けた場合は、傷口は貫通した二ヶ所に穴が出来るため、看護兵は常に小さく束ねた綿撒糸や綿を三角布に巻き込んで準備しておくことが書かれている。

またウイリスが戊辰戦争に従軍した際、「副木一本あてがわれてなかった」と報告した副木の方法についても、戦場では銃や木の枝など身の回りにあるものを添木にして使用し、固定には三角巾以外にも背負っているランドセルの紐などを使用することなど、看護兵として戦場医療で負傷に対処できるような知識と技術が書かれていた。これが看護学教育における包帯法の始まりである。

『三角繃帯用法』には解説文のみが書かれており、巻き方は「三角繃帯図附」に書かれている絵を見ながら休日に各自で練習する、あるいは軍医・看病人が実際に行なうときにその処置方法を観察して習うことが書かれている⁴⁰。現在『三角繃帯用法』は靖国神社内偕行文庫に所蔵されているが、「三角繃帯図附」は、個人所有している数枚しか所在はわかっておらず⁴¹、看護史、医療史の貴重な教育教材である。そのため本稿でも資料6・図4・図5を資料として巻末に掲載した。

戊辰戦争によって戦時医療の課題が明らかになったが、明治新政府は近代的な健軍に向けた改革を行う、その中で徴兵令の制定に伴い、看病人・看病卒が誕生し、一八七五年には制定された「看病人看病卒服務概則」によって各階級の職務内容が定められ、看護管理体制の整備も整った。その体制の整備は、単に看病人・看病卒の仕事が明らかになったという内容にとどまらず、本病院、鎮台病院などの病院運営にも関わるシステムの整備であった。

註

¹ 陸上自衛隊衛生学校修親会編『陸軍衛生制度史（昭和編）』二頁。

² 陸上自衛隊衛生学校修親会編『陸軍衛生制度史（昭和編）』二三八―二四一頁、三五九頁。看病人・看病卒は一八七九年に軍医部の下士・卒となり、一八八八年には軍医部は衛生部に改められた。看病人・看病卒の名称も一八八三年五月には看護長・看護卒へ変更され、その後も衛生部の官等制度は逐次された。衛生部の兵種は一九三六（昭和一一）年に看護兵に、翌三七年には衛生兵となった。

³ 陸軍軍医団編纂『陸軍衛生制度史（明治編）』三二六頁。

⁴ 陸軍軍医団編纂『陸軍衛生制度史（明治編）』三二六頁。一八七二年二月九日「会計局より御親兵各隊保養所看病人日給の儀」により、各隊とも傭人看病人の日給は一日永百

文に統一された。

⁵ 陸軍軍医団編纂『陸軍衛生制度史（明治編）』三二六頁。一八七二年五月六日「諸隊医局小使の帽服に付軍医寮よりの伺」

⁶ 「陸軍軍医寮職員令並事務章程」一八七二年一月一日。内閣官報局『法令全書（第五卷―二）』（原書房、一八八九年刊本、一九七四年復刻）

⁷ コータツツイ『ある英人医師の幕末維新』二四五頁。

⁸ 松下『徴兵令制定史』一四〇頁。

⁹ 防衛ホーム新聞社『彰古館―知られざる軍陣医学の軌跡―』（防衛ホーム新聞社、二〇〇九年）一五一―一六頁。背囊はランドセルの始まりとなるもので、当時の内容品目は、三角布白布、サック入注射器及び薬液瓶、膿盆、巻軸帯、止血帯、呉氏副本、綿撒糸、海綿、脱脂綿、帽子針、錫製水呑、絆創膏の一二種類であった。

¹⁰ 黒澤嘉「明治期の陸軍看護システム」五二六―五二七頁。黒澤嘉氏は、フランスの経理が極めて経理を重要視しており、人・装備・被服など経理監督のための点検をする行事からうまれたものであり、それに倣ったのではないかとしている。

¹¹ 篠原宏『陸軍創設史―フランス軍事顧問団の影』（リブレポート、一九八三年）一五六頁。

¹² 『陸軍病院條例』（全七五條）一八七五年一月一七日、国立公文書館所蔵。

¹³ 『看病人看病卒服務概則』一八七五年一月一〇日、『第六類 太政類典』（太政類典・第二編・明治四年―明治一〇年）。国立公文書館所蔵。

¹⁴ 黒澤嘉「明治期の陸軍看護システム」五二九頁。

¹⁵ 金井一薫「ナイチンゲールの七つの素顔」（『綜合看護』二〇〇九年三月）四九―五八頁。ナイチンゲールの著作は、イギリス人ジャーナリスト W.J. Bishop とその秘書の女史 Sue Goldie によら『ナイチンゲールの開設著作目録』（一九六二年）として編纂された。看護に関する文献四七編、インドおよび植民地の福祉に関する文献三九編、病院に関する文献八編、統計学に関する文献三編、社会学に関する文献九編、回顧録八編、宗教および哲学に関する文献四編、その他二編に分類されている。

¹⁶ 「女性による陸軍病院の看護―平時および戦時の陸軍病院への女性による看護を導入する件に関する補助覚え書」（Subsidiary notes as to the introduction of female nursing into military hospitals in peace and in war. 1858）（湯楨ます監修『ナイチンゲール著作集』第一巻、現代社、二〇〇七年第二版）二五―二三八頁。また第一一条には、

「患者摂生法ヲ守ラサルカ或ハ規則ヲ犯ス者アラハ必ス懇切ニ忠告シ仍ホ改メサルトキハ之ヲ看病人ニ申告ス可シ」とあり、先に述べたようにナイチンゲールが提唱した、医務官の指示を患者に徹底させることについて、看護卒の職務内容に定められていることが確認できる。

¹⁷ 「女性による陸軍病院の看護」臼井坦子編訳代表『ナイチンゲール著作集』第1巻（現代社、二〇〇七年第二刷一〇刷）三九―一三八頁。Subsidiary Notes as to the Introduction of Female Nursing into Military Hospitals. 1858. (In) Selected Writings of Florence Nightingale. Compiled by Lucy Ridgely Seymour. New York: Macmillan Company. 1954 年。

¹⁸ 「女性による陸軍病院の看護」『ナイチンゲール著作集』六九―七一頁。

¹⁹ 「女性による陸軍病院の看護」『ナイチンゲール著作集』六一頁。

- ²⁰ 「女性による陸軍病院の看護」『ナイチンゲール著作集』一三五―一三六頁
- ²¹ 「女性による陸軍病院の看護」『ナイチンゲール著作集』六五―六六頁。
- ²² 齊藤編『寛斉日記』一八頁。
- ²³ 芳賀徹編『岩倉使節団の比較文化史的研究』思文閣出版、二〇〇三年、五頁。歴訪国はアメリカ・イギリス・フランス・ベルギー・オランダ・ドイツ・ロシア・デンマーク・スウェーデン・イタリア・オーストリア・スイスの一二カ国。
- ²⁴ 大久保『岩倉使節の研究』九三―九四頁。
- ²⁵ 田中不二麿（一八四五―一九〇九）岩倉使節団が米欧回覧中の一九七二年八月三日二学制は頒布され、田中は帰国後、『理事功程』で各国の教育制度を詳細に報告した。田中は一八七四年から八〇年まで文部大輔であり、その間七六年にも再渡米しており、それらの成果のもと七九年に教育令を発した。
- ²⁶ 影山昇「岩倉使節団での田中不二麿文部理事官と新島襄」愛媛大学教育学部紀要第一部教育学科（二五）、三三―五七頁。
- ²⁷ 新島襄（一八四三―一八九〇）一八六四年に国禁を犯してアメリカに密航、神学校で学んでいるとき、田中の私設顧問の資格で岩倉使節団に加わる。新島はヨーロッパ各国を見たことで、文明の基礎は国民の教化にあることを学び、結果、日本で純粋な宗教が発展するのを促進する手段としてキリスト教の高等教育期間を設立する。妻は戊辰戦争で会津若松城に籠城した新島八重。同志社大学の創立者。
- ²⁸ 大久保『岩倉使節の研究』一三五―一三六頁。田中は九月八日に米国へ部二冊、九月一八日には独乙国ノ部、十月三十一には「英国ノ部」を提出するなど、順次上申を重ねた。十五冊の内容構成は、影山「岩倉使節団での田中不二麿文部理事官と新島襄」五三頁の表―7に一覧表で知ることができる。「文部省理事功程」は後に六冊として刊行された。現在では、国立公文書館所蔵の岩倉使節関係簿冊が『大使書類』という総称でまとめられている。さらに整理上「原稿」・「原本」・「副本」に大別され、「原稿」のなかに「単行書」・大使書類原稿理事功程・文部省・一として所蔵されており、一から五までの五冊となっている
- ²⁹ 小林哲也『理事功程』研究ノート』（『京都大学教育学紀要』四四号、一九九八年）七五―一〇三頁。
- ³⁰ 久米『米欧回覧実記（一）』二五二―二五三頁。
- ³¹ 久米邦武編、田中彰校注『米欧回覧実記（二）』岩波書店、二〇〇七年、三七七頁。
- ³² 久米邦武編、田中彰校注『米欧回覧実記（三）』岩波書店、二〇〇九年、一一八頁。
- ³³ 久米『米欧回覧実記（三）』三二―三三二頁。
- ³⁴ 久米邦武編、田中彰校注『米欧回覧実記（四）』岩波書店、二〇〇五年、三二二頁。
- ³⁵ 大久保利兼『岩倉使節団の研究』（崇高書房、一九七六年）二七八頁。
- ³⁶ 由井正臣・藤原彰・吉田裕『軍隊 兵士』（岩波書店、一九八九年）九七―九八頁。
- ³⁷ 平尾『資料にみる日本看護教育史』n五頁。
- ³⁸ 陸軍文庫編『三角繻帯用法』（陸軍文庫、一八七五年）靖国神社内偕行文庫所蔵。諸言は陸軍軍医土岐籟徳が書いており、ドイツ人医師が口授したものを軍医試補多納光儀が訳して一冊の本とし、兵士に三角包帯と一緒に携帯することを計ったとある。その目的は、独逸の医師エスマルクが編み出した三角繻帯法をドイツの兵士が平時から練習し身に付けていたことが普仏戦争で大いに助かったとして、わが国の兵士も平素より練習し万一の時に実施することで治療および軍医の助けとなることを目指したことが書かれている。

³₉ 陸軍軍医団編纂『陸軍衛生制度史（明治編）』石黒忠恵「陸軍衛生部旧事談」一一頁。
⁴₀ 拙稿「『三角繙帯用法』と『三角繙帯図附』に学ぶ三角布繙帯用法のはじまり」（『看護
歴史研究』五号、二〇一〇年）三四―四三頁。
⁴₁ 筆者は、「明治六年陸軍本病院」と印刷された「三角繙帯図附」を一枚所蔵している。
世田谷区三宿の衛生学校「彰古館」の所蔵書物には、「明治一〇年大阪陸軍病院」と印
字された同「三角繙帯図附」が写っている写真があり、西南戦争時に大阪陸軍臨時病院
でも看護兵教育用に活用してたと思われる。

第二章 西南戦争と看護

一 「大阪陸軍臨時病院」と看病夫

一八七三年一月一〇日、太政官番外無号布告として諸省府県宛に「徴兵令」が布告された。徴兵令は国民皆兵主義を標榜し、「国民軍ハ常備後備兩軍ノ外ニ、全国ノ男子十七歳ヨリ四十歳迄ノ者、悉ク兵籍ニ載セ置キ、全国大挙ノ役アルニ方リ均シク隊伍ニ編入シ、以テ管内ノ守備ニ供スル者ナリ」¹と、徴兵の対象を明確に規定した。

制定と前後して行われた兵制改革では、全国が六軍管に分けられ、歩兵、工兵、砲兵、騎兵、輜重兵の五種類となり、各兵の団隊を編成して兵力約三万を有する陸軍編制の基礎が出来上がった。徴兵の服役年限は常備軍が三年、後備軍四年（第一後備軍二年、第二後備軍二年）の合計七年であった。

しかし、同時に第三章に「常備兵免役概則」²を設けたことで、徴兵忌避を生み出す結果を招いた。第三章の常備免役概則は、体格不良者（第一条・第二条）、陸海軍将校生徒（第四条）、官吏及び所定学校生徒並びにその修業生（第三条・第五条）、戸主及びその相続者（第六条・第七条・第八条・第十一条）、犯罪者（第九条）、家族中特殊の關係に有る者（第十条・第十二条）、代人料を上納する者（第六章第十五条）であり、徴兵令は家族制度を尊重し、家系の存続に関して考慮して、免役条項が規定されたことは明らかであった

つまり、戸主、戸主たるべきものの、戸主に代わるものすべてを兵役の対象外とした。さらに「官吏である」ことや「官公立学校に入学できる者」「代人料を上納できる」という免役条件に適う者は、殆んどすべてといってよい程、それは士族であった者の子弟であり、免役条項は特権支配層を保護する内容であった。免役条項に該当しない被支配階級にあたる多くの農民にとって、兵役は封建的賦役となった。国民皆兵を掲げる徴兵令が免役条項を掲げていることで、兵員の確保が困難な状況が生まれるだけでなく、徴兵忌避も減ることなく、徴兵令制定三年後の一八七六年の壮丁中の免役者は八割に及び、軍部は頭を悩ますこととなった³。さらに、上層階級や上級学校生徒を兵役から除外したことで、職業軍人以外に予備校将校を貯える道を閉ざし、常備兵力の向上を困難にするという状況を作り出した⁴。

陸軍では、鎮台六カ所、営所一四カ所、歩兵連隊一四（大隊四二）、騎兵大隊三、砲兵小隊一八、工兵小隊一〇、輜重兵隊六、海岸砲兵隊九とし、常備軍（三年）の服役を終了した者が第一後備軍（二年）、続いて第二後備軍（二年）に編入されるシステムを制定した。その結果として、平時人員三一、六八〇名、戦時兵力四六、三五〇名を確保することを目標としたが、七三年末の徴兵による兵員総員は、一五、三〇〇名に過ぎなかった。そのため、政府軍は壮兵（志願による兵士）に頼らざるを得ず、徴兵による兵員の確保は政府の

急務の課題となった。

そのような状況が改善されない中、一八七七年二月一日に起こったのが西南戦争であった。西南戦争の戦死者は、政府軍は六、八四三名（参謀本部編纂課編『従西戦記稿』陸軍文庫、一八八七年）、薩摩軍は六、七八五名（『西南戦争薩摩戦没者全名簿』）と記録されており、多くの負傷者に対して両軍ともに病院を設け、医師や看護者を派遣して治療と看護にあたった。

薩摩は本営を熊本に置くと、病院本部を川尻の延寿寺に置き、熊本城下各地に出張病院を置いた。そこで行われた看護活動に関しては、『西南戦争と薩摩の看護活動』（宮下満朗「敬天愛人第十六号」西郷南洲顕彰会、一九九八年）で、各地方の婦女を雇っていたことが確認されている。

政府軍は増加する負傷者を收容するため、四月一日「大阪陸軍臨時病院」（以下、「大阪病院」とする）を設立した。「大阪臨時病院」の設立場所の選定では、さまざまな条件の検討がなされた。戦場近くに支病院を各地に置くことは、医官の負担が大きくなるなどの問題が起こっており、すでに米国では南北戦争の時に、負傷兵の増加に応じて巨大な木造の仮病院を建設し、そこに負傷兵を收容して治療を施したところ、著しく速やかに治療効果が上がった例があった。検討にあたっては、戦地の近傍では衣食住の補充が困難であり、多数の負傷者は軍の進退を阻害する恐れがあるなどの要件を考え、戦地より遠隔の地に巨大病院を開設し、負傷兵を受け入れる方針がとられた。その結果、商都であり、物品に富み軍人の物品補充にも欠かないことから、兵站病院として数千の病者の受け入れも可能であるとの判断から、すでに征討陸軍事務所があった大阪での病院設立が決まった⁵⁾。

負傷兵は前線の仮繃帯所で治療を受けた後、「大阪病院」に搬送された。「大阪病院」で治療を受けた者の総数は八、五六九名、そのうち退院した者は四、八五五名、三月から七月までの五カ月間に入院した者は四、一六八名であった⁶⁾。負傷兵の多さに、陸軍では医官を臨時に雇い入れ、治療にあたった。「医官並二雇看病人姓名」には、軍医監佐藤進、一等軍医正石黒忠憲、副長二名、病院附医正六名、病室専務として軍医五名、軍医副一名、軍医補一〇名、軍医試補三〇名の他、「雇医」として一二名の医師名が書かれている⁷⁾。看病人に関しては一等看病人一名、二等看病人一〇名、三等看病人三九名の氏名が記録されており、その他「患者取締曹長」が一四名いたことが確認できる⁸⁾。

明治政府は、一八七〇年にはドイツ医学の採用を決定し⁹⁾、さらに七四年八月一日には、衛生行政機構の整備、医師開業免許制度の樹立、近代薬剤師制度の確立を目指し、「医制」（七六カ条）を發布し¹⁰⁾、医学分野の制度制定に向け動き始めていた。この「医制」は、医師の質向上を図る上から、医学教育の確立、医術開業医制度及び医師免許制度の制定、近代的薬剤師制度及び薬事制度の確立を目指して制定された。「医制」は、日本の医制行政の確立の基礎として、一八七二年九月に發布された「学制」と相まって、西洋医学に基づく医学教育を確立する目的があった。明治政府のこのような医事衛生制度の確立に向けた動きの中で、医学を体系的に学んだ医師が育ち始めており、医学を学ぶ者にとって西

南戦争は、貴重な戦場治療を学ぶ実践の場となった。また、医学教育の進歩に伴い、病院の管理、運営方法に関する規則の整備も進んでいた。

病院の管理方法は、前章で触れた一八七五年に制定された「陸軍病院条例」に基づき管理運営された。「大阪病院」の病舎は三〇棟が並列形に設けられ、内科外科に大別された。病舎は重病舎には患者四四名、軽症病舎には八八名の患者を収容した。三〇棟を五区に区分し、一区を六舎として、一区毎に軍医正一名、軍医以下四名、雇医凡そ七名、看病人二名、看病卒八一名が配置された。さらに一区六舎のうち、一舎を重病舎、五舎を軽病舎とし、重病舎には軍医以下一名、雇医二名、看病人一名、看病卒二一名を配置、軽病舎五舎には、看病人一名と看病卒六〇名配置が決められた¹¹⁾。

これら、看病人・看病卒の配置は、一八七五年に制定された「看病人看病卒服務概則」で定められた、「看病卒は患者六名、一〇名に対して一名」「二等看病人は 看病卒二〇名ないし二一名に一名」に基づいて配置されたものであった。実際にどのような配置となるかを図6に表した。軽病舎は八八名の患者を雇医一名、看病卒一二名が配置されたことになる。その計算では必要とされた看護者総数は、看病人一は〇名、看病卒は四〇五名にのぼった。

「大阪病院」に入院した患者の疾患名は戦場で負傷した外科系の患者だけでなく、脚気やリウマチなどの内科疾患患者もいた。一等軍医正石黒忠恵によって作成された報告書「大阪陸軍臨時病院報告摘要第一号」によると、入院した患者の傷病名は一二四症、入院治療を受けた八、五六九名のうち、負傷者は五、九九〇名で内科疾患の者は二、五七九名と、入院患者の約三分の二が内科的な治療を要する患者であった。疾患名の上位にあったものを表5にしたが、内科疾患名で最も多かったものはアジアコレラであり、実に八八七名が罹患し、四八二名が死亡している。石黒の報告では、九四二名の死亡者のうち、負傷による死亡者は三〇七名、内科疾患患者六三五名の死亡のうち、実に四八二名がコレラで亡くなった。コレラの流行は、戦地より凱旋した兵士から発症したものであった¹²⁾。

八月「大阪病院」に戦地より送られて来た患傷病兵からチフス患者が発症し、近くの寺院などを仮病院として伝染病の熱病室として治療にあたる体制をとった。九月二四日に西郷隆盛の死によって西南戦争は終息を迎えるが、その二日前に兵庫港に停泊中の帰還兵七名がコレラを発症した。そのため、伝染病の蔓延を防ぐために隔離病棟を設置することとなり、大阪陸軍臨時病院に属する病室は、臨時病院を本部とし、士官病室、第一、第三養生室、チフス病室、コレラ病室、神戸コレラ病室、西京コレラ病室、滋賀県コレラ病室の計一〇カ所となった¹³⁾。すぐに「大阪病院」では、軍医試補、看病人、看病卒は神戸コレラ病室に派遣されている¹⁴⁾。陸軍では徴兵で集めた兵士を戦場ではなく、伝染病による多くの死者を出したことは、多くの教訓を残した。

入院患者の衣服は淡青色の木綿で統一され、寒い場合は襦袢などが支給された。襦袢の交換は、重症患者は原則五日に一回、通常の患者は七日に一回、養生室患者は一〇日に一回と定められていたが、特に重症患者の場合は、病状により適宜考慮された¹⁵⁾。行なわれ

た看護の内容は、食事・排泄の介助、褥瘡予防・与薬・軟膏塗布・包帯交換・冷罨法の他、四肢切断術後の患者には一日二〜四回、一回一五〜三〇分の微温浴の介助があった。

入院患者の増加、仮病院の創設などで、「大阪病院」では臨時に医師や看病夫を雇入れる方針を取った。雇医は、新聞紙並びに門外に掲示して日程を定め、雇医の志願者を集めて試験を行った。雇医志願者には、姓名・年齢・学業履歴を確認し、理学科学、解剖生理、病理、薬剤学、内科外科の大意を試問するなどの試験を行って採用した。

「看病夫」もまた、雇医同様、新聞と門外への提示で志願者を募り、試験は一二等看病人一名、徒食看病卒一名で試験を実施、試験内容は、「体格」「読書」「扶卒須知衛生学及び看病人看病卒規則概則或は往復文通に差支ナキ者」であった¹⁶。合格した「看病夫」は日給金二五銭から一八銭で雇入れ、報告には一、五七六名の「看病夫」を日給で雇ったことが記録されている¹⁷。しかし、看病夫の中には一〜二日で解雇された者もいた。

陸軍は、一月ごろより入院治療の継続が必要な患者に関しては、雇医や看病卒を付けて、仙台、熊本、名古屋などの病院へ航路、陸路で搬送を開始する¹⁸。「看病夫」の中には包帯術を身に付けて、戦場に派遣された者もいたが、「臨時病院」の患者数が減少するに伴い、「看病夫」も解散となる。その際「大阪病院」では、看護方法に熟し、仕事に勉勵な者には、大阪陸軍臨時病院の名で「職掌ヲ勉学シ頗ル看病ノ方法ヲ得タリ」との「証書」(図7)を授ける方針をとっており、合計二五五名の「看病夫」に「証書」が与えられた¹⁹。その「証書」を与えられたことが、その後どのように生かされたのかは不明であるが、陸軍では有事における看護者不足に備えた一つの対策措置であったと考えられる。

陸軍での看護兵教育は、看護要員用の看護学教科書を作成してからわずか二年しか経っておらず、看護兵の育成には未だ不十分の状態であった。各鎮台病院には会計部より看病人看病卒が廻されていたが、包帯術をはじめ、看護の方法ができる者が少なく、西南戦争以前から、日々訓練しても尚不足する状態であると云う訴えは多く挙がっていた²⁰。そのため、実際に西南戦争で看護兵の需要が高まると、看護者不足は切実な問題であった。

西南戦争では、臨時で医師・看護者を雇入れる方針をとるが、看護者の場合は未だ職業看護婦の教育がなく、医師のように学業履歴を確認する方法がなかった。そのため、外科的治療を受けた患者の看護や伝染病患者の看護に携われる者として、進歩する医療を理解して技術が実践できる看護者を、如何に同じ教育水準で確保するかという課題に、陸軍は取り組むことになる。

二 博愛社による救護活動

西南戦争は、日本赤十字社の前身「博愛社」を誕生させた。熊本城の攻防戦や田原坂の激戦で、多数の死傷者が山野の放置されている状況が新聞で報道された²¹。西南戦争における看護者不足の状況に対して、元老院議員佐野常民²²は「博愛社」を創設し、反乱軍の

負傷兵にまで救護の手を差し出した。佐野常民は一八六七年に、パリ万国博覧会の赤十字の展示館で、敵と味方の別なく負傷者の苦痛を救う国際的な救護組織である赤十字が、一八六三年に創設されたことを知った。一八七三年六月には、ウィーン万国博覧会に参加し、各国で赤十字事業が広がっていることや、普仏戦争における負傷者救護の実際を知り、文明開化の象徴の一つとして人道的国際組織の発展が必要であることと、事業を拡張するためには平時の準備を行うことを学び、日本に於いても救護団体の設立を考えるに至った²³。西南戦争での負傷兵続出の報を知った佐野は、外国の王室や貴族のように、救護団体を立ち上げることを岩倉具視に申し出ていた元老院議員大給恒と連名で、設立請願書²⁴と五条からなる社則²⁵を四月六日に提出した。

それに対し、陸軍卿山県有朋の代理である西郷従道は、右大臣岩倉具視宛に「太政官へ議官佐野常民外一人博愛社設立ノ義御下問ニ付上申」²⁶を提出した。その内容は、此の戦いは国内の戦争であり、看病人は適当に整い治療には差し障りないので、救済の人員が派遣されても混乱を招くということと、結社の儀は善良であるが、平常から準備をしていなければ実現は難しいという主旨の者であった。これらの意見が陸軍内部に実際に存在していた結果であった。

しかし、佐野による山県有朋や有栖川宮への働きかけにより、五月三日有栖川宮に博愛社設立願書が聞き届けられ、五月二七日より、熊本軍団病院へ救護員（男性看護人）を派遣し、救護活動が開始された。西南戦争の救護に従事した博愛社の救護員は、一二九名（監督一名、監督補一名、司計二名、医員長一名、医員及び助手二三名、看護人役夫一〇一名）であった²⁷。

八月一日、「博愛社」は政府から正式に認可されたが、西南戦争の負傷兵の救護に携わることができた背景には、政府の中枢にいた岩倉具視が、一八七二年三月に、岩倉使節団で歴訪したスイスのジュネーブで、伊藤博文とともに赤十字国際委員会のスタッフ・モワニエに会い、赤十字事業についての説明を受けていた事実があった。

岩倉使節団一行は、一八七三年六月から七月にかけて、スイスのジュネーブに滞在し、赤十字国際委員会のメンバーと岩倉具視大使、伊藤博文副使、大山巖らが会合を持っていた²⁸。この面会は、負傷軍人救護国際委員会側が赤十字活動の詳細を日本の使節団に知ってもらいたいと考え、スイス滞在を好機ととらえ、極東から訪れた使節団に、赤十字活動を紹介すること目的として実現したものであった。

国際委員会が残した記録には、「日本が同条約に加入するには時期尚早であること、さらに日本軍の正規の衛生部隊を補助するための自発的な協力を呼びかける以前に、そうした軍の衛生部隊をきちんとした組織として整備するために、まだやるべきことが多く残っているということ、日本人として初めて認識された」²⁹とある。さらに、「日本の軍隊がヨーロッパ式に（それもプロシア軍制ではなくフランス軍制に拠って）組織されていくにつれて、今後各連隊には、外科専門軍医と移動野戦病院が配置されることでしょう。衛生部隊も現在、徐々に編成されつつあります」³⁰とある。確かに日本では陸軍内で衛生部隊

の組織整備が、国内でやっと始められたばかりであった。

岩倉が佐野の申し出に対してその設立願書を却下したのは、それは岩倉の意向と云うよりも、政府軍の衛生部隊が機能していると認識していた軍上層部の自負があったのではないかと考えられている³¹⁾。

岩倉と伊東が赤十字国際委員会(当時の名称は、負傷軍人救護国際委員会)のメンバーと何度も会談したその様子は、赤十字国際委員会の機関紙『Bulletin International』(国際紀要)第一七号(一八七三年一〇月)に掲載されている³²⁾。岩倉と伊藤は、赤十字の思想、活動を十分に理解した上で、日本の現状からは同条約に加入するには時期尚早と云っていた。その理由は、日本の正規の衛生部隊を幫助するための自発的な協力を呼びかける以前に、そうした軍の衛生部隊をきちんと組織して整備するために、まだやるべきことが多く残っていることを認識していたからであった。

岩倉と伊藤らの発言からは、赤十字に加入するにあたっては、西欧諸国と肩を並べるだけの軍隊を健軍し、その中で訓練された兵士による正規の衛生部がシステム化されていることが条件になると認識していたと考えられる。その点においても、陸軍で看護制度を整備する一つの目的には、赤十字に加盟するのに不可欠な条件をクリアすることが目指されたとも言える。

また岩倉具視が、博愛社の申し出を断った理由は、陸軍として負傷兵の救護体制に対してはすでに整備ができているとの認識があったからだとも言われているが、西南戦争の経験は、戊辰戦争でウィリスがパークスへの報告書で述べていたように「理論と実地訓練による看護者の育成」の必要性を陸軍が再認識する機会となり、同時に、有事における看護法を身に着けた者の確保対策についても、改革が迫られることになったのであった。

註

¹ 松下『徴兵令制定史』一四〇頁。

² 松下『徴兵令制定史』一六六―七〇頁。

³ 藤原彰『日本軍事史(上巻) 戦前篇』(社会批評社、二〇〇六年) 五七頁。

⁴ 藤原『日本軍事史』八六頁。

⁵ 石黒忠憲『大阪陸軍臨時病院報告摘要第一号』(陸軍文庫、一八七八年六月、国立公文書館所蔵) 三―四頁。

⁶ 『大阪陸軍臨時病院報告摘要第一号』一八頁。

⁷ 『大阪陸軍臨時病院報告摘要第一号』七〇―七三頁。

⁸ 『大阪陸軍臨時病院報告摘要第一号』七三―七四頁。

⁹ 新村拓『日本医療史』(二〇〇七年、吉川弘文館) 一二五―二二八頁。戊辰戦争で銃創を負った兵士に対する治療を行なったイギリス公使館付医師ウィリアム・ウィリスの功績により、明治政府はイギリス医学の採用に向けて動いていたが、明治二年に・医学取調御用掛に任じられた元佐賀藩医相良治安と越前藩医岩佐純の意見により、ドイツ医学の採用が決定した。

¹⁰ 厚生省医務局『医制百年史』一一―一二頁。「資料編」三六―四四頁。医制の草案は初

代医務局長相良治安が衛生制度編制の大綱を八十五条の「医制略則」にまとめ、二代目医務局長となった長与專斎が全文七十六条の成案をまとめたといわれている。

¹₁ 『大阪陸軍臨時病院報告摘要第一号』五七頁

¹₂ 『大阪陸軍臨時病院報告摘要第一号』三八―四〇頁。

¹₃ 『大阪陸軍臨時病院報告摘要第一号』五六頁

¹₄ 『大阪陸軍臨時病院報告摘要第一号』一三頁。

¹₅ 石黒忠憲『大阪陸軍臨時病院報告摘要第二号』（陸軍文庫、一八七八年、国立公文書館所蔵）七頁。

¹₆ 『大阪陸軍臨時病院報告摘要第二号』二五―二六頁。

¹₇ 『大阪陸軍臨時病院報告摘要第一号』六八頁。

¹₈ 『大阪陸軍臨時病院報告摘要第一号』一五―一六頁。

¹₉ 『大阪陸軍臨時病院報告摘要第一号』一三頁。

²₀ 「病院より看病人百拾名不足云々」陸軍省大日記「明治七年」〔防衛庁防衛研究所所蔵〕

²₁ 吉川龍子「明治期の赤十字看護教育」〔明治聖徳記念学会紀要〕復刻第五十号、二〇一三年）三八七―四〇三頁。

²₂ 佐野常民（一八二二―一九〇二）肥前国に生まれる。九歳で親戚の佐野家の養子となり、外科医を継ぐこととなる。養父は元藩主鍋島齊直に仕えていた。儒学を学んだ後、一度江戸に出るが、再び佐賀に戻り外科医の修行を続けた。一八四八根には適塾に入門、翌年には大村益次郎が塾頭を務めた。一八六五年パリ万博の使節団に佐賀藩から参加し、赤十字を知る。博愛社が設立に伴い、一八七八年には博愛社副総裁に就任。中央衛生学会長、大蔵卿、元老院副議長を歴任。日本赤十字社の改称された一八八七年には初代社長に就任した。

²₃ 吉川龍子『日赤の創始者 佐野常民』（吉川弘文館、二〇〇一年）六一頁。

²₄ 「博愛社ノ創立ト従軍ノ願出」明治十年四月六日、陸軍省大日記陸軍省大日記・西南戦役。

²₅ 「博愛社則」明治十年四月六日、陸軍省大日記・西南戦役。

²₆ 「太政官へ議官佐野常民外一人博愛社設立ノ義御下問ニ付上申」明治十年四月十九日、陸軍省大日記。

²₇ 川俣馨一『日本赤十字社発達史』（明文社、一八九八年）。七一頁。

²₈ 黒沢文貴「赤十字国際委員と岩倉使節団との邂逅」『軍事史学』第四十八巻第一号、二〇一二年）一二八―一三五頁。

²₉ 黒沢文貴「赤十字国際委員と岩倉使節団との邂逅」一三二頁。

³₀ 黒沢文貴「赤十字国際委員と岩倉使節団との邂逅」一三三頁。

³₁ 黒沢文貴「岩倉具視、伊藤博文と赤十字の出会い」〔日本歴史』七八号、二〇一二年）一〇〇―一〇二頁。

³₂ 黒沢文貴「岩倉具視、伊藤博文と赤十字の出会い」一〇一頁。

第二章 看護制度の第一次改革

一 「徴兵看病卒取扱手続」の制定

西南戦争後の一八七八年一〇月、陸軍病院では看病人・看病卒の不足に困り、陸軍省に徴兵適齢者を壮兵看病卒として採用することの採否を確認した。しかし回答は「看病卒は免役に属するものであり、服役期限は未定の者」¹ということであった。そのため、衛生部が民間人を募集して教育をするなどの対応をしていた。

陸軍は徴兵逃避がやまぬ中で徴兵連名簿の人数の少なさを嘆き、徴兵令の改正案として「輜重卒看病卒、諸隊職工を新たに徴集」²することを太政官に上申した。また、西南戦争の勝利は、結果として徴兵制度の確立をもたらしたが、免役条件が多く、市民平等、国民皆兵の根本精神に相反するものがあるとして、明治政府は二年後の一八七九年一〇月二七日、徴兵令の全部に亘って大改正（太政官布告第四六号）を行なった。

徴兵令の改正にあたって、陸軍省は、服役年限を七年から一〇年に延長（常備三年後備四年を改めて常備三年予備三年後備四年）³すること、補充兵役九〇日を一年に延長すること、輜重輸卒看病卒、諸隊職工を新たに徴集すること、免役概則に改めて制限を加え免役の概念を、終身兵役免除、平時兵役免除、一時徴募猶予に大別して整理すること、の四項目の原案を提示した³。その結果、徴兵令改正では、陸軍省が提示した項目に対して、兵役年限は常備軍三年、後備軍四年（第一後備軍二年、第二後備軍二年）の計七年であった規定を、常備軍三年、予備軍三年、後備軍四年の計一〇年に延長し、さらに、補充兵を新設して、常備欠員を補うために一年を期間とすることに改正された。

免役の概念に関しては、一八七三年に「常備兵免役概則」として第三章に独立して設けていた一二項目を、終身兵役を免ずるもの（第二七条）、国民軍の外兵役を免ずるもの（第二十八条）、平時において兵役を免ずるもの（第二九条）、平時において一年間の兵役の徴集を猶予するもの（第三〇条）の四つの場合に分けて設定した。さらに、代人料は、本年の徴兵該当者が金二七〇円の上納をもって免除されること、新たに平時免役にあたる者は金百三十五円を上納するときは、外兵役を免除することに改められた（第六四条）⁴。

この改正の中で免役条項の改正とともに注目されるのは、第三条に輜重輸卒看病卒、諸隊職工の徴集方法が第三条⁵に定められたことである。

第三条 輜重輸卒看病卒並ニ職工ハ各其志願者ヲ徵募スト雖モ、若シ不足スルトキハ、壮丁ノ身幹定尺ニ満タス、又ハ銃器ヲ執ルニ適応セサル者、或ハ合格ノ者ト雖モ、各自ノ職業ニ依リ便宜ヲ以テ諸兵ト同シク徴集シ、該役ニ服セシムルコトアルヘシ

看病卒並びに職工として徴集する者は、その服役は諸兵と同じとされ、不足するときには各自の職業を考慮して便宜を持つて服役に付かせることが制定され、服役年限は常備軍が三年、予備軍三年、後備軍四年の合計一〇年に延長された。

徴兵令が改正された翌一八八〇（明治一三）年一月、陸軍軍医本部長が中心となり、各鎮台の病院長、各営所連隊医官が東京に集められ、徴兵看病卒を徴集するための諸則の整備と、実現に向け、陸軍看病卒平時定員、徴集員数表、陸軍看病人看病卒概則、看病人看病卒心得、看病卒教授書草案の五項目の検討が始められる。これが看護制度の第一次改革の始まりである⁶。

そもそも看病人・看病卒の職域は、衛戍地勤務・隊付勤務・野戦衛生部隊勤務・機関等勤務に分けられ、職域によって充足のされ方や勤務内容は異なった。衛戍地勤務では、部隊等が恒久的に所在する場所に設けられた病院・病室に勤務。隊付勤務では、騎兵・砲兵・工兵・輜重兵などの部隊に配属され、戦時には部隊員の一人として出兵し、負傷兵の救護を任とした。野戦衛生部隊勤務は、戦時に際して編制され、戦時動員によって充足された。官衙など機関勤務は、軍の学校（軍医、獣医などの養成機関も含む）など平時機関の衛生業務に携った。官衙など機関勤務には、参謀本部、陸軍省、造兵廠、兵器本廠や技術研究所などの工場・研究機関も含まれた。隊付勤務の定員がはじめて示されたのは一八八〇年であり、歩兵連隊に三等看病人一名、看病卒三名とされた⁷。

一八八三年二月二〇日、「明治十六年徴兵看病卒取扱手続」（達甲第六号）。（以下「看病卒取扱手続」とする）が制定され、徴兵看病卒の召集方法、定員、教科と教授場所、教育期間、終了時の手続き、命令系統などが定められた（表6参照）。

この規則の制定により、徴兵看病卒は諸兵と同時に召募して住所の最寄の営所に入営し、基本訓練を三ヵ月受けた後、鎮台病院または屯営病院で三ヵ月間看護の方法について訓練を受ける教育方法、教育期間が定められた。計六ヵ月の教育修了時には、連隊長もしくは大中小の隊長、または病院長が熟否を検査し、その結果「二等看病卒」に命ぜられる育成システムが確立した。

教育内容は、第九条で一〇科目が定められた。まず第一教科の三科目（基本体操術、生徒徒歩教練、看病卒心得書）は、兵士としての基本訓練で学ぶ教科である。第二教科四科目（人体造構ノ概略、三角繃帯用法、看病卒背囊入緒品、患者運搬法）と、第三教科三科目（救急要法、繃帯撒絲ノ製造、繃帯通術）は、病院で三ヶ月間の訓練で学ぶものであり、臨床での実習が重視されるものであった。

さらに教育内容が決定されたことで、看護学教科書も整備され、教授用『陸軍看病卒教授主要原本並附録』と看病卒用『陸軍看病卒教授主要』が出版された。尚、陸軍ではその後も看護学教科書の改訂などを続けながら多くの教科書を発行した。その一覧は表7を参照されたい。このように、「明治十六年徴兵看病卒取扱手続」の制定により、教育内容・期間、教育場所、終了時の手続きが定められたことで、戊辰戦争からの課題であった理論と実践訓練による看護兵の育成が確立されたことになる。これが看護制度の第一次改革で

ある。

翌八四年五月二六日に、看病卒は看護卒に名称が変更された。六月には「明治十七年徴兵看病卒取扱手続」¹⁰が改定され、第九條の科目は大幅に変更され、学ぶ科目が一〇科目から一二科目に増えた(表6参照)。変更された科目は、「看護法」「伝染病者看護法」「救急法」「調剤法大意」が加わった。「伝染病者看護法」は、西南戦争でチフスやコレラ患者が発生し、隔離患者の看護が求められた経緯から、追加された科目であった。すでに西南戦争の二年後、一八七九年にはコレラ病予防規則が公布され、患者発生の届出、検疫委員の配置、避病院の設置・患者の標示および交通遮断・汚染物体の処分禁止・清潔消毒方法の施行・患者の死体の処置・官庁における予防方法などが規定されていた¹¹。

初めて定められた「看護法」の具体的な内容は、一八八八(明治二二)年に陸軍省より発行された『陸軍看護卒教科書第四版』で知ることができ、その内容は、「病者看守・病辱・病室温度」「消氣法」「浴法」「消毒法」「患者飲食」「睡眠」「体温測定法」「泄物」「瀕死及死後ノ処置」であった。この内容も、伝染病患者の看護などを想定し、消毒法や排泄物の取り扱いなど、根拠をもってルールに則り実践できる看護兵の育成を目指して盛り込まれたものであった。

定員については、「徴兵看病卒取扱手続」の第三條で「鎮台所在地ニアラサル歩兵隊ニ在テハ毎大隊二三人騎砲工輜重兵ノ各大(中)(小)隊ニ在テハ每一隊二一人トシ」と定められた。さらに、六鎮台病院における看護長看護卒の定員合計は「軍医部職官定員表中各地陸軍病院看護長看病卒定員別表」(以下、「陸軍病院看護長看病卒定員別表」とする)¹²で定められ、一等看護長八名、二等看護長二七名、二三等看護長一六名、三等看護長六七名となり、看護長の合計は一一八名、看病卒は五六八名が配置人員とされた。

看護制度の第一次改革が行われたことで、徴兵看病卒の徴集が可能となり、陸軍病院における看護卒の確保も可能となった。第一次改革によって、病院と各隊には徴兵看病卒を、官衙と学校には徴兵適齢者の者より壮兵看病卒を採用して配属することとなった。

この第一次改革により、一八八三年一月より徴兵看病卒の召募が開始されることになるが、看病卒には壮兵と徴兵の二様が存在することとなる。そのため、身分の違いや欠員時の補充や配属において不都合を生じることとなる。統轄に於いても、徴兵看病卒は鎮台司令官、壮兵看病卒は陸軍軍医本部長という違いがあり、任命補充上に関する法規がないため、看病卒一名の任命にもその都度軍医本部から陸軍省に伺いを立てなければ執行できない状況が続いていた。しかし、看護卒の陸軍軍隊内における教育体制が初めて整備されたことで、全国に配属される隊付き看護卒の教育水準の一定化が図られることとなり、看護制度の第一次改革の意義は大きい。

二 看護長・看護卒の増員計画

一八八一（明治一四）年一〇月二日、国会開設の勅諭が発せられたことで、明治政府の革新は急速に進められることとなる。国会開設が一八九〇（明治二三）年に決定したことで、内閣制、憲法發布、帝国議会の開設に向けた改革が、伊藤博文による憲法起草作業と平行して進展することとなった。陸軍も新政府態勢に伴うそのあり方を考え、桂太郎¹³が中心となり、陸軍省の官制を改革して¹⁴、強力な行政機構の確立を目指すこととなる¹⁵。

一八八二年七月二三日、壬午事変が勃発したことで、翌八月には参事院議長兼参謀本部長山県有朋は、「陸海軍拡張ニ関スル財政上申」で軍備拡張の必要性和軍事費の増加を建議した¹⁶。一月二四日には宮中に地方長官が集められ、軍備拡張と増税についての勅語が下された。政府は一二月に軍備拡張の予算について長期計画を立て、これに基づき一八八五年から一〇年間にわたる軍備拡張計画を策定した。計画は近衛と六鎮台の整備を企図したものであり、兵員は一八七四年に想定した定員と比較し、歩兵は二倍強、騎・砲・工・輜重兵なども大幅に拡張した案であった。

陸軍では、改革を進めるにあたり、後に将官となるべき人物一四名を選抜して欧州に派遣し¹⁷、軍事施設や大部隊の演習など、最新の軍事事情を实地に見聞させる計画を立て、一八八四年一月に大山使節団を結成して、欧州視察を行なっていた¹⁸。大山使節団帰国後、一八八五年五月には軍の大単位を師団に改め、師団編成実現のための改革に着手する。軍備拡張に向けた政策を推し進める任についたのは、五月に陸軍少将となった桂であった。陸軍は一八八五年三月、ドイツ参謀少佐クレメンス・メッケル¹⁹を参謀本部顧問として招聘し、兵制を従来のフランス式を排してドイツ式を導入、ドイツ陸軍に範を仰いだ統一組織体として再編制された。

しかし、陸軍が軍備拡張に向けた政策を始めるにあたっては、国の財政には余裕がなく、増税実現は困難な状態にあり、経費対策も重要であった。軍事予算の対国民総生産（GNP）比率は、明治大正を通じて三パーセント台が普通であり²⁰、軍事費の内で陸軍の経費は六〇パーセント前後が俸給、諸手当、旅費、糧食費、被服費などの人件費で占められた。一人当たりの人件費は海軍の約二倍以上になるが、陸軍は戦略的に兵卒の数を必要とするため、俸給は少なくても、兵員の多さから多くの人件費を必要とした²¹。そのため陸軍では、師団編制に必要な兵の確保は、同時に人件費の削減につながる方策を取る必要があった。

当時の日本は、西南戦争の際の軍事費調達のために行なった紙幣増発から、物価の騰貴と財政金融上の危機状態にあった。その状況の中で立てられた軍備拡張案は、一八八三年から八年間の総額六、七四〇万円にのぼる計画であり、一八八二年から一八八五年の財源は、酒造税と煙草税を増税し、新税を徴し国民の負担を増す政策であった。陸軍卿大山巖が、一八八二年一二月に提出した予算計画書「軍備皇張費取調書」には、一八八三年から

の予算と具体的な拡張計画が書かれている。少し長くなるが、次に引用する²²⁾。

明治十五年十二月軍備皇張之儀被 仰出、差向常備兵ヲ定数迄ニ増加可致、右費用ノ義ハ同十六年度ヨリ年額通貨百五十万円、同十七年度ヨリ通貨五十万円、同十八年度ヨリ猶通貨二百万円ヲ増シ都合通貨四百万円宛年々増加可相成ニ付、其兵員及費用予算取調可申出旨御内達之趣ニ依リ、造兵着手順序ノ計画、及之ニ係ル諸費予算ノ義ハ常時進達致置候通ニ有之、爾来右之計画ニ基キ、十六年度ヨリ仙台鎮台ニ歩兵二大隊砲兵工兵一中隊宛、名古屋広島両鎮台ニ砲兵工兵一中隊宛、各鎮台ハ看護卒若干名宛ヲ召募シ、其他陸軍大学校ヲ新設シ、後備軍司令部ヲ拡張シ、戸山学校ニ士官下士ヲ入校セシメ、射的体操ノ科業ヲ伝習セシメ、及山野砲ノ改造ニ着手シ、同十七年度ヨリ各鎮台ニ六師団ヲ置キ、歩兵砲兵兩隊ノ編制ヲ改正シ、又本年度ヨリ近衛二一師団ヲ置キ、歩兵砲兵騎兵三隊ノ編制ヲ改正ス。右之通師団ヲ置カレタルニ依リ、来ル二十一年度迄ニハ鎮台ニ歩兵二十四連隊砲兵六連隊、近衛ニ歩兵四連隊砲兵一連隊騎兵一大隊ヲ完備セシメ候教育ニテ既ニ着手致候。就テハ之ニ要スル士官下士ノ生徒ヲ年々増募シ、士官学校教導団ニ於テ教育セシメ、或ハ兵營ノ建築兵器彈藥被服陣具馬匹其他増員ニ係ル諸費不少、依テ十六年度ヨリ来ル二十二年度迄七ヶ年ニ割越經理スルモ、尚御下附金ニ対シ差引朱書之通致不足候付、不得止四月入営スベキ徴兵ヲ七月ニ繰下ゲ、或ハ四月満期除隊兵ヲ一ヶ月前乃至三ヶ月前帰郷セシメ、之ヨリ生ズル処ノ全員ヲ以テ補填シ、尚ホ不足ノ分ハ被服戰時備品ヲ以テ一時繰替支弁スル等種種繰合セ、漸ク増員兵ノ給養維持致候目的ニ有之、其順序等ハ詳ニ別表予算備考ニ掲ゲタル通ニ候。然ルニ今般御内議ノ如ク増加兵ニ対スル金額ノ内二百万円御減雜相成候得者維持ノ道無之候事。

陸軍は、徴兵による兵士の目標定数である四万人の充足をめざし、一八八三年一月には、八五年度より部隊増加費として、六年間毎年二百万円の追加支出が与えられることとなった。この額はさらに増加され、八五年以降は、合計四百万円をもって軍備拡張費に充てることとなり、定数四万人体制を可能とする財政確保の態勢は整えられた。しかし現実には、国の財政には余裕がなく、増額実現は困難な状態にあった。

大山は、一八八三年六月一日に「陸軍部内節儉ノ内諭」²³⁾を達し、予定の額内にて目的を達成することを述べている。大山は「陸軍部内節儉ノ内諭」と同時に「軍備皇張費取調書」を提出し、その中で一八八三年度より「各鎮台ハ看護卒若干名宛ヲ召募」する方針を立てており、「軍備皇張費取調諸表」（表8参照）には、一八八三年から一八八九（明治二二）年まで、看護長増員費と徴兵看護卒増員費を予算として計上されていた。

予算を組むにあたり、看護長・看護卒の人数の試算方法は、一八八三年七月に書かれた桂太郎の「戦時陸軍編制並其解説」²⁴⁾の第五表「六管鎮台補充兵第一予備徴兵第二予備徴兵人員表」で知ることができる。

第五表「六管鎮台補充兵第一予備徴兵第二予備徴兵人員表」の中で、看病卒の人員を第二軍管は四一名、第五軍管二八名、合計六九名としている。これらの人員換算の根拠は、同年二月二〇日に制定された「看病卒取扱手続」で定められた定員に基づくものであったと考えられる。第二表「六管鎮台常備予備両軍編制隊」²⁵に記されている各軍管の隊数に、「看病卒取扱手続」第三条で定められた定員「歩兵隊ニ在テハ毎大隊三三人騎砲工輜重兵ノ各大（中）（小）隊ニ在テハ每一隊二二人トシ」をあてはめたものが（表9）であり、中隊に二名を配置するとして計算をすると、桂の案とほぼ一致する。

大山が「軍備皇張費取調諸表」で看護長増員費と徴兵看護卒増員費を予算として計上した背景には、看護長・看護卒の不足という問題状況があり、師団編成に向けた隊付き看護長・看護卒の確実な定員の確保が必要であるとの認識があつた。また、対外戦争の想定にあつては、外地における負傷兵や病兵の救護方法の実際を考えた衛生隊の編制を確立する必要があり、同時に看護長や看護卒をどのように養成するか、具体的な養成制度の改革が迫られることになる。

三 一年志願兵制度の制定と看護長の確保

一八八三年二月二八日、徴兵令二回目の大改正が行なわれ、第一〇条に「年齢二十歳ニ滿タスト雖モ、滿十七歳以上ノ者ハ現役ヲ志願スルコト得」との条項が設けられ、これにより志願兵制度が創設された。さらに第一条では、

年齢滿十七歳以上滿二十七歳以下ニシテ官立府縣立学校（小学校ヲ除ク）ノ卒業証書ヲ所持シ、服役中食料被服等ノ費用ヲ自弁スル者ハ願ニ因リ一個年間陸軍現役ニ服セシム。其技芸ニ熟達スル者ハ若干月ニシテ帰休ヲ命スルコトアル可シ。但常備兵役ノ全期ハ之ヲ減スルコトナシ

という条項が定められ、一年志願兵制度が創設された。この第一条の一年志願兵制度は、看護卒を対象とし、官立府県立学校の卒業証書のある者で、経費を自弁できるものが一年志願兵として看護卒になることができるシステムであつた。

看護卒を対象とした一年志願兵制度以外に、経費を自弁する制度には、一八七四年に制定された士官学校条例（陸軍省布第三六九号）があり、士官生徒²⁶について「入学初二期年間ハ修学ノ費ヨリ被服食糧ニ至ル迄總テ官給トス」とされ、一八八一年七月の士官学校条例の改正（陸軍省達甲第一五号）では、士官生徒に官費生と自費生の二種が設けられていた。自費生は「集学費用及ヒ寢具ヲ除ク外被服食料ノ費用ハ一切之ヲ上納セシムルモノ」とされ、一八八三年の納金額は一年百円内外であつた²⁷。八四年・八五年は、一ヶ月八円であり、これは当時の経済水準ではかなりの高額であり、自弁費用が収められたのは地方

の地主か資産家の子弟など、有産者や上流階級に限られた。看護卒を対象とした一年志願兵に対して経費自弁の費用として提示されたものも、同額であったのではなかったかと考えられる。しかし実際には、該当者は免役制や猶予制にかくれて、一年志願兵制度による看護卒志願を願ひ出る者はほとんどいなかった²⁸。

徴兵令は、憲法発布一ヶ月前の一八八九年一月二二日に三回目の改正が行われ、法律第一号として発布されたが、徴兵令が改正を重ねるその過程で検討されたポイントとして、加藤氏は、左記の三点を指摘している²⁹。

一つは、免疫条項を漸次減らして人材のプールを大きくすること、二つめは兵營で三年間の教育・訓練を終えた兵士に関して故郷に帰してからの半拘束期間を延長すること、三つめは戦時増員できるような予備将校をたくさんつくること、である。さらに、戦時に必要とされるのは兵士ばかりではなく、戦時の第一線の指揮に立つべき将校（少尉以上、それ以外の野戦隊、後備隊などの指揮官、軍医を確保しなければならなかったとしている³⁰。軍医の育成と確保という問題は、医師資格制度により医師教育は進んでいたものの、軍医は軍陣外科学などの知識と実践の治療力が必要とし、その育成には時間を要した。

また、西南戦争で経験した衛生要員の兵卒となる看護卒不足に対しては、一八八三年二月二〇日に制定された「明治十六年看病卒取扱手続」により、前項で説明したように「二等看病卒」に任命できるシステムが確立され、補充制度の整備は着々と進められていた。しかし、未だ衛生要員の下士（看病人）階級の育成システムは存在せず、そのような状況の中で制定されたのが、第一条の看護卒を対象とした一年志願兵制度であった。

陸軍が一年志願兵の対象を看護卒とした目的は、一八八五年四月四日に大山巖によつて提出された「徴兵令第十一條二掲クル一箇年志願兵中本年入営ノ歩兵並ニ看護卒取扱手続左之通相定候條此旨相達候事」（全十項）（以下「徴兵令第十一條一箇年志願兵看護卒取扱手続」とする）³¹に盛り込まれており、制定目的を知ることができる。その要旨を左記に抜粋する。

第一項

・・・(略)・・・看護卒ニ在テハ徴兵看護卒取扱手続第九條ノ第一教科ノミヲ該隊ニ於テ教習セシム可シ

第五項

看護卒志願者ハ徴兵看護卒ト共ニ之ヲ為サシメ而シテ徴兵看護卒取扱手続第九條ノ第一教科ヲ卒レハ之ヲ該地陸軍病院ニ附屬セシメ同條第二第三教科ヲ教習スルノ後其進歩ノ程度ニ從ヒ適宜ノ學術ヲ教授ス可シ

第七項

志願兵中品行方正勤務勉勵ニシテ技芸ニ熟達シ下士ノ任ニ堪ユ可キ者ハ満期若クハ帰休ヲ命スルノ際歩兵ハ聯隊長看護卒ハ病院長下士適任証書ヲ附典・ス可シ又教育上拔群ノ結果ヲ得タルモノハ歩兵ニ在テハ聯隊長看護卒ニ在テハ病院長ヨリ鎮台司令官ニ具狀シ許可ヲ得テ士官適任書ヲ附与ス可シ

第八項

鎮台司令官士官適任書附与ノ具狀ヲ受クルトキハ・・・(略)・・・看護卒ハ其

軍医本部長ニ移牒シ三等看護長ニ任スルノ後之ヲ許可ス可シ

第九項 軍医本部長ハ前項鎮台司令官ノ移牒ヲ受ケ若クハ東京陸軍病院長ノ具狀ヲ

受クルトキハ陸軍卿ノ許可ヲ得テ三等看護長ニ任ス可シ

(傍点筆者付記)

この条例の中で注目したいのは、「下士適任証書ヲ附与」することと、「三等看護長ニ任ス」方法が定められたことである。前章で説明したように、「明治十六年徴兵看病卒取扱手続」の第九條で看護卒が学ぶ教科として規定された結果、兵士としての基本訓練を第一教科として三ヶ月間学んだ後、陸軍病院で第二・第三教科を三ヶ月の実地訓練で看護法を学ぶ教育システムが確立されていた。看護卒志願者と徴兵看病卒とは、このように同じ教育システムで学ぶが、この一年志願兵制度では修了後の昇任に違いが生まれた。つまり、徴兵看病卒は「二等看護卒」に任じられるのに対し、第一条による看護卒志願者は下士階級である「三等看護長」に任じられることが可能となった。

さらに、「志願兵中品行方正勤務勉勵ニシテ技芸ニ熟達シ下士ノ任ニ堪ユ可キ者ハ満期若クハ帰休ヲ命スルノ際」に、病院長が「下士適任証書」を附典するシステムができた。

一八八三年の徴兵令改正における一年志願兵制度の制定目的は、松下氏によると、比較的学識を要する看護卒を得る目的であり、予備役幹部養成のためではなかった、としている³²。しかしこの制度の導入目的は、単に看護卒を補充する制度ではなく、「明治十六年徴兵看病卒取扱手続」に基づいて看護の理論と実践訓練を受けた看護者を、戦時に必要とされる、看護兵を指揮する下士階級の「看護長を確保するシステム」を構築することであった。

看護長の役割は、一八七五年制定の「看病人看病卒服務規則」(表3参照)で定められており、三等看病人(明治一七年に三等看護長に変更)は、病院では看護卒八名を束ねる役割であり、戦時には二等看護長に代わり行軍に従い、看護卒を指揮するという重要な役割を担う者であった。行軍に従う三等看護長は、有事に衛生隊を編成する際には欠かせないポスト役割であり、陸軍としては、三等看護長の下士適任書を授けるシステムを作ることは、加藤が述べているように、戦時の人材のプールに有効な手段であった。

一八八三年の徴兵令第一条の改正にもない、大山は一八八五年に「一年志願兵看護卒取扱手続」を制定し、同年、一年志願兵制度による看護卒志願者の召募を実際に開始した。しかし、実際は一年志願兵で看護卒に応募してくる兵士は甚だ少なく³³、さらに看護長・看護卒養成に向けた取り組みを続けることとなった。

註

¹ 陸軍軍医団編纂『陸軍衛生制度史(明治編)』三二八頁。

² 黒澤嘉幸「明治期の陸軍看護システム」五三三頁。

- 3 加藤『徴兵制と近代日本』九〇頁。
- 4 松下『徴兵令制定史』四七四―四八四頁。
- 5 加藤『徴兵制と近代日本』四六―四七頁。
- 6 陸軍軍医団編纂『陸軍衛生制度史（明治編）』三二八頁。
- 7 黒澤嘉幸「明治期の陸軍看護システム」五二三―五四二頁。
- 8 「明治十六年徴兵看病卒取扱手続」（送乙大五八九号）一八八三年二月二〇日（国立公文書館所蔵）
- 9 拙稿「陸軍看護教科書―明治五年から明治二十三年まで―」（『日本看護歴史学会誌』第二六卷、二〇一三年五月）七九―九三頁。
- 10 「明治十七年徴兵看護卒取扱手続改正」（明治一十七年六月二五日送乙第二五四〇号国立公文書館所蔵）
- 11 新村拓編『日本医療史』（吉川弘分館、二三二頁）。
- 12 一八八三年五月一七日、内閣漢方局『法令全書（第十六卷―二）』（原書房、一九七六年）九八六―九八八頁。
- 13 桂太郎（一八四八―一九一三）長州藩士。戊辰戦争に参加では後方支援に従事。明治維新後は、横浜語学学校で学んだのち一八七九年から三年間私費でドイツ留学を果たす。普仏戦争（一八七〇―七一）のドイツの圧倒的勝利に留学先をドイツに変更し、ドイツの軍事システムを学ぶ。帰国後は山形有朋と陸軍の創設に係わる。一八七五年（二九歳）の時にドイツに公使館武官として渡欧、七八（三二歳）年に帰朝し、中佐で参謀本部管西局長に就任する。八四年に大山巖陸軍卿に随行して三度目の渡欧をする。八五年に帰国後は、少将、陸軍省に総務局に就任。八六年には陸軍次官に昇進する。陸軍大臣を歴任後、一九〇一（明治三四）には首相に就任し日英同盟を締結、日露戦争で勝利も治める。文部大臣、大蔵大臣、貴族院議員、元老、内大臣、外務大臣。
- 14 上法快男『陸軍省軍務局史 上巻 明治・大正編』（芙蓉書房、二〇〇二年）九六―一〇一頁。初代陸軍大臣は大山巖、一八八六年二月に初代事務次官に桂太郎が就任し、軍区、人事局、輜重局の廃止を行い、陸軍次官のポストを設けて桂は自ら就任した。その後、一八九〇年三月に本格的な改革に着手し、統制的調整的部局として「軍務局」を新設、省中には軍務、会計、医務の三局と、法官部を置いた。医務局には、第一、第二の両課を置き、第一課は軍医監一名を課長とし、教育、被服、衛生材料などに関する事項を、第二課は、一二等軍医正一名を課長として、衛生部の戦時事務、軍医学校、衛戍病院、報告、統計等の事項を司った。
- 15 上法『陸軍省軍務局史 上巻』八九頁。
- 16 松下芳男『改訂 明治軍制史論（下）』（国書刊行会、一九七八年）二六―四八頁
- 17 篠原宏『陸軍創設史 フランス軍事顧問団の影』（リブプロポート、一九八三年）四一七頁。メンバーは、大山巖ら十五名。大山以下、三浦梧桜（士官学校長、中将）、野津道貫（東京鎮台司令官、少将）、橋本綱常（陸軍病院長、軍医監）、川上操六（近衛歩兵第一聯隊長、大佐）、桂太郎（参謀本部管西局長、大佐）、小池正文（会計局副長、会計監査）、矢吹秀一（海防局員、工兵少佐）、村井長寛（砲兵大隊長、砲兵少佐）、清水俊（総務局庶務課長、歩兵少佐）、小阪千尋（陸軍大学校副幹事、教授、参謀大尉）、馬場命英（士官学校中隊長、歩兵大尉）、伊地知幸介（砲兵大隊副官、砲兵中尉）、野島丹藏（東京鎮台付歩兵中尉）、保賀致正（会計局付三等軍吏）。
- 18 宇野俊一校注『桂太郎自伝』（平凡社、一九九三年）九七―九九頁。
- 19 クレメンス・ウィルヘルム・ヤロプ・メッケル（Klemens Wilhelm Jacob Meckel）

八四二（一九〇六）ドイツケルンに生まれ、一八六七年にプロシア陸軍大学校を卒業した。普仏戦争に参加後、勲章を受章している。のちに陸軍大学校兵学教官となる。著書に『戦術学』（一九七四年）、『兵棋入門』（一八七五年）、『帥兵術』（一九八一年）があり著名な戦術家であった。日本政府のドイツ兵学教官派遣の要請により、参謀総長モルトケの推薦により来日。一八八五年三月十八日陸軍大学校へ契約期間二年間の月給は四五〇円。一八八六年からは別段手当として月二五〇円が支払われた。一八八八年三月に帰国が一ヶ年延長され、別段手当として月二五〇円が支払われた。一八八八年三月に帰国。
²⁰ 熊谷光久『日本軍の人的制度と問題点の研究』（国書刊行会、一九九四年）一〇一頁。
²¹ 熊谷『日本軍の人的制度と問題点の研究』一〇四―一〇七頁。
²² 「軍備皇張費取調書」伊藤博文『秘書類纂一〇 兵制関係資料（明治百年史叢書第一九卷）』（原書房、一九七〇年）二六〇―二六一頁。
²³ 「陸軍部内節儉ノ内諭」伊藤『明治百年史叢書第一一九卷』二五八―二五九頁。
²⁴ 「八六一五 戦時陸軍編制並其解説」「戦時陸軍編制並其解説附表六枚」「桂太郎関係文書目録八六 桂太郎伝記参考書（十）」（明治一八年六月）（国立国会図書館憲政室蔵）。
²⁵ 「六管鎮台常備予備両軍編制隊」「桂太郎関係文書目録八六 桂太郎伝記参考書（十）」（明治一八年六月）（国立国会図書館憲政室蔵）。
²⁶ 広田『陸軍将校の教育社会史』三二頁。陸軍士官学校條例が出され、一八七四年に士官学校が発足し、一八七〇年に士官候補生制度を導入するまでの陸軍士官学校生徒を通例では「士官生徒」と呼んだ。
²⁷ 広田『陸軍将校の教育社会史』四八―四九頁。
²⁸ 陸軍軍医団編『陸軍衛生制度史』三二五頁。一八八五年より一年志願兵中看護卒志願者を召募するがその人数は甚だ少なかった。
²⁹ 加藤『徴兵制と近代日本』八二頁。
³⁰ 加藤『徴兵制と近代日本』八二頁。
³¹ 「徴兵令第十一条ニ揚クル一箇年志願兵本年入営ノ歩兵並ニ看護卒取扱手続左之通相定候條此旨相達候事」内閣官報局『法令全書（第十八卷―二）』（原書房、復刻原本明治二十三年刊、一九七七年発行）二三五―二三九頁。
³² 松下『徴兵令制定史』四九二頁。
³³ 陸軍軍医団『陸軍衛生制度史』三三四頁。

第Ⅲ部

陸軍看護制度成立期

第一章 衛生隊編成に向けた改革の動き

一 ジュネーブ条約への加入成立

一八八五年五月鎮台条例が改正され、軍の大単位を師団に改め、全国を七軍管として各軍管に鎮台を置き、鎮台司令官（中・少将）が戦時には師団長となつて作戦に従事することとなつた。師団編制にあつては、鎮台条例が改正された翌月の六月に、桂太郎は「出師編制及び職務綱領」¹を立案する。これにより師団編成と軍事衛生、それに伴う看護卒の配属をどのように考えていたかを知ることができる。ここで注目すべきは、看病卒の配属とともに、日本赤十字社のことに触れていることである。「第一七條 病院」の二項目には、戦場で負傷した患者の看護を博愛社に託すという案を持つていた事が確認できる。左記はその部分を抜粋した文である。

- 一 病院ハ經理長ニ隸シ全軍中ノ医務ヲ総括シ医官以下ヲ指揮シ軍人軍属ノ健全ヲ保護シ患者ヲ治療スル可シ
- 一 陣中病院ヲ他所ニ転スルニ方リテ患者ヲ臨時病院ニ又地下病院ニ移シ或ハ博愛社ノ如キ会社ト協議シテ患者ヲ之ニ託シ或ハ臨時ニ地方ノ医ヲ使用スル等ノ事務モ亦院長ノ任トス
- 一 病院ハ軍ニ後方ニ置キ而メ戦線ト相隔ルヲニ随ヒ数個ノ支病院ヲ配設シ以テ旅団病院ヨリ送致スル処ノ患者ヲ治療スルヲ要ス故ニ院長ハ其患者ノ多寡及ヒ地位等ニ応シテ医官以下ヲ派出シテ治療ニ従事セシム

また、「第四條 旅団編成」には、「病院ハ一等軍医正若クハ二等軍医正一名ヲ以テ其長トシ二等軍医正二名軍医八名薬剤官副補ノ中一名及看病人看病卒若干名ヲ置キ以テ旅団病院及大小繙帶所二分属セシム」とある。これらから、桂は師団編成にあたり、病院や繙帶所の設置方法や配置人員なども自ら計画しており、戦線の移動に伴い、負傷兵の看護を「博愛社」に依託する考えを持っていた。

一八八四年に、陸軍卿となつた大山は、三度フランスに渡り、各国の兵制の研究とともに、同行した橋本綱常とともにジュネーブ条約の加入手続きを調査していた。橋本が大山巖使節団の随行員として留学した目的には、陸軍衛生制度の調査だけでなく、政府と博愛社の委託による赤十字病院の調査、万国赤十字条約加盟に関する諸種の手續等を調査する使命があつた。橋本はベルリンに長く滞在し、一八八四年九月には大山の代理として公使館参事フォン・シーボルト氏に随行し、ジュネーブにおける第三回赤十字会議に出席した。

橋本は一八八五年一月に大山使節団の欧州視察から帰朝した際、博愛社の将来抛るべき方針につき意見を具申し、戦時傷病兵の救護を行うために、平時に於いて救護員を養成すべきこと、救護員養成機関として病院を設けることを「赤十字社ノ儀ニ調査」にまとめた。

七月二〇日、外務卿伯爵井上馨より「瑞西国政府ニ於テ設立ノ赤十字社ノ加入ノ件」²が上申書として提出され、翌年一八八六年六月、蜂須賀公爵を主席とする特命全權使節団を政府が派遣し、ジュネーブ条約への加入が成立した。

「瑞西国政府ニ於テ設立ノ赤十字社ノ加入ノ件」には、橋本が作成した「赤十字社ノ儀ニ調査」と「赤十字社則」が添えられており、赤十字社に加盟することの利点を、「欧州各国へ対シ我邦文明ノ意向ヲ表彰スルノミナラズ我国ノ地位ヲ一層上進セシムルノ盛挙ニ可有ト存候」とあった。つまり、赤十字に加盟することで先進諸国に対する日本の地位を一層向上させることになる述べられていた。

上申書には、伊藤博文、松方正義などをはじめとして、山県有朋、西郷従道、川村純義、山田顕義、大山巖など陸軍関係者の名が連ねられており、赤十字社への加盟は単に陸軍衛生部のみ意向ではなく、政府としての欧州各国を意識しての政策であった。それは、明治政府が目指した国際社会において欧米列強諸国と肩を並べる強国となるためには、赤十字への加盟は一つの必要な条件であった。八月四日、大山は赤十字社規則並調査書類を添えて「赤十字社加盟ノ件」³を提出し、翌年のジュネーブ条約への加盟成立につながった。

橋本は、大山使節団の欧州視察から帰国し、「赤十字社ノ儀ニ調査」作成の間に、赤十字に関する資料を整理し、重要と思われるものを翻訳した。⁴ 翻訳したものには、『赤十字』『普国在伯林婦人連合社制法』『マインノフランクフルトニ於ケル戦地負傷軍人及罹病軍人看護連合社ノ看護婦教員成（普）』『民立病院首普概則』があった。橋本は看護婦教育に関しても知識を得ており、救護員養成機関としての病院の建設についても提唱している。⁵

桂が立案した「出師編制及び職務綱領」は、これら赤十字加盟への動きを背景として考案されたものであった。一月には「戦時編制概則」の改正案が提出され、一八八六年一月に「戦時編制概則改正」が作成された。⁶

一八八六年六月五日、「在仏国瑞西公使館」において、「赤十字ニ帝国政府加盟調印」が行われ、ジュネーブ条約へ加入、国民へは一十一月一日にジュネーブ条約に加入した旨が公布された。⁷ すでに五月一日には、病院設立が正式に議決され、早朝故松宮彰仁親王から陸軍大臣宛てに、「看護人看病婦ヲ養成」するための病院の建設地の借用の願書が提出されていた。

同年十一月一七日、博愛社は博愛社病院（後の日赤本社病院）を開設し、陸軍軍医総監である橋本綱常が初代病院長となった。橋本が初代病院長になるに至っては、一

○月○日博愛社総長熾仁親王より陸軍大臣大山巖に対して「博愛社ヨリ病院創設ニ付橋本軍医総監囑託ノ義照会」が提出された⁸⁾。

博愛社ノ義ハ尋常ノ慈善会社ニ異ナリ軍人ノ負傷者ヲ救護シ以テ戦陣ノ義務ニ服事致シ候者ニ付既ニ明治十年西南ノ役ニ際シ本社創立ノ節ハ征討総督ノ御指令ニ依リ特別ノ保護ヲ受ケ軍団軍医部長ノ管理ヲ得テ其事ヲ行ヒ候義ニ有之平時モ亦其努ハ戦時ノ準備ヲ経営致シ候者ニ付自然御省ノ保護ヲ仰クニアラサレハ事業ヲ全フスルコト能ハス彼ノ欧州赤十字社ノ如キ常ニ陸軍軍医部ト連絡シテ諸事ヲ調理シ公私其便宜ヲ得候趣承ル所ニ御坐候就テハ本社病院落成ノ上ハ院長及ヒ掛リ医員ノ設置看護人看病婦ノ養成其他治療方ニ関スル諸件ハ総テ橋本軍医総監ヘ囑託致度本社ハ私立ノ一社ニ不過候得共其事業ハ軍陣衛生ノ一端ニ関シ専ラ報国ノ志ヲ存シ且ツ海外諸国ニモ干涉致候義ニ付何卒特別ノ御詮議ヲ以テ前義御聴容相成度此段及御依頼候成

一八八七(明治二〇)年五月二〇日、博愛社は「日本赤十字社」と改称した。そして、一八八九年、「日本赤十字社看護婦養成規則」(以下、「養成規則」とする)が制定され、翌九〇年看護婦生徒の養成が開始された。「養成規則」は全二〇条からなる⁹⁾。

第一条 本社看護婦養成所ヲ設ケ生徒ヲ置キ卒業後戦時ニ於テ患者ヲ看護セシムル用ニ供ス

第二条 看護婦生徒ヲ志願スル者ハ修学年間専ラ之ニ従事シ且ツ卒業後二ケ年間病院ニ於テ看護婦ノ業務ニ服シ後二十年間ハ身上ニ何等ノ異動ヲ生スルモ国家有事ノ日ニ際セハ速ニ本社ノ召募ニ応シ患者看護ニ尽力セン事ヲ誓フ可シ

第二條では、卒業後二〇年間の応召義務が明確に定められ、国家は有事の際に日本赤十字社看護婦を確保できることとなった。その結果、桂が考えていた戦場での「博愛社」への患者委託案が現実可能なものとして動き出したのであった。

二 「担架卒教育規則」の制定

陸軍では、外地における負傷兵や病兵の救護方法の實際を考えた衛生隊の編成を確立する必要を認識し、これら衛生隊の編制に向けた改革に着手する。一八八六年一月四日「戦時編制概則」¹⁰⁾が制定され、「戦時編制概則」の第一章第二條師団ノ編制では「歩兵連隊毎ニ大繙帶所同大隊毎ニ小繙帶所ヲ置ク」事と大繙帶所と小繙帶所「看

護長同卒若干名」を置く事が定められた。

陸軍では同年三月、「陸軍臨時制度審議委員」¹を設けた。委員会では、①一師団二属スル原野病院編制勤務及ヒ材料、②一師団二属スル衛生隊ノ編制勤務及ヒ材料、③各部隊二属スル衛生部ノ編成勤務及ヒ材料、④兵站病院ノ編成勤務及ヒ材料、⑤各衛生部二属スル輜重ノ編制、⑥担架卒補助担架卒ノ教育及ヒ担架卒召集方法以下の六点について調査が行われ、メッケルと共に具体的方法の計画に乗り出す。同月、「鎮台職官表當所職官表」¹²により、看護長・看護卒の定員が定められた。さらに戦時編制にあたり、実際に軍医とともに治療にあたる看護長・看護卒の他に、負傷兵を包帯所まで運搬する者、運ばれてきた負傷兵の看護を行なう者を必要とし、それを誰が担当し、どのように確保するか、看護卒の職務の見直しがなされた。

「師団戦時整備仮規則」¹³の第二章野戦師団の第二款で、衛生隊は「野戦師団中新二編成スルモノ」として「予備役及後備役ニ在ル歩兵」で「担架術卒業証書ヲ所持スル者」を配属する方針を打ち出した。「担架術卒業証書ヲ所持スル者」を衛生隊に配属する目的は、橋本の上申書にみる事ができる。

医務局長橋本綱常は三月二七日「戦時衛生軍務改正之義ニ付申進」¹⁴を大山巖に提出する。橋本はここで「補助担架卒」を作ることとを「従来ノ制ヲ釐革シ独逸国ノ制ヲ参酌シ補助担架卒ヲ取り又衛生隊ノ編制ヲ定ムルハ目下必要ノ事業ナルヲ信ス」と進言する。さらに、「補助担架卒」の必要な理由を、以下の例を挙げて説明している。

戦時救傷ノ事タル軍医部事業中ノ一大部分ヲ占ルモノニシテ各国軍医部ニ於テ最モ研究スル所ナリ佛国ノ如キ千八百七十年及ヒ七十一年ノ役ヨリ殊ニ鋭意改正ヲ加ヘシモノハ蓋シ独国ノ戦時衛生事業ト比較自省シテ慊トセサル所アルニ由ルモノナリ本邦ノ該事業タル歴年計画スル所ナレトモ之ヲ実施ニ施用セシハ僅ニ西南ノ役アリシノミ然レトモ此役モ亦決シテ該事業ヲ順整確實ニ実施シ得タル者ニアラス爾来改正ニ孜孜タレトモ未タ完全ノ定制ヲ得ス仰 現今ノ制ニ拠レハ戦隊ニ於ケル負傷者ハ戦友之ヲ小綱帶所ニ送ルヲ法トスレトモ之ニ戦友ヲ使用スルハ特リ戦列ノ隊力ヲ減殺スルノミナラス兵卒事ヲ之ニ託シテ動モスレハ戦列ヲ離レントスルノ弊アルハ皆十人ノ知ル所ナリ例之バ一中隊人員ヲ二百人トシ負傷者ヲ其十分一ト仮定スルトキハ二十人又每一傷者ヲ護送スルニ概ネ三人ヲ要ストスレバ則六十人ナリ之ヲ以テ二十名ノ傷者運搬ニ充ツルトキハ戦列ニ残ル者殆ト半数ニ過キス果シテ然ラバ名ハ一中隊ニシテ其実ハ半中队ニ過キササルカ如シ加之 平素運搬救急ノ事ヲ教ヘサルノ戦友ヲシテ此事ニ從ハシムル時ハ救ヒ得ヘキノ傷者ヲシテ斃レシムルノ惨状ナキヲ保シ難シ況ヤ近日ダネウ万国救傷同盟エ我政府加盟連合ノ美挙アルニ於テオヤ此際従来ノ制ヲ釐革シ独逸国ノ制ヲ参酌シ補助担架卒ヲ取り又衛生隊ノ編制ヲ定ムルハ目下必要ノ事業ナルヲ信ス其編制教育ノ方法ニ至テハ特ニ委員ヲ命セラレ制定アランコトヲ稟請候也

(線筆者付記)

橋本は、現今の決まりでは、負傷者を小繙帶所に移送するのは戦友の兵卒であり「傷者ヲ護送スルニ概ネ三人ヲ要ストスレバ則六十人ナリ之ヲ以テ二十名ノ傷者運搬ニ充ツルトキハ戦列ニ残ル者殆ト半数ニ過キス」として、一名の負傷の運搬に必要な兵卒の数は三名であり、負傷者の搬送のために隊の力が減殺されることの問題点を挙げている。さらに、「平素運搬救急ノ事ヲ教ヘサルノ戦友ヲシテ此事ニ従ハシムル時ハ救ヒ得ヘキノ傷者ヲシテ斃レシムルノ惨状ナキヲ保シ難シ」と述べ、平素運搬救急についての教育を受けていないことで救える人も救えないなどの不都合が生じることが挙げた。これらを改善するために、ドイツの制度を参考にして「補助担架卒」を作り、衛生隊の編制を定めることを提案した。

その結果、六月二五日「担架卒選抜及教育規則並衛生隊編制表之儀ニ付上申」¹⁵が戦時衛生事務改正審査員から提出される。

先般戦時衛生事務改正之儀ニ付訓令御下附相成候中衛生隊編制之調査ニ及候処從來戦闘区域地ニ於ケル傷者ノ運搬法ハ看護卒或ハ輪卒等ヲ以テ之ニ充用スルノ定規ニ有之候得共看護卒ハ其職ニ於テ運搬作業ヲ主トスル者ニ無之又輪卒ハ平時之カ教育ヲ受ケス彼是不都合不少ニ付従前之制ヲ釐革シ更ニ独逸之編制ニ準拠シ歩兵砲兵隊ニ於テ平時ニ之カ教育ヲナシ有事ニ際シテ傷者運搬ニ従事セシムルコト御改正相成候得共戦闘区域ニ於ケル衛生事務完全可致ト被存候是等ノ事項ハ悉皆調査結了ノ上復命可致義ニ候得共本年ヨリ御着手不相成候テハ漸次遷延ニ及候義ニテ最モ差掛リ居候ニ付先ツ之ニ要スル部分審査ヲ終ヘ即担架卒選抜及教育規則並ニ衛生隊編制表相添開陳致候間御採用相成度候也

調査した結果、戦闘区域の負傷者を運搬するのは「看護卒或ハ輪卒等ヲ以テ之ニ充用スルノ定規」であるが、「看護卒ハ其職ニ於テ運搬作業ヲ主トスル者ニ無之」又「輪卒ハ平時之カ教育ヲ受ケス彼是不都合不少」と述べ、ドイツ編制に倣い「歩兵砲兵隊ニ於テ平時ニ之カ教育ヲナシ有事ニ際シテ傷者運搬ニ従事セシムルコト」にする方針を打ち出し、「担架卒」の選抜方法と教育規則案に編成表を添えて上申する。

「担架卒」を制定するにあたり、戦時衛生事務改正審査委員の一人である陸軍一等軍医 谷口謙は、同年二月の『陸軍軍医学雑誌』二月号に「独逸戦時衛生條例摘要」¹⁶を掲載した。さらに一等軍医武谷豊は、谷口謙の説話したものを「独逸衛生條例摘要附録」¹⁷として編纂し、同時に紙上発表していた。

谷口はまず「独逸戦時衛生條例摘要」(資料7)を、以下のように紹介している。

彼ヲ知り己ヲ知ルハ豈独リ軍機ノミナランヤ軍隊医務ニ在テモ亦然リ而シテ今ヤ開明諸国ノ戦時衛生部編制ハ独逸ヲ以テ最良トス佛人ニシテ猶且之レヲ欽美ス其整備知ルヘキナリ茲ニ其大綱訳萃シテ一覽ニ供ス是亦彼ヲ知ルノ一端也

谷口は、戦時衛生部編制は独逸が最良であるとの考えを持って、戦地における病院機関と編制について詳細に紹介している。

一項 隊ニ隊附医官病院助手及ヒ補助患者運搬人隊属薬品車担架繃帶具入背囊若クハ薬品及ヒ繃帶入匣並ニ病院助手携帶囊ヲ附ス

此人員及ヒ材料ヲ以テ病室舎営病院及ヒ隊繃帶所（戦闘地ニ）ヲ設立ス
病室ハ病院的看護ヲ要セス暫ニシテ回復就役ノ目途アル患者ヲ収容スル所ナリ・・・（略）・・・ 隊繃帶所ハ戦闘地ニ於テ隊附医官ノ傷者ヲ集合セシメ救急繃帶ヲ施シ若シ傷者ヲ 派出衛生部 若クハ戦地病院ニ輸送シ得サル場合ニ於テ遷延スヘカラサル手術ヲ施ス為ニ之ヲ設置スルナリ

二項 戦争ニ於テ死傷者ヲ生スル時ハ 派出衛生部作業ヲ始ム 但該部ハ大戦ニ至テ作業ヲ始ルモノトス該部ハ各軍団二三箇予備師団二一箇ヲ附ス該部ノ主要ナル任務ハ傷者ヲ医治スル為ニ大繃帶所ヲ備置シ 傷者運搬者ヲ以テ傷者ヲ戦闘地及ヒ隊繃帶所ヨリ大繃帶所ニ輸送スルニアリ・・・（以下略）・・・

ドイツでは、「派出衛生部」が「各軍団二三箇予備師団二一箇」を附属しており、「傷者運搬者」が、傷者を戦闘地及び隊繃帶所より大繃帶所に輸送するシステムがあることを紹介し、派出衛生部の人員構成を示した。「派出衛生部」は騎兵大尉が該部司令官であり、騎兵中尉、騎兵少尉が各一名配属されていた。ここで紹介されている人員には「傷者運搬人」の他に「上等病院助手」「病院助手」「陸軍看病人」があった。

谷口と同じく一等軍医の武谷豊は「独逸衛生條例摘要附録」で、具体的に戦場で設置される機関の役割と配当する人員について解説をしている。その中で上等病院助手は陸軍における一等看護長、病院助手は二三等看護長、陸軍看病人は看護卒に相当するとしている。

一〇月一九日、戦時衛生事務改正審査委員の陸軍歩兵大佐児玉源太郎は「担架隊演習方法印刷之件ニ付申進」¹⁸を大山に提出し、担架隊の編制計画として看護長看護卒による実施演習の方法が決められた。すでに一四日には「改正傷者運搬術試業之例」¹⁹により、傷病者の運搬術試業のために東京鎮台に対して、歩兵卒八〇名、軍医三名、看護長一名、看護卒六四名、輜重駄馬三頭を差し出すことの通達が出されていた。

担架隊演習方法は、「衛生隊ハ二中隊ヨリ編制シ一中隊ハ三小隊一小隊ハ四分隊ハ上等兵一名担架卒十一名又此幹部ニ医官薬剤官看護長卒若干名ヲ附シテ繃帶所ヲ設立セシム」と設定され、看護長看護卒が補助担架卒を指揮して行なわれた。これらの演習は、陸軍が補助担架卒を採用し、衛生隊の編制を考える上での実際的な検証となった。

一八八七年二月五日、「担架術教育規則」（陸達第一八号）（資料8）が定められた。

「担架術教育規則」は、戦場に於いて傷者を運搬する学術を教授するために設けられ、対象は歩兵及び砲兵隊の下士兵卒を若干名修業させること（第二条）とした。教育期間は一八八七年三月（第十條）、卒業は検閲を行い、卒業証書を附与すること（第十二條）、

復習として毎年夏に予備役及び後備軍の下士卒中より担架術を修業したものを召集して、現役の修業中の者とともに演習すること（第十七条）、などが定められた。同時に「担架卒選抜及教育復習規則」（資料9）も定められ、この第一條において担架上等兵、担架卒、補助担架卒が定められた。

第一条 担架卒ハ 歩兵及ヒ砲兵隊ニ於テ之ヲ養成シ 有事ノ日ニ当リ衛生部ニ属シ傷者ヲ運搬セシメ 其称呼ハ本務ニ服スルニ際シ之ヲ称スルモノトス而メ之ヲ分テ三トス

其一担架上等兵 担架上等兵ハ 現役一ヶ年ヲ終タル上等兵ヨリ選抜シテ之ヲ教育シ衛生隊ヲ編制スルニ方リ之ヲ編入ス

其二担架卒 担架卒ハ補助担架卒ノ現役満期ノ者ヲ以テ之ニ充テ 衛生隊ヲ編制スルニ方リ之ヲ編入ス但シ砲兵ノ補助担架卒ハ之ヲ除ク

其三補助担架卒 補助担架卒ハ歩兵及ヒ砲兵現役一ヶ年ヲ終ヘタル兵卒中 行状方正ナル者ヲ選抜シ之ヲ教育シ戦時現隊ニ在テ傷者運搬ノ勤務ヲ執ラシム

「担架卒選抜及教育復習規則」には第一表と第二表として、歩兵一中隊担架術修業定員表と砲兵一中隊担架術修業定員表が付記されており、現役教育数と予備役に編入する数が一八八六年から一八九四（明治二七）年まで計画されている。衛生隊は戦時に編制するものであり、陸軍では戦時に必要とする兵士を確実に確保する方法をシステムとして整える必要があり、担架卒、補助担架卒の選抜方法を、現役満期の者や現役一年を終えたもので構成し、卒業証書を附与することで、一定の教育を受けた兵士を効果的に活用するシステムとなった。

さらに第二二條では「近衛並ニ各鎮台ニ於テハ毎年担架卒ヲ召集シ之ニ歩兵及ヒ砲兵ノ補助担架卒ヲ加エ衛生隊ヲ編制ス其編制方法左ノ如シ」として、編制方法を「戦時師団衛生隊編制表」として提示した。戦時師団衛生隊は担架隊演習方法の際に想定されたとおり、二中隊六小隊で編制された。

一八八七（明治二〇）年二月五日「担架術教育規則」及び「担架卒選抜及教育復習規則」が制定され、戦場における負傷者を運搬する兵士を、「担架修業兵卒業」として名簿による管理を行うこととなった。戦時に必要とされる衛生隊の兵士の補充は、歩兵及び砲兵で「担架術修業兵卒業」者で、予備役や後備兵役から召集するシステムが作られた。看護長もまた予備役より召募することがあることも定められた。これらの規則の制定により、教育を受け特別な技術を身につけた兵士を、戦時要員として確保できることになった。さらに五ヶ月後の七月二〇日には「戦時師団司令部編成表」が作成され、その中で「衛生隊編制表」（表10）²⁰も明示され衛生隊編制時における担架卒の人数も定められた。

『陸軍衛生制度史（明治篇）』四八四頁には、「担架術教育」の項目が確認できるが、

衛生隊の編制は明治二十一年七月の師団戦時整備表に於いて発表されたことから始まり、その前年より衛生隊担架卒の教育が始められていたことが書かれている。しかし、橋本の上申や、担架卒教育が開始された理由や目的については書かれていない。表11は、看護卒と担架卒の教育内容を比較したものであるが、看護卒の教育期間は六ヶ月を要するが、担架卒その半分である三ヶ月で「担架術修業兵」として管理することができる。表10には一隊には看護卒二四名の配属に対し、担架卒は二六四名と約一倍にあたる兵卒を配属する計画になっている。

「担架術修業兵」の成立は、故郷に帰してからの半拘束期間（平時にあつては時々、復習に應ずる義務）を有効に活用し、戦時に担架卒として召集するシステムを作った。職域によつては一定の訓練期間を要するが、兵士の育成には経済的な効果も考える必要があつた。「担架術修業兵」の成立は、戦場に於ける看護卒の職務として、包帯所において医師とともに治療に専念できる体制作りがなされたことを意味し、看護卒の職務の見直しの結果であつた。「担架術修業兵」の成立は、陸軍衛生史における師団編成に向けた改革の一つとして位置づけることができる。但し実際には「担架術卒業証書」制度を導入したが、担架術の教授は所属本隊で行なうことで一定の規定がなされず、一八九二（明治二五）年に改正され、日清・日露戦争などの実践を経て改正は昭和になつてもなされることとなる。

三 傭人磨工卒の採用開始

一八八四年五月二六日に、看病卒は「看護卒」と改称される。一八八五年一〇月五日に達乙第二百四号及び第三九号を以つて、看病卒の任命は定員内において本部長が任命できることとなつた。しかし、依然として看護卒の取扱は、壮兵看護卒が軍医本部、徴兵看護卒は鎮台司令官にかわりはなく、これらの不都合を解消する方法が考えられた。

一八八六年四月五日には、「明治十九年徴兵看護卒取扱手続」（以下「看護卒取扱手続」とする）が制定され、欠員の補充方法に関して第六條で「病院附看護卒ノ内ヨリ之ヲ補ヒ」と定められた。同月二二日に橋本綱常は、壮兵看護卒も徴兵看護卒と同様に各鎮台司令官が統轄すべきことを上申書として提出する²¹。

壮兵看護卒進退上之儀ハ從來当局ニ於テ取扱来候処徴兵看護卒ニ在テハ各所管長官ニ属居候ニ付取扱上区々相成候間自今壮兵看護卒進退之儀ヲ総テ各鎮台司令官ニ於テ取扱候様御達相成度此段申進候也

追テ一軍管内ニ在ル諸隊各官衙附ノ壮兵ハ総テ該鎮台司令官ニ於テ統轄候様

五月五日には省令第七二号²²により、壮兵看護卒も徴兵看護卒同様各鎮台司令官が統轄することとなり、徴兵壮兵の区別なく鎮台司令官によつて配属・配転・欠員補充などが

可能となった。また、一八八四年に看病卒が「看護卒」と名称は改称されたが、徴兵看護卒は一等二等と階級が分かれているのに対して、壮兵看護卒は単に看護卒という名称しかないという身分の違いを生じていた。徴兵看護卒の教育方法や階級の進級に関しては「看病卒取扱手続」が適用されていたが、壮兵看護卒には適応されなかったことで、身分や看護に関する能力に徴兵と壮兵では差が生じていた。そのため統轄の統一に継いで、一八八六年九月二五日には、送乙第四〇二七号によって壮兵看護卒も徴兵看護卒同様、一等二等に分けられ、徴兵壮兵看護卒の身分の統一が図られた。壮兵と徴兵の看護卒の統一は、軍備拡張に向け、看護長・看護卒の定員決定・配属場所やその勤務内容に応じた人員配置を考える上では必要な改正であった。

一八八八年二月二四日には、陸達第二一九号「陸軍看病人磨工召募準則」(資料1〇)が制定され、磨工を雇員として民間より志願者を採用する方針がとられることになる。陸軍では明治初年には治療器械の研磨修理を、必要が生じる毎に時々職工を備役して実施させていた²³。一八七五年の「陸軍病院条例」第六六号では「機械器械掛ハ医科百般ノ器械ヲ主管シ時々清拭シ錆腐ノ処ナカラシム」と、病院の管理上医療器械の保守点検は必要であり、器械簿の記録も器械掛の仕事であった。しかし年々、陸軍部内備付器械が精巧な物に変わり増加する中で、各鎮台では磨工の必要性が生じ、一八八一(明治一四)年に初めて各鎮台から看病卒一名を東京に召集して、軍医部本部にて研磨術を修得させ、研磨技術を学んだ看病卒が研磨術の技術を部内で普及させる役割を担っていた。

一八八二年九月二〇日発行の「医事新聞第六五号」には、「陸軍軍医本部に於いては昨年八月来各鎮台の看病卒一名宛を召し研磨の術を教授せられしが本年九月一日其卒業証書を与えられたという其人名左の如し」とあり、大阪陸軍病院、名古屋陸軍病院、熊本陸軍病院、鹿児島陸軍病院、仙台陸軍病院の看病卒各一名(計五名)に「陸軍研磨証書」を授けたことが掲載されている。

徴兵看護卒として六カ月の教育期間をかけて看護の技術を身につけても、配属場所に器械掛があることで、戦場で救護にあたる看護兵の確保にも支障をきたした。また、器械の修理保存ができない看護卒が配属されることでの不都合や、看護技術が必要とする職域の人員の確保の問題など、さまざまな問題も生じ始める。そのため、器械の修理研磨技術を持つ者を雇員として採用することは、分業化を促進し、技術を持った者の有効な配属が可能となる方法であった。

陸軍は「陸軍看病人磨工召募準則」を制定する方針をとるが、その制定にあたり、一八八八年十一月一日陸軍大臣大山巖が次のように制定理由を上申している²⁴。

官廨及衛戍各官衙附看護卒ヲ廃シ更ニ雇人ノ看病人ヲ被置候上ハ其召募方法必要ニ有之候且又従前治療器械修理保存ハ看護長卒ヲ以テ之ニ充テ置キ候得共元来看護長卒ハ其教育ヲ受ケサルモノニ付実際不都合ニ有之候依テ自今之ニ充ツヘキ看

護長卒ノ人員ヲ減シ更ニ雇人ノ磨工ヲ置キ該修理保存ニ従事セシメ度既ニ戦時野
戦病院編制表等ニハ磨工ヲ被置候ニ付 旁 かたがた以テ平時ヨリ磨工ヲ置カサルトキハ彼
是不都合不少候就テハ其召募方法ハ看病人同様被相定候様致度依之テ別札之通其
方案及進達候条御詮議之上御決行ヲ相成り候様存度此段申進差也

その結果、「陸軍看病人磨工召募準則」が定められ、第一條で「看病人ハ病院病室及
憲兵隊其他衛生部士官ノ属スル官廨ニ置キ患者ノ看護其他看護ニ係ル雑務ニ服セシム」
と規定されたことで、病院、官衙、学校には傭人の看病人を使用することになった。
第二条では、近衛各師団の軍医部及び病院に置いて治療器械の研磨と修理を行うこと
が定められた。これは、明治初年から徴兵令が制定されるまで使用していた傭人看病
人の復活であった。

この磨工卒を傭人として採用する方針は、明治一六年以降とってきた壮兵看護卒を
漸次減少させ、総て徴兵看護卒とする方針に関係したものであった。「陸軍看病人磨工
召募準則」が制定された同日に、後述する看護手制度が制定されたことで、壮兵看護
卒は全て廃止される。そのため、磨工術を修得している者を、服役年限を過ぎた後も
志願者として軍隊に採用・確保できるシステムとなったのであった。

「陸軍看病人磨工召募準則」に基づくシステムは、一九〇九（明治四二）年までそ
の制度は存続するが、戦時補充上の関係から再び看護卒に磨工術を修得させることに
なり、一九一五年八月には純然たる磨工卒が誕生することになる²⁵⁰。

対外戦争を想定した明治一五年以降は、西南戦争で再認識された看護者の確保の問
題とともに、師団編成に向けた軍備拡張政策の中で、改革が行われることになった。
限られた軍事費のなか、軍隊や戦場で求められる技術に応じた職域の者として、新た
に研磨術の研修を終えたものには「陸軍研磨証書」を、担架術を三カ月学んだ者には
「担架術修業兵卒業」という証書を発行し、陸軍で管理するシステムができた。これ
らは看護卒が担っていた職域からの独立であり、看護制度改革の中で行われたと位置
付けることができる。

陸軍では、橋本が中心となり担架卒や磨工卒に関する改正と同時進行する形で、看
護制度の改革に着手しており、次章で看護卒の教育内容など、行われた第二次看護制
度改革について明らかにしていくこととする。

註

¹ 「第十三号 出師編制及職務綱領」『桂太郎文書 十七』（国立国会図書館憲政室所蔵）
九六一―一三四頁。

² 「瑞西国政府ニ於テ設立ノ赤十字社ノ加入ノ事」親展第一八九号、国立公文書館・公文
別録・外務省・明治一五年―一八年第三卷。この中には「赤十字ノ儀ニ付調査」と「赤
十字社規則」第一〇条が含まれている。

- ³ 「赤十字社加盟ノ件」 国立公文書館・内閣・公文書別録・陸軍省・海軍省・明治十八年、製作者大山巖。
- ⁴ 亀山『近代日本看護史』 日本赤十字社と看護 一六頁。川口啓子・黒川章子『従軍看護婦と日本赤十字社―その歴史と従軍証言』(文理閣、二〇〇八年) 三〇―三二頁。
- ⁵ 吉川『日赤の創始者 佐野常民』 一一三頁。
- ⁶ 「戦時編制概則改正」 達乙第一号、明治一九年一月四日『陸軍省大日記』
- ⁷ 吉川『日赤の創始者 佐野常民』 一一二―一一三頁。
- ⁸ 「博愛社ヨリ病院創設ニ付橋本軍医総監督囑託ノ義照会」 明治一九年一〇月二〇日『陸軍省大日記』 明治一九年「式大日記十月」
- ⁹ 日本赤十字社中央女子短期大学編纂『日本赤十字社中央女子短期大学九〇年史』(一九八〇年、絢文社) 一六―一七頁。
- ¹⁰ 「戦時編制概則」 達乙第一号、明治一九年一月四日『陸軍省大日記』
- ¹¹ 「陸軍臨時制度審議委員」 戦時衛生事務改正審査員メンバーとして名を連ねているのは、遠藤慎司(陸軍二等軍吏)、谷口謙(陸軍一等軍医)、落合泰蔵(陸軍一等軍医)、原田良太郎(陸軍騎兵大尉)、徳田正稔(陸軍輜重兵少佐)、真鍋斌(陸軍歩兵中佐)、石坂惟寛(陸軍一等軍医正)、児玉源太郎(陸軍歩兵大佐)である。
- ¹² 「鎮台職官官所職官表別紙之通被改」 達第十二号、明治一九年三月一日、『法令全書第十九ノ二』(内閣官報局、一九七八年) 一六八―一七二頁。
- ¹³ 『戦時編制概則改正師団戦時整備仮規則陸軍定員令』(防衛研究所図書館所蔵)「軍事行政編制三四二」。
- ¹⁴ 「戦時衛生軍務改正ノ義ニ付申進」(医第七九号)『陸軍省式大日記』 明治一九年「式大日記四月」
- ¹⁵ 「担架卒選抜教育規則並ニ衛生隊編制表之義ニ付上申」(式大一一四八三号) 一八八六年六月二五日『陸軍省式大日記』 明治二〇年「式大日記二月」(総医第六八号)
- ¹⁶ 谷口謙(ゆずる)「独逸戦時衛生條例摘要」『陸軍軍医学会雑誌』 第三号、一八八六年二月) 一七―三二頁。
- ¹⁷ 武谷豊「独逸衛生条例摘要附録」『陸軍軍医学会雑誌』 第三号、一八八六年二月) 三四―四三頁。
- ¹⁸ 「担架隊演習方法印刷之件ニ付申進」 明治二〇年「式大日記二月」 一八八六年一〇月一九日「担架隊演習方法」が別紙として添付され九〇冊印刷された。
- ¹⁹ 「改正傷者運搬術試業之例」(送乙第四二〇九号) 明治一九年「式大日記十月」 一八八六年一〇月一四日
- ²⁰ 「戦時師団司令部編成表」 明治二〇年七月二〇日、陸達第一五六号『陸軍省大日記』
- ²¹ 「一般へ壮兵看護卒総括の達」 一八八六年四月二二日、明治十九年「式大日記五月」
- ²² 「壮兵看護卒ノ義自今徴兵看護卒同様各鎮台司令官ニ於テ統轄スヘシ」 一八八六年五月五日省令第七二号。
- ²³ 『陸軍衛生制度史(昭和篇)』 二五二頁。
- ²⁴ 「雇人之看病人磨工召募方法被相定度儀ニ付申進」 明治二二年一月一日『陸軍衛生制度史(明治篇)』 三二九頁。
- ²⁵ (総医第九一号) 陸軍省「貳大日記 明治二二年一月二三日(防衛研究所図書館所蔵)『陸軍衛生制度史(昭和篇)』 五三頁。

第二章 看護制度の第二次改革

一 「看護学卒業」名簿管理のはじまり

一八八四年に改定された「明治十七年徴兵看護卒取扱手続」(省令第四一号)が改正され、看護卒の学ぶ科目は二科目となった。さらに二年後の一八八六年四月五日には「明治十九年徴兵看護卒取扱手続」が制定され、第三教科の「伝染病者看護法」に代わり、「治療介輔法」(表12参照)という教科が盛り込まれた。同年六月二日には、『陸軍看護卒教科書第二版』が出版され、「治療介輔法」の内容として、薬量、薬用法、浣腸法、罨法、蟬針及吸角用法、芥子泥及芫菁膏貼用法、手術準備及介輔、救急法、創傷、止血法の項目が並んだ。これは戦場で軍医を助け、治療にあたる看護兵に求められる技術として、追加された看護法であった。「治療介輔法」という教科は、師団編制と衛生隊の編制を考えるにあたり、看護卒には、創傷の取扱を習熟させたいとの考えのもとに制定されたものであった。

一八八七年二月二十八日、「明治二十年陸軍看護卒教育規則」(陸達第一五五号、全九条)(以下「看護卒教育規則」とする)(資料11参照)が制定され、「明治十九年徴兵看護卒取扱手続」は廃止となる。「看護卒教育規則」では、それまでの「徴兵看護卒」という対象名が「陸軍看護卒」に、「取扱手続」が「教育規則」に変更される。この「看護卒教育規則」は、看護卒教育上の初めての単行規定であった¹⁾。

「看護卒教育規則」では、看護法として学ぶ第二・第三教科は「明治十九年徴兵看護卒取扱手続」(表13参照)と変更はなかったが、教科書は改訂され、『陸軍看護卒教科書第三版』(明治二〇年五月一三日発行)が発行される。その諸言を紹介する。

此書ハ看護卒教科ノ大要ヲ示ス者ニシテ其業ヲ受授スルニ字句文章ニ拘ラズ専ラ其趣意ヲ審ニシ実地応用ヲ主トスヘシ。看護卒ハ常備役満期ノ後ト雖トモ常ニ此書ヲ携帯シテ家業ノ余暇温習シ有事ノ日ニ方リ機ニ臨テ捷ク其技能ヲ奏センコトヲ要ス。此書ノ空欄中ニハ各自教授ヲ授ケタル條件ヲ記憶ノ為メ記入スルコトヲ許ス。予備及ヒ後備役ニ在ル者ノ定期復習或ハ臨時召集ノ際ニハ必ス此書ヲ携帯スヘシ

この諸言により、陸軍では、常備役(四年)で看護卒として技能を学んだ者に対して、有事に備えて召集されることを念頭において、各自技能を維持することの必要性を説いていること確認できる。

「看護卒教育規則」が制定される以前は、第三教科まで修了した者は、病院長が習熟を検査し、鎮台指令官に具申して許可を得て「二等看護卒」が命ぜられていた。しかし「看護卒

教育規則」の第七條において、病院長がその習熟を検閲し、本人の手帳に「看護学卒業」のことを記入すること、卒業名簿と配附表を所管の軍医部に報告する事となった。つまり、常備役で陸軍看護卒として必要な教科を学び病院長の検閲に合格した者を、軍医部が「看護学卒業」として管理するシステムが始まったことを意味した(図8参照)。

「看護卒教育規則」では、陸軍看護卒は近衛鎮台の歩兵連隊に編入し、六ヶ月の教育期間の間に定められた教科を、病院分営や重病室で学び、教習後は病院長が習熟を検閲するシステムが確立された。卒業が決まれば本人の手帳に「看護学卒業」のことを記載するとともに、部隊でも名簿を管理し、軍医部に報告された。「検閲」によつて卒業を決め、「看護学卒業」として名簿管理することになったことは、「担架修業兵卒業」と同様に、教育を受け特別な技術を身につけた兵士の確保による兵力の向上をもたらすためのシステム作りとなり、看護制度の改革のひとつと位置付けられる。

二. 看護手制度制定に向けた上申

一八八八年一月二四日、「陸軍衛生部現役看護手補充條例」(全七條)が制定され、徴兵壮士の両看護卒は廃止となり、隊附に看護手を置き、病院官衙学校は看病人を雇人とするこ
ととなる²⁾。

陸軍医務局長橋本綱常はこの制定に先立ち、一月九日陸軍大臣大山宛てに左記の上申書を提出している³⁾。

今般各兵編制表ニ看護卒ヲ削リ看護手ヲ被置ラレ御詮議ニ就キテハ該看護手ノ儀ハ卒ト異リ其の教育ニ係ル學術ノ程度ヲ高尚トシ以テ上等兵ノ資格ニ充ツヘキ精神ヨリシテ改正候儀ニ有之候然レハ此段教育不十分ノ看護卒ヲ以て頓ニ看護手ト換称セシムルトキハ右ノ改正シタル精神上ニ於テ不都合ニ之有候又此際看護卒ヲ全廃センカ若シ之ヲ廃スルニ於テ現時ノ看護手充塞セサルノミナラス一朝事アルニ際シ野戦病院ソノ他各隊ニ補充スヘキ者之ナクニ付在役看護卒廃シノ義ハ此亦施行難致候佑此在役看護卒ハ其満期迄服役セシメ当分ノ内看護手欠座ノ場所ハ看護卒ヲシテ之カ勤務ニ被充度此段申進候成

明治二十一年十一月九日

医務局長 橋本綱常

陸軍大臣伯爵 大山巖 殿

橋本は、教育不十分な看護卒を全廃し、看護手を設ける案をもっており、その看護手は卒と異なり、高い教育を受け上等兵の資格として充実させる方針を打ち出した。なぜ、橋本はこのような方針を上申したのか、その根拠は、一月一二日の橋本の上申書「看護卒ヲ廃シ上等兵資格ノ看護手ヲ置キ各官廨及病院ニハ雇人之看病人ヲ附シ歩騎砲工輜重兵隊ノミ各中

隊ニ該看護手壹名宛被附度儀付申進」⁴に書かれている。長くなるが全文を引用する。

従来看護卒ノ補充ハ初ヨリ看護卒トシテ徴集シ歩兵隊ニ編入シ然ル後病院ニ於テ看護学ヲ教授シ卒業ノ上病院及歩騎砲工輜重兵隊等ニ配付スルノ規制ニ有之候処元ト看護卒ハ乗馬隊ニ在テハ乗馬スルヲ原則トス故ニ現行ノ制度ハ歩兵隊ニ在テハ其等ヲ得ルト雖トモ他ノ乗馬隊ニ在テハ軍事上ノ教育ニ於テ其等ヲ得サルノ憾ナシトセス依テ自今騎兵隊附ニ在テハ騎兵隊ニ砲兵隊附ニ在テハ砲兵隊ニ編入相成候様致度加之初ヨリ看護卒トシテ徴集スルトキハ自家腦中想像期画スル所ノモノ專ラ看護ノ一点ニアルヲ以テ軍事上ノ教育ヲ加フルモ其練熟ノ程度自ラ十分ナラサルノ弊アリ故ニ各兵初年兵ニシテ上半年間軍事上ノ教育ヲ受ケタルモノヨリ選抜シテ下半年間看護学修業兵トナシ然ル後看護卒ヲ命シ候様致度候且ツ自今看護卒ハ各隊ノミニ置き病院及各官廨附ノ者ハ之ヲ全廃シテ雇員ノ看病人ヲ配布スル事ニ改正相成候様致度何者病院ニ於ケル看護卒ノ勤務ハ隊附ト其趣ヲ異ニシ隊附ニ在テハ行軍等ニ当リ医官一時不在ノ場合ニ於テハ救急処置ヲ施スヘキ技倆ヲ要スレトモ病院ニ在テハ兵起居ノ介補屎尿ノ排棄、室内洒掃、食餌ノ配与、等ヲナスニ止ルヲ以テ雇員ノ看病人ヲ使用スルモ敢テ差支ナカルヘク之ニ反シテ病院等ニ兵役義務者ヲ置クトキハ其費用上頗ル不利ナリ何者兵役義務者ニ在テハ其勤務ヲ隔日ニ為ササルヲ得ス故ニ實際ノ日役五十人ナレハ定員百人ヲ要シ而シテ別ニ教育中ノモノ五十人アルヲ以テ其定役以外百人ヲ養ハサルヲ得ス況ヤ為メニ看護卒舎ヲ要スルヲヤ之ニ代ユルニ日勤ノ雇員ヲ以テスルトキハ日役五十人ヲ要セハ定員亦五十人ニテ足レリ又更ニ看護卒舎ヲ要セサルノ利アリ又従来看護卒ノ教育時期ハ大約六ヶ月ニシテ内三ヶ月ハ軍事上ノ教育ニヶ月ハ看護学ノ教育ニ充テ候処今日ノ實際ニ徴スルニ該教育ノ日数ニテハ看護学ハ固ヨリ軍事上ノ教育ニ於ケルモ充分ニ無之況ヤ軍人志氣態度ニ至テハ充分ナリトナシ難キノ憾ナシトセス元来看護卒ノ勤務タル固ヨリ病兵ノ起臥ヲ助ケ屎尿ノ排棄等ニノミ従事スルニ非スシテ平生専ラ医官治療ノ補助ニ任シ行軍演習其他ノ場合ニ於テ一時医官ノ不在ニ際シテハ自ラ救急処置ヲ為スヘキモノニ之アリ其処置ノ適否如何ニ依テハ患者ノ予後ニ於テ其關係少シトセス依之従前ノ教育年期ヲ改メテ一ヶ年トシ其上半年ハ軍事上ノ教育其下半年ハ看護学ニ充テ相当ノ教育ヲ加ヘンコトヲ希望ス蓋シ従来教育時期ノ短キハ定員内ヲ以テ教育スルノ主旨ニ出テタルモ此方案タル財政上苟且ノ策ニシテ教育ト実役ト両様同時ニ施行スヘカラサルハ論ヲ踈タス依テ教育中ノモノハ定員ノ内ヨリ之ヲ省キ各兵ヨリ初年兵ニシテ上半年軍事上ノ教育ヲ受ケタルモノヨリ補充スルトキハ年々各兵一中隊ヨリ半人ツツノ補充員ヲ要シ而シテ病院等ニ之ヲ置カサルモ戰時ノ要員ハ決シテ欠員ヲ生セサルヘシ今試ニ其要員ヲ算スルニ戰時一師団〔留守師団ヲ合シ〕ニ看護長九十七人看護卒百八十六人ヲ定員トス今平時一師団ノ人員ヲ算スルニ看護長五十二人〔看護長ノ補充ハ看護卒ニシテ再役志願ノ者ヲ以テス〕看護卒二百九十六人〔現役六十二人〔各兵中隊二人〕予備役百

四人後備役百三十人」アリ故ニ前陳ノ如ク平時平均一人ノ定員ニ就キ戰時要員ヲ減算スルモ〔戰時定員ニ封スル看護長ノ欠員ハ看護卒ニシテ其適任証書ヲ所持スル者ヨリ補充ス〕尚殘員六十人ヲ得ヘシ故ニ戰時ノ補充ニ於テハ支吾アルコトナシ然リ而シテ毎年一中隊半人ノ補充員ヲ現行各隊編制表ノ中隊定員ニ増加スルトキハ其數全國通シテ合計二百〇七人トス此費額金一 万七千二百九十五円十七錢九厘〔着手初年ハ更ニ金五千七百二十一円四十三錢ヲ要ス〕ヲ要ス然ルニ該金額支出ノ途ヲ調査スルモ曩ニ騎工輜重兵之隊ヲ拡張スルヲ以テ今日ニ在テハ其支出道ナキニ依リ更ニ兵員ヲ増加シテ補充スルハ目下望ムヘカラサル事トス 故ニ各隊編制表中隊定員ヨリ毎年半人ヲ看護卒補充ノ修業員ニ加フルノ他良策ナカルヘシ 其理由ヲ述ンニ看護卒ハ其之ヲ命シタル日ヨリ現役ニ服スルコトニケ年ナルヲ以テ其補充ハ毎年定員二分ノ一ヲ要スヘク且ツ此方法ニ拠ルトキハ中隊兵員ハ定員ノ如ク現在ニテ欠員スルコトナカルヘシ即チ入營後六ヶ月間ハ軍事上ノ教育ヲ授ケ此ニ於テ看護學修業兵ヲ命シ 六ヶ月間所在地病院ニ入学或ハ通學セシメ卒業ノ上看護卒ヲ命スルノ心算ナレハ其修業中ハ他ノ兵卒ト毫モ異ルコトナク 有事ノ時ニ於テハ未卒業者ハ固ヨリ看護ノ實務ニ服スルコト能ハサルヲ以テ兵卒ノ勤務ニ服セシムルノ主義トス 而シテ一中隊ヨリ半人ノ補充員ヲ採ルトキハ歩兵一連隊ニ六人ヲ要スト雖モ年々徵集人員ニ就テハ戰員ノ定員中ヨリ看護學修業ニ従事セシムル者ハ實際二人ニ過キサル割合ニ當レリ何者 従來看護卒定員ハ歩兵一連隊二十二名ニシテ之ヲ戰員外トシ其徵集ハ年々三分一即チ四名ナリ而シテ該四名ハ看護學修業中ト雖トモ他二二年兵三年兵ヲ合セテ定數トナセリ 自今之ヲ改メ 初年兵ノ看護學修業中ノ者ハ合算セスシテ常ニ定數十二名〔二年兵六三年兵六〕ヲ現在セシメ 又 從來ノ如ク看護卒ノ徵集ヲ戰員外トセスシテ戰員ニ組込ミ 戰員中ニ於テ看護卒ノ補充ヲ教育スル時ハ毎年一中隊ヨリ半人一連隊ニ付キ六人ヲ要ス然レトモ此六人中ニハ從來一連隊ノ戰員中ニ組込アル看護卒ノ徵集員四名ヲ含有スルカ故ニ他ノ二名ノミ毎年戰員ヨリ補足スルノ理ナリ然ル時ハ各隊ニ於テモ別ニ不都合ナカルヘク且ツ其兵ノ補充隊及後備隊ノ編制上ニ於ケルモ著シキ障礙ナカルヘシ而シテ常時困難ノ財政ヲ以テ之カ為メニ強テ他ノ費目ヲ減少シ殊更ニ兵員ヲ増加スルニ及ハサルナリ故ニ前述ノ如ク各兵中隊兵卒ノ定員ヨリ毎年半人宛ヲ採リ看護卒ヲ補充セントス且又 看護卒ノ技倆ハ他ノ上等兵ニ於ケル學術ト相匹敵スルモノニ可有之而シテ其職務治療ノ事ニ与カルヲ以テ卒ノ身分ヨリ上位ニアラサレハ患者ノ信用上ニ於テモ其關係不少候ニ付自今其位置ヲ 上等兵ト同一ニナシ 且看護卒ノ名稱ヲ看護手ニ改メラレ度前條ノ理由ナルニ依リ別冊之通看護手補充條例案取調致進達條御詮議相成候様致度追テ右決行相成候上ハ看護學修業兵ノ教育規則必要ニ可有之ニ付是亦其方案二本取調別冊ノ相附シ置候條同時ニ御決行相成度此段副テ申進候也（ 線筆者加筆）

橋本は上申書の中で、現状の問題点を挙げ、戦時における看護卒の定員を確保するための

方法、軍隊における看護卒に求められる能力を維持するための教育方法、補充方法、効果的な看護卒の配置と其の位置づけなど、具体的な改正案を提示した（表13参照）。

橋本は、看護卒の職務が戦場に於いては「医官が不在の時には自ら治療処置を施す人」であると役割づけをし、そのためには三ヶ月の看護学の教育期間では充分ではないこと、看護卒が施す其の看護の技量は上等兵に匹敵する学術であることを挙げ、看護学の教育期間を六ヶ月にすること、待遇は上等兵と同等として、名称も「看護手」とすることを提言した。また、陸軍としての兵士の確保や軍事教育の視点に於いては、やはり三ヶ月の教育期間では軍人志気態度に欠けるとして、軍事教育期間を六ヶ月に延長し、歩騎砲工輜重兵隊の各隊で教授することの有効性を述べた。

橋本の改正案は、上半年を軍事教育に、下半年を看護学教育に充てるというものであり、結果、教育期間を六ヵ月から一年に延期するものであった。下半年看護学教育を学ぶ者は、兵卒中から「篤実温厚読書算筆アル者」で「看護手ニ適当ノ者」を選び、「看護学修業兵」を命じて看護学を学ぶ方法を提案した。教育期間を一年間に延長するにあたっては、兵士の確保と補充方法を考える必要があり、橋本は病院に於ける看護卒の職務内容は、雇員で何等不都合はなく、病院では雇員を使用することで、軍隊では看護卒を兵士として確実に確保できること、経費上も節減できることを述べた。

現況を改正するためには、経費対策も重要であった。軍事予算の対国民総生産（GNP）比率は、明治大正を通じて三パーセント台が普通であった⁵。軍事費の内陸軍の経費は六十パーセント前後が俸給、諸手当、旅費、糧食費、被服費などの人件費で占められた。一人当たりの人件費は海軍が陸軍の約二倍以上になるが、陸軍は戦略的に兵卒の数を必要とするため、俸給は少なくても、兵員の多さから多くの人件費を必要とした⁶。そのため陸軍では、師団編制に必要な兵の確保は、同時に人件費の削減につながる方策を取る事が必要であった。橋本の上申は、留守師団を合わせた戦時師団に必要な看護長と看護卒を試算し、軍全体の拡張を考えた上申内容であった。

一八八五年五月一日に制定された「陸軍俸給表改正」⁷では、看護長・看護卒の日給月給は以下のように定められた。「陸軍看病人磨工召募準則」で定められた看病人の月給は一等給で八円、二等給は七円であり、月給のみを比較すると看護卒よりは高い。しかし、宿舍費・食費など人件費としての陸軍予算を考えると雇人の看病人を使用する方が、経費の削減につながるという考えであった。

一等看護長	日額は二十二銭七厘、平均月額六円九十銭五厘
二等看護長	日額は十六銭五厘、平均月額五円一銭九厘
三等看護長	日額は十銭二厘、平均月額三円十銭三厘
一等看護卒	日額は五銭三厘、平均月額一円六十一銭二厘、
二等看護卒	日額は四銭五厘、平均一円三十六銭九厘

橋本は、戦時の要員に欠員が生じない補充方法として、中隊より毎年半人を補充員として

取することを考えた。従来の看護卒の定員は歩兵連隊に一二名（看護修業兵四名十二年兵四名十三年兵四名）を戦闘外としていたものを、定員一二名（二年兵六名十三年兵六名十看護学修業兵）とすることとした。

陸軍では徴兵令を制定する際に、服役年限を何年にするかの議論がなされ、山県有朋が採用した三年制が継続されていた。が、財政逼迫に対して陸軍大臣の大山巖は現役年限の短縮も考えていた。しかし、桂太郎は対外攻撃型の芽を植えつけ、皇威拡張を実現するために現役兵の教育年限は、最低三年間は必要であるとして、服役年限の短縮には反対の意を唱え、現役三年制に固執した。橋本は、教育中である初年兵を含めて看護卒の定員とすることで、定員を確保する方針を打ち出した。補充方法を半人ずつとすることは、能力の維持を確保する確実な方法の提案であった。また、看護長の補充については、戦時師団では看護卒で「下士適任書」を所持する者より補欠をすること、平時師団では、看護卒の再役志願者から補充することを提案した。

橋本は、戦時の要員に欠員が生じない補充方法として、中隊より毎年半人を補充員として取ることを考えた。従来の看護卒の定員は歩兵連隊に一二名（看護修業兵四名十二年兵四名十三年兵四名）を戦闘外としていたものを、定員一二名（二年兵六名十三年兵六名十看護学修業兵）とすることとした。橋本は、教育中である初年兵を含めて看護卒の定員とすることで、定員を確保する方針を打ち出した。補充方法を半人ずつとすることは、能力の維持を確保する確実な方法の提案であった（図8参照）。

三 看護手制度と下士補充制度の確立

橋本の上申の結果、一八八八年二月二十四日「陸軍衛生部現役看護手補充条例」（資料12）が勅令九二号（以下「看護手補充条例」とする）として制定された。すでに二月一日には、「陸軍看病人磨工召募準則」が制定されており、上申書の中で述べられている「看護卒ハ各隊ノミニ置キ病院及各官廨ノ者ハ之ヲ全廃シテ雇員ノ看病人ヲ配布スル」という意見が、「陸軍看病人磨工召募準則」の第一條「看病人ハ病院病室及憲兵隊其他衛生部士官ノ属スル官廨ニ置キ患者ノ看護其他看護ニ係ル雑務ニ服セシム」に生かされていることが確認できる。

「看護手補充条例」の制定により、隊附徴兵看護卒は看護手となり、衛生部におけるは看護手の服装・徽章・日給などは、総て上等兵と同等となった（図9）。研磨術を修得している者は磨工に採用され、多くの看護卒は病院付きは雇人の陸軍看病人として職務を継続することとなった¹⁰⁰。

この制定により、徴兵看護卒および壮兵看護卒の徴集は中止となり、看護卒は隊附及び病院の現役看護卒を合わせて配属されることとなった。橋本はその移行処置として、「現役看護卒中近衛各師団ニ於テ六百六十八名ハ当分在營セシメ其他ハ此際帰休セシム」¹⁰¹という内容

の省令案を提出し、六六八名の看護卒をそのまま在営措置を取ってもらえるように依頼をしている。

さらに同日には、「陸軍衛生部現役下士補充条例」（勅令九三号）全六条（資料13）が公布され、その第一条には、「陸軍衛生部現役下士ノ補充ハ看護手ニシテ入隊ノ日より起算シ二箇年以上現役ニ服シ再服役ヲ許シタル者ヲ以テス」として、「下士候補名簿ヲ製シ」陸軍省医務局長が管理することが定められた。この勅令により、看護手として二年間服役したもので再役を認めた者を名簿で管理して、衛生部下士候補とすることとなった。

「看護手補充条例」では、教育期間は橋本の上申の通り、軍事上の教育六ヶ月、看護学の教育六ヶ月の計一年に延長され、軍事上の教育は歩兵隊への編入という限定がなくなり、補騎砲工輜重兵の初年兵が対象となった（第一条）。第三条では、「第二條ノ割賦ヲ受ケタル中隊長ハ部下ノ兵卒中篤実温厚読書算筆アル者ニシテ看護手ニ適當ノ者ヲ選ミ其名簿ヲ作り順序ヲ經テ連隊長獨立大隊ニ在テハ大隊長以下之ニ倣フニ呈スヘシ」とあり、配属された看護手を修めた者（軍事教育六ヶ月、看護学六ヶ月）から、選んで順番に名簿に登録して看護手となるシステムとなった。

第四条では、看護学修業兵は、連隊長が命じ、その地に衛戍病院に通学して看護学を学ぶこととなった。さらに第五条では、「看護学修業兵」を、卒業後は卒業名簿によって管理すること、看護手に補欠が生じたときは連隊長が看護手を命じることとなった。橋本は上申書の中で「戦時ノ要員ハ決シテ欠員ヲ生セサルヘシ」として、「看護長ノ補充ハ看護卒ニシテ再役志願者ノ者ヲ以テス」「戦時定員ニ封スル看護長ノ欠員ハ看護卒ニシテ其適任証書ヲ所持スル者ヨリ補欠ス」という改正案を提案しており、第五条の制定によって看護手及び看護長の欠員も、速やかに補充できるシステムが作られた。第六条では、毎年二中隊に一名の割合で補充することが定められた。一八八六年から一八九〇年制定された各隊の編制表はこの規則が基本となり配置されることになる。

「看護手補充条例」「陸軍衛生部現役下士補充条例」が制定された結果、看護卒からか上等兵となる看護手に適していると思う者を選んで名簿を作り、その名簿のなかから看護学修業兵を命じて衛戍病院で学ばせ、看護学修業兵として名簿登録し、看護手に欠員が生じたときにはその名簿から補充する。また、衛生部下士には二年間看護手を務め、衛生部下士候補生として名簿に登録されている者から、下士に任命するシステムが確立したのであった（図10参照）。この看護手制度の制定が「看護制度の第二次改革」（表16参照）である。

「陸軍衛生部現役看護手補充条例」が制定された翌日の二五日には、「陸軍看護学修業兵教育規則」（達第二四一号）全一七条（資料14）が制定された。この規則で初めて、試験制度（第十四條、第十七條）が導入された。試験は学科が口答、術科は実施が行われた。術科は包帯術、救急術、患者運搬法の三科目であり、この三科目は戦場の看護人の技術として陸軍が必要とした技術であった。但し、患者運搬法は、担架術の教官を看護長が担っていたことから、修得するべき技術であった。

試験の合否基準も決められ、試験制度の導入は陸軍が将来上等兵、更に戦時においては下士（看護長）となる可能性のある「看護学修業兵」の、教育レベルの標準化を目的としたものであった。「陸軍看護学修業兵教育規則」が制定されたことで、教科書も改訂される。一八八八（明治二一）年二月二日に『陸軍看護卒教科書（第四版）』が出版され、使用されていたが、一八九〇年五月二日には陸達第九二号として『陸軍看護学修業兵教科書』が出版される。

『陸軍看護学修業兵教科書』の第一編は「勤務学」（資料15）であり、軍隊における看護者に求められる軍人としての態度・資質・看護技術能力・教育期間・役割・選抜方法・求められる資質などが書かれている。第一項目では、軍隊で看護人には、戦場における伝染病者の看護と負傷兵の救急処置能力と、「勇気ト服従ノ精神」が必要であり、上官の命令を遂行する事も書かれている。二項目目には、看護手は軍事上の教育を受け、軍役に服している者として、兵器を執れることで、「名誉ヲ得ル」事ができることが書かれている。これは、橋本が上申書で述べたように、陸軍では看護人であっても兵士としての役割を求めている。軍役としての志気の高さと、戦場での役割を果たせる人材の育成をめざしていた事が明文化されている。これらは、軍事教育期間の延長によって修得できる能力として実現できた結果であった。

また看護手になれるのは「歩兵、騎兵、砲兵、工兵、輜重兵中六箇月間軍事教育ヲ受ケ品行方正ニシテ読書、算術ヲ心得、訓育ニ適スヘキモノ」で選抜された者であり、「特科学術」を取得した者であった。「特科学術」の内容は、戦時に医官や調剤手の人員が不足することを想定し、看護手の任務範囲が拡張することがあるとして「現役中更ニ高度ノ教育ヲ受クルヲ要スル」とした。

「陸軍衛生部現役看護手補充條例」の制定により現役満期の者が志願により再役として看護手に従事できることになった。陸軍では軍事教育も特科学術として看護学を修得した者を、戦時に看護手または看護長として召集できるようになったことで、戦時に確実に召集できるシステムの確立であった。これは、加藤陽子氏が徴兵令改正の三つめのポイントとした、国家が訓練済み兵力の効率的な確保に向けて、看護手・看護長の補充と召集システムが、整備・確立したことを意味した。

第二章は「看護手ノ勤務」として九項目が挙げられている。看護手の所属と定員については「看護手補充條例」の第六條に毎年二中队に一を割合で補充することと同様に、「看護手ハ所属ノ中队ニ属シ一ハ本隊の医官ニ隷属シテ勤務ヲ為スヘキモノナリ」とある。さらに第六章には平時衛生部組織の概要で各隊に附属する衛生人員は示された。

防衛研究所図書館所蔵の『明十九〜二三編制関係綴』¹²には、一八八七年から一八九〇年に制定された編制表が集録されている。

- ・「戦時歩兵一連隊編制表」（明治二〇年一月）
- ・「戦時工兵一大隊編制表」（明治二〇年一月）

- ・「戦時騎兵一大隊編制表」(明治二十一年五月二日)
- ・「騎兵補充中隊編制表」(明治二十二年五月二日)
- ・「戦時輜重兵一大隊編制表」(明治二十二年一月二〇日)
- ・「衛生隊編制表」(明治二十二年七月二〇日)
- ・「野戦病院編制表」(明治二十二年七月二〇日)
- ・「戦時野戦砲兵一連隊編制表」(明治二十三年二月二二日)
- ・「平時要塞砲兵一連隊編制表」(明治二十三年三月二九日)

編制表のうち、明治二〇年、二二年に作成されたものの階級は看護長・看護卒であるが、明治二三年に制定された編制表では、階級は看護長と「看護手」に変更されている。

一八八八年七月に制定された「野戦病院編制表」の階級には一二三看護長が七名、看護卒は一〇名に看病人は三〇名、磨工は一名の合計四一名が兵卒の定員となっている。「陸軍看病人磨工召募準則」で定められたように、病院に看病人と磨工を徴兵でなく、雇員としたことで、野戦病院では三一名の徴兵による兵卒の削減につながった事が確認できる。

また一八九〇(明治二三)年制定の「戦時野戦砲兵一連隊編制表」の備考欄には、中隊附一(二)等卒中少とも「補助担架卒四名を含む」事が書かれている。「補助担架卒」は階級には書かれていないが隊内の役割として「補助担架卒」を育成していた事が確認できる。

このように看護手制度第二次改革(表14参照)により、陸軍は衛生隊編制に向け、看護要員の教育体制、補充体制が確立したのであった。

註

¹ 『陸軍衛生制度史(明治篇)』四五九頁。

² 『陸軍衛生制度史(明治篇)』三三八頁。

³ 「在役看護卒服役ノ件、本年徴集看護卒補充員組換ノ件、看護卒過員帰休ノ件」(総医第九二号)「陸軍省式大日記」乾(防衛研究所図書館所蔵)

⁴ 「看護卒ヲ廃シ上等兵資格ノ看護手ヲ置き各官廨及病院ニハ雇人之看病人ヲ附シ歩騎砲工輜重兵隊ノミ各中隊ニ該看護手名宛被附度儀付申進」明治二年「式大日記二二月」、式大三三八三号、総医第一〇六号、防衛庁研究図書館所蔵。

⁵ 熊谷光久『日本軍の人的制度と問題点の研究』(国書刊行会、一九九四年)一〇一頁。

⁶ 熊谷『日本軍の人的制度と問題点の研究』一〇四―一〇七頁。大正元年の比較になるが、一人あたりの俸給諸給(含諸手当)は陸軍一六、三円に対し、海軍二六・一円と海軍の半額となるが、総額の人件費となると陸軍の兵員数二四、四〇〇名に対して総人件費五八、九九二、七〇二円に対し、海軍は兵員数五四、〇七五名に対して総人件費二、九二六、三二六円と、陸軍が二倍の人件費を必要とした。

⁷ 「陸軍俸給表改正」明治一八年五月一日、内閣記録局『明治職官遠隔表(全七冊)合本

⁸ 2『明治百年史叢書』第一七五回配本／第二七二巻(原書房、一九七七年)八二―八五頁。篠原『陸軍創設史』三六〇―三六五頁。一八七〇年の「徴規則」では、服役期間を四年と定め、「論主一賦兵」では曾我が常備三年、第二予備二年、第二予備二年の合計七年を主張、山県は予備の仕組みについて詳しく調べ二〇歳で兵役に入り、二年で予備籍に移り、その

後も四年の予備兵役があることで、七年の予備を含めて一五間の兵役が確保できるという計算をした。実際には曾我案の三年が採用されたことになる。

⁹ 山田千秋『日本軍制の起源とドイツ』原書房、一九九六年、二二二―二二七頁。ドイツの軍政を模範とした桂太郎は三年現役制に強く固執した。一八六〇年代のプロイセンでも軍制改革の焦点であり、国王や貴族は二年では忠実な兵士は養育できないと主張した。一八六〇年頃のドイツでは、統一のためには対外戦を戦いぬくには、命令にきわめて忠実な兵士を確保する必要がある、桂も兵士には対外攻撃型の芽を植えつけ、皇威拡張を実現するための方略として現役三年制に固執した。加藤陽子『徴兵制と近代日本』六三―六四頁。桂は明治十八年一二月に「陸軍経常費節減ニヨル軍制改革反対」をおこない、文明の進んだ欧州諸国でさえ兵士を教育するのに三年を要するのに、二年に短縮するのは無理だと主張した。

¹⁰ 『陸軍衛生制度史(明治篇)』三二九頁。

¹¹ 「在役看護卒服役ノ件、本年徴集看護卒補充員組換ノ件、看護卒過員帰休の件」(総医第九二号) 陸軍省令第二二号、省令案、「陸軍省式大日記」乾(防衛研究所図書館所蔵)

¹² 軍事行政編制四五五、『明治十九―二三編制係綴り』(防衛研究所図書館)

結論

本稿は、陸軍衛生制度史における看護制度の成立過程を明らかにすることを主題に置くものである。陸軍が、職業看護婦が開始される以前に、系統的・組織的教育という欧米的な形態による近代看護教育を始めたその意図を明らかにし、日本の近代化との関係でその意義を考察することである。

陸軍衛生制度史では、看護卒の補充を「看護制度」と題しており、制度の整備が開始されるのは、一八七三年に徴兵令の制定で看病人・看病卒が会計部病院課に位置付けられ、全国の鎮台病院に配属されたことに始まる。明治政府が近代国家を目指す中で、この看護制度の整備が行われた目的はどのようなものであったのだろうかという問題認識のもと、看護制度の成立過程とその背景を明らかにした。

以下、本書の結びとして、各章をふり返りつつ、序論であげた分析視覚のもと、総括を行いたい。同時に、本書に残された課題についても触れておく。

第一部の「陸軍看護制度成立前史」では、看病人に関する規則が確認できる「小石川療養所」「長崎養生所」「横浜梅毒病院」を取上げた。「小石川養生所」を存続する過程では、看病人の資質として「惻隱の心」がある者であることが望ましいとされた。しかし西洋式の病院が建設され、西洋医学を学び始めた医師らが病院実習を経験する中で、優秀な看護が病院経営に必要であることが認識されることになる。

「戊辰戦争期」、各藩が近代化を目指して購入した武器により、多くの兵士が銃弾に斃れた。銃創を負った多くの兵士には外科的治療を施せる西洋外科学を学んだ医師が必要であり、明治新政府は西洋医学に基づく医師の育成は、近代化のためには緊要の課題であるとして、改革に取り組む。また戊辰戦争では、幕末に長崎でポンペに医学を学んだ橋本綱常や関寛斎により、衛生隊による移送や出征軍衛生機関連業務体系の形成がなされ、軍陣医学の発展が始まったことも確認した。

しかし同時に、戊辰戦争は多くの戦場医療の課題を明らかにした。本稿では、一・西洋医学を身につけた医師の早急な育成、二・医療材料、武器弾薬、食糧などの確保・補充システムの確立、三・戦場における医療体制の確立、四・理論と実地訓練による看護者の育成、五・文明国家となるべく人道主義の理解という、五つの課題が明らかになったことを指摘した。

亀山は、戊辰戦争時に雇われた女性看病人は、単なる洗濯や飯炊きなどのいわゆる女性の仕事を分担させられたにすぎないと考察していたが、本稿では戊辰戦争のなかで、「負傷兵の治療に携わる人」として看病人への認識が変化したことを指摘した。そして東京大病院では、ウィリスの提言などに従い、病院看護に女性登用を試み、包帯交換なども病院の看護に女性が適していることが確認される。

第二部の「陸軍看護制度の草創期」では、山県有朋が軍医寮に松本良順を招聘した、そ

の目的から、松本により軍隊の中に看護卒が位置付けられた過程を明らかにした。明治の初期に看護兵に行われた教育の内容は、陸軍省が作成した看護学教科書で知ることになる。陸軍では、看護兵に必要とされる戦場での止血法、包帯法などを身に付けさせることを念頭に置いた教育をしていた。しかし、一八七七年に起こった西南戦争では、看護兵の技術不足と絶対的な数の不足に加え、コレラの蔓延という問題も起こる。

徴兵令が制定されたものの、免役条項のために政府がめざす兵士数の確保は為されない状況の中、陸軍では西南戦争を教訓として、すべての看病卒を徴兵で召集し、さらにその教育は戦時の外科的治療、また伝染病の蔓延を防止するための消毒法などを教育し、看護法の基礎知識と技術を身に付けた看護兵の育成を目指すことになる。

その方法として、陸軍では看護兵教育を系統的・組織的に教育するシステムを構築する。また看護兵を育成する必要性には、ジュネーブ条約加盟に向け、その条件となる陸軍の正規の衛生隊の編制システムを確立するための、衛生要員の育成・確保という、二つ目の目的があった。

黒澤も指摘しているように、ジュネーブ条約の加盟に向けた課題は、敵味方の区別ない救護への抵抗感进行处理する以上に、専門的な戦時救護医療、すなわち軍医学を充実させることにあったのであり¹、同時にそれは戊辰戦争で明らかとなった課題の解決に繋がるものであった。そのために陸軍では、近代看護学の導入を行い、知識を授け、実施訓練により看護法を身に付けた兵士を育成し、正規の衛生隊の確立を目指すことになる。

陸軍では、兵士に軍事教育の基本教習を終えた後、看護卒に選ばれた者に看護法を学ばせる方式をとる。取締規則を改正し、定員を定め、学ぶべき教育内容・教育方法を整備し、看護学教科書の作成にも着手する。このように、陸軍が鎮台病院で近代看護学教育をはじめたことは、看護史教育前史として位置付ける価値はある。

第Ⅲ部「陸軍看護制度の成立期」では、師団編成に向けた軍備拡張政策の中で、行われた看護制度改革に焦点をあて、衛生部下士補充制度が確立した、第二次看護制度改革までを研究対象期間とした。陸軍の衛生隊編制に向けた改革を行ったのは、戊辰戦争で出征軍衛生機関業務体系の形成を実践した橋本綱常であった。橋本は西欧諸国に軍事視察に訪れ、その近代的な軍事システムと衛生部門についても学ぶ。橋本は帰国後、わが国の徴兵制度に合わせた改革を推進した。その結果、有事に必要とされる衛生部下士の補充及び上等兵である看護手の補充システムを確立する。改革の過程では、下士となる看護長を確保する方策として一年志願兵制度も取り入れられたが、結果としては看護手制度による確実な方法で改革された。

橋本による看護制度の確立は、対外戦争を視野に入れた軍備拡張政策の中で、師団編制に向け衛生隊の編制を可能にしたという点で評価されるものである。陸軍衛生制度の中で看護卒の補充制度を看護制度としているが、衛生隊の編制に向けた改革では、戊辰戦争で課題となった、看護兵の教育システムの確立²看護制度の確立という単純なものではなく、戦場医療を総体的にとられ、分業と継続・維持を視野に入れて取り組むべき課題であった。

つまり、最前線で治療にあたるもの者、負傷兵を搬送する者、医師の治療器具の保守点検、入院治療の看護を担当する者、その医療全体を統括する事務全般を掌る役割を担う者、薬の調合を担当する者など、職域を定め、徴兵された限られた兵士と国家予算の中で、如何にその体制を構築するかが、看護制度改革の柱となるものであった。そのため、看護制度の第二次改革では、担架卒や磨工卒など、看護卒が担っていた仕事が分業され、その職域に応じた教育期間による兵士の育成と確保が可能となったのである。結果、衛生部門の人的補充制度の整備ができたことは、軍隊の基礎ともなり、近代化に向けた動きのなかで、看護制度改革が確立された意義は大きい。さらに、ジュネーブ条約加盟の条件のひとつともいえた正規の衛生隊を作り上げ、兵士らに赤十字思想を浸透させたという点においても、陸軍の努力は評価されるものである。

さて、今後の研究課題であるが、看護制度の第二次改革が行われると同時に、日本赤十字社の看護婦養成が始まる。『陸軍看護学修業兵教科書』が発行された同年、東京飯田町（のち渋谷に移転）日本赤十字社病院において看護婦養成教育が開始（四月一日）され、入学者は解剖学・生理学・消毒学・看護法・治療介輔法・救急法・傷病運搬法の八科目を学んだ。教科書は、当初『足立氏看護法』などを参考としていたが、陸軍軍医学校教官、校長を務めた足立寛が一八九六年六月に『日本赤十字社看護学教程』を刊行する²。今後は、正規の衛生隊と幫助する日本赤十字社における看護婦養成の関係が、どのように築かれることになるのか、陸軍側から検討を加える必要がある。

さらに日清・日露戦争にはじまる対外戦争が繰り返させる中で、看護制度改革は改革を繰り返すことになるのであり、本稿が対象とした期間はあくまでもその初期にあたる部分である。最終的には、第二次世界大戦まで陸軍の看護制度改革について研究を行っていく必要がある。

また、陸軍省発行の看護学教科書には戦場で必要とされる包帯法や止血法だけでなく、病院看護に必要な病室環境や食事の世話、消毒法など、看護法全般が網羅されている。明治二〇年前後に開始された職業看護婦教育は、海外の看護指導者により教育されたことで、陸軍で行われた看護学教育内容が参考とされたという先行研究はない。今後はその点についても研究を進めることで、わが国の看護学教育の発展における陸軍の果たした役割も明らかになるのではないかと考える。

註

¹ 黒澤文貴『日本赤十字社と人道援助』四〇—四一頁。

² 吉川龍子『日本赤十字社看護学教程』坪井良子編『近代日本看護名著集成』（二〇一四年、大空社）五三—五八頁。

資料編（表・図・資料）

表 1

「奥羽出張病院」付属医一覧

	氏名	採用日	付属医申付日	所 属	出張病院における業務など	月 給		
						8月24日	9月20日	10月1日
1	関 寛斎	慶応4年6月8日			〈頭取〉 ・ 東京引揚解散まで			
2	斉藤龍安	6月10日		寛斎門人	・東京引揚後富士艦乗組	5両	5両	8両
3	中村洪斎	6月10日		古川堂門人	・7月18日英船に乗船 ・東京引揚解散まで	3両	5両	6両
4	安楽養清	6月17日		薩摩藩大砲隊付属医	・6月21日「飛準丸」と7月14日「飛準丸」に付添乗船 〈助役〉 ・9月20日より相馬病院へ	給料を受け取った記録なし		
5	中西玄隆	6月18日	6月18日	川越藩	・8月20日帰宅			
6	小松秀謙	6月18日	6月18日	川越藩	・7月22日小名浜への移転、軽症者に付添 ・8月末日まで(?)	3両		
7	篠田本庵	6月18日	6月18日	平潟住	・東京引揚解散まで	3両		
8	下山田主計	6月18日	6月18日	平潟住	・8月20日帰宅			
9	田口耕斎	7月7日		酒井村住	・7月末日まで(?)			
10	府川三省	7月18日	7月18日		・東京引揚解散まで	5両	5両	8両
11	小松立介	7月25日	9月1日	寛斎門人	・8月26日寛斎の門人希望 ・東京引揚解散まで	2両	2両	5両
12	伊東文仲	7月28日		下総佐倉住佐藤泰然門人	・8月31日三春に出発、 ・東京引揚解散まで	3両→5両	5両	8両
13	伊東弘三	7月28日	9月1日	寛斎門人	・8月26日寛斎の門人希望 ・東京引揚後大病院出勤	2両	2両	5両
14	山内宗春	8月1日		平町内住	・9月3日まで	3両		
15	大和田意仙	8月1日		平町内住	・東京引揚後大病院出勤	3両→5両	5両	8両
16	石川玄意	8月1日		平町内住	・9月3日まで	3両		
17	遠藤良斎	8月1日		平町内住	・9月3日まで	3両		
18	草野得柄	8月3日		笠間藩医	・9月6日寛斎の門人願い ・東京引揚解散まで	5両	5両	8両
19	藤田玄涛	8月4日		上小川村住	・東京引揚解散まで	3両→5両	5両	8両
20	草野万吉	8月9日			・8月26日寛斎の門人願い ・9月末日まで	2両	5両	
21	山内圭三	8月9日	9月1日	寛斎門人	・8月26日寛斎の門人願い ・東京引揚解散まで	未記入		5両
22	桂 静馬	8月12日	9月1日	笠間藩	・8月26日寛斎の門人願い ・平で残務整理			6両
23	大村公民	8月12日		平町住	・8月26日寛斎の門人願い ・東京引揚後大病院出勤			5両
24	草野栄吉	8月12日		仁井町住	・門人に取立、見習?			
25	宮本寿碩	8月13日	9月1日	下小川村住	・8月26日寛斎の門人願い ・東京引揚解散まで	未記入	2両	5両

出典：斉藤省三編白里研究グループ『寛斎日記—奥羽出張病院日記を中心として—』陸別町教育委員会、1982年、33—44頁を主に参考として筆者作成。

表2

「奥羽出張病院」東京引揚人数

	出発日	患者数			医師数	看病人		人足	計
一番立	10月26日	長州	(10)	19	3	16	(男8、女8)	108	146
		佐土原	(1)						
		筑州	(8)						
二番立	10月27日	因州	(23)	23	3	18	(男12、女6)	92	136
三番立	10月28日	芸州	(15)	15	3	14	(男11、女7)	84	116
四番立	10月28日	郡山	(3)	3	3	4		18	28
		60			12	52	(男31、女21)	302	426

出典：斉藤省三編白里研究グループ『寛斎日記—奥羽出張病院日記を中心として—』
陸別町教育委員会、1982年、37－38頁を主に参考として筆者作成。

表3

明治8年「看病人看病卒服務概則」の職務比較表

	下 士			卒
	一 等 看 病 人 十一等・曹長	二 等 看 病 人 十二等・軍曹	三 等 看 病 人 十三等・伍長	看 病 卒
定員・職域	<ul style="list-style-type: none"> ・陸軍本病院2名 ・各鎮台病院1名 ・医官・会計官の指示に従い病室内諸般の事務を掌る 	<ul style="list-style-type: none"> ・看病卒20名ないし21名に1名 ・各鎮台病院に1名 ・諸隊附医官・会計官の指揮に従い病室内事務を管掌 	<ul style="list-style-type: none"> ・看病卒8名に1名 ・一・二等看病人の指示に従い看病卒を指揮する ・二等看病人に代わり行軍に従う時は総て同官職務の條款による 	<ul style="list-style-type: none"> ・患者6～10名に1名 ・各屯営病室に1名を置き、薬剤の準備、医官の手術介助
病棟管理	<ul style="list-style-type: none"> ・毎日午前8時、午後4時に各病室・浴室・便所まで巡視、汚染箇所は担当の二等・三等看病人を督責し速やかに看病卒が清掃 	<ul style="list-style-type: none"> ・一等看病人不在時の代理 ・毎日午前7時より午後3時まで室内・浴室・便所などを巡視し不潔の箇所を病室掛伍長に通知し、使役兵卒に清掃させる 	<ul style="list-style-type: none"> ・担当する室内・廊下・便所などの清掃 ・病室内の備品及び日用消耗品の点検・補充 	<ul style="list-style-type: none"> ・1日に2回病室内を清掃し、食器も清潔、気温への配慮、便所に至るまで清潔の保持 ・尿器便器の速やかな片付け、毎朝痰壺便器の清浄 ・診察・食事前20分間は空気の入れ替え ・毎室1名づつ交替で火の元の点検
患者管理	<ul style="list-style-type: none"> ・毎日午後7時より9時までの間は各病室を巡視し、患者数を確認、日表を記録し、翌午前7時に会計官に報告 ・危篤患者の担当看病卒は二・三等看病人と協議して選定 ・死亡患者の処置、身許に関する情報の管理、遺言及び私物の保護 ・災害時の避難誘導を指揮 	<ul style="list-style-type: none"> ・毎日午後7時より9時まで室内を巡視し、患者数を点検・記載、日表を記録し、翌午前7時に会計官に報告 ・受け持ち患者の急変時、異常時は速やかに医官に報告 ・新たな入院患者に病室の諸規則の説明。病状を詐偽する場合は医官・病室掛伍長に報告 ・医官に面会者の許可を得て、その旨を病室掛伍長へ通知 ・災害時は医官の指揮に従い病室掛伍長に通知、使役兵卒を附して避難誘導 ・患者の文書往診、面会者への注意 ・行軍の時、必要時患者輸送の介助 ・医官診察時の介助、手術の介助 	<ul style="list-style-type: none"> ・重症患者は看病卒の見本となるよう率先して懇切に看護を実施 ・新たな入院患者に病室の諸規則の説明。 ・散歩など患者外出時の管理 ・院外面会者の管理(医官に許可を得て、看病卒一名を付す) ・退院患者、死亡患者の書類を医官・会計官へ送致 ・退院患者の個人情報を一等看病人に報告 ・患者の請求物品を一等看病人に申請と受領 	<ul style="list-style-type: none"> ・看病人の指示に従い、与薬・食事・体位変換の介助を親切懇篤に実施 ・与薬は量・時間を守り、飲食はすべて医官の指示を順守 ・回診の時は患者の傍らで容体を医官に詳細に報告 ・患者に異常がある場合は医官に速やかに報告 ・患者が療養生活を守らない時は注意・指導し、改善無い場合は看病人に報告 ・患者の散歩・沐浴時の付添、脱院防止 ・看病人の指示に従い面会場面に立ち会う ・上官の指示に従い死亡患者の処置 ・医官診察時は軟膏貼付・繃帯、手術介助
人的管理	<ul style="list-style-type: none"> ・二等看病人以下の勤務態度の管理 ・看病卒出勤簿の管理 ・看病卒の病室担当配置 ・会計官・医官の命令の伝達 	<ul style="list-style-type: none"> ・看病卒の出勤簿の管理 ・三等看病人・看病卒の勤務状況の監視 ・命令布告は看病卒に通知 		
教育的管理	<ul style="list-style-type: none"> ・職務の余暇に二等看病人以下に看護の方法を教える 			
物品管理	<ul style="list-style-type: none"> ・三等看病人が記載した患者私物請求品の帳簿を確認し、会計官・医官の点検後、物品を交付 ・各病院病室の消耗品出納の監視、破損状況の確認、三等看病人を介して補充 ・要焼却リネンに関しては会計官に報告し指揮を受けて処分 	<ul style="list-style-type: none"> ・患者私物請求品の帳簿記載 		<ul style="list-style-type: none"> ・行軍のときは、外科具・手術の備品を背囊に納めて背負い医官に従う ・背囊中の薬品他器械などの品目は暗記し、使用時に備える

表4

岩倉使節団『特命全権大使米欧回覧実記』病院見学記録の抜粋

年月日	見学先	記 録 内 容	篇一頁
明治4.12.22	「ストックトン」癲狂院見学	○夫ヨリ、「ストックトン」邑ニ至リ、姑ク車ヲトトム、桑港ヲ距コト、九十二英里、此平野中ノ一大都邑ナリ、此邑ニ癲狂院ノ設ケアリ、停車中ニ一覽ス、其屋造壮大ニテ、前後ニ広苑ヲ設ケ、五禽ノ戯ヲナサシム、今男女ノ病人、一千五百人アリ、病ノ軽重ニテ室ヲ異ニス、病甚キハ室ヲ鎖シ、手足械ヲ施シ、便溺坐ヲ汙スモアリ、ミナ看病男女ヲ付ス、手足ノ械ハ鉄ニテ作ル、近年其囚犯ヲ待ツニ同シキヲ以テ、革製ニカヘン事ヲ議スルト云、凡ソ癲狂病ノ劇性ニテ、暴動制シ難キハ、殊ニ婦人多シトナン、	(一)-115頁 第五卷 アメリカ合衆国 「カリフォルニア鉄道ノ記」
明治5.5.1	癲狂院見学	癲狂院ニ赴ク、院ハ「ユスチンブランチ」河ノ前岸、岡上ニアリ、境域広濶ニテ、樹木陰森タリ、中ヲ開キテ庭園トナシ、中央ニ病院アリ、高恢ニテ結構清絶ス、右ニ病男ヲ入レ、左ニ病女ヲ入ルル、近来院内ニ説教室ヲ設ケヤヤ備成セリ、病堂ニハ画額ヲ掛ケ、盆花ヲ列ネテ、病人ノ愛玩ニ供ス、室中ノ空氣甚タ清冷ナリ、窓格ハ鉄造ニテ嚴重ヲ極ム、 ○園後ニ洗濯所アリ、器械ヲ設ケ、常ニ十余婦ヲイレテ、衣服帨巾ノ類ヲ洗ハシム、又材木製場アリ、其傍ニ蒸氣器械場ノ軸輪アリ、此ヨリカヤーノ巨輪ニ伝フ、輪ハ風扇ヲ仕掛ケ、背後ニアル密林ヨリ、清浄ナル空氣ヲ流動セシメテ、室中ノ洞口ヨリ燭キ入レ、此ヨリ隧道ヲ鑿リ、庭地ノ底ヲククリテ病院ノ下ニ達シ、吹出ス故ニ鼓入ノ氣ハ、地中ニテ湿ヲ失ヒ冷氣トナリテ、院中ニ散スルヲ以テ、酷暑ト雖トモ、院内ハ常ニ涼シ、	(一)-252・3頁 第十三卷 アメリカ合衆国 「ワシントン府ノ記下」
明治5.6.26	癡児院見学	○夫ヨリ癡児院ニ至ル、此院ハ手足不随ノ嬰兒ヲ受ケテ、治療スル病院ナリ、父母病児ヲ連れ来レハ、安車ヲ以テ児ヲ受ケ、蒸氣カノ鉤上ケ器械ヲ仕掛ケ、児ヲ楼上ノ病室ニ送ル、現ニ入院ノ児、男女百三十四人アリ、一児アリ足踵攣縮シ、跟地ニツカス、其趾ヲ截テ筋肉ヲ緩メントセリ、一女児アリ十一年歩スル能ハサルモノナリシニ、入院十五ヶ月ニテ歩スヘキニ復セリトテ、試ミ歩シテ示セリ、寢室ハ、鋼鍊ノ網ヲ張タルヲ用フ、西洋近年専ラ鋼鍊線ニテ製セル螺旋ノ彈キヲ、寢牀ノ墊トナシ、蒲団ヲ其上ニシク、牀ニ上レハ、穩カニ身ヲウケ、輒和トシテ身ニサハラサレトモ、病児ヲ臥セルニハ猶激動強シトテ、此新工夫ノ鍊鋼ニカエタリ、	(一)-346頁 第十九卷 アメリカ合衆国 「ニューヨークノ記」
明治5.6.27	エスト河の2島の病院（売笑婦の産院）に関する記録	港ヲハナレ「ブロックリン」府ノ前ヲ駛リテ、西河ヲ遡ル、河中ニ二島アリ、島中ノ空氣潔キヲ以テ、此ニ病院牢屋ヲ建ツ、此病院ニハ、売淫ノ婦、妊娠シタルモノ、来テ児ヲ産ム所アリ、其児ヲ院中ニテ育養スル、育嬰院ノ法ニ同シ、米国ハ地大ニ人少ナルヲ以テ、百般ニ生口ヲ繁クスルノ術ヲ尽シ、カカル私生ノ子モ、亦牧養スル方ヲ尽ス、育嬰院ノ設ケ、米ト露トノ兩國、尤モ手ヲ尽シタリ、然トモ識者ハ謂フ、世ニ不善ノ門ヲ開キテ、人工ノ多カラシムヨリハ、寧ロ風教正シクシテ、人口ノ少キヲ以テ、「シヴィル」ノ趣意ニ合セリト、寔ニ篤論是ナリ、	(一)-351頁 第十九卷 アメリカ合衆国 「ニューヨークノ記」

年月日	見学先	記 録 内 容	篇 一 頁
明治5.9.23	ソルテヤ邑の病院に関する記録	「ソルテヤ」邑ニ至ル、○校ノ前ニ養老院アリ、職人ノ老衰シテ用ヲナサザルモノハ、此ニ入レテ恤養ス、又病院アリ、村中ノ病人ヲ医薬ス、	(二) -286頁 第三十五卷 イギリス国 「プラトホルト」府ノ記
明治5.10.28	倫敦での病院見学	「アレキサンドル」氏ノ誘引ニテ、大裁判所、並ニ病院ヲ回覧ス	(二) -375頁 第四十卷 イギリス国 「ロンドン府後記」
明治5.11.2	グリーンウィッチの海軍病院見学	緑威ノ海軍病院ハ、元王宮ニテ、英王ノ猶予ノ地タリ、維廉第三世、及ヒ馬利后ノ時代ニ、其宮ヲ以テ海軍ノ病院トナシタル、高名ナル所ナリ、全院ミナ白石ヲ以テ建築シ、宇内宏大ナリ、	(二) -377頁 第四十卷 イギリス国 「ロンドン府後記」 * 写真あり
明治6.1.18	パリ軍病院見学	○軍病院ハ「ワンセーン」城ヨリ、巴黎府ニ入ル、郭門ノ辺ニアリ、屋造宏大ニテ、高サ五階、中ニ広庭ヲ包ミテ、横縦各六十間許、室ヲ分ツテ病人ヲイルル、一室ニ四十ノ寢床ヲ安ンス、全院ニ二百人ヲイルル、薬剤店ノ室、台所、洗濯所、浴湯所ミナ広大ナリ、病房ニハ、ミナ耶蘇磔刑ノ図ヲカカケ、看病婦人（所謂ル「ノン」ナルモノ）ニテ看護ス、「カドレイキ」教国ノ風俗ナリ、又男看病人モアリ、	(三) -118頁 第四十五卷 フランス国 「パリ府ノ記 四」
明治6.3.14	1770年フレデルヒ2世設立の大病院見学	○夫ヨリ大病院ニ至ル、大病院ハ、一千七百七十年、「セ、クレート、フレデルヒ」第二世ノ代ニ、勅建シタルモノナリ、伯林ノ本部ニ於テ、辺鄙ノ地ニアリ、其地域ノ内ハ、広苑ヲ帯ヒ、周囲ニ市塵ノ閑ヲ絶ツ、屋造ハ四層ノ高宇ニテ、磚瓦ヲ壁トシ、白鉛漆粉ヲ塗リタレハ、白石屋ニ彷彿トシテ壯麗ナリ、近年ニ増建修造シタル屋ハ、上宇ヨリ空気ヲ流通セシムルヲ主要トシ、以テ建築ス、此ハ米利堅国ニテ發明セル屋造式ニテ、近年病院ノ建築ニハ、重ニ此法ヲ用フルトナリ、蓋病ヲ治シ、健康ニ復スルニハ、空気ノ功、最モ著大ニテ、藥石ノカハ、遠ク及ハサルコト、近年ニ益実験シタルヲ以テ、漸ニ此式ノ屋ニ改革スルト謂ヘリ、 ○全院ニ病室七百アリ、病人二千人以上ヲイルルヘシ、現ニ入院ノ病人、一千六百人アリ、衣服、衾茵ヲ洗濯スル室、十一ヶ所、一歳ノ費用四十万弗（日耳曼ノ貨幣「ターラー」ヲ称セサルハ伯林滞在中ニ独逸語ニ通セルモノニ乏シク常ニ英語ニテ応答セルヲ以テ其答語モ故ラニ「ターラー」ヲ弗ニ改メタルナリ）、其内ニ、政府ヨリハ其八万弗ヲ払ヒ、他ハ病院ノ所有財産ヨリ生スル利ニテ辨ス、病人ヨリ入費ヲ収ムルコトナシ、入院ノ病人ニ、宗門ノ限制ナシ、看病人ノ給料ハ、年給八十弗許ナリ、 ○台所ニハ、巨釜六ヶヲ連ヌ、大ナルハ円径七尺、小ナルモ六尺ニ及フ、以テ「スープ」ヲ煎ル、此数釜ニテ、千五百人ノ食ヲ調スルニ足ル、西洋ノ風ハ、常食ニ麴包ヲ用フ、故ニ台所ニテハ、只羹ト肉汁トヲ調スルニ過キス、是ヲ以テ庖厨簡易ニシテ善辦スルコト、比類ナリ、其竈ノ火ヲ導キ、地底ヨリ洞ヲ掘リテ、半英里外ノ地ニ達シ、其地ニ烟突ヲ築キテ噴出セシム、炭酸瓦斯ヲシテ、院内ノ空気ヲ攪乱セシムヲ免ル為メナリ、	(三) -321頁 第五十八卷 フランス国 「ベルリン府ノ記 上」

年月日	見学先	記 録 内 容	篇 - 頁
		<p>空気ハ、人ノ健康ニ於テ、第一ノ効用ヲナスモノニテ、病ヲ療スルカモ、薬剤ニ超越ス、又炭酸瓦斯ノ人身ニ害アルコト等、少ク物理ト生理トノ一般ヲ窺ヒタルモノハ、了解セルヘシ、然レトモ世人ハ、未タ其故ヲ知ラサルモノ多ケレハ、此ニ其略ヲ論シオカン、世人ミナ謂ヘシ、人ノ健康ヲ保ツニハ、飲食コソ第一ノ効用ナルヘシ、如何トナレハ、飲食ノ人ヲ養フコトハ、人皆日タニ之ヲ目睹スレハナリ、空気ノ人身ヲ養フコトモ、飲食ト同ク、日タ不断ニ其効ヲ現セリ、人之ヲ目睹スルヲ得サレハ、知ルニ及ハサレトモ、試ミ思ヘシ、食ヲ断ツコト数旬ナルモ猶死セス、氣息ノ呼吸ヲ断テハ、須臾ニ死ス、是空気ハ人身ニ最モ緊要ナル明証ナラスヤ、空気ハ目ニ視ルヘカラサレトモ、其体質アルコト、水ヲ拒ミ膚ニ障ルニテ、知ラレタリ、此体質ヲ吟味スレハ、ニケノ瓦斯ニテナル、酸素一ト、窒素三トノ調剤ナリ、是ヲ清浄ノ空気トス、</p> <p>動物不断ノ氣息ハ、此空気ヲ吸ヒ、内部ニテ其酸素ヲ肺管ノ鼓動ニカケ、又胃中ヨリ送リタル、食物ニ含ミシ、炭氣ニ調和シ、炭酸瓦ストナシテ、再ヒ呼ヒ出ス、故ニ人ノ呼吸ハ、其吸フトキニ入ルモノハ、酸室ノ清氣ニテ、其酸素ハ内部ニ入りテ種種ノ効用ヲアタヘ、而テ呼フトキニ出ルハ、炭素ニ抱合シテ、炭酸瓦ストナリ、人身ニ効用ナキヲ以テ、直ニ輸シ出スナリ、試ニ密閉ノ小室、又ハ箱内ニ入り、居ルコト数時ナレハ、氣ヲ閉テ死ス、是他ノ故ニアラス、</p> <p>其内ニアル清浄ノ空気ハ、已ニ吸ヒ尽シ、跡ニハ呼出シタル、炭酸瓦ストナリ、其内ニ充滿スルユヘナリ、凡地上ノ空氣中ニハ、常ニ炭酸瓦斯ノ混スルヲ免レス、其原因ハ種種アリ、或ハ人物ノ呼出ス氣息ヨリシ、或ハ火ノ焰ヨリ生シ、或ハ物ノ腐爛朽敗ヨリ生ス、如此ク炭酸瓦斯ノ生スルコト多ケレトモ、人ヲ毒スルニ至ラサルハ、空氣ノ分量多ク、又風ニ動揺サレテ散シ、又其氣ノ質重クシテ、地上ニ沈下スル等ニヨル、</p> <p>且炭酸瓦斯ハ、草木ノ肥養ニハ、反テ第一ノ効用ヲナスモノニテ、凡草木ハ、常ニ葉ヨリ此氣ヲ吸ヒ、其炭ヲ収メテ、木質トナシ、酸ヲ呼出ス、動物ノ氣息ト相反スルヲ以テ、地上ノ炭酸瓦斯ハ、草木ニ吸取テ清浄ナル酸素トナシ、空氣中ニ呼出シ、人ノ滋養ヲ造ルモノナリ、故ニ病院ハ、草木多キ地ヲ選ミ、支廬ノ烟火ヲ離ルル処ヲ選ム、是清浄ノ空氣ヲトルタメナリ、烟突ヲ遠サケ、病室ノ穢氣ヲ交代セシムル設ケヲナスハ、炭酸ノ毒ヲサケルナリ、ミナ府中ニ上水下水ノ管アルカ如シ、</p> <p>患人ニ藥カヲアタヘル、最第一ナルモノナリ、此理ヲ推考シテ、人ノ居常ニモ、能ク空氣ヲ清浄ニシ、炭酸瓦斯ヲ除クニ、心ヲ用フルヲ要ス、疫病瘴毒ノ流布モ、此氣ヨリ生ス、病ノ伝染モ、此氣中ニ感ス、是人ノ目ニ視ルヲ得サル所ナレハ、往往ニ知覺セスシテ、自ラ己ニ毒スルモノ多シ、慎マザルヘカラサルナリ、</p>	(三) -322・323 頁

年月日	見学先	記 録 内 容	篇 - 頁
明治6.3.14	新病院 (1867年現在の皇后増築) 見学	<p>○新病院ハ、今ノ皇后ノ建タル院ナリ、此日ハ皇后ヨリ、特ニ接伴掛ニ囑シテ、我使節ヲ案内シ、一見セシメ給ヒシ、</p> <p>○此院ハ、一千八百六十七年ニ造起セルモノニテ、庭園宏恢ニ、樹木森沈タリ、屋宇ハ甚タ大ナラス、病室ミナ米国式ノ造作ニテ、病人ハ十五人ヲイルルヘシ、現ニ六十人ノ入院アリ、此院ニ入ルモノハ、病人ヨリ月ニ一千弗ヲ納メシム、故ニ入院ノ人ハ、ミナ有産ノ人ノミニテ、其接遇甚タ鄭重ナリ、全院ノ費用ハ、其大半ハ、府中ヨリノ寄附ニテ辨ス、</p> <p>○院中ニ礼拝堂アリ、病室ノ人ヲ殯スル所アリ、庖厨及ヒ窖蔵ニ至ル迄、ミナ清麗ニシテ、器皿尽ク整備ス、又洗濯室ニハ、五六名ノ女エヲイレテ、洗濯ヲナサシム、洗濯器械ノ設ケナシ、手ニテ洗濯シ居タリ、此ニ仕使セラル婦人ハ、多ク貴族豪家ノ寡婦トナリタルモノ、施済ノ為メニ、此ニ入りテ事ヲ操ルモノナリ、此日我輩ニ院中ヲ接伴セルハ、四十余ノ婦人ニテ、容止嫺雅ナリ、貴族ノ寡少君ナリト、</p> <p>○此朝モ、我輩ニ先タツテ、皇后親ラ病室ヲ見舞リ、帰御アリシ後ナリキ、大抵1ヶ月ニ、三四度ハ病人ヲ見回り、問訊アルトナシ、一統此ニ名ヲ題署シテ帰ル、此時ハ飛雪紛紛ニテ、院ノ庭園ヲ一見スルニヨシナカリキ、</p>	(三) -324 頁 第五十八卷 フランス国 「ベルリン府ノ記上」
明治6.4.11	医学校附属 の解剖寮の 見学	<p>○二時ヨリ駕シテ、医学校附属ノ解剖寮ニ至ル、此ハ元四十年前ニ建テタルヲ四年前ニ広メタル大館ニテ、規模宏壮ナリ、寮内ニテ解剖スル数ハ、一ヶ年ニ全部ノ解剖ヲナスコト、六百人ヨリ七百人ニ及フ、病ノ一部ヲ解剖スルハ、其数ヲシラス、此屍ハミナ病死ノ人ナリ、罪人ノ屍モ解剖スルヤト問シニ、之ナシト答ヘタリ、凡病院ニテ、政府ノ救済ヲ以テ、無費ニテ治療ヲ受ケ、遂ニ死シタル貧民ハ、ミナ解剖ヲ受クルヘキ義務ト定ム、解剖ノ後ニハ、又縫合シ完身トナシテ、政府ヨリ之ヲ葬ムルナリ、其内ニ石炭ヲ以テ乾固シ、骨骸ヲ存シテオクモアリ、是ハ無宿ノ貧民ニテアルヘシ、</p> <p>○此日ハ、全部ノ解剖屍五六人、一部ノ解剖モ六人アリ、又一寮ニハ牧畜ノ解剖科アリ、牛馬羊犬ノ解剖ヲナシ、各室ニ蓄フ、乾燥ノ支骨、火酒漬ノ臓腑、蠟細工等甚タ夥多シ、八年前ヨリ、石灰ニテ乾固ノ法ヲ行ヒシ石屍アリ、髑髏ノ多キハ、数室ニ充牣シ長廊ニ堆積シ万数ニ超ユ、</p> <p>○入校ノ生徒ニ、蒙古人、満州人アリ、又女医生モアリ、露国ノ婦人ハ、大学校ニ入りテ業ヲ講スルモノアリ、他国ノナキ所ナリ、重ニ医業ヲ学フ、解剖ノ寮ニテ、ニハノ窈窕タル婦人、案ニ向ヒ臓腑ノ火酒漬シヲ摸シ、捻リテ書籍ニ比較シテ驗スルアリ、或ハ断腕ヲ執ヘテ査驗スルモノアリ、頗ル人ヲ驚愕セシム、欧洲ニテ婦人ノ大学校ニ入ルハ、露国ト瑞西トノミ、</p>	(四) -101 頁 第六十五卷 ロシア国 「セントペートルボルグ 府ノ記下」

年月日	見学先	記 録 内 容	篇 一 頁
明治6.4.11		○ 兎ヲ以テ試験シ、或ハ蛙ヲ照シテ査驗スル室アリ、 ○ 医学校ハ、築造更ニ広大ナリ、全費中ニイル、生徒二千 百人、其入費年ニ三百五十万「ルーブル」、此日分析寮ヲ回 復ス、記スヘキコトナシ、	(四) -102頁
明治6.4.11	医学校附属 病院の見学	○此ニ附属セル病院アリ、病人八十人アリ、此ハ医生へ、病 ノ治療ヲ現地ニ付テ、鍛練セシムル為メ、校ノ「ドクトル」(医博 士)治療ヲナストキ、生徒ニ其容体ヲ示シテ、治術ヲ思考セシ ムル設ケナリ、大病院ハ又別ニアリ、四日前ニ類ノ皮ヲトリテ鼻	(四) -102頁
明治6.4.27	「ストックホル ム」府湖岸病 院	是ヨリ病院ヲスキテ、兵学校ニ至リ、其城中ノ岡上ニ 上リ、湖上ノ景ヲ一望ス、風光絶佳ナリ、前ニハ湖ヲ 隔テ、一村アリ、此村中ニ牢獄一区建ツ、空気ノ清浄 ナルヲ扱ミテ建タルナリ、	(四) -182頁 第六十九卷 スウェーデン国 「瑞典国ノ記下」 *写真あり
明治6.5.15	ローマ軍病 院の見学	○軍病院ニ至ル、スヘテ七十室ヲ分ツ寢床三百五十ヲ具 ス、現ニ入院ノ病人百五十人アリ、医師十一人ヲ配ス、看病 人ニハ「ノン」アリ、 ○此院ニテ記スヘキハ、浴室ノ設ケナリ、尋常ノ浴盤	(四) -312頁 第七十六卷 ローマ国 「羅馬府記下」 *写真あり

【表5】大阪陸軍臨時病院入院患者疾患名と患者数

内科系疾患名	患者数	死亡	外科系疾患名	患者数	死亡
アジアコレラ	887	482	上肢銃創	2531	121
脚気	461		下肢銃創	1556	99
腸粘膜カタル	163	5	軀幹銃創	818	48
腸チフス	161	69	頸首銃創	705	31
単純熱	110	1	上肢截傷	125	1
弛張熱	62	1	頭首截傷	71	3
関節慢性リウマ	46		軀幹截傷	42	
気管支カタル	36		下肢截傷	28	1
赤痢	36	9	軀幹打撲	26	
胃慢性カタル	34		下肢打撲	24	
ディスペプシア	30				
発疹チフス	28	14			

石黒忠恵『大阪陸軍臨時病院報告摘要第一号』（陸軍文庫、1787年）「大阪
陸軍臨時病院並所轄病院病類総表」33－38頁より作成

表 6

明治 16 年・17 年徴兵看護卒取扱手続

	明治十六年徴兵看病卒取扱手続 明治16年2月20日送乙第五八九号 明治16年7月達丙第十八号ニテ第十一・十二條追加	明治十七年徴兵看護卒取扱手続改正 明治17年6月25日送乙第二五四〇号 改正：第二・三・四・六・九條
第一条	本年徴兵看病卒取扱方ハ総テ生兵規則ニ拠リ其他ノ諸則モ諸兵ニ同シト雖モ其異ナル所ノモノハ此手続ニ準拠ス可シ	本年徴兵看病卒取扱方ハ総テ生兵規則ニ拠リ其他ノ諸則モ諸兵ニ同シト雖モ其異ナル所ノモノハ此手続ニ準拠ス可シ
第二条	徴兵看病卒ハ諸兵ト同時ニ召集シ住所最寄ノ營所ニ入營セシム可シ	<改正> 徴兵看護卒ハ諸兵ト同時ニ召集シ鎮台所在地ニアラサル歩兵隊ニ要スル人員ハ其最寄居住ノ者ヲ以テ入營セシメ其他ハ悉ク鎮台所在地ノ歩兵隊ニ編入シ第九條ノ第一教科ヲ教習セシム
第三条	前條入營ノ人員ハ鎮台所在地ニアラサル歩兵隊ニ在テハ毎大隊ニ三人騎砲工輜重兵ノ各大(中)(小)隊ニ在テハ每一隊ニ一人トシ其他ハ悉ク鎮台所在地ノ歩兵隊ニ編入シ第九條ノ第一教科ヲ教習セシム可シ	<改正> 前條ノ教習卒レハ鎮台所在地ニアラサル歩兵隊ニ在テハ該卒ヲ医官ニ渡シ又鎮台所在地ノ歩兵隊ニ在テハ其地陸軍病院ニ渡スヘシ
第四条	各隊ニ於テ第九條第一教科ノ教習卒レハ該卒医官ニ渡シ各所付看病人ヲシテ第九條第二及ヒ第三ノ商科ヲ教習セシム可シ 但鎮台所在地ノ歩兵隊ニ在テハ該隊所要ノ人員ヲ除キ其他ノ者ハ該地陸軍病院へ渡シ同病院ニ於テ第二第三ノ教科ヲ教習ス可シ	<改正> 病院若クハ隊附医官ニ於テ看護卒ヲ受取ルトキ看護長ヲシテ第九條ノ第二第三教科ヲ教習セシム
第五条	第九條第二第三ノ教科ハ看病人ヲシテ専ラ之ヲ教習セシムト雖トモ医官之ヲ指揮監査ス可シ	第九條第二第三ノ教科ハ看病人ヲシテ専ラ之ヲ教習セシムト雖トモ医官之ヲ指揮監査ス可シ
第六条	三教科ノ教習全ク卒レハ連隊長連隊ヲ為サザル隊ニ在テハ大(中)(小)隊長病院ニ在テハ病院長其熟否ヲ検査シ鎮台司令官ニ具申シニ等看病卒ニ命スル者トス	<改正> 教科ノ教習全ク卒レハ東京ニ在テハ病院長其熟否ヲ検査シ軍医本部長ニ具申シ許可ヲ得其他ニ在テハ連隊長若クハ病院長其熟否ヲ検査シ鎮台司令官ニ具申シ許可ヲ得テニ等看護卒ヲ命スル者トス 但各地陸軍病院ニ於テニ等看護卒ヲ命セントキハ直ニ各所要ノ人員ヲ配賦ス可シ爾後病氣事故等ニテ欠員ヲ生スルトキハ病院附看護卒ノ内ヨリ之ヲ補フモノトス
第七条	看病卒ノ職務ハ看病人看病卒服務概則ニ詳ナリ但シ徴兵看病卒ニ在テハ総テ屯営内ニ宿スル者トス	看病卒ノ職務ハ看病人看病卒服務概則ニ詳ナリ但シ徴兵看病卒ニ在テハ総テ屯営内ニ宿スル者トス
第八条	徴兵看病卒ハ鎮台司令官ニ於テ統轄スト雖トモ其職務ニ至テハ軍医本部長之ヲ管掌スル者トス	徴兵看病卒ハ鎮台司令官ニ於テ統轄スト雖トモ其職務ニ至テハ軍医本部長之ヲ管掌スル者トス
第九条	徴兵看病卒ニハ左ノ教科ヲ教習シ六ヶ月間ニシテ卒業セシム可シ 第一教科 第一 基本体操術 第二 生兵徒歩教練 第三 看病卒心得書(明治16年3月削除) 第二教科 第一 人体造構ノ概略 第二 三角繃帶用法 第三 看病卒背囊入諸品 第四 患者運搬法 第三教科 第一 救急要法 第二 繃帶撒絲ノ製造 第三 繃帶通術	<改正> 徴兵看病卒ニハ左ノ教科ヲ教習シ六ヶ月間ニシテ卒業セシム可シ 第一教科 其一 柔軟体操 其二 歩兵教練 第二教科 其一 人体造構ノ概略 其二 看護卒背囊並携帯具ノ用法 其三 三角繃帶用法 其四 繃帶撒絲ノ製造 其五 繃帶術 第三教科 其一 看護法 其二 伝染病者看護法 其三 救急法 其四 患者運搬法 其五 調剤法大意
第十条	看病卒一名ニ付教習ニ要スル品目左ノ如シ 一 看病卒心得書 一冊 一 同 教科主要 一冊 一 三角繃帶図附 一枚 一 白地三角繃帶 一枚 一 片頭軸繃帶 三卷 一 布 六尺 一 布袋 一個 計七種	看病卒一名ニ付教習ニ要スル品目左ノ如シ 一 看病卒心得書 一冊 一 同 教科主要 一冊 一 三角繃帶図附 一枚 一 白地三角繃帶 一枚 一 片頭軸繃帶 三卷 一 布 六尺 一 布袋 一個 計七種
第十一条	第四條但書ニ因リ各地陸軍病院ニ於テ徴兵看病卒ヲ受取ルトキハ該卒ノ人員ニ応シニ三等看護長若干名ヲ以テ教授掛ニ二等看護長一名ヲ以テ給与掛ニ三等看護長一名ヲ以テ炊事掛ニ充テ各其事務ヲ取扱ハシム 但教授掛ハ一般ノ取締ヲナシ若干名宛週番ヲ以テ宿直ヲナサシム	第四條但書ニ因リ各地陸軍病院ニ於テ徴兵看病卒ヲ受取ルトキハ該卒ノ人員ニ応シニ三等看護長若干名ヲ以テ教授掛ニ二等看護長一名ヲ以テ給与掛ニ三等看護長一名ヲ以テ炊事掛ニ充テ各其事務ヲ取扱ハシム 但教授掛ハ一般ノ取締ヲナシ若干名宛週番ヲ以テ宿直ヲナサシム
第十二條	各地陸軍病院ニ在テハ徴兵看病卒ノ人員ニ応シ該卒若干名ヲ以テ本務ノ外当番及ヒ其他ノ使役ニ充ツヘシ	各地陸軍病院ニ在テハ徴兵看病卒ノ人員ニ応シ該卒若干名ヲ以テ本務ノ外当番及ヒ其他ノ使役ニ充ツヘシ

表7

明治期陸軍看護学教科書一覧

番号	書 名	発行年	発行元	対象	備考
1	撤善篤繙帶式	1872 (M5). 5	文部省		・明治16年以降自然廃止
2	繙帶彙編	1974 (M7). 5	吉雄種満著		164
3	三角繙帶用法	1875 (M8)	陸軍文庫	兵士用	・陸軍軍医土岐頼徳がドイツ人シセルが口授したものを軍医試補多納光儀が訳したものを一冊の小冊子として作成
4	陸軍病院扶卒須知	1875(M8). 2.25	陸軍文庫	看護要員全般	・明治8年11月10日『看病人看病卒服務規則』制定、二等看病人が余暇に看護の方法を教導することが定められた
5	陸軍看病卒教授主要	1883 (M16). 3. 20	陸軍軍医本部	看病卒用に出版	・明治16年2月20日「明治十六年徴兵看病卒取扱手続」制定 ・明治17年4月改定
6	陸軍看病卒教授主要原本並附録	1883 (M16). 3. 20	陸軍軍医本部	教授用として出版	・明治19年6月改定
7	陸軍看病卒教科書	1884 (M17). 4. 23	陸軍軍医本部	看護卒用(兵用)	・明治17年6月25日「明治十七年徴兵看護卒取扱手続改正」、「看護法」が第三教科の一つとなる ・明治19年6月改定
8	陸軍看護卒教科書第二版	1886 (M19). 6. 2	陸軍省医務局	看護卒用(兵用)	・明治19年4月5日「明治十九年徴兵看護卒取扱手続」、「治療介輔法」が第三教科の一つとなる ・明治20年5月改定
9	陸軍看護卒教科主要原本第二版	1886 (M19). 6. 2	陸軍省医務局		・明治23年5月廃止
10	担架術教科書	1887 (M20). 3. 7	陸達第28号	担架卒用	・明治20年2月5日「担架術教育規則」「担架卒選抜及教育規則」制定
11	陸軍看護卒教科書第三版	1887 (M20). 5. 13	陸軍省医務局		
12	陸軍看護卒教科書 第四版	1888 (M21). 2. 12	陸軍省医務局		・明治23年5月廃止
13	陸軍看護学修業兵教科書	1890 (M23). 5. 12	陸達92号	看護卒用(兵用)	・明治36年6月陸達第61号で廃止
14	陸軍看護調剤学教程	1890 (M23). 6. 2	陸達111号		・明治36年6月陸達第61号で廃止
15	陸軍看護学修業兵修業書	1890 (M23). 6. 4			
16	陸軍看護手修業書	1890 (M23). 6. 4		看護長・看護手用	
17	陸軍看病人教科書	1890 (M23). 8. 11	陸達156号		・明治36年陸達第61号で廃止
18	担架術教科書	1893 (M26). 5. 23	陸達55号		
19	陸軍看護学教程	1897 (M30). 6	陸達79号		・明治36年陸達第61号で廃止
20	陸軍看病人修業書	1897 (M30). 6			
21	陸軍看護学修業兵教科書第一編改版	1897 (M30). 9. 15	陸達103号		
22	陸軍看護卒教科書	1899 (M32). 12. 22	陸達152号		・明治36年陸達第61号で廃止
23	陸軍看護学修業兵教科書	1903 (M36). 6. 10	医第34号		・明治42年3月廃止
24	陸軍看病人教科書	1903 (M36). 6. 10	医第35号		・明治42年看病人廃止に伴い消滅
25	看護学教程	1903 (M36). 7. 9	医第40号	看護長用(下士官用)	・明治42年3月廃止
26	陸軍看護卒教科書	1903 (M36). 7. 15	医第41号		・明治42年3月廃止
27	看護教程	1909 (M42). 3. 31	医第45号		

陸軍軍医団編纂『陸軍衛生制度史』(小寺昌発行、1913年)482～484頁を参考に作成

表 8

軍備皇張費取調諸表

軍 備 費 予 算							
名称	16年度	17年度	18年度	19年	20年	21年	22年
近衛 六鎮台 歩 兵 隊 増 員	60,468	354,865	751,668	1,080,370	1,495,715	1,658,777	1,658,777
近 衛 騎 兵 隊 増 員	60,468	10,281	12,419	12,419	12,419	12,419	12,419
近衛 六鎮台 砲 兵 隊 増 員	42,310	133,544	247,273	289,611	340,528	353,240	353,240
仙台、名古 屋、広島 工 兵 隊 員	30,945	46,220	53,172	53,172	53,172	53,172	53,172
近衛 六鎮台 輜 重 兵 隊 附 費	30,945	46,220	22,654	88,833	98,805	105,863	105,863
看 護 長 増 員 費	3,866	4,874	6,195	6,260	6,260	6,260	6,260
徴 兵 看 護 卒 諸 費	35,616	43,821	61,116	61,116	61,116	61,116	61,116
患 者 増 員 費	594	1,472	15,680	25,206	26,272	26,286	26,286

註)伊藤博文、『《明治百年史叢書》第109回配本/119巻秘書類纂10 兵制關係資料』原書房、1970年2月、
262～263頁「皇備皇張費取調諸表」より抜粋

表 9

明治16年 桂太郎草案の看護卒の定員の考え方

軍管	師団	兵種	隊数	看病卒の人員計算	隊数	看病卒の人員計算	合計	桂の案
第二	第四 (仙台)	歩	一連隊 (二大隊) (二中隊)	3名×2=6名 2名×2=4名	一大隊	3名×1=3名	40名	41名
		兵	一連隊 (二大隊) (二中隊)	3名×2=6名 2名×2=4名	一大隊	3名×1=3名		
	第五 (青森)	砲兵	一大隊 (二中隊) (二小隊) 一隊	2名×2=4名 1名×2=2名 3名	一中隊	2名×1=2名		
		工兵	一中隊 (一小隊)	2名×1=2名				
		輜重兵	一小隊	1名×1=1名				
		輜重輸卒						
第五	第十一 (広島)	歩	一連隊	3名×2=6名	一大隊	3名×1=3名	28名	28名
		兵	一連隊	3名×2=6名	一大隊	3名×1=3名		
	第十二 (丸亀)	山砲兵	一大隊 (二中隊) (二小隊)	2名×2=4名 1名×2=2名	一中隊	2名×1=2名		
		工兵	一中隊 (一小隊)	1名×1=1名				
		輜重兵	一小隊	1名×1=1名				
		輜重輸卒						

註:『桂太郎文書十七』桂太郎関係文書目録86. 桂太郎伝記参考書(十)5.戦時陸軍編制並其解説附表六枚、明治18年6月、33~48頁

表10

戦 時 師 団 衛 生 隊 編 制 表

備考			仕官下士ハ皆輜重兵科ヲ以テ附属スルモノナレトモ該兵科幹部充実スルマテハ各兵科ノ幹部ヲ以テ之ニ充ツルモノトス	輜重兵軍曹一名同卒三名ハ行季ノ監視トス	輜重輸卒ノ中十二名ハ乗馬將校ノ馬卒トス	兵卒					下士							將校							
合計	看護卒	輜重輸卒				輜重卒	担架卒	担架上等兵	二三等看護長	一等看護長	一等書記	輜重兵二等軍曹	輜重兵一等軍曹	各兵二等軍曹	各兵一等軍曹	各兵曹長	二三等薬剤官	二三等軍医	一等軍医	二三等軍吏	各兵中少尉	各兵大尉			
97	24	44	3		炊事掛 1	8	2	1	1	1	炊事掛 1			1	6	3	1		衛生隊長 1	本部					
	72(?)					13							12												
405	24	44	3		25	8	2	1		13	4	2	1	6	3	1	2	1							
	360					31							14												
154				喇叭卒 131	分隊長 1						半小隊長 6	小隊長 2	小隊長 1					中隊長 1	一中隊						
	144					9							1												

戦時師団衛生隊編制表

二
中
隊

六
小
隊

出典：明治20年7月20日「陸軍省大日記」陸達156号

表 11

看護卒と担架卒の教育内容の比較

看護卒と担架卒の教科内容の違い		
明治十九年徴兵看護卒取扱手続	担架卒選抜及教復習規則	
明治19年4月5日制定	明治20年2月5日制定	
第一教科	学 科	術 科
其一 柔軟体操 其二 歩兵教練	解剖生理学大要	繃帯術
第二教科	創傷論	傷病者ノ取扱
其一 人体造構ノ概略 其二 看護卒背囊並携帯具ノ用法 其三 三角繃帯用法 其四 繃帯撒絲ノ製造 其五 繃帯術	患者ノ看護法	担架使用術
第三教科	繃帯学	急製担架術
其一 看護法 其二 治療介輔法 其三 救急法 其四 患者運搬法 其五 調剤法大意	担架使用及運搬法	傷病者運搬法
	衛生隊編制及其勤務則	
	補助担架卒ノ勤務則	
六ヶ月間で卒業	授業期間は凡そ3ヶ月	

表 12

陸軍看護卒教育内容の変遷

規則	明治十七年 徴兵看護卒取扱手 続改正	明治十九年 徴兵看護卒取扱手続	明治二十年 陸軍看護卒教育規則	陸軍看護学修業兵教育規則		『日本赤十字社看護学 教程』
	明治17年6月25日 送乙第2540号	明治19年4月5日 省令第41号	明治20年12月28日 陸達百五十五号	明治 2 1 年12月25日 陸達第二百四十一号		明治23年
	教科	第九條	第七條	第三條		
第一教科	柔軟体操	柔軟体操	歩兵教育順次概表初年兵第一期術科学科	勤務学		解剖学
	歩兵教練	歩兵教練		人体造構ノ概略		生理学
				医療囊並繃帶囊入諸品ノ使用法		消毒法
第二教科	人体造構ノ概略	人体造構ノ概略	人体造構ノ概略	学 科	繃帶製造及消毒繃帶ノ使用法	看護法
	看病卒背囊並携帶具ノ用法	看病卒背囊並携帶具ノ用法	医療囊並繃帶囊入諸品ノ使用法		看護法	治療介輔
	三角繃帶用法	三角繃帶用法	三角繃帶用法		救急法	繃帶法
	繃帶撒絲ノ製造	繃帶撒絲ノ製造	繃帶製造及消毒繃帶ノ使用法		治療介輔法	救急法
	繃帶術	繃帶術	繃帶術		調剤法大意	傷病運搬法
	看護法	看護法	看護法			
第三教科	伝染病者看護法	治療介輔法	治療介輔法	術 科	繃帶術	(明治26年から追加) 軍陣勅諭
	救急法	救急法	救急法		救急術	陸海軍人等級及徽章
	患者運搬法	患者運搬法	患者運搬法		患者運搬法	赤十字条約
	調剤法大意	調剤法大意	調剤法大意			

	明治十九年徴兵看護卒取扱手続 明治19年4月5日省令第四一号 * 明治十六年徴兵看病卒取扱手続廃止	明治二十年陸軍看護卒教育規則 明治20年12月陸達第百五十五号 * 明治十九年徴兵看護卒取扱手続廃止
第一条	徴兵看護卒取扱方ハ総テ生兵規則ニ拠リ其他ノ諸則モ諸兵ニ同シト雖トモ其異ナル所ノ者ハ此手続ニ準拠ス可シ	陸軍看護卒ノ教育ハ此規則ニ拠ル其入隊ノ手続ハ新兵入隊定則ニ異ルコトナシ
第二条	徴兵看護卒ハ諸兵ト同時ニ徴集シ近衛ニ要スル人員ハ近衛歩兵隊ニ營所並ニ分營ニ要スル人員ハ其最寄居住ノ者ヲ以テ其歩兵隊ニ其他ハ悉ク鎮台所在地ノ歩兵隊ニ編入シ第七條ノ第一教科ヲ教習セシム	陸軍看護卒ハ近衛鎮台ノ歩兵連隊ニ編入シ第三項ノ教科卒業ノ後チ各部隊ニ配当スルモノトス
第三条	前條ノ教習卒レハ該卒ヲ近衛鎮台ニ在テハ軍医長營所ニ在テハ病院長分營ニ在テハ隊附医官ニ渡ス可シ	陸軍看護卒ニハ左ノ教科ヲ教授シ六ヶ月間ニ卒業セシム 第一教科 歩兵教育順次概表初年兵第一期術科学科 人体造構概略 医療囊並繃帶囊入諸品ノ 第二教科 使用法 三角繃帶用法 繃帶製造及消毒繃帶品ノ使用 繃帶術 第三教科 看護法 治療介輔法 救急法 患者運搬法 調剤法大意
第四条	軍医長病院長又ハ隊附医官ニ於テ看護卒ヲ受取ルトキハ看護長ヲシテ第七條ノ第二第三教科ヲ教習セシム可シ 但病院内看護卒舎狹隘ニシテ其総員ヲ容レ難キトキハ便宜若干名ヲ歩兵隊ニ留メ病院ニ通学セシムルモ妨ケナシ	第一教科ハ歩兵隊第二第三教科ハ病院分營ニ在テハ重病室ニ於テ之ヲ教授ス
第五条	第七條第二第三ノ教科ハ看護長ヲシテ専ラ之ヲ教習セシムト雖トモ医官之ヲ指揮監査ス可シ	第二第三教科ニ在テハ医官看護長之ヲ教授ス而シテ病院長分營ニ在テハ高級医官以下倣之ハ其教育上ヲ監視スルモノトス
第六条	教習全ク卒レハ近衛鎮台ニ在テハ軍医長營所ニ在テハ病院長分營ニ在テハ連隊長其熟否ヲ検査シ都督或ハ司令官又ハ旅団長ノ許可ヲ得テ二等看護卒ヲ命スル者トス 但近衛及鎮台營所病院ニ在テ二等看護卒ヲ命セシトキハ諸隊ニ要スル人員ハ直ニ配賦ス可シ爾後病氣事故等ニテ欠員ヲ生スルトキハ鎮台營所ニ在テハ病院附看護卒ノ内ヨリ之ヲ補ヒ近衛ニ在テハ補充員ニテ第七條ノ教科ヲ卒業シタル後之ヲ補フモノトス	第一教科ノ授業卒レハ連隊長ハ之ヲ病院長ニ引渡スヘシ 但シ近衛ニ在テハ近衛軍医長ヲ經テ東京鎮台病院長ニ引渡スヘシ
第七条	徴兵看病卒ニハ左ノ教科ヲ教習シ六ヶ月間ニシテ卒業セシム可シ 第一教科 其一 柔軟体操 其二 歩兵教練 第二教科 其一 人体造構ノ概略 其二 看護卒背囊並携帯具ノ用法 其三 三角繃帶用法 其四 繃帶撒絲ノ製造 其五 繃帶術 第三教科 其一 看護法 其二 治療介輔法(伝染病看護法から変更) 其三 救急法 其四 患者運搬法 其五 調剤法大意	第二第三教科ノ教習ヲ卒レハ病院長其習熟ヲ検閲シ本人手帖卒業列叙区書ニ看護学卒業ノコトヲ記入シ後チ所要ノ部隊エ近衛所要ノ人員ハ該衛軍医長ニ引渡スヘシ而シテ卒業名簿並ニ配附表ヲ調製シ之ヲ所管ノ軍医部ニ報告スヘシ 但近衛軍医長ハ本項ニ拠リ卒業者ヲ受取ルトキハ直ニ衛下各隊ニ引渡スヘシ
第八条	看病卒一名ニ付教習ニ要スル品目左ノ如シ — 看護卒教科書 一冊 — 図附三角繃帶 一枚 — 白地三角繃帶 二枚 — 片頭軸繃帶 三卷 — 布 六尺 — 布袋 一個 但シ以上ノ品目ハ満期ノ際各自ニ附与スル者トス	病院(重病室)ニ在テハ第二教科授業ノ初メニ於テ修業者ニ左ノ品目ヲ官給ス而シテ此品目ハ現役満期ノ時ト雖トモ各自ニ携帯セシメ返納セシムルニ及ハス — 看護卒教科書 一冊 — 図附三角繃帶 一枚 — 白地三角繃帶 二枚 — 片頭軸繃帶 三卷 — 布 六尺 — 布袋 一個
第九条		對馬警備隊看護卒モ亦此規則ニ準拠シ教科ハ其要領ヲ教授シ四ヶ月ヲ以テ卒業セシム

橋本綱常上申「陸軍衛生部現役看護手補充條例被定度件」明治21年11月12日

現状	問題点	改正案
看護卒として歩兵隊に編入し、軍事に関する教授(第一教科)を受ける。第二・第三教科を病院で学んだのち、歩・騎・砲・工・輜重兵隊に配属される	騎・砲・工・輜重兵隊に配属された者は各隊で必要とされる軍事上の教育が不十分	初めての編入を歩・騎・砲・工・輜重兵隊に配属し、軍事上の教育を受ける
	看護卒として徴集されたものは、看護のことしか頭にないので、軍事上の熟練度が不十分	初年兵で上半年軍事上の教育を受けた者より選抜して「看護学修業兵」として下半年間教育を受け看護卒を命じる
隊付き看護卒の勤務は行軍等にあたり、医官一時不在の場合は自ら救急処置を施す技量を必要とする	処置の適否により患者の予後に関係する	教育期間を1年として、上半年は軍事上の教育、下半年は看護学の教育を充てる
軍事上の教育3ヶ月、看護学の教育3ヶ月の計6ヶ月。	6ヶ月の教育期間では、看護学も軍事上の教育も不十分。特に軍人志気態度は充分といえず。	
病院における看護卒には兵起居の介補尿尿の廃棄、室内洒掃、食事の配与等	病院に兵役義務者を置くことは其の費用上頗る不利	看護卒は各隊のみ置き、病院及び各官廨の看護卒を全廃止とし、雇員の看病人を配置する
日役50人の場合100人を要するのだけでなく、看護舎も必要とする	教育中の者を倍の人員を養う必要が生じ、看護舎を要する。日役の雇員であれば、日役の定員ですみ、宿舎も必要としない。	
軍事上の教育と看護学の教育を受け、看護の技量を身に付け看護卒として医官不在のときは自ら治療処置を施す	職務上治療に当たるが、卒という身分上、患者からの信用上において不都合が生じる	看護卒を上等兵と同等とし、名称も「看護手」に改める

表15

陸軍・政治の動向と陸軍看護制度の変遷(明治1～明治22)

西暦	明治	月	日	陸軍の動き	月	日	制度制定と改革	
1868	初年						陸軍病院では日給の看病人を使用	
1871	4	7	14	廃藩置県	7	5	兵部省内に軍医寮が置かれた(軍医寮は明治6年5月廃止)	
1873	6	1	10	徴兵令の発布	5		会計部病院課に看病人、看病卒位置づけ、志願兵(壮兵)を使用	
1875	8				11	10	「看病人看病卒服務概則」制定	
1877	10	2		西南戦争開始			「看病夫」を日給で雇い、看護法に熟達した者には「証書」を附与	
1879	12	10	27	第一回徴兵令の改正			第三条の変更により徴兵看病卒の徴集の準備開始	護 制 度 第 一 次 改
1882	15			壬午事変勃発	9	11	「陸軍研磨証書」5名に附与	
1883	16	5		ドイツのベルリン内務省御用掛柴田承桂視察に赴く	11	10	「明治十六年徴兵看病卒取扱手続」制定	
		12	28	第二回徴兵令の改正			第11条の一年志願兵制は経費が自弁できる看護卒育成が対象	
1884	17				5	24	「看護卒」に改称	
					6	25	「明治十七年徴兵看護卒取扱手続」改正	
1885	18	3		陸軍メッセルを招聘し軍制改革に着手	4	4	「一年志願兵歩兵並二看護卒取扱手続」制定し、一年志願兵制度による看護卒志願者を召募	
1886	19	6	5	「赤十字ニ帝国政府加盟調印」	2	26	陸軍省医務局設置	看 護 制 度 第 二 次 改 革
		11	15	ジュネーブ条約加盟の件国民に公布	4	5	「明治十九年徴兵看護卒取扱手続」制定	
1887	20				2	5	「担架術教育規則」制定 「担架卒選抜教育復習規則」制定	
		5	18	日本赤十字社篤志看護婦人会設立				
		5	19	博愛社が日本赤十字社と改称				
		6		足立寛日本赤十字社篤志看護婦人会で看護法の講義開始				
					12	28	「陸軍看護卒教育規則」制定	
1888	21				12	1	「陸軍看病人磨工召募準則」制定	
					12	24	「陸軍衛生部現役看護手補充条例」制定	
							徴兵・壮兵看病卒廃止。隊附に看護手、病院官衙には雇人看病人に変更される	
					12	24	「陸軍衛生部現役下士補充条例」制定	
					12	25	「陸軍看護学修業兵教育規則」制定	
1889	22	1	22	第三回徴兵令の改正(法律第一号)				
		2	11	大日本帝国憲法公布				
1890	23	4		日本赤十字社で看護婦養成開始				

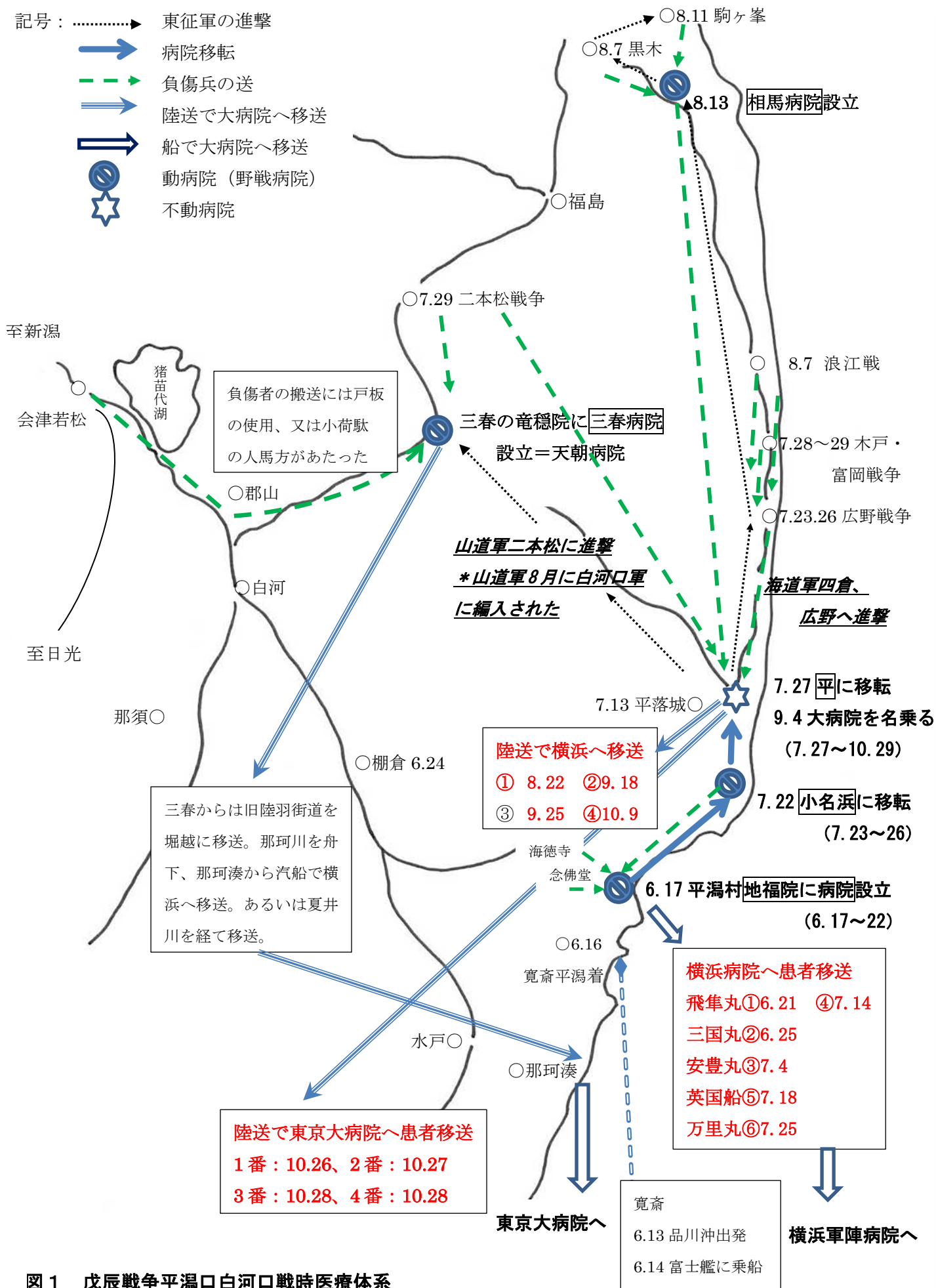


図1 戊辰戦争平潟口白河口戦時医療体系

出典：佐藤省三編『寛齋日記』35～36頁。

註：出典に佐久間『奥羽出張病院』の研究、『奥羽出張病院』の研究（承前）を参考に筆者作成

記号： ☆ 不動病院
 + 中間病院
 ● 動病院（軍病院、分院、支病院）

← 負傷者の後送経路

⇐ 海路で後送

至庄内

村上軍病院
 ・家老久永の邸宅

動病院

至米沢

新発田軍病院
 ・裏町長徳寺内に設置
 ・藩医らは前線軍医としての立場で活動
 ・帰順藩医の登用

新潟軍病院
 中間病院

五泉口軍病院

・安勝寺・清林寺内に設置

坂下口

東京・横浜の
 病院へ後送

柏崎軍病院
 不動病院

鯨波
 直江津

高田軍病院

・高田寺町浄土宗来迎寺内に設置

根病院＝兵站病院

・本病院とも呼ばれた
 ・従軍各藩藩医が治療
 ・ウィリスは明治元年
 9月1日に到着

関原軍病院
 中間病院

与板軍病院

見附軍病院

長岡軍病院

・料亭綿松及び
 栄涼寺内に設置

八十里峠

吐津

長岡口

至只見（会津）

小千谷軍病院

・洋方医石坂松庵宅設置
 ・各藩で野戦病院設置

動病院＝仮繃帯所

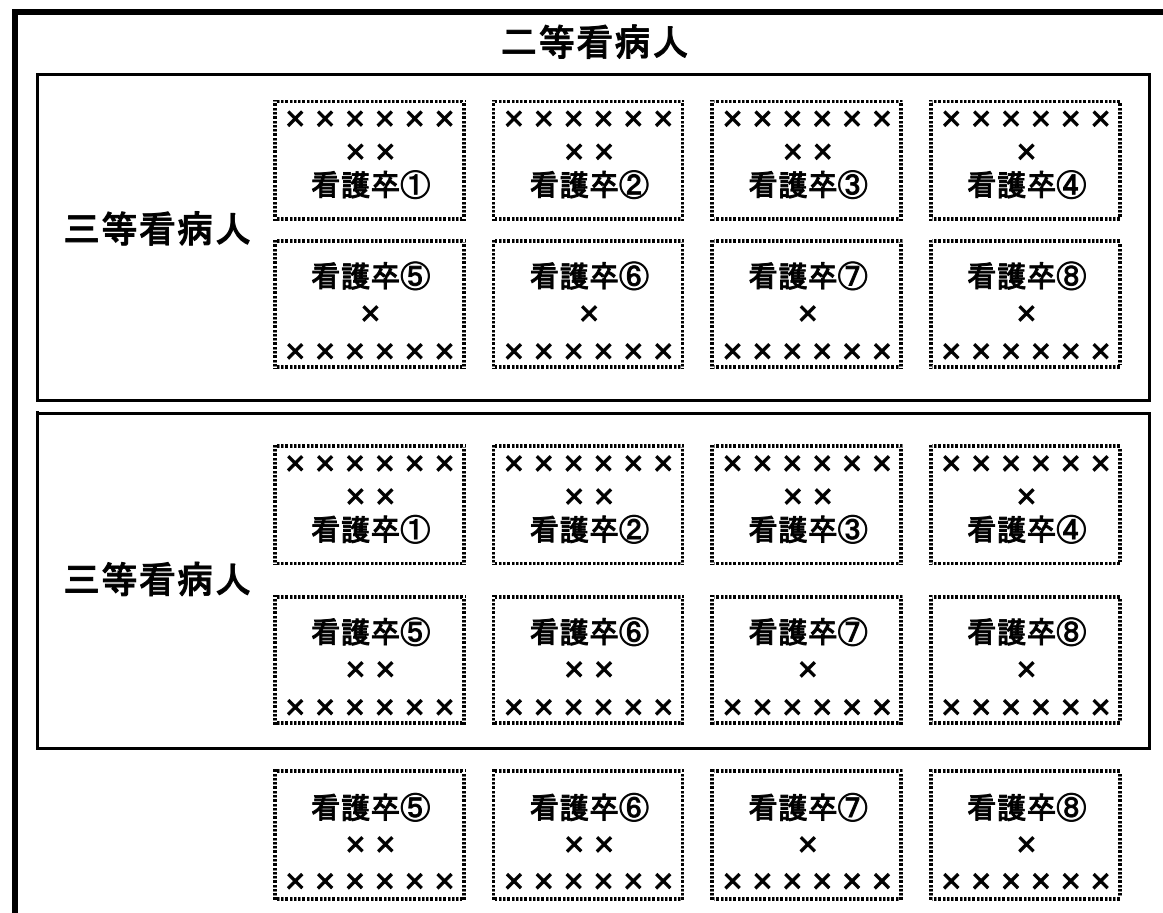
⇨編成・各藩一隊に医師2名
 ・薬剤方又は調合方

浦佐軍病院

・会津藩との戦闘に備え善光寺内に設置
 ・軍医は前進

図2 戊辰戦争越後口軍病院と戦時医療体系 註：蒲原「明治戊辰戦争越後口病院の変遷（上）（中）（下）」

を参照に筆者作成



管理基準： 二等看病人→看病卒20～21名に1名
 三等看病人→看病卒8名に1名
 看病卒 → 患者6～10名に1名

記 号： ×＝患者













【図3】明治八年「看病人看卒服務概則」による管理体制



【図4】
『三角繃帶用法』附録「三角繃帶図附」

『三角繙帯図附』の解説

【図 5 - 1】

『三角繙帯用法』の説明			図の 番号	『三角繙帯図附』に描かれている絵	
頸巾状巾	先尖(まずせん)端より下縁に向て幾重にも畳み随意(おもうまま)の幅となすべし。	先端より下縁に向かって幾重にも他畳凡頸巾状巾の用法(もちいかた)は甚だ簡(てみじか)にして爰(ここ)に書載(かきの)せ教訓(おしえさと)すに足す。唯二本の帽子針にて其両方の端裾を縫着け又は之を結ぶべし。	8	目の創に頸巾状巾を用いる方法	
			14	目の創に頸巾状巾を用いる方法	
			22	目や額の創に頸巾状巾を用いる方法	
			10	耳・頬・頤・下顎の創に頸巾状巾を用いる方法	
			24	手の軽い創に頸巾状巾を用いる方法	
			29	額の創に頸巾状巾を用いる方法	
頸巾状巾	先尖(まずせん)端より下縁に向て幾重にも畳み随意(おもうまま)の幅となすべし。	先端より下縁に向かって幾重にも他畳凡頸巾状巾の用法(もちいかた)は甚だ簡(てみじか)にして爰(ここ)に書載(かきの)せ教訓(おしえさと)すに足す。唯二本の帽子針にて其両方の端裾を縫着け又は之を結ぶべし。	6	手の軽い創に頸巾状巾を用いる方法	
			11	手の軽い創に頸巾状巾を用いる方法	
			15	足の軽い創に頸巾状巾を用いる方法	
			18	足の軽い創に頸巾状巾を用いる方法	
			26	腕の軽い創に頸巾状巾を用いる方法	
			27		
			28		
			32	手の創に頸巾状巾を用いる方法	

『三角繙帯図附』の解説

『三角繙帯用法』の説明		図の 番号	『三角繙帯図附』に描かれている絵	
7	頸巾状巾 副木其外骨の碎たる者 を撐(ささゆ)る道具 を用るとき之を結固 (むすびかた)むる等に 用う			
		1	足の骨の碎けた者に頸巾状巾 で副木を固定する方法	
		2	頸巾状巾で腕に副木(剣鎗或は 其鞘)を固定する方法	
		12	銃(てっぽう)と頸巾状巾を用い た副木の固定方法	
		16	木の枝を副木(鎗破たる車の 輻或は樹枝)として頸巾状巾 で固定する方法	
半 巾	小き二枚の巾入用な るときは尖端の処より 下縁の正中(まんな か)まで正直(まっす ぐ)に割くべし。			
		7	手の創に半巾を用いる方法	
	足の創を巻くには先ず足 蹠(あしうら)を巾の中央に 当て尖端を趾の方に向け 爰にて折反し足の甲の方 にやり両端裾にて踝骨の 周囲(めぐり)を纏(まと い)、足甲にて交叉へ再足 蹠にやり爰にて結べし。	23	足先の創に半巾を用いる方法	
	肩の創を巻くには二 枚の半巾を用うべし。	33	肩の創に半巾を2枚用いる方法	

『三角繃帯図附』の解説

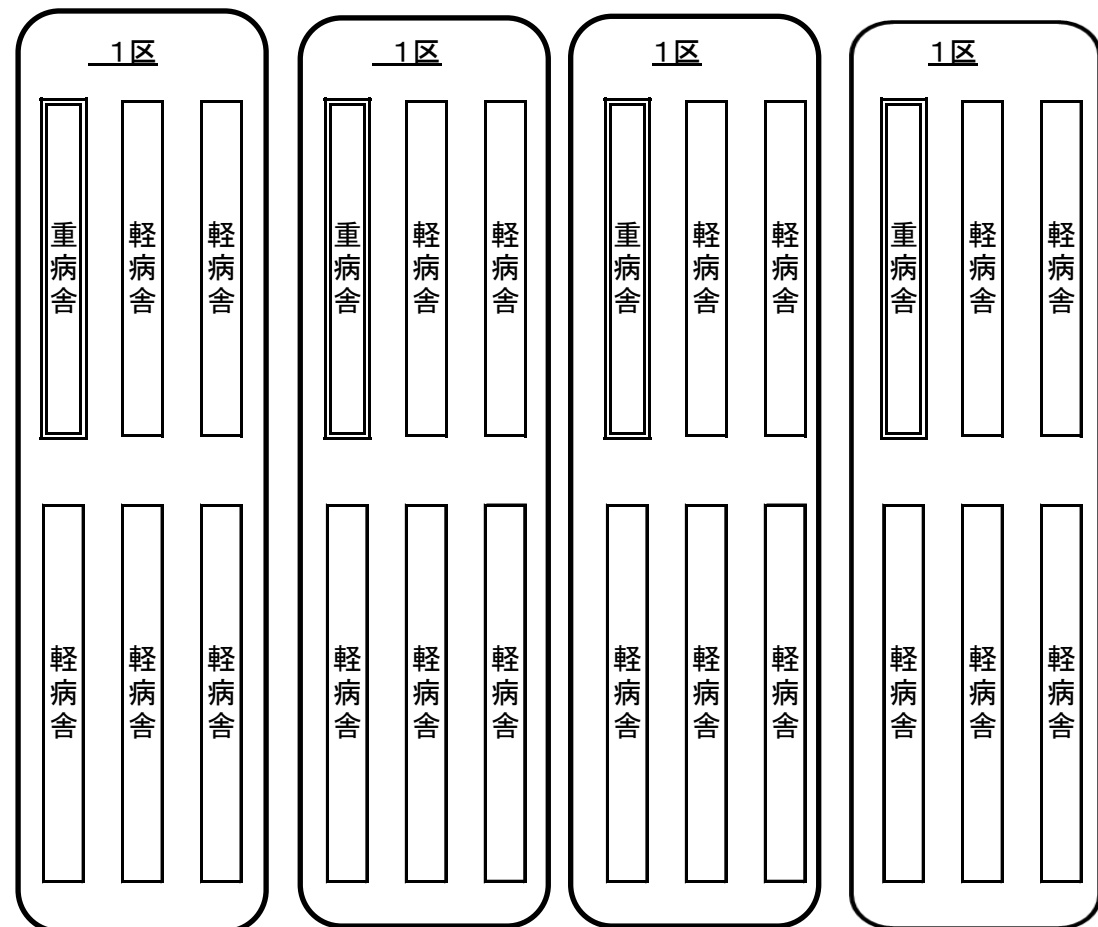
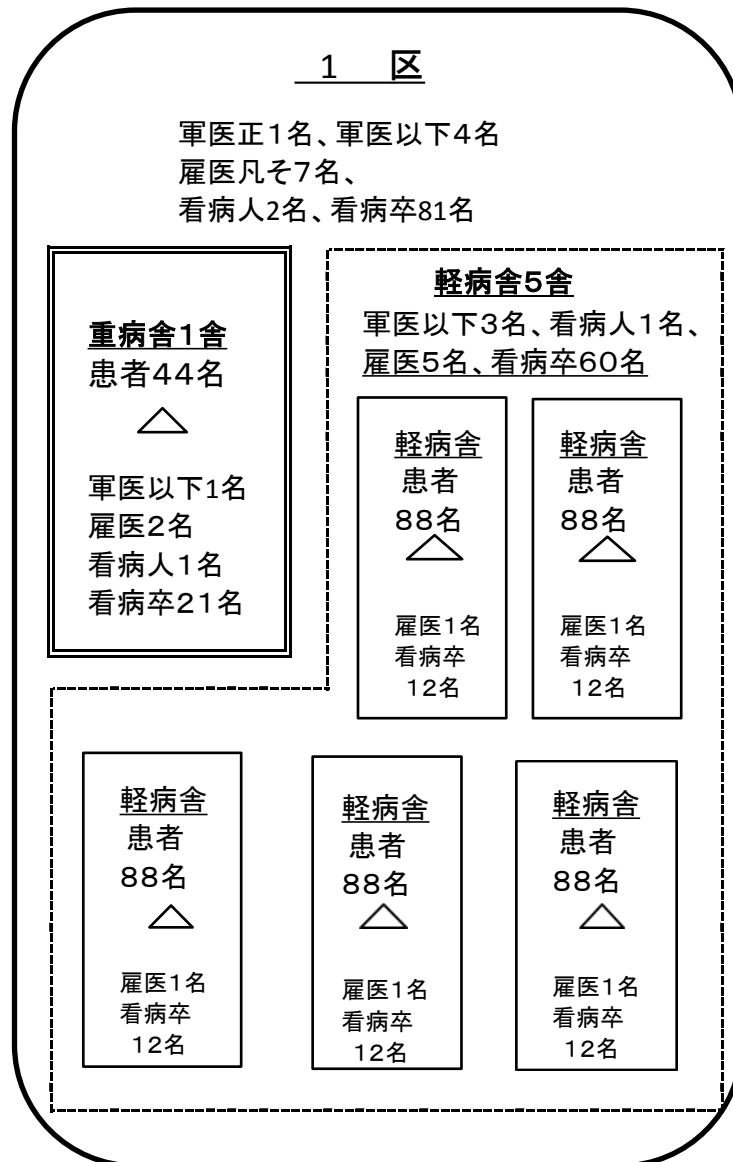
【図 5 - 3】

	『三角繃帯用法』の説明	図の番号	『三角繃帯図附』に描かれている絵
全 巾	胸の創を巻くには先巾の中央を胸に当て其尖端は一側の肩を超へ後方に引き、下縁は胸腹を被い両端裾を右左の脇下に廻し、背にて相互に結合させて尖端を右の結目の下に通し再之を上に折反し帽子針にて縫止むべし。	19	胸の創を巻く方法
		20	胸の創を巻く方法
	背中の中を巻くにも胸と同じ方法を用いる。忠、胸と反対(うらはら)となり、後の所は爰にて前となるの違ひあるまでなり。	13	背中の中を巻く方法
	腕を適好(ほどよ)き位置に繫保たんに先一方の端裾を取りて創なき方の肩を超させ項窩(うなじ)を回り向側に送り、爰に止めおき又一方の端裾を胸前に垂れ応(こころ)を用い、手軟に屈(かがめ)たる腕を巾の中央に当て其先端は臂后(ひじのうしろ)一寸六七分許(ばかり)を余しおき。さて其の端裾を腕の前より上に向て曳上げ創つきたる肩の上にやり項窩の処にて先に回きたる端裾と取合せて結止めさて臂后に余したる尖端を前に廻し帽子針にて縫止むべし。	4	大腕保持巾(手を繫保つ三角巾の方法)
		17	
		25	
		34	四肢の切断された部位に用いる方法
	大腿は上膊(うわうで)より太き故に、全幅の三角巾を用いる。但し巾の下縁にて大腿の上部を巻き両端裾を二重廻して結べし。若股の肥太たる者にて結び難き者は大なる帽子針二本を用いて縫止むべし。	31	腰の創に三角巾を全巾で用いる方法
頭 巾	頭創を巻くには先(まず)三角巾の中央を頭の顛上(てんじょう)に当て其下縁を額に垂れ其尖端を項(うなじ)に垂れさせ其の下縁にて額を覆い両方の端裾は耳上を超え頭の后(うしろ)に廻し爰にて交叉(やりちが)へ再額に廻し此処にて結ぶべし。此時項に垂たる尖端を前になし置たる交叉(やりちが)の上に折反し頭の顛上にやりて縫着くべし。	9	頭の創に頭巾を用いる方法
		21	頭の創に対する頭巾の方法

〈大阪陸軍臨時病院病棟管理方法〉

・30棟を並列形に建設、5区に区分、1区は6舎(1舎＝重病舎、5舎＝軽病舎)

必要とされた看護者数 : 看病人 $2 \times 5 \text{区} = 10 \text{名}$
看病卒 $81 \times 5 \text{区} = 405 \text{名}$



* 石黒忠恵「大阪陸軍臨時病院報告摘要第一号」57頁を参照し作成

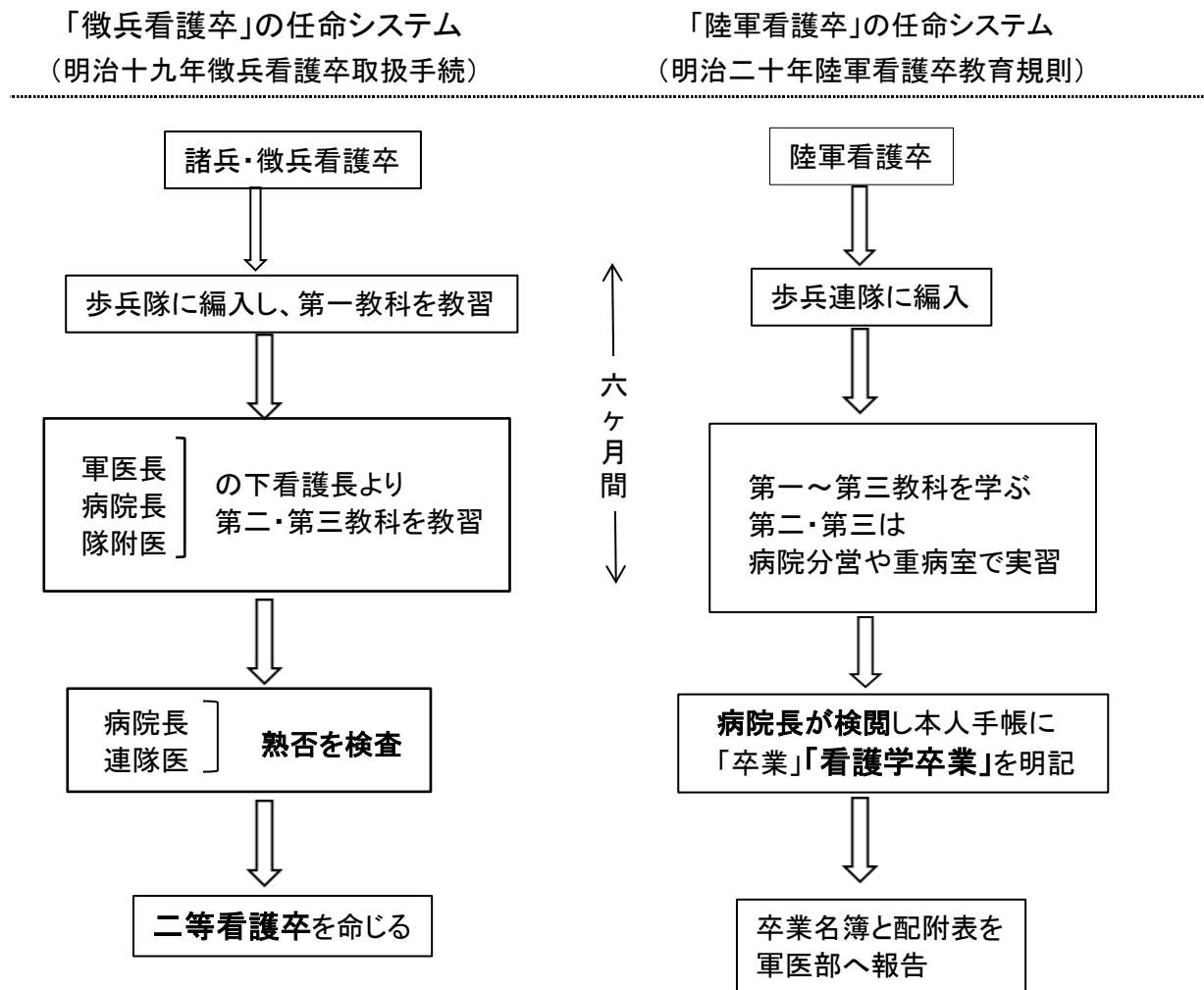
【図6】「大阪陸軍臨時病院」病棟管理図

【図7】大阪陸軍臨時病院発行「看病夫証書」

第何號	本買族籍
	姓
	名
右ノ者於當院看病夫トシテ僱中ヨク職掌ヲ勉勵シ 頗ル看病ノ方法ヲ得タリ故ニ此証書ヲ附與ス	
明治十年何月何日	
大阪陸軍臨時病院印	

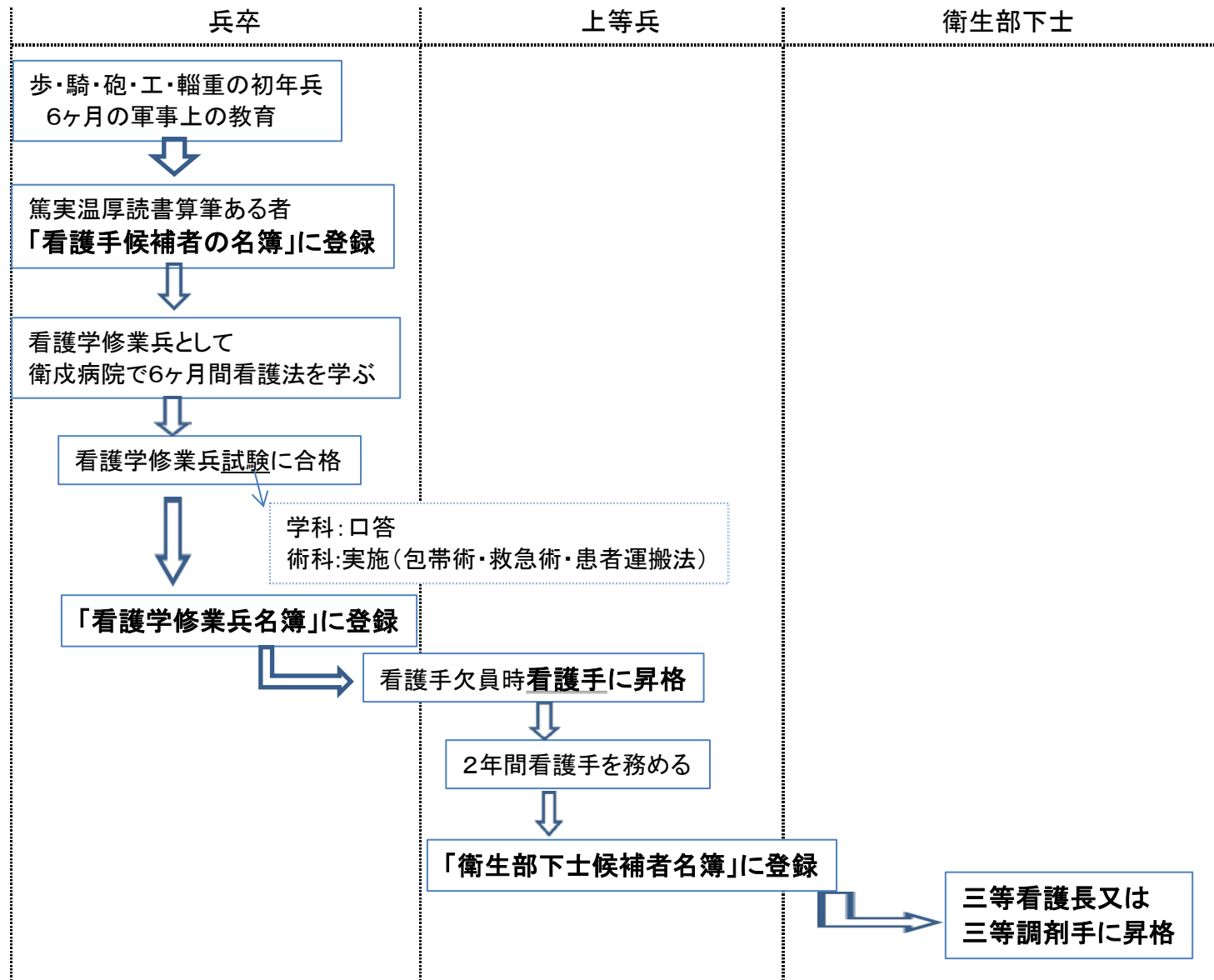
出典：『大阪陸軍臨時病院報告摘要第一号』

陸軍省、1879年、68頁



【図 10：看護長・看護卒の変遷】

明治陸軍階級表にみる看病人・看病卒の変遷（報告者作）										
明治四十二年			明治三十八年			明治二十九年			明治十六年	
衛生部			衛生部			軍医部			明治八年	
看護長			看護長			看護長			看護長	
上等										
一等看護長			一等看護長			一等看護長			一等看護長	
二等看護長			二等看護長			二等看護長			二等看護長	
三等看護長			三等看護長			三等看護長			三等看護長	
看護卒			看護手			看護手			看護卒	
一等									一等	
二等									二等	



【図 1 1 看護制度の第二次改革による衛生部下士補充システム】

【資料1】

益頭 駿次郎『欧行記』

大塚武松編『遣外使節日記纂輯第1・3』（日本史籍協会、一九三〇年）

「欧行記二」一八六—一九〇頁に病院見学の記録

○三月十九日 曇朝雨 晝前巴里斯の病院を一見として我国医師二人を同道す。其病院は方六十間余り三四階作にて最大廈なり。最初何ヶ年前巴里斯市中の商家一同にて諸人のため設けし由。当時は追々増加して且病院一体の家規矩は先つ入口に医師所あり、第二は諸薬調合所あり、第三には諸薬製煎所あり、第四には湯飲所あり、第五には沐浴所あり、

第六には蒸気温室あり又寒^マ頂^マを請るの一室あり、第七には諸布洗濯所あり、第八には病人臥具衣服改請取渡し所あり、第九には病人の食料製し所あり、第十には病死人を差置所あり、此所一人毎にブリキにて張りたる台に載半経の覆を掛け首計見える様の製具なり、第十一は病死人を解体所あり、此処には既二人の女子の腹をさき五臓六腑を分け其俣にあり、第十二には火温蒸所あり是は匱の内へ体入れ首計り箱の外へ出し薬氣の火温を以惣身の体を温むる所なり。外病人を差置局十八あり、一局毎に三十四ヶ所の鐵床あり。夜具は悉く布を用ひ一床毎に食台を設けあり。当時病人五百六十人居住すと云。茲に病院月々入費出金の基本を尋問せしに第一は市中の豪家より奇特金差出、第二は市中の劇場見世物其外都て人寄にて遨遊所へ入輸す価の高凡百フランクのものには二十フランクの高を取立る法なる由、故に右の場所には病院の収金を扱ふもの一人つつ差出置右日の内に取立候由、第二には不融通のものあり。品物質入にして凡百フランク高のものへ七十フランクを貸し一ヶ年利足六フランクとして期限と極め当人請戻しなしかたきものは流物し其品を商人へ糶売なし過銀なる時には其内を元利を引殘銀は病院の入費の高へ加へる由、第三組合商家にても親子の身寄のもなく死去して家相續なすものなき時は家主死する時家財を病院へ差納度義遺言あらは左の通病院の入費に加へ又遺言なく死たるものは家財は政府に没収なすと云入費の仕法は大略前條のことにあり、当時仏国八十八部に部落を区別し、右は一部毎に奉行を置之れを支配し小部にて下奉行を差置大略一部毎に病院は有之、小部にては病院を作りても僅の病人数にては空しく入費相掛無益に属し候場所も有之右様の場所は別に病院は無之若病人有之節は近辺大部落の病院へ差遣し養生為致候法にて尤入費其外は病院無之場所より右條々仕様通り割合候て入費も差出す○当時仏国には大小三十余の病院有之候

由○病院へ入るもの手續方極困窮にて飢渴に迫り候程のものは一切病院の収賄^マ死去^マ致し候節は葬理邊も病人入用の中を以取行候由、又格別の困窮人に無之候ても医師を招き療治相受候ては多分の入費も相掛殊に療養方不行届等の族は病院に入療養を受け一日に二フランクから六フランク位の価を拂少の入費を以十分に療養相加候由○病院医師の義は四十人有

之内十人は上等の医師にて跡三十人の分は自分修行旁調藥等司り候ものの由、早朝より病院へ罷出診察致し午後に及帰宅いたしアバミニストレーションと唱へ病院一切の事を惣轄いたし居役所有之尤役所願出候ものは夫々病症を診察し其病により入り部屋にて所を撰み出役所の命にて夫々分配いたし候趣○病院看病男は一体仏国民間の若き男百人有之候へは五十人は兵隊にいたし候制度に有之候処右兵隊の内にて病院に入り看病を望む □^ゴ時は七ヶ年の期を限り召使ひ猶また兵卒に致し候由尤右七ヶ年中には大略医師の筋を心得候様相成相應出来いたし候ものはエルス、ヲシユルと相唱へ候て半は医師半は士官にて兵卒の中に加り戦争等の節疵受候ものの療治等為致候趣○別にバレイス中にストラジビュルグと相唱へ候陸軍の為にのみ設置候病院有之候○右病院は前病院に比し候ては一層広大にて病症千八百床程も有之候趣右は全く政府入費にて陸軍の上等士官等の入り候病室は清潔にして手広に作り恰も旅宿に居ると同様に有之候由右陸軍病院附頭取たる医師は医学校の中 療養學術共相勝れ候ものを選び六七年の中半者ハレイス平人の病院に入り修行為致半はアラビヤ邊へ差遣し小戦争の節士卒の疵傷を負ひ候ものを療治致し実地の修行相熟し候上にてミレタイレと唱へ候医師頭に取立候趣右医師の位階は陸軍にて申候得はゼネラルの官に相適り候位階にて医師の棟梁に有之一ヶ年の給分二千トルラル程に有之候由○右は全く仏国にては陸軍の世界第一と申請へ候程の義に付格別陸兵の為には力を盡し撫育いたし候趣に有之○菓園の近傍に婦人のみの病院有之候右は婦人の狂氣いたし候ものを入れ相養病院にて所謂狂癲院と相唱へ候場所にて又婦人の老若に至り四肢不得のもの此院に入れ養生為致候趣○男子は狂氣いたし候もの別に有之候由

(句読点は報告書付記)

【資料2】

玉蟲左太夫『航米日録』第四

沼田次郎・松沢弘陽校注『日本思想大系 66 西洋見聞集』
(岩波書店、一九八三年)一〇四、一〇五頁。

ワシントン滞在の記録

四月十四日 晴 滞留、已後同伴三兩人ニテ旅館ヨリ東北ニ行ク、十五六町ニシテ一巨屋アリ、高サ 四層ニシテ長サ十二三間横十間余、周圍ニ木柵ヲ 繞ス、石ニテ玄關ヲ造ル、即チ病院ナリ。始メニ階上ニ登ル。大小ノ房室相並ビ數十個アリ。男女各限隔ヲナシ、病者臥シ居タリ。一房多キハ七八人少キハ五六人、病者女ナレバ女、男ナレバ男ヲ以テ監視セシム。寢室・食床極メテ清潔ニス。医官数人其傍ニ在テ時々ニ診察ス。又一房ニ骸骨ヲ列ス、五臓六腑皆備具ス。外ニ胎内ノ小児、一月ヨリ十月ニ至ル迄ノ死骸ヲ焼酎ニ浸シ玻璃壺ニ入ル、其形チ生ケタル如シ。又一房ニ外療ノ具アリ。木材ニテ四体ヲ象ル、又 俎 まないた ニ似テ大ナルモノア是ヨリ奥ニ入リ房室数ヶ所アリ。其内一房ニ天主ヲ安置シ、正面ニ十字上ニ縛セラル裸体ノ人形ヲ金色ニ 鏤 ちりば メ安置シ、其後ロニハ男女相對シタル画ヲ掛ク。左右ニ瑠璃色ノ瑠璃中へ燈ヲ点ジ頗ル深遠ナリ。女僧黒衲衣ヲ服シテ是ヲ守護ス、男ノ入ルヲ禁ズ。予等ヲ導キシモノ始メ男ニシテ、此房中へ入リシトキ女僧一人付き副フテ、男ハ戶外ニ待ツ。尤其女僧ハ常ニ十字木ヲ腰辺へ帶ブ。天主堂へ入レバ腰ヲ屈シテ礼拝シ居ル。是定メテ病人ノ為メ安置スルナラン。其外病人ノ取扱ヘ一ノ遺漏ナク感心スベシ。

【資料3】

福沢諭吉編纂『西洋事情』

尚古堂、一八七〇年

*句読点は富山正文編者代表『福沢諭吉選集 第一巻』（岩波書店、一九八〇年）

「西洋事情 初編卷之一」一二〇—一二一頁を参照。

病院

一 病院ハ、貧人ノ病テ医薬ヲ得サル者ノ為ニ設ルモノナリ。政府ヨリ建ルモノアリ、私ニ会社ヲ結デ建ルモノアリ。英国及ヒ合衆国ニ此法最モ多シ。私ニ建ルモノハ、社中ヨリ王公貴人富商大賈ニ説テ寄附ヲ請ヒ、病院既ニ成ル後モ尚ホ年々定タル寄附ノ金高ヲ集メテ長ク病院ヲ持続ス。又病院ニ入ル者モ、極貧ノ者ハ全ク費ヲ出サザレトモ、稍ヤ産アル者ハ貧富ニ応シテ医療ノ費ヲ払フ。各国ノ首府都会ニハ、病院アラサル所ナシ。○病院ノ法ハ各国大同小異、左ニ仏蘭西病院ノ法ヲ示ス。

巴理斯ニ病院大小十三所アリ。一院附属ノ医師、各々八人ヨリ十五人、最モ大ナル病院ニハ三十人アリ。介抱人ハ男女両様アリテ、男子ハ病男ニ属シ、婦人ハ病婦ニ属ス。病人五十人ニ介抱人十名ヲ附ルヲ定則トス。又「ノン」ト称スル者アリ。コレハ老若婦人、不幸ニ逢フ歟、又ハ他故アルモノ、神明ニ誓テ若干年間、病者ヲ扶ケント自カラ約シ、其年期内ハ、男女ノ交ヲ絶チ、清潔ヲ守ルコト、本邦ノ尼ノ如クシテ、病院ニ入ル者ナリ。故ニ此「ノン」ハ病者ヲ介抱スルニ男女ヲ弁セス、臥床ニ近ツクコト妨ナシ。又「ノン」ハ固ヨリ自カラ好テ院ニ入ルモノナルカ故ニ、俸金ヲ受ケス、唯衣食ノ給アルノミ。院ニ留ル時日モ制限ナク、今日既ニ入ルトモ意ニ適セサレハ明日出ルヲ得。○十三院、各所ニ布在スト雖トモ、王宮ノ近傍ニ官ノ役所アリテ、官ヨリ吏人ヲ置キ、総病院ヲ支配ス。故ニ都下ノ人民、病院ニ行ント欲スル者ハ、先ツ此役所ニ至リ、官ノ免許ヲ受ケテ然ル後、病院ニ入ル。○病院ノ費用ハ、総テ政府ヨリ出スルコトナシ。初メ之ヲ建ルトキハ都下ニ命ヲ下シ、各戸ヨリ貧富ニ応シテ出銀セシメ、其後、院ヲ修理シ、或ハ病者ニ与フル藥品衣服ノ価、及ヒ婢僕給料等ノ費ハ、左ノ法アリテ金ヲ集ム。

第一 都下ノ人、各其志ニ従テ病院ニ金ヲ修ルコト、本邦ノ寺社ニ寄附スルカ如シ。
第二 都下ノ芝居、見セ物、其外遊樂ヲ以テ利ヲ得ルモノハ、得ル所ノ金、十分ノ四ツ、病院ニ納メシム。

第三 貧困未タ甚シカラサレトモ、自家ニ医師ヲ招クノ力ナクシテ病院ニ入ル者ニハ、医薬ノ価トシテ、一日ニ二「フランク」乃至四・五「フランク」ヲ納メシム。

第四 政府ヨリ貸附所ヲ建テ質物ヲ取ル。其法一年ヲ期限トナシ、利息六分ヲ収ム。品物ヲ質入シタル者、期限ニ至テ金ヲ償ハサレハ、其物ヲ出シテ糶売トナス。例ヘハ初メ質入レシタルトキ百両ヲ貸シタル品物、糶売ニテ百三十両トナレハ、一年百両ノ利息六両ヲ引キ、残り二十四両アリ。之ヲ病院ノ費用トス。

第五 西洋諸国ニハ養子ノ法ナシ。故ニ父母妻子ナキモノ死スレハ、其家産盡ク近キ親属ニ帰ス。若シ親属モナクシテ家産帰スル所ナキトキハ、之ヲ政府ヘ収テ病院費用ヲ供ス。

右ハ仏国西病院ノ通法ナレトモ、海陸軍病院ノ如キハ其費用全ク政府ヨリ出ツ。

【資料4】

英国探索（福田作太郎筆記）

沼田次郎・松沢弘陽『西洋見聞録』（岩波書店、一九七四年）五一四―五二三頁。

英国倫敦府病院并学校の事

- 1 竜動には、数百年前より既に病院の設け有之、其後人口増加仕候に随ひ追々建立いたし、當時にては最早三拾余ヶ所も有之由。
- 2 右病院は、家計富饒にて安樂に日を送候者其外惣て仁恤の志有之者共損金いたし取建、其後も年々損金いたし、病院中諸費を取賄、貧民は救助仕候様に主法相立有之由。
- 3 右寄附金を出し候者は、上は国王・諸大臣を始、下は士官・町人に至るまで、銘々思ひ思ひに出金いたし候事にて、素より員数等取極有之訳には無之、全く仁受を施し、志の厚薄、家計の多寡に従ひ候事に候由。右の内、年々員数を取極置差出候者も多く有之由。
- 4 右様年々取極候金を出候ものの内、三ポント三シルリング出候者はゴウノルと唱、其病院の儀に付諸事相談仕、年々只壹ポント出候もの、并一度に拾ポント寄附いたし候ものは、シュブカライフルと唱へ、只其仲間に入候迄にて、諸事相談の儀は無之よし。
- 5 病院の制はいづれも同様にて、貧民共病気の節病院に來り診察を受、其輕重に従ひ、只藥を申請自分宅にて養生為致、手間取候様の病氣は其儘病院へ留置治療を施し、全快の上宅に返し候由。其故施藥を請候ものは甚だ多く、既にキンクスコルレジと申病院にて、昨年中病院に入込候者は三千人計にて、自宅にて藥を申受候ものは三万人も有之由。
- 6 病人を差置候場所は、大抵幅四間、長さ拾式三間の部屋に、拾四五人宛さし置、看病人三四人宛附置候。病院に大小不同有之候へ共、何れも数百人入込候程の設有之候。
- 7 右の外、飲食製所・藥調合所・病人浴湯所等悉く相備居候。
- 8 病人部屋はいづれも清潔にいたし有之、病牀・蒲団等は七日毎に引替候由。且寒氣の節カツフル又は蒸氣仕掛にて部屋内を温候様いたし有之候。婦人・小児等の部屋には金魚鉢・盆石又は草花を植候杯にて、病人の氣分を引立相慰め候様に見請候。
- 9 病牀の上には、其名前・病名、并に引請の医師姓名、藥法・飲食等の事を認候札を懸置、一見いたし候得ば、諸事分明に相知候様致し有之候。
- 10 看病人は惣て婦人を用候。右は飲食の外年々式拾ポント程の給金を請候趣に候。尤病院にて不同も可有之候。数拾人の儀に付其内老人頭立候もの有之、諸事差図いたし候由。
- 11 藥の儀、藥屋相詰候場所所有之、始終両三人程宛相詰居、諸藥一切備置、医師より方書遣候へば其通調合いたし、其掛へ相渡し、数ヶ月或は半年にて右入用丈の代料を請取、外に右調剤の料として一ヶ月百五拾ポント遣し候よし。是亦病院の大小に随ひ不同も有之由。
- 12 医師は内科・外科・小兒科等、各式人宛頭取候もの有之、右の外老人宛病院へ詰切居候。右頭取候ものは日々病人を見舞候上、藥其外の手当等差図いたし、右詰切候者は都て

頭取の差図を請取計居、且病人中容体相替候儀も有之候はゞ、治療向等は又頭取へ申聞取計候由。

13 右医師の頭取は、各一家を為し居、医術も熟達いたし候者にて、自分活計に不足も無之、且詰切居候医師も修行の爲めに有之候故、総て医師は一切手当等受候儀無之由。右の外修行中の医生は日々病院へ入込、病人を診察いたし、治法等を質問研究仕候、専ら実験を心掛候由。

14 異病其外種々の外科施術有之節は、志有之医生共を集置、療治の次第を熟視為致、頭取候ものより病気の縁故を悉敷申述、治療の法を指示し会得為致候。

15 平日はセクレタリーと唱候取締の者耆人有之、諸事取計、其余は看病人并に奴僕数人有之、別段役人様のもの無之候様子に有之候。

16 前条寄附金は年々多分有之、既に昨年キンクスコルレジーは七千ポイントも相聚候。右の内式千五百ホントは両替渡世の者、千五百ホントは其他の商人、其余は国王を始諸大臣并見分有之候ものより差出候由。

17 年々の寄附金にて諸費取賄候には十分有之候得共、其年に寄流行病又は不時の儀有之、過分の入費相懸り、積金乏敷相成候節は、其趣を新聞紙に認諸方へ差出候へば、早速志の者共出金いたし候よしにて、聊も政府の力を借候儀は無之由。

18 政府にて取建候病院は、グリニッチと申処に海軍の爲一ヶ所、其外陸軍の爲設け候分所々有之候由。

19 セルシーと申処に有之候陸軍病院の入費、千八百六十二年中に貳万七千五百三拾ポント相掛候由。

20 右高の内にて奉行其外諸役人・医師等、総て貳拾人余も有之候ものゝ手当、其外一切の入用相籠居候よし。尤右入用は元より所々にて不同有之候事。

21 病院の内、眼病院は全く別に取建有之候へ共、入込居候ものは甚少く、多分は日々通ひ診察を請候事にて、重症に無之候へば自分宅にて養生仕候由。其故日々診察を請候もの三四百人宛有之候。尤右眼病院も数ヶ所に有之趣、尤諸事外病院と同様の仕法に有之候。

22 狂病院と唱候もの有之、男女に限らず発狂いたし自宅にて養生出来かね候ものは同所へ遣し候由。此処にても医師にて頭取を兼候もの有之、諸事取計候由。

23 発狂人は男女に分ち置、余程手広の部屋へ入置、銘々の存寄次第に日を送らせ候様子にて、一見いたし候節も、画或は音楽いたし、或は書見いたし、婦人の方も同様、縫物いたし候も画をいたし候ものも有之候。其部屋々々の外、婦人の方は楽器等を置、踊を致し候場所、男子の方は玉突いたし候場所有之、種々気分を慰め神心を安んじ候設有之候。

24 右看病人は、男子の方は男子、婦人の方は婦人に有之候。

25 発狂の上悪事いたし候ものは、同所へ入置候事にて、仮令刑罰に行ふべき程の悪事いたし候ても、狂人に候へば其儀無之候。既に親を殺候由の者有之、是等は生涯此院中に入置候由。且我子を殺し、家を焼き、女王を殺さんといったし候よしのもの耆人有之、右等は全く発狂の儀にて聊主意は無之故、右様取計候よし承申候。

26 発狂のもの手荒に騒候者を入置候部屋は、四方共に厚き蒲団を張詰め、如何様に騒候ても怪我無之様にいたし置候。往々自殺を好み候者も有之、是等は切ものは一切取上げ、殊に寄手足等縛り置候ものも有之候由。一体英国には、身分有之候ものは物事を深く考へ、終に神心脳乱いたし、又貧民にてはブランシーと申強き酒を多く用ひ、其為め本心を取失候等にて、発狂人は甚だ多く有之よし。

27 狂病院にては、薬用等にて治療いたし候為めに無之、只々精神を落付させ、時々親切に道理を説聞せ、何となく本心に立返らせ候様の趣意に有之候。

28 右の外、病院は甚多く候得共、其取建方等は何も同様の儀に有之候。

29 府中のキンクスコルレシーと申病院にて入金・出金の次第左の通。

・・・(略)・・・

30 学校は英国にて「スクール」と相唱大小不同に候へども、竜動府中にも数百ヶ所有之、いづれも政府より取建候ものには無之、最初有志のもの損金いたし取建、其後は稽古人より一ヶ年何程と定り候金子差出候様の法度にて、諸事其金にて取賄候よし。

31 稽古の儀は手跡・算術より理学・分析術・画学等にいたる迄悉く相具り、年齢・智恵にて其料を分ち、銘々其学を専ら稽古仕候趣。

32 医学所は、先人身機関等熟知いたし候為、実物経験の前、絵図或は雛形にて十分人体の形状を知候様いたし、夫より薬剤の学、分析の学其他医術に要用の学問は出来候様にいたし置、凡三ヶ年程を限といたし日々入込修行仕候。其为一ヶ年五拾ポント或は四拾ポント宛を収め候由。右の処にて学問一と通り出来候上、病院へ参り治法等実験いたし、実地修行上達の上、免許を請、始て門戸を開き候様取極有之由。

33 右の如く修行仕候にも多年許多の金を費し故、芸術熟達の上は世上の用ひも宜敷、必安樂に日を送り候様成行候由。其故英国にては、一芸熟練のものは決て家計に苦候様の儀無之由。

34 右学校中にて、商学と唱専ら商賈交易の事を研究致候処も有之候。

35 啞院と唱候者有之。此処へは啞のみ修行のため入置候事にて、男女の小児式百人計も有之。其教方は先最初五音の発し候様子を示し、其より文字は指にて相定め、其外種々手真似にて教授いたし、追々音声を発し候様相成候。既に十七才計の婦人にて、手真似にて咄し懸け候へば、平人の通り口上にて返答いたし候、聊差支無之。又十三歳の男子にて、手様にて咄し候へば、速に文字にて返答いたし候もの見懸け申候。大抵小児の節より十年も修行いたし候へば、一通りの咄は口上にて出来候様相成候趣に有之候。

36 盲目院と唱候ものは、盲人を集め、銘々好みに従ひ一芸を伝授いたし候。盲人は年輩の差別なく六年の間は教授いたし遣、其より銘々自分渡世致候由。

37 読書・算術・音楽修行仕候ものも有之。又種々の織物を学び、或は籠細工・網等製候もの有之、右の品々は政府入用の買上、其有余は売払候由。六年の年限相立候とも、貧民にて自分家宅も無之難渋の者は、同所へ差置細工等為致候由。

38 婦人は大抵音楽を稽古いたし候様子に有之。

右取建方は諸病院同様にて、更に政府の世話には無之候。

39 学校にて教授いたし候もの手当は、至て少分に有之候よし。尤夫々科も有之候儀、余程大勢に有之候故、頭取と申様の人有之、其次第にて多少不同に御坐候。極少なき分は百ホント計り、夫より段々相増五百ホント計り受用いたし、又稽古人より銘々の志にて附届いたし、是また余程多分に有之趣。

40 右の如く手当諸用いたし候へ共、盲院并狂病院の頭取などは、銘々の志にて相勤候迄にて、諸用物は請取不申相詰候由。是は銘々の暮方は兼て活計相立候ものと相見申候。

41 稽古人より差出金は其科により種々不同も有之、キンクスコルレジーと申学校にて承候は大略左の通有之候。(・・・略・・・)

42 右学校は、諸学科の内何に限らず稽古いたし候様に取建有之、手習より性理学・器械学・天文学等夫々其碩学の者出席いたし、稽古方等に就ても夫々差別有之、右規則及教授の者の名簿は一書に詳載いたし有之候。右飜解仕候へば、六七百枚にも相成可申程の紙数に相見申候。

【資料5】

看病人看病卒服務概則（明治八年十一月十日）

陸軍卿 山県有朋

看病人看病卒ハ会計監督長ニ統率シ各所管会計官ニ隸属シ医事ニ関涉スル事項ハ総テ医官ノ指揮ニ従フ者トス其服務ノ綱領ハ病院條例ニ揭示ストイヘトモ今爰ニ陸軍本病院鎮台病院屯営病室ニ依テ其職務ノ綱目ヲ區別スルコト左ノ如シ

第一章 一等看病人職務

- 第一條 一等看病人ノ人員ハ陸軍本病院ニ二人各鎮台病院ニ一人ヲ率トス
- 第二條 一等看病人ハ医官並ニ会計官ノ指揮ニ従ヒ病室内諸般ノ事務ニ厚スヘシ
- 第三條 毎朝会計官ノ室ニ至リ出勤簿ニ捺印ス又自己ノ室内ニ於テ別ニ看病卒出勤簿ヲ設ケ捺印セシム月末ニ至リ其病氣引等ヲ区分シ勤惰表ヲ製シ会計官ニ呈スヘシ
- 第四條 毎日午前八時午後四時各病室ハ勿論浴室廁圍ニ至ルマテ一々巡視シ汚穢不潔ノ箇所アレハ担当ノ二三等看病人ヲ督責シ看病卒ヲシテ直ニ酒掃拂拭セシムヘシ
- 第五條 前條ノ外毎日午後七時ヨリ九時迄ノ間ニ於テ病室ヲ巡視シ患者ノ現員ヲ点檢記載シテ日表ヲ製シ翌日午前第七時限り会計官ニ報告スヘシ
- 第六條 二等看病人以下其職務ヲ惰リ或ハ言行ヲ慎マス飲酒ハ勿論猥褻ノ小説ヲ讀ミ雜話高声等ヲ為ス者アレハ禁止教戒シ仍ホ改心セサル者ハ医官及ヒ会計官ニ具陳スヘシ

第七條 職務ノ余暇ヲ以テ二等看病人以下ニ看護ノ方法ヲ教導スヘシ

第八條 看病卒ヲ病院内各室ニ配置シ或ハ甲室ヨリ乙室ニ交換セシムルハ医官ノ指揮ニ従ヒ処分シ而シテ会計官ニ報告スヘシ

第九條 会計官或ハ医官ノ命令ハ二等看病人以下ニ遺漏ナク伝達スヘシ

第十條 危篤ノ患者ハ該室担当ノ二三等看病人ト熟議シ看病卒中殊ニ誠実ノ者ヲ撰ヒ之ヲ付シテ諸事懇切ニ注意看護セシムヘシ

第十一條 患者私用物請求ノ節ハ手拭齒磨楊枝半紙卷紙□櫛石筆郵便切手烟草髮鋏□塵紙等ヲ云フ三等看病人其品目ヲ牒簿ニ記載シ毎週之ヲ湊合シ医官ノ調印ヲ經テ差出ストキハ会計官ヘ申告シ其会計官ヨリ該隊会計官ヘ通報ノ後物品若クハ金銭ヲ受領シ猶医官及ヒ会計官ノ点檢ヲ歷テ之ヲ三等看病人ニ交付スヘシ

第十二條 各病院病室内消耗品ノ出納ヲ監視シ且備付被服寢具等ハ破損セサル様ニ常々注意スヘシ若シ破損セシモノ有ルトキハ具ニ之ヲ点檢シ三等看病人ヲシテ之ヲ受領簿ニ記載セシメ該室担当医官ノ調印ヲ得テ其破損品ヲ該院ノ会計官ニ還納シ更ニ新品ヲ受領スヘシ

但患者ノ用ヒシ被服寢具等病症ニ依リ之ヲ焼却スヘキ者ハ其品目ヲ詳記シ會

計官ニ呈シ指揮ヲ受ケ処分スヘシ

第十三條

凡病院近傍ニ失火或ハ非常ノ事アリ災害將ニ至ラントスル時ハ患者ノ妄ニ室外ニ出ルヲ禁シ医官ノ指揮ニ從ヒ看病卒ヲ附シテ避シム其歩行スル能ハサル者ハ車載或ハ負担シテ之ヲ避シムヘシ

第十四條

患者死亡スルトキハ医官ノ指揮ニ從ヒ看病卒ヲシテ其死体ヲ屍室ニ移サシメ成規ノ如ク其隊号等級姓名年齢並ニ死没ノ年月日時刻ヲ記シテ床頭ニ掲ケ看病卒ヲシテ看守セシメ若シ生前遺託ノ言アレハ之ヲ詳記シ私有物ハ之ヲ保護シ死体交付ノ時併セテ之ヲ交付シ証書ヲ取り置クヘシ

第二章 二等看病人職務

第一條

二等看病人ハ看病卒二十人乃至二十一人ニ就キ一人ヲ率トス其職務ハ一等看病人ニ亜キ同官不在ノトキハ之ヲ代理スヘシ

第二條

二等看病人ハ各屯營病室毎ニ一人ヲ置キ諸隊附医官及ヒ會計官ノ指揮ニ從ヒ其病室内ノ事務ヲ管掌ス而シテ近衛及ヒ東京鎮台等ニ在テハ本病院各鎮台ニ在テハ該台病院ニ管轄シ屯營病室ニ分属セシムル者トス

第三條

毎朝會計官ノ室ニ至リ出勤簿ニ捺印ス其各屯營病室ニ在テハ自己ノ室内ニ於テ別ニ看病卒出勤簿ヲ設ケ捺印セシム月末ニ至リ其病氣引等ヲ区分シ勤惰表ヲ製シ該隊會計官ノ点檢ヲ經テ所管病院會計官ニ呈スヘシ

第四條

平常三等看病人並ニ看病卒ノ勤惰行狀ヲ監視シ苟モ職務ヲ怠リ言行ヲ慎マサル等ノ者アルトキハ懇切ニ教戒ヲ加ヘ仍ホ改メサレハ一等看病人ニ申告スヘシ

第五條

自己担当ノ患者急劇ノ諸症ハ勿論總テ異狀アルヲ見ハ速力ニ医官ニ報告スヘシ若シ危篤ノ者アルトキハ看病卒中殊ニ誠実ノ者ヲ撰ミ之ヲ付シテ諸事懇切ニ注意看護セシムヘシ

第六條

屯營病室ニ在テハ毎日午前七時午後三時室内及ヒ浴室廁團ニ至ルマテ一々巡視シ汚穢不潔ノ箇所アレハ速力ニ病室掛伍長ニ通知シ使役兵卒ヲシテ直チニ酒掃拂拭セシムヘシ

第七條

前條ノ外毎日午後七時ヨリ九時迄ノ間ニ室内ヲ巡視シ患者ノ現員ヲ点檢記載シテ日表ヲ製シ翌日午前第七時限ヨリ該隊會計官ニ呈スヘシ

第八條

各屯營病室ニ在テ患者新タニ到ルトキハ先ツ病室ノ諸規則ヲ説示了会セシム若シ之ヲ犯ス者アラハ懇切ニ説諭シ仍ホ改メサルカ或ハ病狀ヲ詐偽スル等ノ事アレハ医官ニ申告シ且病室掛伍長ニ通知スヘシ但規則ヲ説示セスシテ犯ス者アルトキハ己レ其責ニ任ス可シ

第九條

各屯營病室ニ於テ下士以下患者ヲ訪フ者アルトキハ医官ノ許可ヲ得病室掛伍長ニ通知シテ相見セシムヘシ

第十條

凡屯營病室近傍或ハ非常ノ事アリテ災害將ニ至ラントスル時ハ患者ノ妄ニ室外

ニ出ルヲ禁シ医官ノ指揮ニ從ヒ病室掛伍長ニ通知シ使役兵卒ヲ附シテ之ヲ避シム其歩行スル能ハサル者ハ車載或ハ負担シテ之ヲ避ケシムヘシ

第十一條 患者猥リニ文書ヲ往復シ或ハ屢他人ト面語スル者アルトキハ其事情ヲ査問シ不審ノ事アラハ直チニ之ヲ医官ニ報告スヘシ

第十二條 患者ノ内医官ノ許可ヲ得スシテ室外ヲ徜徉スル者アラハ直チニ之ヲ制止シ且担当看病卒ノ不注意ヲ督責スヘシ

第十三條 時々ノ命令布告ハ遺漏ナク看病卒ニ通知スヘシ

第十四條 職務上ニ於テ意見アラハ一等看病人ニ陳述シ指示ヲ乞フ可シ

第十五條 各屯營ニ分属スル者ハ行軍ノ時列外ニ於テ跟行セシム若シ歩行ニ堪ヘサル患者アル時ハ医官ノ証言ニ困リ患者ノ輸送ヲ掌トル者トス

第十六條 其兵隊宿陣ニ着シ医官診按ノ時ハ之ニ從ヒ看病卒ヲシテ薬剤ノ用ニ供シ医官ノ手術ヲ助ケシメ諸事ニ注意スヘシ

第十七條 滞陣中日常診察ノ時ト雖トモ諸事ニ注意スルコト前條ノ如シ

第三章 三等看病人職務

第一條 三等看病人ハ看病卒八人ニ就テ一人ヲ率トス

第二條 毎朝會計官ノ室ニ至リ出勤簿ニ捺印シ一二等看病人ノ指示ニ從ヒ看病卒ヲ指揮シ病室内重症ノ患者ハ昼夜ヲ論セス自ラ看病卒ノ率先トナリ懇切ニ看護スヘシ看病卒ノ動作言語ニ注意シ其勤惰ヲ調査シテ一二等看病人ニ申告スヘシ

第三條 病室内ノ褥床寝衣毛布蚊帳唾壺便器等ノ備品ハ常ニ監視シ破碎毀損セサル様ニ注意セシムヘシ

第四條 病室内備付被服及ヒ器具等破損スルトキハ一等看病人ノ点検ヲ經テ之ヲ受領簿ニ記載シ該室担当医官ノ調印ヲ受ケ故品ヲ該院會計官ニ返納交換シ更ニ新品ヲ領収スヘシ但シ薬剤並器械等ハ同上医官ノ調印ヲ受ケ薬剤官ニ就テ受領スヘシ病室内日用筆墨紙薪炭油等ノ消耗品ハ牒簿ニ其品目数量ヲ記載シ一等看病人ノ点検ヲ經医官ノ調印ヲ得テ會計官ニ呈シテ其現品ヲ受領スヘシ

第五條 各病院ニ在テ患者新ニ入院スルトキハ先ヅ病室ノ諸規則ヲ説了会セシメ若シ犯スモノアラハ懇切ニ説諭スヘシ仍ホ改メサルトキハ之ヲ医官ニ申告ス但説示セスシテ規則ヲ犯ス者アルトキハ己レ其責ニ任ス可シ

第六條 担当スル処ノ室内廊下厠圍等ハ極メテ清潔ナラシメ若シ不潔汚穢有ルトキハ己レ其責ニ任スヘシ

第七條 患者病状ヲ詐偽シ医官ヲ欺罔セント謀ル者ヲ偵知スルトキハ直ニ其情状ヲ医官ニ陳述スヘシ

第八條 患者室外散歩ノ許可アルトキハ各員ニ散歩札ヲ附シテ室外ニ出タシ帰室ノ時其札数ト人員ヲ照査シテ入室セシム但シ定時限ヲ過ザシムヘカラス

第十一條 患者散歩ノトキハ各室ヨリ看病卒一人ヲ附シテ監視セシメ庭内ノ樹木ヲ折り堀
墻ヲ攀ツル等ノ挙動ナカラシムヘシ

第十二條 凡ソ院外ノ人患者ヲ訪フトキハ其証書ヲ檢シ医官ノ許可ヲ得テ看病卒一人ヲ附
シテ面接所ニ於テ相見セシムヘシ

但重症ノ患者ハ医官ノ許可ヲ得テ床頭ニ就テ相見セシムヘシ

第十三條 全治ヲ得或ハ廃兵トナリ退院スル者及ヒ死亡スル者等アルトキハ該室担当ノ医
官ヨリ其処方箋ニ其月某日退院若クハ死亡ト朱書セシモノヲ受取等病院第一課
ノ医官及ヒ會計官ニ送致スヘシ

第十四條 前條ニ由テ退院セル者アルトキハ其隊号等級姓名年齢月日等ヲ詳記シ一等看病
人巡視ノ時之ヲ具陳スヘシ

第十五條 患者請求ノ物品ハ隊号等級姓名並ニ其品目ヲ牒簿ニ記載シ置き毎週之レヲ湊合
シ医官ノ調印ヲ受ケ之ヲ一等看病人ニ呈ス可シ

第十六條 前條ノ物品ヲ一等看病人ヨリ領収スルトキハ医官ノ指揮ニ從ヒ之ヲ其本人ニ附
与シ牒簿目次ノ下ニ受領ノ二字ヲ記注セシムヘシ

第十七條 二等看病人ニ代リテ行軍ニ從フトキハ總テ同官職務ノ條款ニ依ル可シ

第四章 看病卒職務

第一條 各病院ニ在テハ看病卒一人ニ付患者六人乃至十人ヲ率トス重症ノ患者ハ此限ニ
アラス各屯營病室ニハ看病卒一人ヲ置キ藥劑ノ用ニ供シ兼テ医官ノ手術ヲ助ク
ルモノトス

第二條 毎朝当該看病人ノ室ニ至リ出勤簿ニ捺印シ医官及ヒ看病人ノ指揮ニ從ヒ患者藥
劑ノ服用飲食ノ給与起臥ノ扶持等ニ従事ス但其之ヲ行フコト深切懇篤ヲ尽スヲ
以テ旨トス

第三條 藥劑ヲ服セシムルニ其分量並ニ時刻ヲ謨ル可ラス且飲食ハ總テ医官ノ検査ヲ經
サルモノハ仮令患者懇請スルト雖トモ決シテ与フ可カラス

第四條 医官回診ノ時ハ患者ノ床頭ニ侍シテ詳カニ其容体ヲ陳述シ又患者ニ異変ノ容体
アルトキハ速ニ医官ヘ報告スヘシ

第五條 患者摂生法ヲ守ラサルカ或ハ規則ヲ犯ス者アラハ必ス懇切ニ忠告シ仍ホ改メサ
ルトキハ之ヲ看病人ニ申告ス可シ若シ因循報知セサレハ己モ亦罰責アル可シ

第六條 病室内外共ニ穩靜ヲ主トシ清潔ヲ旨トスルヲ以テ一日ニ回ツツ必ス酒掃拂拭シ
藥器食具等ヲ清滌シ時氣ノ寒暖ニヨリ被服褻脱等ニ注意シ其廁圍ニ至ルマテ清
潔ニスルヲ要トス

第七條 診察及喫飯ノ前後二十分時間ハ牖戸ヲ開テ大氣ヲ流通セシムヘシ但賊風ノ恐ア
ルトキハ此限ニ在ラズ

第八條 大小便其他凡テ不潔ノモノハ速ニ除キ去リ夜間用ユル所ノ唾壺便器ハ毎朝之ヲ

清滌シ昼間ハ屢之ヲ清滌ス可シ

第九條 患者散歩沐浴ノ時ハ必ス附添ヒ之ヲ監護シ若シ脱院スル者アレハ己レ其責ニ任

スル者トス

第十條 毎室一名ツツ交番看守シ暖爐浴室厠園等昼夜トモ屢巡視シテ失火ヲ警メ別シテ

煙突ノ不潔毀損等ナキヤウニ注意スヘシ

第十一條 患者ヲ訪フモノ有ルトキハ看病人ノ指揮ニ從ヒ共ニ面謁所ニ至リ相見セシムヘ

シ重症ノ患者ハ床頭ニ就テ相見セシムルヲ以テ必ス其側ニ侍ス可シ

第十二條 近火等総テ非常ノ節ハ医官及ヒ看病人ノ指揮ニ從ヒ重症ノ患者ハ車載或ハ負担

シテ其災害ヲ避ケシム可シ

第十三條 死者アレハ上官ノ指揮ニ從ヒ屍室ニ移シ臥床ニ臥サシメ白布ヲ以テ屍ヲ覆ヒ懇

切ニ取扱ヒ其側ニ侍シテ之ヲ守護ス可シ

第十四條 行軍ノ時ニ当テハ外科具並ニ初発ノ手術ニ必要ナル木綿等ノ諸具ヲ藏メタル背

囊ヲ負担シ以テ該隊ノ医官ニ跟随ス可シ

第十五條 負担シタル背囊中藥品及器械ノ品目等尽ク諳知シ需用ニ臨テ渋滞アル可カラス

第十六條 兵隊宿陣ニ着シ医官診察ノ時ハ投劑貼膏並ニ繃帶外科等ノ手術ヲ助クヘシ

【資料6】

明治七年『三角繃帯用法』

陸軍文庫（偕行文庫

所蔵）

諸言
しよげん

このもちいかた　さき　どいつじん
此用法は曩に独逸人「シセル」が口述せしを軍医試補多納光儀筆記
せしものなり。然るに其稿本を和解し此の一小冊子にし三角包帯と共
へいしちどう　たずさえ　はか　がんらいこのしよ　どいつこく　だいはかせ
に兵士一同に携しめむことを計る。元来此書は独逸国の大博士「エス
マルク」といえる名医が昔より世に伝りたる三角繃帯の用法を元にし、
さまざま　くふう　ころ　あみだ　もの　せんそうききゅう　さんかくほうたい　もちいかた　もと
様々に工風を凝し網出せる者にて戦争危急にして軍医の足ざる時
へいしたが　きず　ばしよ　まきもめん　ほどこ　てみじか　しかた　しめ　もの　すで
兵士互に傷せし場所に繃帯を施す簡便の法を示す者なり。既に
いつさくねん　ふらんす　せんそう　どいつ　へいし　へいぜい　よ　これ　ならいこみ
一昨年独逸と仏蘭斯との戦争に、独逸の兵士は平生より能く之を習込
たるゆえ大に助となりたるなり。希くは我がくに　へいし　へいじつ　これ
こころえ　まんいち　ときこれ　ほどこ　おおいに　りようじ　て　たすけ　またぐんい　ことかけ
心得おき、万一の時之を施さば大に療治の手助となり又軍医の事缺
を　おぎな　た　をも　補うに足らむ。

明治七年八月

陸軍軍医士

岐頼徳識

それへいし　せんじよう　いつ　もとよりそのみ　きづきやぶ　もちろん　そのいのち　また
夫兵士の戦場に出るときは固其身の毀傷るは勿論、其命おも亦
ちりあくた　どうよう　おも　ちから　つく　もの　そのきず　うけ　くるし　すみやか　ほど
塵芥同様に思いて力を尽す者なれば其傷を受けて苦むときは速に程
りようじ　くわえ　これ　すく　さてちさ　たたかい　ぐんい
よき療治を加て之を救はずんばあるべからず。扱小き戦のときは軍医
かんびよう　んそのほかいりう　どうぐ　せんじよう　もち　まきもめん　けがにん　かきおく　もち
看病人其外色々の道具（戦場にて用いる繃帯怪我人を昇送るときに用
まきもめん　じゆうぶん　そな　にわか　きず　うく　もの　すみやか　とうぜん
いる繃帯など）も十分に具わりて俄に創を受る者あるも速かに当然

の療治りようじの行届ゆきとどくものなれども、大なる戦たたかいのときは斯かる十分じゅうぶんのものにあ
らず。縦令たとい 預軍医あらかじめぐんいなどを備そなうるも幾千人いくせんにんの兵士へいし一度に傷を受きずるときは
尽こころこく軍医の取扱とりあつかいの行届ゆきとどくべきにあらず。幸さいわいに他の手伝人ほか てつだいにんなどと
きも繃帯まきもめんは最早費尽もはやついやしつくし、或は紛失あらい ふんしつし 或は敵の炮丸てき たいほうだまに焼崩やきくずされ、之
が為ために沢山の病人びょうにん幾日も療治を受うけることは能はざることあり。右の如
き事ことは古むかしの人が著あせる書物しよもつを見て明みに証拠あきらかあることなり。然れば
兵士の戦場せんじょうに出るときは一人毎に皆必ず一條の繃帯まきもめんを携たずさへるは第一
の心得こころえなり。さすれば軍医の手廻ぐんい てまわりかぬるときは此繃帯このまきもめんにて手から傷を
巻まくくことになり。又仲間相互またなかまそうごに之を施ほどこすこともなるなり。元来兵士は
無常つねつね「ランドセル」(身辺の諸色しよしきを納いれ ため へいし たずさえ ふくろ なか たけ
ごしやくにすんばかり まきもめん かいめん ひとつ すこし めんざんし ひとつつみ ようい
五尺二寸許の繃帯と海綿一筒と些少の面撒糸ひとつつみを一包となして用意
することなれども右は甚だ便利とするに足らず。何故ぞというに此第一
繃帯まきもめん(戦場せんじょうにて即時に施す繃帯をいう)の本意とする所に新に創を受
たる者ものを病院に昇送かきおくるとき様々の物の傷口に入るを禦ふせぐにあり。故
に其創そのきずせし処を蓋包おおいつつみて 日光砂塵虫類ひのひかりすなちりむしるいその他汚物の其処そのところに入を防
ぐべし。骨の関節ほね つがひめの怪我けがには位置いちを程よくし其場所を安やすらかにして動
かさざる様ようになし。又血の出またち いでて止やまむるときは其創口を壓おして之を止とどむ
べし。又熱またねつを起し腫痛はれいたむときは寒電法かんあんぼう(看病卒は皆心得居みなこころえれり、知らざ
る者ものは之に尋ぬべし)を施ほどこし其勢そのいきおいを挫ひしぐなどなり。然るに今「ランド
セル」の中に纔なか わづかの海綿かいめんを貯たくわえるも只輕き創を受ただかる きずたるとき間其功ある

のみ。こと まきもめん 殊に繙帶ものという者は之に慣なれたる者にあらざれば之を巻くこともならず。強しいて之を巻まくも忽たちまち緩ゆるみて創口きずぐちに入りて、又は其巻方また そのまきかた緊きつすぎて其効なきのみならず大に害を發すことあり。然れば此より拭涕巾はなふき或は頸巾あるい えりまきなどにて巻を優まれりとす。中にも拭涕巾は戰場たりとも之を所持しよじせざる者なければ之を用るを便利とす。然れども世に之を用る人なきは全く其巾狭して汚きたき其巻方を知らざるが故なり。然るに此三角巾このさんかくきんは其大十分にして戦場の第一繙帶は實に此上もなき便利の品なり。そのうえ用法も簡易にして素人にも甚だ学易し。則此三角巾に書たるは火線外鉄炮丸の届かざる所をいうの繙帶所にて怪我人の互に其創を繙帶する状を示す。此余が考を「キール」がこう（地名）の書工「ウツテマーク」たのみ えがか（人名）に頼て書せ之をベルリン（地名）の彫刻師ベエケル（人名）に囑け三角状の銅版に鑄せ此布に押たる者にて之を携る者をして其図を見て其巻法を悟らしめんが為なり。中にも才智の鋭き者は一度之を覽て大略其扱方を悟ることを得べし。又休の間には図を見て之を習い或は軍医看病人の繙帶をなすとき之を見習べし。斯して十分之を吞込むときは夫々の役を止て己が故里に帰るとき、自分は勿論他人の傷を受しときなどにも此法にて危急の場を救得ることあり。斯一人之を知るものあれば其里人も之を見習いて終に自他の大益をなすなり。此三角巾は元来余が創て工夫し出せるに非ず。既二三百年以前「スウィツル」このさんかくきん がんらい わ はじめ くふう いだ あら（地名）の「マヨール」といえる人が之を外科術の中に入

これ ため たくさん ほん あらわせ そのころのう ほめすこ あま いっぱう こりかたま
れ之が為に沢山の本を著し其効能を嘗過して余りを一方に凝塊
ついで よのつね まきもめん うちくず かえつ さまざま そしり う このきん ほまれ
り、竟に尋常の繃帶まで打駁さんとし却て様々の誹を受け此巾の誉
うしな さ せけん げかいしゃまた びよういん ままこれ もちい ものおおく これ
を失えり。然れば世間の外科医者又は病院にて間之を用る者多は之
もちい ものすくな そのなまえ し いた このきん もめんあるいぬの
を用る者少くして其名前をも知らざるに至れり。此巾は木綿或は布
もつ こしらえ もの がんらいむかし ぞくせつ もめんるい きず がい
を以て製たる者なり。元来昔よりの俗説に木綿類は創に害ありとい
もの ふる じだい げか きわた さまざま じゆつ もちい まし
う者あれども古き時代より外科の生綿を様々の術に用ることあり。況
もめん もちい なん がい 仰 此巾は 薄き 木綿の 広
て 木綿を用るとして 何の 害あらんや。 仰 此巾は 薄き 木綿の 広
さんじやくさんずんばかり もの ゆえ おおはば もめん かつ これ たて あまた さんかくきん
三尺三寸許の者なり。故に大幅の木綿を買て之を裁ば数多の三角巾
となる。左すれば其一箇の価甚だ廉きものなり。其上之を畳めば骨牌
さ そのひとつ あたいはなは やす そのうえこれ たた かるた
位の大となり其重も僅に十三匁余其厚も七分許なるゆえ常に
ぐらい おおきさ そのおもさ わずか じゅうさんもんめあまりそのあつさ しちぶばかり つね
兵士の「ランドセル」中に携る繃帶囊より遙に便利の者というべし。
へいし ちゆう たずさえ ほうたいぶくろ はるか べんり もの
へいぜいへいし これ たずさう めんざいし いかんまた かんびようにん たず あつていきん
平生兵士の之を携るの綿撒糸(医官又は看病人に尋ぬべし)と壓定巾
かみ おな そえ もつ はず よう おおく これ た もの
(正に同じ)とを添て持べき筈の様なれども多は之のみにて足る者な
たとえ ほうたいじよまた けがにん かきおく とちゆうせいすい べんり ときどききずばしよ
り。譬ば繃帶所又は怪我人を昇送る途中清水の便利にして時々創場所
あら でき でき ごと さ とき ち とめ ため
を洗うことの出来るものなどの如し。然れども時としては血を止る為
かる きずぐち おしてい ちさ つかね めんざいし ふたつ
に軽く創口を壓定ねばならぬこともあるゆえ小く束たる綿撒糸、二個
あるい わた さんかくきん なか まきこみ よし これてつばうきず つきぬけ うらおもて ふた
或は綿を三角巾の中に巻込おくを善とす。此銃創の突貫て裏表に二
あな でき もの そのとき ようい またつうれいまきもめん はりつく
つ孔の出来ることある者なれば其時の用意なり。又通例繃帶の凝着
ふせ ため にまい こうやく ようい みぎ きずぐち くさ やす ゆえ
を防がん為に二枚の膏薬を用意すれども右は創口を腐らせ易きが故
に、余は専ら左の方を用う。

せきたんさん いちふん あぶらこうやくじゅうぶん
石炭酸(二分) 脂膏(十分)

右の膏藥と綿撒糸の束たる者は漆を塗たる紙に包むべし。

斯なきば膏藥はいつも變ることなく其上之を包む三角巾をも汚すこと

なし。但此漆紙は凡一寸許の大にして三角巾の内に包置も其容小

して重も僅に七匁不足を増のみなり。凡兵士の出陣するときは皆必

右の品を兵糧囊の内に蓄うべし。「ランドセル」は戦劇しくなれば

屢之を投棄ることあればなり。

さんかくきん もちいかた
三角巾の用法

凡三角巾の用法を知んには先其名所を知らで叶はぬ事なれば、左に

其図解を示すべし。即図の「甲」という符は上の端にて先端を名づけ、

「甲」「乙」の符と「甲丙」の符の所を側縁と名づけ「丙」「乙」の

符の所は下縁と名づけ下縁の両端を端裾と名づく。

此巾は夫々の場所に蒙りたる創の大形などの變るも工夫にて如何様

にも用ることとなる者なり。其上小き二枚の巾の入用なるときは尖端

の処より下縁の正中まで正直に割へし。此二枚の巾を「半巾」と名

づく。三角巾の中には常に膏藥二枚と綿撒糸の束二個を小き囊に包

て入置ゆえに右の繃帶を施すときは先其膏藥を創に貼り其上に綿撒

糸の束を置き軽く壓定むべし。此巾は身体の場所の異なるに随て其

用法も様々差う者なれば、今図に合て説記すべし。能々会得して之を

じつち よち
実地に用うべし。

「頸巾状巾」(頸巾状の巻木綿という儀なり)の巻法は先尖端より下縁
けいきんじょうきん えりまきなり まきもめん わけ まきかた まずせんたん かえん
に向て幾重にも畳み随意の幅となすべし。右の巻木綿は唯頸の創
むかつ いくえ たた おもうまま はば みぎ まきもめん たたくび きず
のみならず他の場所にも用うへし。即眼(第八及第十四図を見合すべ
ほか ばしょ もち すなわちめ だいはちおよびだいじゅうよんず みあわ

し)額(第二十二及第二十九図を見合すべし)耳頬頤下顎等なり。又
ひたい だいにじゅうにおよびだいにじゅうきゅうず みあわ みほおとがいたあごなど また
手足の軽き肉創(第五第六第十八第二十六及第二十七図を合せ見る
てあし かる にくのきず だいごだいろくだいじゅうはちだいにじゅうろくおよびだいにじゅうしちず あわ み
べし)或は副木其外骨の碎たる者を撐る道具を用るとき之を結固
あるい そえぎそのほかほね くだけ もの ささゆ どうぐ もちい これ むすびかた

むる等に用う(第一第二第十二及第十六図を見合すべし)。又小き環
など もち だいいちだいにだいじゅうにおよびだいじゅうろくず みあわ またちさ わか
の形となして創つきたる腕を繫保つに用うへし。凡頸巾状巾の用法
かたち きず うで かけたも もち およけいきんじょうきん もちいかた
は甚だ簡にして爰に書載せ教訓すに足ず。唯二本の帽子針にて其
はなは てみじか ここ かきの おしえさと たら ただにほん ぼうしはり その

両方の端裾を縫着け又は之を結ぶべし。但之を結ぶに二通あり。一
りようほう たんきよ ぬいつ また これ むす ただしこれ むす ふたとおり ひとつ
は「船結」(天の符たる図)と名づけ、一は「女結」(地の符の付た
ふねむすぶ てん しるし ず な ひとつ おんなむすぶ ち しるし
る図)と名づく女結は緩み易きゆえ船結を用る方宜し。頭創を巻
ず な おんなむすぶ ゆる やす ふねむすぶ もちい かたよろ あたまきず まく

には先三角巾の中央を頭の巔上に当て其下縁を
まずさんかくきん ちゅうおう あたま てんじょう あ そのかえん
額に垂れ其尖端を項に垂れさせ其下縁にて額を覆い両方の端裾
ひたい た そのせんたん うなじ た そのかえん ひたい おお りようほう たんきよ
は耳上を超え頭の后に廻し爰にて交叉へ再額に廻し此処にて結
みみのうえ こ あたま うしろ まわ ここ やりちが ふたたびひたい まわ このところ むす

ぶべし。此時項に垂たる尖端を前になし置たる交叉の上に折反し頭
ぶべし。此時項に垂たる尖端を前になし置たる交叉の上に折反し頭
てんじょう ぬいつ これ とうきん あたま まきもめん わけ な
の巔上にやりて縫着くべし。之を「頭巾」(頭の巻木綿という義)と名
づく(第二十一図)。
だいにじゅういちず

手の創を巻には半巾を用うへし。先手の甲を此巾の上に置べし。其置
て きず まく はんきん もちー まつて こう このきん うえ おく そのおき

法は腕頸を下縁の中央に当て尖端の方は指頭に至り折反して再
 腕頸に至り両方の端裾を尖端の上にて交叉へ再腕頸の背にやりて
 結べし(第七図を見合すべし)。足の創を巻には先足蹠を巾の中央
 に当て尖端を趾の方に向け爰にて折反し足の甲の方にやり両端裾
 にて踝骨の周囲を纏、足甲にて交叉へ再足蹠にやり爰にて結べし
 (第十五図及第二十三図を見合すべし)。断切られたる手足を巻にも上
 と同法を用う。即巾の下縁を切残されたる創口の上の方に当て其
 尖端を創口の処にやりて之を覆い再上の方に折反し両端にて其上
 を結止むべし。腕を適好き位置に繫保たんには先一方の端裾を取
 て創なき方の肩を越させ項窩を回り向側に送り、爰に止おき又一方
 の端裾を胸前に垂れ応を用い、手軟に屈たる腕を巾の中央に当
 て其尖端は臂后一寸六七分許を余しおき。さて其端裾を腕の前より
 上に向て曳上げ創つきたる肩の上にやり項窩の処にて先に回
 たる端裾と取合せて結止めさて臂後に余したる尖端を前に廻し帽子
 針にて縫着くべし。之を「大腕保持巾」(腕を繫保つ大なる三角巾とい
 う義)と名づく(第四第十七第二十五図を見合すべし)。
 胸の創を巻には先巾の中央を胸に当て其尖端は一側の肩を越へ
 後方に引き、下縁は胸腹を被い両端裾を右左の脇下に廻し、背
 にて相互に結合せさて尖端を右の結目の下に通し再之を上
 に折反し帽子針にて縫止むべし。背の創を巻にも上と同法を用う。但上

と反對にて上にて后の所は爰にて前となるの違ひあるまでなり。
肩の創を巻には二枚の半巾を用うべし。乃其一是頸巾の如く疊重
ね腕の保持巾(腕を繫保つ三角巾という義)となして前腕(臂より先
の方を云ふ)に施すべし。扱其一に創を受たる肩の上に当て尖端
を頸の方に向け下縁を上膊の中央に当て両端裾を其内側(腋下)に
廻して交叉へ、再其外側にやりて結べし。さて其尖端は保持巾を通
し頸の方に引き再保持巾の上に折反して帽子針を刺し縫止むべし。
腰の創を巻も其法上と同じ(爰には保持巾を用ることなし)。けれども
大腿は上膊より太き故に、全幅の三角巾を用いずばならず。但し巾
の下縁にて大腿の上部を巻き両端裾を二重廻して結ぶべし。若股
の肥太たる者にて結び難き者は大なる帽子針二本を用て縫止むべ
し。尖端も亦肩創同様になすべし。但之を病人の腹帯の下に通し再
其上を経て下の方に折反し帽子針にて縫止むべし。若其人腹帯をせ
ざるときは頸巾などを巻て其代となすべし(第三十一図を見合すべし)。
凡骨の傷つきたる病人を病院に輸るには副木を其場所に当て之を
保護せざれば其場所揺動き大に其痛を増し、又其創の性も悪くなる
なり。抑々副木という者は傷を受けて其骨の揺動き固持る力を失た
る者に、外より力となるべき者を副え縛固めて固保ることの出来る
様になす者なり。然れば若用意の副木缺るときは何にても其代となる
者を用うべし。譬は劍鎗或は其鞘(第二図を見合すべし)銃(第十二図

をみあわ見合おれすべし。折やりやぶれたる鎗破くるまたる車やの輻あるい、或きのえだは樹枝だいじゅうろくす（第十六図）を見合みあわすべし。藁葦等わらいなどの束つかねたる者ものを其場所そのばしょに当てあ之これを巻縛まきしばるが如ごとし。斯かく巻縛まきしばるには頸巾えりまきの如ごとく畳たたまるる者ものを宜よろしとす。譬たとえは手拭腹帶手綱銃てぬぐいはらおびたづなてつぽうの紐ひも「ランドセル」の緒等ひもなどの如ごとし。

「三角巾の畳法」は先第一に左右の端裾たんきよを重ねかさ小き三角形ちさとなすべし。第二には斯く畳たたみたる三角形さんかくがたの端裾たんきよを尖端せんたんの方かたに向けむ畳たたみて四し角形かくがたとなすべし。第三には右の四角形みぎを二に折して長方形ながかくがたとなすべし。第四には此長方形このながかくがたを二に折おりて再四角形ふたたびとなすべし。第五には右の四角形かくがたを二に折ふたつべし。此にて小き長方形これとなるなり第六には右の小き長方形ながかくがたを二に折おれば凡三寸許およそさんずんばかりの小き方形ちさとなる。右を二本の帽子針みぎにて縫着ぬいつくるときは兵糧囊ひょうろうぶくろに納いるるに至いたつて便利べんりの者ものとなるなり。

三角帶用法終

【資料7】 「独逸戦時衛生條例適要」

谷口謙『陸軍軍医学雑誌』第三号、明治十九年年二月、
一七—二三頁。

彼を知り己を知るは 豈^あ独り軍機のみならんや軍隊医務に在ても亦然り而して今や開明
諸国の戦時衛生部編制は独逸を以て最良とす仏人にして猶且之れを欽美す其整備知るへき
なり茲に其大綱を訳^{すい}萃して一覽に供す是亦彼を知るの一端也

明治十九年二月

一等軍医 谷口謙識

機関及び編制並に制定

(甲) 出戦軍

一項 隊に隊附医官病院助手及び補助患者運搬人隊属薬品車担架繃帶具入背囊若くは
薬品及び繃帶入匣^{はこ}並ひ病院助手携帶囊を附す

此人員及び材料を以て 病室^{クラシケンスツベン} 舍 営病院及び隊繃帶所（戦闘地に）を設立す

病室は病院的看護を要せず暫にして回復就役の目途ある患者を收容する所なり
舍営病院は軍隊舎營地の近傍に他の病院なき時は病院の不足なる時に之を設立す
隊繃帶所は戦闘地に於て隊附医官の傷者を集合せしめ救急繃帶を施し若し傷者を派
出衛生部若くは戦地病院に輸送し得ざる場合に於て遷延すへからざる手術を施す
為に之を設置するなり

二項 戦争の依て死傷者を生する時は派出衛生部作業を始む但該部は大戦に至て作業を始るもの
とす該部は各軍団に三箇予備師団に一箇を附す該部の主要なる任務は傷者を斃治す
る為に大繃帶所を備置し傷者運搬者を以て傷者を戦闘地及び隊繃帶所より大繃帶
所に輸送するにあり隊繃帶所を存立せしむると之を大繃帶所に合併せしむるとは
場合に依るへし大繃帶所医官の増員を要するときは隊附医官並ひ戦地病院の人員
及び材料を使用することあるへし

三項 戦地病院は傷者及び病者を看護し軍軍病院の人員と交代し再び軍団に^{こんずい}跟随して
爾後の需要を待つへし（各軍団に戦地病院十二各予備師団に三箇を附す）
戦地病院をして派出衛生部を補助せしむることあるへし

（兵站及び鉄道）

兵站及び鉄道に於ける衛生事務は主として定置軍病院に於ける治療事務患者の配当並ひ之
に関する方法及び編制並に戦地衛生上需要の衛生材料の送致之れなり

四項 軍病院は戦地病院の傷者及び病者建築物殊に傷者及び病者の治療並に安臥に必需の材料を需要するか為に之を設く其己に戦地病院に交代したる者を定置軍病院と名く軍病院附人員の事務は戦地病院に異なることなし

五項 兵站医官及び兵站病院 兵站医官は兵站区内に於て医務に従事し需要に従い兵站病院を設立し此を通行する隊部隊或は患者運搬組の患者並に兵站監に附属する隊の患者を収容して之を治療すへし

六項 患者配当

患者運搬医員並に衛生列車及び病列車を以て患者を配当せしむ

〔イ〕 患者運搬医員は患者の配当兵站区に於ける背後運搬を処弁す

〔ロ〕 衛生

担架術教育規則（陸達第十八号）

明治二十年二月五日

総 則

- 第一條 此規則ハ戰場ニ於テ傷者ヲ運搬スル學術ヲ教授スル為メニ設クルモノトス
- 第二條 歩兵及ヒ砲兵隊ニ於テ其下士兵卒若干名ヲシテ之ヲ修業セシムルモノトス
- 第三條 毎年担架術ヲ修業セシムヘキ人員ハ歩兵連隊ニ一等軍曹一名二等軍曹二名砲兵連隊ニ二等軍曹三名砲兵大隊ニ上等兵一名歩兵中隊ニ兵卒三名砲兵中隊ニ一名トス上等兵ヲ出タス歩兵中隊ニハ兵卒二名トス
- 第四條 大隊長ハ下士中隊長ハ上等兵現役一ヶ年ヲ終ヘタル者ヲ選抜シテ連隊長若クハ大隊長ニ具申スルモノトス
- 第五條 中隊長ハ現役一ヶ年ヲ終ヘタル一等卒若クハ一等卒ト為ルヘキモノニシテ沈勇混懇篤篤アリ且讀書習字ヲ為シ得ル者ヲ選抜シ名簿ヲ製シ大隊長ニ呈スルモノトス
- 第六條 大隊長ハ中隊長ノ進呈シタル名簿ニ就キ審査ノ上連隊長ノ認可ヲ得テ中隊長ヲシテ担架術修業ヲ命セシム
- 第七條 連隊長ハ大隊長ノ具申ニ依テ之ヲ認可シ教官ヲシテ教授セシム

教 育

- 第八條 担架術ハ學術ノ二科トス其科目ハ第三表ニ示スカ如シ
- 第九條 担架術ノ教授ハ歩兵連隊（分遣若クハ分屯隊ハ大隊）及ヒ砲兵連隊ニ於テス但分遣分屯ニ係ル中隊ノ分ハ所属本隊ニ合シテ之ヲ行フモノトス
- 第十條 授業期限ハ凡ソ三ヶ月ニシテ毎年新兵入営ノ期ヨリ初ムル者トス但シ授業時限ハ一日ニ凡ソ五時間トス
- 第十一條 修行中疾病等ニテ卒業ノ目途ナク之ヲ免除スルトキハ成ルヘク補欠スヘシ
- 第十二條 連隊長ハ卒業ノ檢閲ヲ行ヒ卒業証書ヲ附与シ而シテ旅団長ヲ所管長官ニ報告スル者トス
- 第十三條 担架術修業中ハ衛兵其他ノ諸勤務ハ適宜ニ之ヲ免スルヲ得ヘシ又何等ノ事故アルモ規制休暇等ハ一切之ヲ許サザルモノトス

教 官

- 第十四條 教官及ヒ助教ハ連隊中ノ医官及ヒ看護長ヲ以テ之ヲ充テ其人員ハダ第二表ノ如シ
- 第十五條 高級ノ教官ハ連隊長ノ命ヲ受ケ左ニ揚クル二項ヲ担任スヘシ
- 一 學術授業ノ順序ヲ予定シ又毎週施行ノ日課表ヲ製シ且教育ニ關スル進歩ノ景

況ヲ連隊長及ヒ所管軍医長ニ報告スヘシ

- 二 卒業ノ期ニ至レハ學術ニ優劣順序ヲ定メ番号ヲ付シ卒業名簿ヲ製シ之ヲ連隊長ニ進呈ス

第十六條 教官ハ高級教官ノ指図ヲ受ケ一般ノ教育ヲ担任シ助教ヲ補助シ教育上ノ細目ヲ担当スルモノトス

復 習

第十七條 復習ハ毎年夏期ニ於テ予備役及ヒ後備軍ノ下士卒中担架術ヲ修業シタルヲ召集シ之ニ現役中ノ担架術修業者ヲ加ヘ演習ヲ施行ス之ヲ野外演習ト云フ

第三表

担 架 術 教 則 表	
学 科	術 科
解剖及生理学大要	繃帶術
創傷論	傷病者ノ取扱
患者ノ看護法	担架使用術
繃帶学	急製担架術
担架使用及運搬法	傷病者ノ運搬法
衛生隊編制及其勤務則	
補助担架卒ノ勤務則	

【資料9】

担架卒選抜及教育復習規則

明治二十年一月二十八日

總 則

第一條 担架卒ハ歩兵及ヒ砲兵隊ニ於テ之ヲ養成シ有事ノ日ニ当リ衛生部ニ属シ傷者ヲ運搬セシメ其称呼ハ本務ニ服スルニ際シ之ヲ称スルモノトス而メ之ヲ分テ三トス

其一 担架上等兵

担架上等兵ハ現役一ヶ年ヲ終タル上等兵ヨリ選抜シテ之ヲ教育シ衛生隊ヲ編制スルニ方リ之ニ編入ス

其二 担架卒

担架卒ハ補助担架卒ノ現役満期ノ者ヲ以テ之ニ充テ衛生隊ヲ編制スルニ方リ之ニ編入ス但シ砲兵ノ補助担架卒ハ之ヲ除ク

其三 補助担架卒

補助担架卒ハ歩兵及ヒ砲兵現役一ヶ年ヲ終ヘタル兵卒中行状方正ナル者ヲ選抜シ之ヲ教育シ戦時現隊ニ在テ傷者運搬ノ勤務ヲ執ラシム

第二條 担架術修業中ハ衛兵其他ノ諸勤務ハ適宜ニ之ヲ免スルヲ得ヘシ又何等ノ事故アルモ帰省休暇等ハ一切之ヲ許サザルモノトス

第三條 毎年担架術修業期限ニ至レハ歩兵一連隊ニ一等軍曹一名二等軍曹二名砲兵一連隊ニ一二等軍曹三名ヲ採リ担架術ヲ修業セシム但此定員ハ毎年交換シ連隊中ノ下士ハ漸次悉ク担架術ヲ習熟セシムルニ至ルヘシ

第四條 連隊長ハ大試験終レハ卒業ノ検問ヲ行ヒ卒業証書ヲ附与シ而シテ之ヲ所管長官ニ報告スル者トス

選 抜

第五條 補助担架卒ハ志操廉潔ニシテ怯懦ナラス兼テ篤実ニシテ一等卒

若クハ一等卒ト為ルヘキ見込ノモノヲ撰フヲ法トス故ニ各中隊ニ於テ中隊長ハ先ツ其撰ニ当ルヘキ者ニ就キ体格及ヒ読書習字ヲ検査シ第一表第二表ニ揚クル要員ヲ選抜シ名簿ヲ製シ之ニ自己ノ意見ヲ附シ大隊長ニ進呈ス

第六條 大隊長ハ中隊長ノ進呈シタル名簿ニ就キ審査ノ上連隊長ノ認可

ヲ得テ中隊長ヲシテ担架修業ヲ命セシム

第七條 連隊長ハ大隊長ノ具申ニ依テ之ヲ認可シ教官ヲシテ教授セシム

教 育

第八條 担架術ノ教授ヲ分テ學術ノ二科トス其科目ハ第三表ニ示スカ如シ

第九條 担架術ノ教授ハ歩兵及ヒ砲兵連隊分遣隊ハ大隊或ハ中隊ニ於テ為ス者トス

第十條 授業期限ハ凡ソ三ヶ月ニシテ毎年新兵入営ノ期ヨリ之ヲ始ムル者トス但シ授業時限ハ一日ニ凡ソ五時間トス

第十一條 担架術修業中疾病等ニテ卒業ノ目途ナクシテ之ヲ免除スルトキハ成ルヘク補欠

スヘシ

教官

第十二條 教官ハ連隊中ノ医官看護長ヲ以テ之ニ充テ其人員ハ第四表ノ如シ

第十三條 高級教官ハ左ニ揚クル四項ノコトヲ担任スヘシ

一 連隊長ノ命ヲ奉シ授業上一般ノ責ニ任ス

二 學術授業ノ順序ヲ予定シ又毎週施行ノ日課表ヲ製シ各学期ノ終リニ小試験ヲ為シ且月末ニ於テ教育ニ関スル進歩ノ景況ヲ連隊長及ヒ所管ノ軍医長ニ報告スヘシ

三 卒業ノ期ニ至レハ連隊長ノ命ヲ受ケ學術ノ大試験ヲ為シ優劣順序ヲ定メ番号ヲ付シ卒業名簿ヲ製シ之ヲ進呈ス

四 担架術修業兵卒業ノ後其教育ニ関スル進歩ノ景況書ヲ作り之ヲ所管ノ軍医長ニ報告スヘシ

第十四條 教官ハ高級教官ノ指図ヲ受ケ一般ノ教育ヲ担任シ助教ハ教官ヲ補助シ教育上ノ細目ヲ担当スルモノトス

第十五條 復習ハ担架卒ヲシテ其運搬術ヲ益々精熟セシメン為メ実施ニ異ナラサル活用ヲ演習スルヲ以テ目的トス之ヲ野外演習ト云フ

第十六條 野外演習ニ方リテハ軍医監或ハ一等軍医正ヲ以テ師団軍医長ノ職ヲ奉セシメ而シテ衛生隊演習一般ノ指揮ヲ掌ラシム

第十七條 師団軍医長ハ演習ノ方法ヲ予定シ其施行ノ地所ヲ定メ所管長官ニ具申スヘシ

第十八條 野外演習中ハ若干隊ヲシテ之ニ附属セシメ戦線ヲ仮設シ或ハ仮設傷者等ノ用ニ供セシム

第十九條 野外演習ノ期限ハ毎年夏期ニ於テス其総日数ハ概ネ三週間（始メニ週日ヲ補助担架卒予備役担架卒終テ一週日ヲ補助担架卒後備役担架卒）ヲ定メトス然レトモ時トシテ之ヲ増減スルコトアルヘシ

第二十條 演習畢レハ軍医長ハ実施ノ景況ヲ記載シ之ヲ所管長官ニ報告スヘシ

第二十一條 復習ノ為メニ召集スヘキ担架卒ハ衛生隊ニ編入スヘキ者ノミニシテ剰余ノモノハ本科ノ復習ヲ為サシムルモノトス

第二十二條 近衛並ニ各鎮台ニ於テハ毎年担架卒ヲ召集シ之ニ歩兵及ヒ砲兵ノ補助担架卒ヲ加エ衛生隊ヲ編制ス其編制方法左ノ如シ

一 予備及ヒ後備役ノ担架卒ハ衛生隊定員ノ半数ヲ召集他ノ半数ハ翌年召集之ニ補助担架卒ヲ加ヘ衛生隊ヲ編制ス

二 衛生隊ニ附属スル各兵將校及ヒ曹長ハ常備隊付他ノ下士ハ現役下士或ハ予備及ヒ後備役隊員下士ニシテ担架術ヲ修業セシ者或ハ担架上等兵ニテ下士適任証書ヲ所持スル者ヲ以テ之ニ充ツ

三 衛生隊ニ附属スヘキ衛生部員ハ鎮台病院或ハ各隊ニ附属スル者ヲ以テ之ニ充ツ但看護長ハ予備役ヨリ附属スルコトアリ

第一表

備考	予備役二補入数	現役教育数	歩兵一中隊担架術修業定員表								
			十九年	二十年	二十一年	二十二年	二十三年	二十四年	二十五年	二十六年	二十七年
現役教育数ハ補助担架卒トス而メ戦時ニ方リ欠員ヲ生スルトキハ予備役担架卒ノ内ヨリ補欠ス 予備役二補入数ハ担架卒ニテ衛生隊ニ補入スル者 十九年ニ限り第三第二年兵ヲ教育シ其他ハ第二年兵トス 十九年ヨリ各年定員中ニ一連隊ニ付喇叭卒一名ヲ算入スヘシ 二十年ヨリ各年定員中ニ一連隊ニ付上等兵一名ヲ算入スヘシ 本表ニ載スル外毎年一連隊ニ一等軍醫一名二等軍醫二名ヲ撰ビ担架術ヲ修業セシム		十七名 <small>上等兵一 名</small> 十八名 <small>上等兵一 名</small>	十九年共六	二十年共六	二十一年共二	二十二年共二	二十三年共二	二十四年共二	二十五年共二	二十六年共二	二十七年共二
	七				十四	二十	二十	十九	十三	十二	十二

第二表

備考	予備役二補入数	現役教育数	砲兵一中隊担架術修業定員表							
			十九年	二十年	二十一年	二十二年	二十三年	二十四年	二十五年	二十六年
補助担架卒予備役二補入スルモ担架卒トイルコトナシ戦時ニ方リ現役補助担架卒・欠員スルトキ其 補欠ニ供スルノミ故ニ予備役ニ入リタル者ハ一般兵卒ニ異ナルコトナシ 十九年ニ限り第三第二年兵ヲ教育シ其他ハ第二年兵トス故ニ毎年教育人員ハ三年兵二年兵トヨ合シ 二人トナル 二十年ヨリ一大隊ニ上等兵一名ヲ各年定員ニ増加シ教育ス 本表ニ載スル外毎年一連隊ニ一二等軍醫三名ヲ撰ビ担架術ヲ修業セシム		十七年 共卒二 十八年 共卒一	十九年共一	二十年共一	二十一年共一	二十二年共一	二十三年共一	二十四年共一	以下順序数同	以下順序数同
	二									

【資料10】

「陸軍人磨工召募準則」(第二百二十九号)

明治二十一年十二月一日

陸軍大臣伯爵 大山 巖

総 則

第一条 看病人ハ病院病室及憲兵隊其他衛生部士官ノ属スル官廨ニ置キ患者ノ看護其他看護ニ係ル雑務ニ服セシム

第二条 磨工ハ近衛各師団ノ軍医部及病院ニ置キ治療器械ノ研磨ト修理ノ事ニ服セシム

第三条 看病人ハ採用ノ日より滿六ヶ月間勤務時間中ニ於テ看護学ヲ修業セシム

第四条 看病人ノ給料ハ月給ニシテ一等給ニ等給ニ分ツ其一等給ハ八円二等給ハ七円トス磨工ノ給料ハ月給ニシテ之ヲ五等ニ分ツ

第六条 其一等ハ三拾円二等ハ貳拾五円三等ハ二拾円四等ハ拾五円五等ハ拾貳円トス

看病人磨工ハ雇員ニシテ其勤務年限ハ之ヲ定メスト雖トモ採用ノ日より滿三年以内ハ自己ノ情願ヲ以テ免除スルコトヲ許サス然トモ疾病及品行不正勤務 懶惰^{らんだ}ナルモノハ之ヲ免除ス但其疾病ニ罹ルモノハ陸軍医官ノ診断書ニ依リテ之ヲ処分ス
第七条 三年以上勤務スルモノト雖トモ戦時若クハ事変ノ際ハ如何ナル事故ト雖トモ免除セサルコトアルヘシ

第八条 看病人磨工ノ勤務年限ノ滿限ハ五十五歳トス然トモ精勤実直且身体強壯ニシテ猶ホ勤続ヲ志願スル者ハ体格検査ノ上尚若干年ノ勤続ヲ許可スルコトアルヘシ

第九条 看病人ノ被服ハ代金ヲ給与シテ定制ノモノヲ自弁セシム磨工ハ之ヲ給与スルコトナシト雖トモ戦時若クハ事変ノ際ニ限り現品ヲ以テ貸与スヘシ

第十条 看病人ハ採用ノ初二等給ヲ給シ一年ノ後勤務実直品行方正ナル者

ニ一等給ヲ給ス其一等給ハ所属部隊総員ノ半数ヲ定員トナシ之ニ超エルコトヲ得ス但奇数ニ在テハ寡数ヲ一等給トナスベシ一人ノ部隊ニ在テハ此限ニアラス

第十一条 磨工ノ給料ハ其技芸ノ生熟功程ノ精粗ニ依リ之ヲ定ム但之ヲ定ムルトキハ所管軍医長ノ承認ヲ経ルモノトス

召 募

第十二條 看病人磨工ハ欠員アルニ当リ其部隊ニ於テ軍医隊ノ欠員ハ所管軍医部ニ於テ民間ヨリ志願者ヲ採用ス但左ニ記列スルモノハ採用スルコトナシ

一 身代限ノ処分ヲ受ケ負傷ノ弁償ヲ終ヘサル者

二 禁錮以上ノ刑ニ処セラレタル者及賭博犯ノ処分ヲ受ケシ者

三 前項ノ外平常素行修マラス同郷同町村ニ於テ排斥セラルル者

四 兵籍ニ在ル者国民兵役ヲ除ク

第十三條 召募ノ手續ハ部隊長適宜之ヲ定ム

第十四條 事変ニ際シ戦時要員補欠ノ為メニ之ヲ召募スルハ其所管ノ軍医部ニ於テ之ヲ施行ス

第十五條 志願者ノ検査項目ハ左ノ如シ

一 年齢自二十一年至四十年

二 身幹五尺一寸以上磨工志願者ハ除ク

三 体格強健ノ者

四 読書 真片仮名交リ文

五 作文 尺牘せきとく文ノ類

六 算術 加減乗除

七 治療機械研磨修理ノ実施看病人志願者ハ除ク

第十六條 前條ノ検査ハ部隊長軍医部警備隊ハ軍医長、病院ハ院長、衛戍病室ハ其衛戍司令官タル隊長憲

兵隊諸学校学舎砲兵工廠監獄ニ在テハ其長

試験委員ヲ定メ之ヲ施行ス

第十七條 前條ノ試験委員ハ看病人ニ在テハ医官二名医官一名ノ部隊ニ在テハ各兵科士官一名ヲ加

フ磨工ニ在テハ医官薬剤官各一名ヲ以テ編制スヘシ

第十八條 試験合格ノ者ハ之ニ看病人或ハ磨工ヲ命シ誓文帖ニ署名捺印セシム不合格ノ者

ハ本人願書ノ本書ニ試験不合格ト朱書シテ却下スルモノトス

第十九條 部隊長ニ於テ採用シタルトキハ本人願書ノ副書ニ其命シタル年月日ヲ朱書シ戸

籍明細ノ副書ヲ添ヘ所管ノ軍医長ニ移牒スヘシ故ニ免除ノ時ハ復タ其免除ノ理由

ヲ記シ姓名并解雇かいこ月日ヲ軍医長ニ報告スルモノトス

第二十條 志願者ニハ正副二通ノ願書ニ戸籍明細書ヲ添ヘテ召募ノ部隊長ニ出サシムヘシ

第二十一条 願書及ヒ誓文等ノ書式左ノ如シ

願書

身元引受人

戸籍明細

誓文の雛形あり

【資料11】

陸軍看護卒教育規則

(明治二十年十二月二十八日 陸達第五百五十五号)
但明治十九年省令乙第四十一号ヲ廃止ス

陸軍大臣 大山 巖

- 一 陸軍看護卒の教育は此規則に拠る其入隊の手續は新兵入隊定則に異なることなし
- 二 陸軍看護卒は近衛鎮台の歩兵連隊に編入し第三項の教科卒業の後ち各部隊に配当するものとす
- 三 陸軍看護卒には左の教科を教授し六ヶ月間に卒業せしむ
 - 第一教科 歩兵教育順次概表初年兵第一期術科学科
 - 第一教科 人体造構概略 医療囊並繃帶囊入諸品の使用法
 - 三角繃帶用法 繃帶製造及消毒繃帶品の使用 繃帶術
 - 第三教科 看護法 治療介補法 救急法 患者運搬法 調剤法大意
- 四 第一教科は歩兵隊第二第三教科は病院分営に在ては重病室に於て之を教授す
- 五 第二第三教科に在ては医官看護長之を教授す而して病院長分営に在ては高級医官以下儀之は其教育上を監視するものとす
- 六 第一教科の授業卒れは連隊長は之を病院長に引渡すへし
但し近衛に在ては近衛軍医長を経て東京鎮台病院長に引き渡すへし
- 七 第二第三教科の教習を卒れは病院長其習熟を検閲し本人手帳卒業列叙^ノ區書に看護学卒業のことを記入し後ち所要の部隊え近衛所要の人員は該衛軍医長に引渡すへし而して卒業名簿並に配附表を調製し之を所管の軍医部に報告すへし
但近衛軍医長は本項に拠り卒業者を受取るときは直に衛下各隊に引渡すへし
- 八 病院(重病室)に在ては第二教科授業ノ初めに於て修業者に左の品目を官給す而して此品目は現役満期の時と雖とも各自携帯せしめ返納せしむるに及はす
 - 一 看護卒教科書 一冊
 - 一 図附三角繃帶 一枚
 - 一 白地三角繃帶 二枚
 - 一 片頭軸繃帶 三卷
 - 一 布 六尺
 - 一 布袋 一個
- 九 對馬警備隊看護卒も亦此規則に準拠し教科は其要領を教授し^ハヶ月を以て卒業せしむ

陸軍衛生部現役看護手補充條例（勅令第九十二号）

明治二十一年一月二四日

第一條 現役看護手ノ補充ハ歩騎砲工輜重兵ノ初年兵ニシテ概子六箇月軍事上ノ教育ヲ受ケ更ニ六箇月間看護学ヲ修メタル者ヲ以テス

警備隊ニ在テハ軍事上ノ教育及看護学修業時期ハ各三箇月トス

第二條 前條ノ補充ハ近衛及師団ノ軍医長前年度ニ於テ予メ各隊所要ノ看護手人員ヲ調査シテ都督師団長ニ呈シ都督師団長ハ之ヲ各隊ニ割賦シ各隊長ハ之ヲ各中隊ニ官賦スヘシ

第三條 第二條ノ割賦ヲ受ケタル中隊長ハ部下ノ兵卒中篤実温厚読書算筆アル者ニシテ看護手ニ適當ノ者ヲ選ミ其名簿ヲ作り順序ヲ經テ連隊長獨立大隊ニ在テハ大隊長以下之ニ倣フニ呈スヘシ

第四條 連隊長ハ第三條ノ名簿ニ拠リ看護学修業兵ヲ命シ其地ノ衛戍病院又ハ衛戍病室ニ入学或ハ通学セシムヘシ

第五條 看護学修業兵卒業シタルトキハ看護学修業兵名簿ニ登録シ看護手ノ欠員看護手ノ下士ニ新級又ハ其満期ノ時ニ限ルニ際シ連隊長ニ於テ看護手ヲ命スヘシ

第六條 看護手ハ毎年二中隊一人ノ割合ヲ以テ補充スルヲ例トス

第七條 現役看護手再服役ヲ請フコトヲ得其法ハ陸軍現役下士等上等兵再服役條例ニ拠ル但警備隊ニ在テハ尚ホ警備隊條例第四條ヲ適用ス

陸軍看護学修業兵教育規則（陸達第二百四十一号）

明治二十二年二月二五日

教 育

第一條 看護学修業兵ハ衛戍病院ニ入レ其教育所ニ於テ教成ス。授業ヲ分々学科術科トス。但師団司令部所在地外ニ在テハ本隊ヨリ通学セシムルモノトス

第二條 衛戍病院長ハ看護学修業兵入学前ニ於テ教官ヲ定メ且教育ノ準備ヲナスヘシ

第三條 教官ハ病院及各隊各官廨附ノ者ヲ以テ之ニ充ツ而シテ之ヲ定ムルニハ病院長予メ之ヲ人選シテ所管軍医長ノ認可ヲ経テ之ヲ定ム

第四條 衛戍病院長ハ教育上一般ノ事ヲ主宰シ教授ノ方法ヲ計畫スヘシ

第五條 修業期間ハ凡ソ六箇月間トシ其授業時間ハ一日ニ四時乃至五時間トス。而シテ授業時間ノ外尚適宜ノ時間ヲ定メ副科トシテ読書習字及算術ヲ学ハシムヘシ

第六條 衛戍病院長ハ卒業試験ノ時ハ之ニ臨場ス。而シテ試験後教官ヨリ出シタル卒業名簿ニ抛リ卒業証書ヲ製シテ之ヲ本人ニ附与シ各本隊ニ復帰セシメ同時ニ其連隊長独立大隊ニ在テハ大隊長以下之ニ倣フ並ニ所管軍医長ニ卒業名簿ノ写ヲ以テ之ヲ申告スヘシ

第七條 入学中ハ何等ノ事故アルモ帰省休暇等一切之ヲ許ササルモノトス

第八條 入学中疾病等ニテ卒業ノ目途ナキモノハ本隊ニ復帰セシメ看護学修業兵ヲ免ス。而シテ其者入学後三箇月以内ナレハ病院長ハ該連隊長ニ其補欠員ヲ請求スヘシ

第九條 入学期ヲ後クレテ入学スル者ノ教育ハ授業時間ヲ伸長シ勉メテ他ノ修業兵ト同一ニ卒業セシムヘシ

第十條 此教育中被服、装具、日給ハ本科ニ異ナルコトナシ而シテ入学中ノ教育費用ハ衛戍病院ニ於テ支弁シ其他ノ諸給与ハ本隊ヨリ支弁スルモノトス

教 官

第十一條 教官ヲ別テ教授助教トス其教授ハ医官助教ハ看護長ヲ以テ之ニ充ツ

第十二條 教授ハ衛戍病院長ノ命ヲ承ケ授業ノ事ヲ掌ル其中高級ノ者一名ハ尚左ノ事項ヲ処理スヘシ

一 衛戍病院ノヲ承ケ授業上一般ノ責ニ任ス。故ニ日々教場ニ臨ミ授業ヲ監視ス

二 毎週日課表ヲ製シ每一教程ノ終リニ小試験、全教程ノ終ニ大試験ヲ施行シ試験得点表大試験ニハ卒業名簿ヲ備ヘ製シテ病院長ニ申請ス

三

大試験了ラハ學術進歩ノ程度及授業上一般ノ景況書東京ニ在テハ二本ヲ製シ病院長ニ出ス病院長ハ之ニ意見ヲ附シ軍医長東京ニ在リテハ看護長又第一師団ノ軍医長ニ進達スヘシ

第十三條

助教ハ教授ノ命ヲ承ケ教育上ノ細目ヲ担当シ兼テ教育所ノ庶務ニ従事ス

試 験

第十四條

第十二條ノ試験ハ教習シタル所ノ學術二科ニ就テ問題ヲ設ケ学科ハ口答、術科ハ実施之ヲ行ハシメム

但副科ハ試験ヲ行フコトナシ

第十五條

小試験ノ点数ハ每一問題ニ最高点十点ト定メ二問題ヲ附シ其点数ヲ合算シ更ニ問題ノ数ヲ以テ除シ平均点ヲ附スルモノトス

第十六條

大試験ノ点数ハ每一問題ニ最高点二十点ト定メ四問題ヲ附シ其ノ点数ヲ合算シ更ニ四問題ノ数ニ依テ之ヲ除シ平均点ヲ得テ之ニ毎小試験ノ点ヲ加算シ六十点以上ヲ甲、四十五点以上ヲ乙、三十点以上ヲ丙、二十九点以下ヲ丁トス

第十七條

前條ニ掲クル丙以上ノ者ヲ合格トシテ卒業者トシ其以下ノ者ハ更ニ若干日間復習セシメ再ヒ試験スヘシ。而シテ猶合格セサルトキハ本隊ニ復帰セシメ看護學修行兵ヲ免スルモノトス

初出一覧

序章

陸軍衛生要員の育成と一年志願兵制度の創設（『国士館史学』第15号、2011年3月）

第一部 戊辰戦争と看護

職業看護婦の始まりに関する一考察―「小石川療養所」「長崎療養所」「横浜梅毒病院」を通して―（『法政史学』80号、2013年9月）

欧米諸国の看護婦の紹介記録の歴史を辿る―幕末から明治初年―（『日本医史学雑誌』第58回第2号、2012年6月）

陸軍における近代看護学の導入（『軍事史学』第49巻第3号、2013年12月）
文久遣欧使節団による夷情探索と看護―フランスとイギリスの看護―（『看護歴史研究』七号、2014年4月）

欧米諸国の看護婦の紹介記録の歴史を辿る（その2）―「福田作太郎筆記」を中心に―（『日本医史学雑誌』第60回第2号、2014年6月）

第二部 陸軍看護制度の創設

兵士が学んでいた包帯法に関する知識と技術―明治七年発行『三角繃帯用法』より―（『日本医史学雑誌』第54回第2号、2008年6月）

陸軍における看護卒教育の始まり（明治6年～明治17年）（『日本看護歴史学会誌』第23号、2010年3月）

陸軍の衛生要員補充制度の成立過程（『軍事史学』第46巻第2号、2010年9月）
西南戦争と大阪陸軍臨時病院（『日本医史学雑誌』第57回第2号、2011年6月）
陸軍看護学教科書―明治5年から明治23年まで―（『日本看護歴史学会誌』第26号、2013年5月）

第三部 陸軍看護制度の第二次改革

陸軍衛生隊編制に向けた「担架卒」の成立過程（『日本医史学雑誌』第55回第2号、2009年6月）

衛生隊編制に向けた陸軍看護制度の第二次改革（『国士館史学』第14号、2010年3月）

日本陸軍における看護卒と磨工卒の関係（『日本医史学雑誌』第56回第2号、2010年6月）

参考文献一覧（五十音順）

- 相川忠臣『出島の医学―出島を舞台とした近代医学と科学の歴史ドラマ―』長崎文献社、二〇一二年
- 青木袈裟美編輯『陸軍衛生制度史、第二卷（大正篇）』陸軍省医務局内陸軍軍医団、一九二八年
- 青木正夫・新谷肇一・篠原宏年「長崎養生所の敷地選定と配置計画について―日本最初の近代洋式病院、長崎養生所に関する計画史的研究―」『日本建築学会論文報告集』第三六二号、一九八六年
- 朝倉治彦編『幕末明治日誌集成 第二卷』東京堂出版、一九八六年
- アーネスト・サトウ著、坂田精一訳『一外交官の見た明治維新（下）』岩波文庫、二〇〇九年
- 荒井保男『日本近代医学の黎明―横浜医療事始め』中央公論新社、二〇一一年
- 安藤優一郎『江戸の養生所』PHP研究所、二〇〇五年
- 石井研堂『明治事物起原 下巻』春陽堂、一九四四年
- 石黒忠憲『大阪陸軍臨時病院報告摘要第一号』陸軍文庫、一八七八年六月（国立公文書館所蔵）
- 石黒忠憲『懐旧九十年』岩波文庫、一九八三年
- 石橋長英・小川鼎三『お雇い外国人（九）―医学』鹿島研究出版会、一九六九年
- 伊藤博文『秘書類纂10 兵制関係資料（明治百年史叢書第一九卷）』原書房、一九七〇年
- 井上忠男『戦争と救済の文明史―赤十字国際人道法のなりたち』PHP研究所、二〇〇三年
- 今泉孝「絵ハガキで見るパリの古い病院（四）―ヴァル・ドウ・グラーヌ陸軍病院（パリ五区）（その1）』『医譚』七二巻、一九九七年、四二五―四二五三頁
- 今泉孝「フランス軍陣医学におけるヴァル・ドウ・グラーヌ病院の役割」『日本医史学雑誌』四三巻三号、一九九七年、一五四―一五五頁
- 今泉孝「絵ハガキで見るパリの古い病院（五）―ヴァル・ドウ・グラーヌ陸軍病院（パリ五区）（その2）』『医譚』七三巻、一九九八年、四三一―四三三頁
- 岩田高明『福田作太郎筆記』の『欧州探索』にみる西洋教育制度受容過程の分析―文久元年遣欧使節団による欧州学制探究―『日本の教育史学・教育史学紀要』二〇〇六年、一九―三十一頁
- 岩渕佑里子「寛政―天保期の養生所政策と幕府医学館」『論集きんせい』第三二号、二〇〇〇年六月、四〇―六一頁
- 宇野俊一校注『桂太郎自伝』平凡社、一九九三年
- 大石学『吉宗と享保の改革 改定新版』東京堂出版、二〇〇一年
- 大久保利兼他編『史料による日本の歩み近代編』吉川弘文館、一九九六年
- 大塚英明「万延元年遣米使節、随行医師・川崎道民の海外帰国報告―道民自筆本『航米実記』の紹介をめぐって―」東京国立博物館研究誌、一九九七年、五四六号、五七―六九頁
- 大島蘭三郎「近世日本病院略史（四）」『中外医事新報』一二二四号、一九三五年一〇月、四〇四―四〇六頁
- 大山元帥伝刊行会『元帥公爵大山巖』マツノ書店、二〇一二年
- 小川鼎三・酒井シヅ校注『松本順自伝・長与専斎自伝』平凡社、一九八〇年
- 小高建『日本近代医学史』考古堂書店、二〇一一年
- 尾立貴志「衛生隊誕生―戦場医療のルーツをたどる」『歴史群像』一九（五）、二〇一〇年、七八―八六頁
- 加藤陽子『徴兵制と近代日本 一八六八―一九四五』吉川弘文館、一九九六年
- 金井一薫「ナイチンゲールの七つの素顔（その1）」『綜合看護』二〇〇九年、四九―五八頁
- 神谷昭典『日本近代医学のあけぼの―維新政権と医学教育』医療図書出版、一九八〇年
- 蒲原宏「明治戊辰戦争越後口軍病院の変遷（上）」『日本医事新報』一八〇〇号、一九五八年、四五―四八頁

蒲原宏「明治戊辰戦争越後口軍病院の変遷（中）」『日本医事新報』一八〇一号、一九五八年、四四—四九頁

蒲原宏「明治戊辰戦争越後口軍病院の変遷（下）」『日本医事新報』一八〇二号、一九五八年、五二—五五頁

亀山美知子『近代日本看護史』日本赤十字社と看護』ドメス出版、一九九七年

亀山美知子『近代日本看護史』戦争と看護』ドメス出版、一九九七年

亀山美知子『近代日本看護史』宗教と看護』ドメス出版、一九八五年

川口啓子『近代日本看護史』看護婦と医師』ドメス出版、一九八五年

川口啓子「従軍看護婦派遣への道程に関する研究ノート（一）」『大阪健康福祉短期大学紀要』（二）二〇〇四年三月、八一—八九頁。

川口啓子「従軍看護婦派遣への道程に関する研究ノート（二）日露戦争を中心に」『大阪健康福祉短期大学紀要』（三）二〇〇五年三月、八三—九五頁

川口啓子「従軍看護婦派遣への道程に関する研究ノート（三）第一次世界大戦を中心に」『大阪健康福祉短期大学紀要』（四）二〇〇六年三月、六九—七六頁

川口啓子「従軍看護婦派遣への道程に関する研究ノート（四）第二次世界大戦とその後」『大阪健康福祉短期大学紀要』（五）二〇〇七年三月、九三—一〇二頁

川俣馨一『日本赤十字社発達史』明文社、一八九八年

看護行政研究会編集『平成二六年版 看護六法』新日本法規、二〇一四年

看護史研究会（代表執筆 遠藤恵美子）『派出看護婦の歴史』勁草書房、一九八三年

看護史研究会編『看護学生のための世界看護史』医学書院、一九九七年

看護史研究会編『看護学生のための日本看護史』医学書院、二〇〇八年

木村紀八郎『大村益次郎伝』鳥影社、二〇一〇年

久野明子著『鹿鳴館の貴婦人 大山捨松—日本初の女子留学生』中公文庫、二〇一一年

熊谷光久『日本軍の人的制度と問題点の研究』国書刊行会、一九九四年

熊谷光久「明治期陸軍軍医の養成・補充制度」『軍事史学』第四六巻第二号、二〇一〇年、二七—四五頁

黒沢文貴・河合利修編『日本赤十字社と人道援助』東京大学出版会、二〇〇九年

黒沢文貴「赤十字国際委員と岩倉使節団との邂逅」『軍事史学』第四八巻第一号、二〇一二年、一二八—一三五頁

黒沢文貴「岩倉具視、伊藤博文と赤十字の出会い」『日本歴史』七八号、二〇一二年、一〇〇—一〇二頁

黒澤嘉幸「陸軍看病人について」『日本医史学雑誌』第三七巻第四号、一九九一年、一〇五—一〇七頁

黒澤嘉幸「明治期の陸軍看護システム」『日本医史学雑誌』第三九巻第四号、一九九三年、六三—八一頁

黒澤嘉幸「明治期の陸軍看護技術」『日本医史学雑誌』第四〇巻第二号、一九九三年、九三—一〇〇頁

厚生省医務局編『医制百年史（資料編）』ぎょうせい、一九七六年

厚生省医務局編集・発行『日本看護制度史年表』一九六〇年

古賀十二郎『西洋医術伝来史』日新書院、一九四二年

国公立所蔵史料刊行会『日本医学の夜明け』日本世論調査研究会、一九七八年

児島襄『大山巖 第一巻幕末・維新』文藝春秋、一九七七年

斉藤省三（白里研究グループ）編集『寛斉日記—奥羽出張病院日記を中心として—』陸別町教育委員会、一九八二年

酒井シズ『絵で読む江戸の病と養生』講談社、二〇〇三年

酒井シズ「日本の看護と高木兼弘」『日本看護歴史学会誌』第二〇号、二〇〇七年

酒井シズ監修・日本医師会編集『医界風土記 中国・四国篇』思文閣出版、一九九四年

酒井シズ監修・日本医師会編『医界風土記 北海道・東北編』思文閣出版、一九九四年

坂井建雄編『日本医学教育史』東北大学出版会、二〇一二年

佐久間温巳「奥羽出張病院日記」の研究—戊辰戦争中の一軍事病院の実態—『医譚』五三号、

一九八二年、三一九四—三二〇〇頁

佐久間温巳「奥羽出張病院日記」の研究（承前）―戊辰戦中の一軍事病院の実態―『医譚』第五四号、一九八五年、三三七〇—三三七八頁

佐々木克『戊辰戦争―敗者の明治維新』中公新書、二〇一三年（三三版）

鮫島近二『明治維新と英医ウィリス』日本医事新報社、一九七三年

J・A・ドラン著、小野泰博・内尾貞子訳『看護・医療の歴史』誠信書房、二〇〇一年『J・novel』二〇一三年一月（『婦人世界』第四卷、第二二号、明治四二年一月号復刻）

塩見鮮一郎『解放令の明治維新―賤称廃止をめぐる―』河出書房、二〇一一年

塩見鮮一郎『弾左衛門とその時代』河出書房新社河出文庫、二〇〇八年

篠原宏『陸軍創設史―フランス軍事顧問団の影』リポート、一九八三年

上法快男『陸軍省軍務局史 上巻 明治・大正編』芙蓉書房、二〇〇二年

新村拓『死と病と看護の社会史』法政大学出版局、一九九五年

新村拓編『日本医療史』吉川弘文館、二〇〇七年

宗田一・蒲原宏・長門谷洋治・石田純郎編『医学近代化と来日外人』世界保健通信社、一九八八年

菅谷章『日本の病院―その歩みと問題点―』中公新書、一九八一年

杉田暉道・長門谷洋治・平尾真智子・石原明『看護史』医学書院、二〇一〇年第七版

杉森みどり、舟島なをみ『看護教育学』医学書院、二〇一四年、第五版増補一刷

瀧澤利行『明治初期医師養成教育と衛生観』『日本医史学雑誌』第三八巻四号、一九九二年、四五—六四頁

太政官編『復古記』第二編、内外書籍、一九二九年

立川昭二『明治医事往来』新潮社、一九八六年

田中彰編『近代日本の軌跡1 明治維新』吉川弘文館、一九九四年

谷口謙「独逸戦時衛生條例摘要」『陸軍軍医学雑誌』第三号、一八八六年二月、一七—三二頁

津田右子「日本の近代看護教育草創期の教育観を探る」『看護学総合研究（呉大学）』三巻一號、二〇〇一年、八—二五頁

坪井良子編『近代日本看護名著集成解説』第二期（第一〇—第一八巻）『大空出版、一九八九年』

富田正文編『福沢諭吉選集（第一刷）』岩波書店、一九八〇年

土曜会歴史部会（代表執筆・高橋政子）『日本近代看護の夜明け』医学書院、二〇〇〇年

中尾健次『弾左衛門―大江戸もう一つの社会』解放出版社、一九九四年

長尾幸作『亜行日記鴻目魁耳』日米修好通商百年記念行事運営会編『万延元年遣米使節史料集成』第二巻、一九九—二二九頁

中田雅博『緒方洪庵』思文閣出版、二〇〇九年

中西淳朗「横浜軍陣病院の介抱女」『日本医史学雑誌』第四二巻第四号、一九九六年、一五八—一五九頁

中村赴『新説 明治陸軍史』梓書房、一九七三年

西岡香織「日本陸軍における軍医制度の成立」『軍事史学』第二六巻第一号、一九九〇年、二四—三九頁

原剛「概説 戦傷病者に対する医療・援護体制」『軍事史学』第四九巻、第四号、二〇一四年三月、三八—四九頁

伴忠康『適塾と長与専斎―衛生学と松香私志』創元社、一九八七年

平尾真智子「明治初期における陸軍看護制度の看護教育史上の意義」『教育史学会集録』第三九号、一九九五年、五〇—五一頁

平尾真智子『資料にみる日本看護教育史』看護の科学社、二〇〇一年

広田照幸『陸軍将校の教育社会史―立身出世と天皇制』世織出版、一九九七年

ヒュー・コータツツイ著、中須賀哲朗訳『ある英人医師の幕末維新』中央公論社、1985年

福島義言「花旗航海日誌」、日米修好通商百年記念行事運営会編『万延元年遣米使節史料集成』

第三巻（風間書店、一九六一年、二七九—四〇〇頁）

- 福田邦三・永坂三夫・久永小千世共訳『聖トマス病院ナイチンゲール看護婦養成学校100年の歩み』日本看護協会出版会、一九七三年
- 富士川遊『日本疾病史』平凡社、一九六九年
- 富士川遊『日本医学史綱要2』平凡社、一九七五年
- 藤原彰『日本軍事史（上巻）戦前篇』社会批評社、二〇〇六年
- 文京ふるさと歴史館編集・発行『洪庵、知安、そして鴎外 近代医学のヒボクラテスたち』二〇一二年
- ヘンリー・ネーネスト・シゲリスト著、大津章訳『医学の歴史——医学の夜明けを尋ねて——』三学出版有限公司、二〇〇九年
- 星亮一『会津落城——戊辰戦争最大の悲劇』中公新書、二〇〇七年（四版）
- 星亮一・戊辰戦争研究会編『新選組を歩く——幕末最強の剣客集団その足跡を探して』光人社、二〇一一年
- 中野善達『文久遣欧使節の徒目付福田作太郎をめぐる』『蘭学資料研究会研究報告第二〇〇号』一九六七年九月月刊、一一—一二頁
- 日本医史学会編集『横浜軍陣病院の日記』『日本医史学会雑誌』第一七巻附録、思文閣出版、一九四四年
- 日本科学史学会編『日本科学技術史大系第二四巻医学（一）』第一法規出版、一九六五年
- 日本赤十字社病院編『伝記叢書160 橋本綱常先生』大空社、一九九四年
- 日本赤十字社中央女子短期大学編纂『日本赤十字社中央女子短期大学九〇年史』絢文社、一九八〇年
- 沼田次郎・松沢弘陽『西洋見聞集』日本思想大系66、岩波書店、一九七四年
- 沼田次郎、荒瀬進訳『ボンペ日本滞在見聞記』雄松堂書店、二〇〇二年
- 益頭駿次郎『欧行記』（大塚武松編『遣外使節日記纂輯 第一—三』日本史籍協会、一九〇三年）一二五—一三八頁
- 松沢弘陽『近代日本の形成と西洋経験』岩波書店、二〇〇八年（第四刷）
- 松下芳男『改訂 明治軍制史論（下）』国書刊行会、一九七八年
- 松下芳男『徴兵令制定史』五月書房、一九八一年
- 松山棟庵・森下岩楠合訳『初学人身窮理 全二冊』一八七三年（初版）
- 南和男『江戸の社会構造』塙書房、一九九七年
- 壬生町立歴史民俗資料館編『壬生の医療文化史 先駆者の医療を訪ねて』独協医科大学、壬生町立歴史民俗資料館発行、二〇一〇年
- 宮永孝『ボンペ——日本近代医学の父』筑摩書房、一九八五年
- 宮永孝『文久二年のヨーロッパ報告』新潮選書、一九八九年（第三刷）
- 宮永孝『幕末遣欧使節団』講談社、二〇〇六年
- 森永種夫校訂『長崎幕末史料大成3 開国対策論』長崎文献社、一九七〇年
- 陸軍軍医学校篇・発行『陸軍軍医学校五十年史』一九三六年
- 陸軍軍医団編『陸軍衛生制度史（明治篇）』小寺昌発行、一九一三年
- 陸上自衛隊衛生学校修親会編『陸軍衛生制度史（昭和篇）』原書房、一九九〇年
- 歴史学研究会編『日本史料（4）近代』岩波書店、二〇〇九年
- 『歴史読本』編集部編『カメラが撮らえた会津戊辰戦争』新人物往来社、二〇一二年
- 山県有朋の手記『越の山嵐』陸軍省編修掛編・発行『越の山嵐』一九三〇年
- 山内慶太『福澤諭吉の見たロンドンの医療』福澤諭吉教会編・発行『福澤諭吉年鑑二九』二〇〇二年二月、一〇五—一二九頁
- 山口一夫『福澤諭吉の西航巡歴』福澤諭吉協会、一九八〇年
- 山田千秋『日本軍制の起源とドイツ』原書房、一九九六年
- 由井正臣・藤原彰・吉田裕『軍隊 兵士』岩波書店、一九九二年
- 横浜市役所編纂『横浜市史稿』（風俗編）臨川書店、一九八五年復刻
- 吉川龍子『日赤の創始者 佐野常民』吉川弘文館、二〇〇一年
- 吉川龍子『明治期の赤十字看護教育』『明治聖徳記念学会紀要』復刻第五〇号、二〇一三年、三八七—四〇三頁

吉田裕『「国民皆兵」の理念と徴兵制』五月書房、一九八一年
吉村道男監修『寺島宗則自叙伝／榎本武揚子』ゆまに書房、二〇〇二年
米村晃多郎『野のひと 関寛斎』春秋社、一九八四年